明治四十二年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

東京第一の流行品

醫藥學博士大賞讃音尾一等軍醫發明

新案特許皮膚病特効

美顔タオル

本品は社會の進歩に伴ふて發明せられた嶄新の装置を有する家庭用美顔器



なれば苟も衛生を重じ化粧に注意する貴紳淑女方は必ずこれを愛用せらる

特製（美顔營養料二百五十日用分付）金壹圓

甲種（美顔營養料一百五十日用分付）金六拾五錢

地方は二個迄送費八錢申受く

發賣元 東京市京橋區新富町二丁目五番地 電話新橋三九四壹振替壹八五四六 伊藤合資會社

特約店 ローヤル水本舗 佐々木商店 御園おしろい 御園商店

白木屋松屋呉服店など始め到る處有名なる化粧品洋品店にて販賣す

女子文壇
第五年第十四號

【本欄】

目次

白鳩



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

七五三御祝着用品

御祝着用の御模様物、友禪帶地等を始め當年新流行の呉服太物類澤山に準備仕居候間多少に拘はらず御用命の程偏に奉願上候。外に

歐米新流行洋服地

歐米新流行雜貨類

何れも新荷到着仕候間何卒御立寄り御遊覧被成下度尚ほ御春着用御染物等は此際御急ぎ御註文被仰付候様奉希上候。

東京日本橋駿河町

三越呉服店

北白川宮武子女王殿下

（本年學習院女子部御卒業）

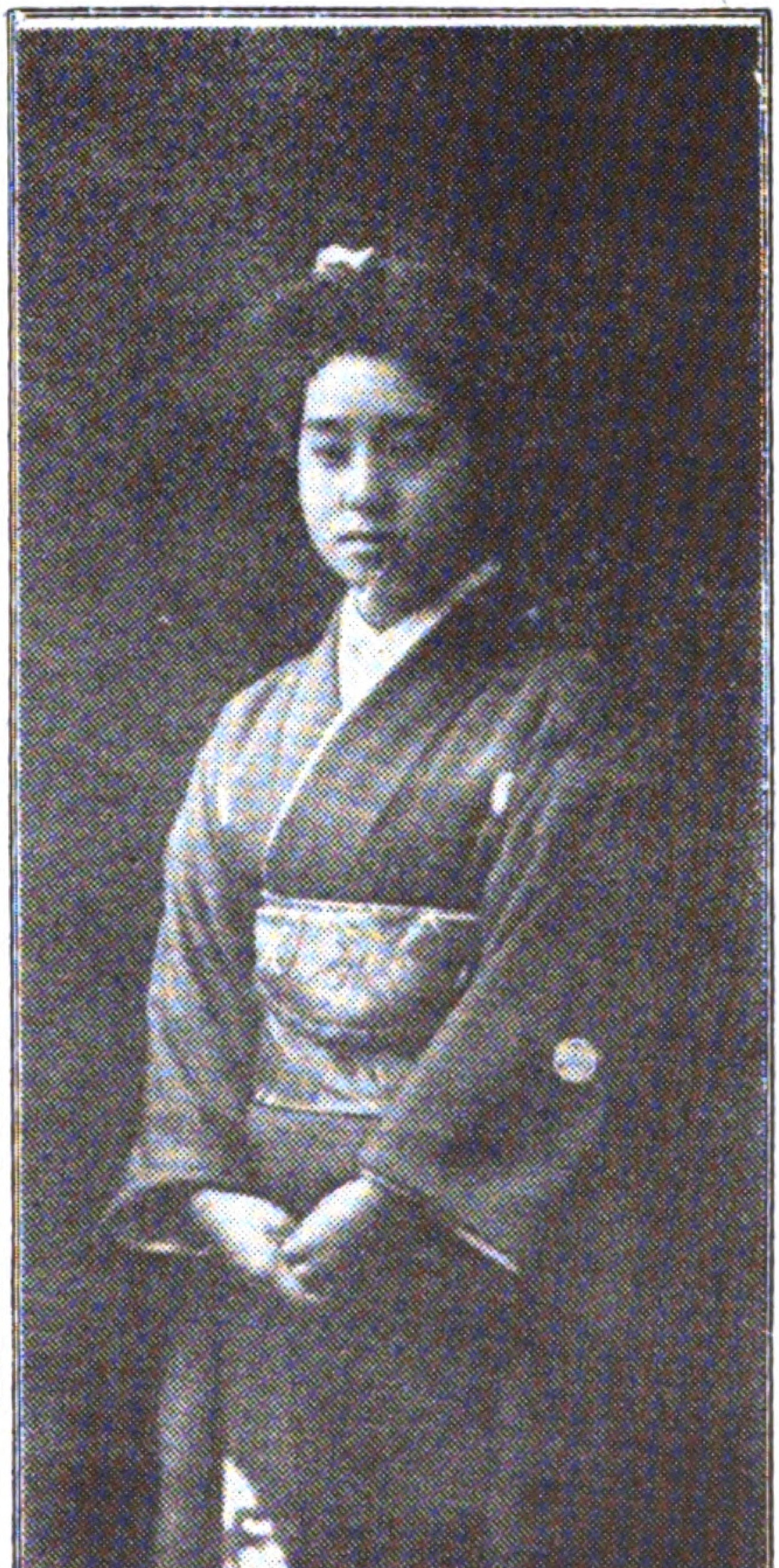


（大[illegible]色版[illegible]）

名門の夫人



侯爵四條隆愛氏夫人



伯爵溝口直正氏夫人

壹日發行
一年第三號

十一月號要目

內容益豐富



天下一品少女達の讀物には一等よい雜誌

少女

每月一日發行 定價一冊拾錢（送壹錢）半年郵稅共六拾三錢 口繪挿畫澤山



▶繪入讀切もの◀

◎卷頭讀物 **大事の御用**……（夢二畫三色刷）……河井醉茗

●働いて遊べ ●？…… ●人形のお代り…ちどり女

◎**洞の住居**……上代八雲

●ナキムシ…竹久夢二 ●理科新話…醒岳小史

◎**葡萄摘み**……一色醒川

●一時間の讀書…西崎花世 ●山の向ふ…ゆめ二

◎**三味線とバイオリン**……宮崎よへい

東京 京橋區大鋸町 女子文壇社發行
（振替口座東京第壹七貳九番）

特約大賣捌所
東京堂 至誠堂 東海堂 上田屋 北隆館 良明堂 外取次全國雜誌店

▶美麗口繪澤山◀

●ゐねむり…蘭女 ●紫色の蝸牛…日野巖村

◎奇拔なる考物 **飛行器の競爭** ◎**豐作** SM

◎**松蟲鈴蟲**…岩田烏山 ◎**面白い譬** 記者

●昔の狐、今の狐…三浦鴻風 ●葉ちゃんとぶち 小野美智

▲英語の手ほどき…城西隱士 ▲少女ノート ▲新聞

◎**少女文壇** ◎文章◎日記◎日用文◎和歌◎俳句◎詩◎筆蹟◎圖畫◎笑話◎工夫畫◎少女料理◎少女實驗談◎世事問答◎少女くらぶ

（ろノ一）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

新輸入 肉體美容料 色白新劑

本劑は近時佛國パリーの貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち色を**白くし皺を伸し**艶美の容貌となるを確證す世上種々雑多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製分壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる内服劑 サーサパリラ

價壹劑二圓七拾錢▲參劑七圓五拾錢▲五劑拾貳圓拾錢

英國ロンドン「パーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑強なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒瘡毒リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

色白特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹸は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん**皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質**を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

以上三種 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

有効保險 前代未發 秘傳奇術

全壹册正價郵税共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢 封送の事

(目錄大要)神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰〇の爛れを治する法●消渇を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顔クリーム製造法●音聲を清良にする法●齒痛即治藥製法●髪の脱落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●毛髪必生法●臭汗治法●白髪を染る法●髪毛の光澤を美にする新藥●齒磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●ほくろを落す法●ビットル酒製法●夏日室内を爽涼にする法●羅紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず體衰へざる法●拔毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の皺婆を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盜人を見顯はす神術●女に〇れらるゝ藥法●硬き毛髪を柔軟にする法●思ふ女を〇〇かす藥法●堅き女の氣を〇〇す藥法●陰〇を長大にする藥法●そばかす必治法●女を〇〇にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に〇れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●悋氣深き女を治する藥法●閨中の秘藥●即座に男情を増す法●毒蟲に螫れたる時腫ぬ特効藥●避食の仙術●神速に精力を強む法●即座陰身術●人を眠らす秘法即ち催眠術●顔赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を〇せしむる法●記臆力を増進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の奇術●黒字夜光の奇術●老人終身皺取りの奇術●腋臭を治する法●色白くする内服劑新法●寶丹の藥法●腹痛速治法●疥癬病の藥法●生たる鯉を遠國へ送る法●服嘴を治する法●黄疸を治する法●鮫肌を直す秘法●味増の損じたるを直す法●痳病の治法●月經の不順を治する法●痳氣の妙劑●齒痛を治する法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る最新法●頭髪を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法●火傷即治の秘法●シャクリ即治法●聲を能くする新術●白髪豫防新法●土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●寢小便を治する秘法●頭瘡を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを拔く新法●乳の出る妙藥●陰部の諸瘡治する法●虎列拉病療治簡易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齢により房事の度數●病氣前知の奇術●男女全體の色を白くし且つ艶美ならしむる法●苺酒を製造する法●富を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏帽子洗濯新法●疊の汚染を落す新法●新しき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易美顔術新法●衣服に油の付たるを落す長法▲以下數拾法略す(合計壹百四十法あり)著金即刻送本す

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館商店**

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

▼毎月一回▲

女學世界

▼一日發行▲

第九卷第十四號　十一月一日發行　正價廿錢　郵稅二錢　前金四冊七拾五錢●八冊一圓四十五錢　十六冊二圓八拾錢●外に要送料

販賣用電話　本局二六二〇番

東京博文館　本町

振替貯金口座　東京二四〇番

大藏次官若槻禮次郎氏の家庭



（令嬢繁子）學習院女子部卒業　（母堂）　（夫人悳子）　（令息有格）


男爵肝付兼行氏令嬢兼子嬢（三輪田高等女學校卒業）


男爵小澤武雄氏令嬢綾子嬢（學習院女子部在學中）


伯爵坊城俊德氏令嬢竹子嬢（學習院女子部卒業）

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

於發明品博覽會 名譽銅牌受領

目下習字の好時期なりとて入會最盛なり

習字速成通信教授

本會獨特の特許速成法は如何なる惡筆にても最短日の練習にて頗る上達せしむ。

書者 文部省習字檢定試驗委員 稻川雲谿先生及玉木愛石先生

○書者女子部 小野鵞堂先生外講師大家數拾名

見本 詳細會則 無代進呈

東京本郷森川町一 電話下谷三〇壹番

帝國習字速成學會

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

梅毒根治藥

本剤（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の**ばい毒**根治特効新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑかさ。しつ疳。かんそう。よこね。ようばいそうだいどく。疥瘡。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓つて根治**することを確證す從來賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本剤を試服し其病源を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。

藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分貳圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

生殖機病特効新劑……（獨逸新輸入藥）

内服 ヨヒンビン

拾錠入壹劑 藥價送料共 壹圓九拾錢 郵券貳割增

本剤は獨逸國伯林大學教授博士スピーゲル氏の發見に係る男女**生殖機不能**（即ち**陰萎病。腎虚神經衰弱**）遺精。夢精。早漏。過房。元氣衰弱。老衰無力。生殖虚弱。生殖機能障害。早老者。精液精蟲缺乏。不妊娠。冷症。發育不全等に用ひ輕症は參四劑重症は五六劑慢性難症は八九劑にて根治の目的を遂する天下無比**可驚奇効**ある最新發見藥也**精力**を**增進**し生殖器を強健ならしめんと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効眞に**如電光**世にありふれたる誇大奇言を羅列する内地製無効賣藥と同一視することなかれ本剤の眞効は高名なる醫師に就て承合せば明白也

奏効確證 美容新劑 やせる藥

本剤（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明剤にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤くほてり、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本剤を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共壹圓廿錢 貳劑分六圓廿錢特別製分 九圓拾錢着金即刻送藥す

▲世界唯一 痳病消渇の根治新藥

りんめつ 痳滅

痳滅は最も進歩したる最新の痳病消渇即治模範藥なり、本剤はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主剤とし是を内服して**痳病消渇**の原因たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製剤せし新藥にて輕症は壹劑重症は特別製分にて**根治**すること確證す但し彼の普式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけ藥價不廉なり用者諒之せよ

藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢 郵券代用貳割增しの事

腋臭 わきが 全治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても忽ち**病菌**を**滅殺**し全治し決して他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦腦を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

本剤は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徴したる世界無比の毛髪速生藥なり、即ち男女共胎物の疵、はつぼうはけの疵、やけどの疵、頭髪及はゑぎわの薄き人、陰部に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本剤特別製分を用ゆれば忽ち毛髪を發生する特効あること確證す本剤は從來ありふれたる種々雑多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付玉石混同視すること勿れ

特別製分 金五圓三拾錢 大瓶貳圓卅錢 中瓶壹圓廿錢

以上六藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新舘藥房**（電話下谷五四六番）

落潮



女子文壇の愛讀者にして又壽美禮おしろい並に壽美禮洗粉の愛用者なり、日常之を用ひて艶麗なる容姿を具へたるを以て寫眞を弊店に贈られたることより茲に掲ぐ



壽美禮おしろい愛用者鑑（其二）

●らい病根治新劑

▲藥名……レプロイス

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たるを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始めて完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絕し生涯永久の榮華を完ふせよ。輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共壹劑分五圓拾錢特別製分拾圓拾錢

●美き聲の出る新藥

發聲藥は古來甚はだ多し然れども其の確効あるものは恐らくは疑はし獨り本劑の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり本劑は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑也何程音聲惡しき方又は聲出ぬ人にても本劑特別製分を服すれば直に全治し充分なる美聲を發することを確證す

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓拾五錢

腦病を根治し記憶力を增進する靈劑

記憶增進元

（藥價）七週分四圓五拾錢五週分參圓六拾錢參週分貳圓參拾錢壹週分八拾錢（送料）各拾錢宛

本劑は獨逸大醫ペクリーボワト氏の新處方に基き醫學的の元理に徵し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記憶力大に增進し人世の殺ハ見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記憶力欠乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記憶力大に增進すること誓て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絕顯著なる奇効を知れ

月やくおろし



本劑は腐たる…ず子宮に停滯せ…ず如何程長き月經閉止も必ず忽ち快く通…りたる月經にて

下りものもキレーに流下す又た特別製分を用ふれば久しく月經閉止及び血塊にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及惡血毒血を一掃することを確證す但し本劑は比類なき効極めて峻烈顯著なるも毫も無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は一劑分七拾錢特別製分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢貳劑分壹圓參拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の大盛を奏み近時々怪しき無効な類似僞藥續はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ

世界無比 最新發明藥

あざ

及び入墨。ほくろ。そばかす。なまづ。いぼを必ず美麗に除去することを保證附

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面にありとも毫も痕跡を殘さず無痛に除去し得らるゝことを確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完うせよ來館者へは山の如き全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑をあざ、入墨、ほくろを除去するものとそばかす、なまづ、いぼを除去するものとの二種に區別し一はあざ入墨ほくろを除去し又はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あい左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢郵券貳割增（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）

以上五藥 專賣元 東京市神田五軒町十九番地 日新館藥房

女子文壇の廣告に依り御申込の節は其旨御書添を乞ふ

今の女を知らんと欲する者は此一冊を繙け

家庭日記

◎女子文壇第四増刊 要目 十一月十五日發兌

▲お七夜の赤飯と棟上の餅拾ひ
▲草生水日記
▲初めて丸髷に結ふ
▲大呉服店のバーゲンデー
▲憚る處なき女學生の境遇
▲開放したる心の扉
▲晴れの日が近くなる
▲同じ女と生れながら陰と日向の違つた身上
▲未來の博士達の爲に
▲舞臺に出づる迄と、出たる後

▲大地震當時の虎姫村
▲母に氣を附られて日記を試む
▲新しい書室と新しい少女
▲家事のひま〳〵に讀むツルゲーネフ
▲診察室の三日間 ▲引越の日
▲學生時代より家庭時代に移らんとする薄き愁 ▲都會生活の一面
▲ある朝、ある午後、ある夜
▲二三日の間に定まる運命
▲猫の嫁入 ▲一生懸命になれ
▲周圍に連れて大人びて行く
▲不思議の早起 ▲和洋の御馳走
▲夫の愛を疑ふ若き妻のやるせなき思ひ
▲スヰートホーム
▲思ふ儘なる別莊住居 ▲出勤日
▲田舍廻りの似而非講師
〔以上日記文〕

附録

最近の日記

三宅花圃女史　長谷川時雨女史
大塚楠緒子女史　國木田治子女史
與謝野晶子女史　尾島菊子女史
岡田八千代女史　荒川澄子女史

和歌・▲鉛筆▲潮▲夜・・▲湯殿の姿見▲お目・・▲壓倒▲門・・・▲
の室▲戀▲自然美文見へ▲雪降るまで小説の柳▲手紙書簡文雨
につけ風につけ▲切なる胸・・新論文・▲今の女▲妾が心の詩・▲月光俳句・
を姉様へ▲お花の先生へ告白▲母のつとめの下

◎定價金貳拾錢 郵税壹錢五厘

頁二百三十 挿書澤山 美裝

發行所 東京京橋區大鋸町 女子文壇社 振替壹七貳九 賣捌 全國各雜誌店

帝國劇場附屬技藝學校第二期生



（向って右）中村君子、宇治彌壽代、島智久、山中よし子、（中央）齋藤きみ子、內藤治子、村瀨篤子、伊藤つるよ、（左）富田百合子、奥脇しげ子、宮川美代子、小原春子

（雜報欄記事参照）

雙生の受驗者

檜垣竹野子（姉）



檜垣梅野子（妹）

（雜報記事參照）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

肥滿病新藥

（米國新輸入劑）

小供の折りてよりぶとく肉太りたるため左の如く**美愛**と稱せられし人も年頃になり**醜婦**となる人少なしとせず本劑はバークデビス合社の模範製劑にて脂肪多き人◉ぶと〳〵ふとり血太り肉太り酒太り水太りにきび赤◉ふき出物多き人◉長滿◉ぶつ〳〵逆上脊痙輕症より一二劑如何程の惡性も三劑分連服せば**艶白**となり程よく色は幽豆やせて皆つて**美**顔窈窕たる美人となる事を保持す……

諸孃姉の福音



藥價 一劑一圓五拾錢 二劑二圓九十錢 三劑四圓卅錢 送料十錢宛

▲肥藥性に苦む人は他藥に迷はず速に服用あれ

◉ 世界唯一 **月やく下し藥**……見よ……病める婦人 月經なき女子

專門博士賞賛指導の新發見良藥

▲勿驚……藥力最强度……其效極て峻烈……有効無害……保險藥



本劑は婦人**月經**不順月經閉止二三ヶ月の月經**滯**りは一二劑にて必ず流下す**四五月**以上又は**血塊**にても特製或は別製分服用せば安心に忽まち**流經**す凡に各婦人病院に於て効力卓絶なりと賞賛せられたる此の女月丸なり滯り又は不順にて苦む人は速に服用あれ▲藥價一劑六十錢、二劑一圓十錢、特製二圓廿錢、別製分三圓卅錢、送料四錢

發賣本舖 東京々橋區中橋和泉町 振替口座一〇六七七番 **小宮愛生堂**

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

◎趣味と實益二乍ら完備せるは我が◎

婦人画報

十一月一日 拾一月卷 廿五錢　郵稅二錢 六冊稅共壹圓五十錢 十二冊稅共二圓八十八錢

畫報

▼晩秋　三宅克己筆 彩色石版畫
▼郊外の一日
▼活劇　天長節の夜會と活人畫
▼新任愛國婦人會長と副會長……
▼五閨秀畫家の席上揮毫……
▼米國に於ける成功者と食堂……
▼夜會服を着る跡見玉枝女史……
▼北白川宮妃殿下　最近の御眞影
▼伏見若宮妃殿下　御渡歐の光景
▼閑院宮妃殿下　婦人教育會に御臺臨……
▼小說に筆を染つゝある物集博士令孃……
▼如花　諸名家の令孃鑑
▼團子坂の菊　會式野外料理
▼東伏見宮妃殿下の御運動……
▼令孃と日曜
▼鰺料理法の寫眞說明……
▼馬車上の同盟國兩陛下……
▼日向輝武氏夫人及其家庭……
▼珍野菜▼菊花展覽▼ダリア
▼胡蝶の舞▼ピアニスト其他

讀物

◎我校卒業生の女優志願者　三輪田眞佐子
◎床しき婦人實例　跡見花蹊
◎躾を誤まりし母親　岸邊福雄
◎袈裟御前　遠山稻子
◎結婚前の婦人　山脇房子
◎女學生の氣質色々……　西田敬止
◎東西看護婦相違……　萩原竹子
◎女優と女學生……　澤柳政太郎
◎危險極る女優志願……　中島德藏
◎淸き婦人　大町桂月
◎鰺一式の料理
◎伊澤乙女孃訪問……　婦人記者
◎我婦人と似非なる獨逸婦人……
◎惡娘を持つ母親の苦……
◎寄宿舍の窓より觀たる世間
◎娘に書せる小說　物集博士
◎米國人歡待振　瓜生婦人
◎和洋服兼用の
◎小供前垂れ
◎育兒……　鷲山女史
◎コートショール
◎小取廻の日向家臺所　跡見李子
◎惡女學生を感化せし實例

東京飯田町四の四　東京社　電話番町二三三九

(ほノ三)

女子文壇の廣告によりお申込の節は其旨御書添を乞ふ

第二回新學期開始

實用女學講義錄

◉入會の最好機は今日也

此際入會者は入會金免除の特典あり

▲自宅に在りて業務の傍、高等女學校程度の學術技藝を修得せんと欲するものは速に本會に入れ、本會發行の實用女學講義錄は前記學課の外に我國家庭の事情に參酌して女子必須の諸學藝を遺憾なく講究せしむ。

▲會長　尾崎行雄氏自ら會務を監督し取扱親切也

▲講師　斯道に經驗深き專門大家拾數氏之に當る

▲組織　高女課程以外家政技藝等を加へ實用的也

▲講義　言文一致點入れ假名付きにて誰にも判る

▲質問　不明の處は何回にても自由に質問を許す

▲雜誌　會員には講義錄の外機關雜誌を每月進呈

▲本會は中學講義錄を發行して成功せる深き經驗を基礎として新式の教授法により丁寧懇切に教授す、小學校卒業位の學力あらば何人にても容易に了解することを得べし

▲會員　の詩歌文章俳句は添削して雜誌に掲載す

▲會費　全學期の會費は都合半月の學費にて足る

▲入會　何時入會するも講義錄は第一號より送る

▲章票　會員には會員章、修業證、卒業證を送る

▲特典　此際至急入會者には入會金を免除すべし

◉見本つき規則書　申込次第無料進呈

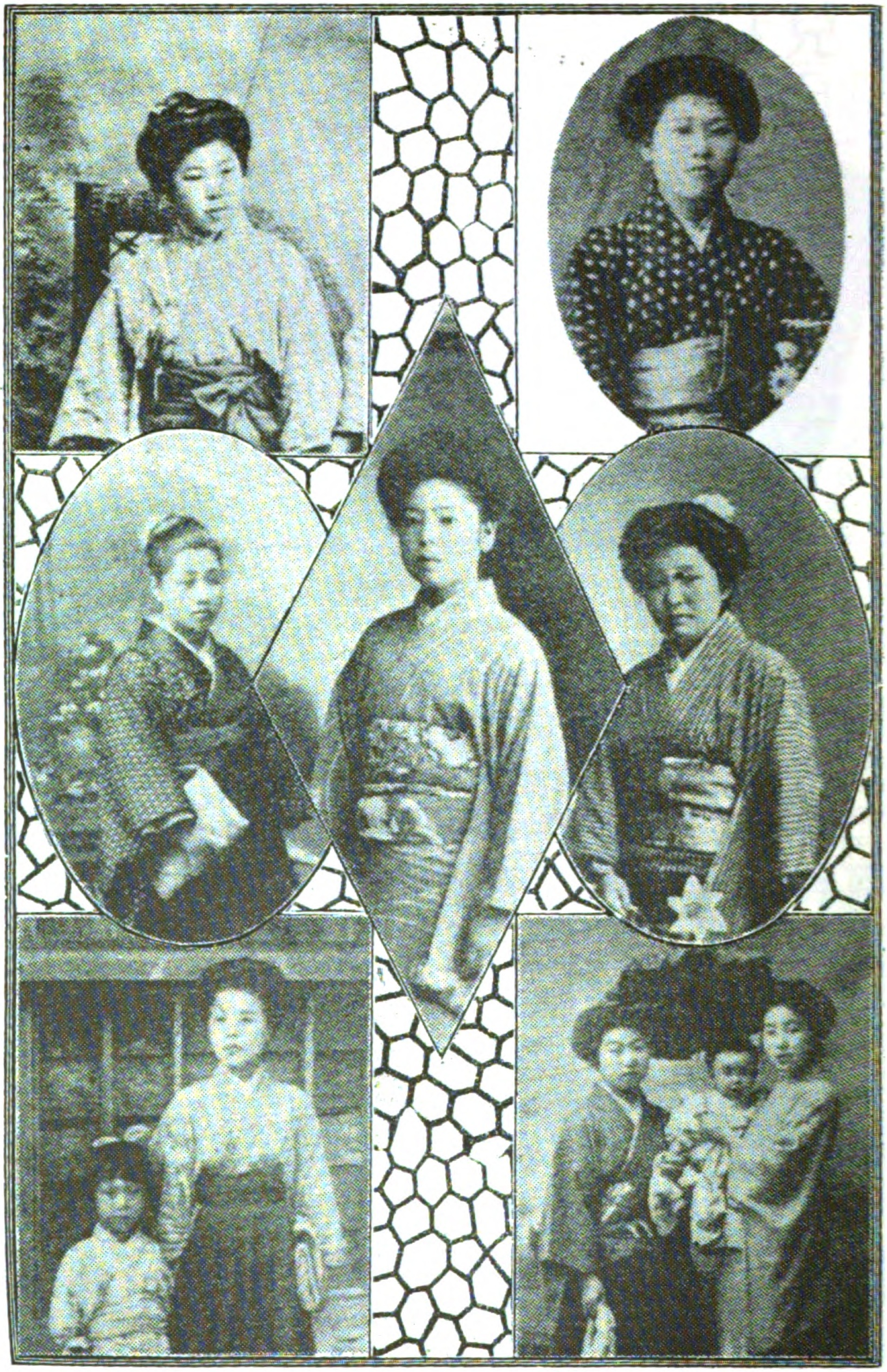
講義錄第一號は拾月一日發行也

東京神田區駿河臺

大日本國民中學會女學部

振替東京四二〇〇番　電話本局（三三〇〇四番 七〇〇七番）

わが寫眞帖



（江尻）三宅花園子
（德島）上野浦箏子
（佐渡）田村貞子
（京都）中畑春枝
（遠江）新井智江子
（横濱）關村梅子、小田切絹子
（松山）近藤さも子

（續々誌友諸孃のお寫眞寄贈を乞）



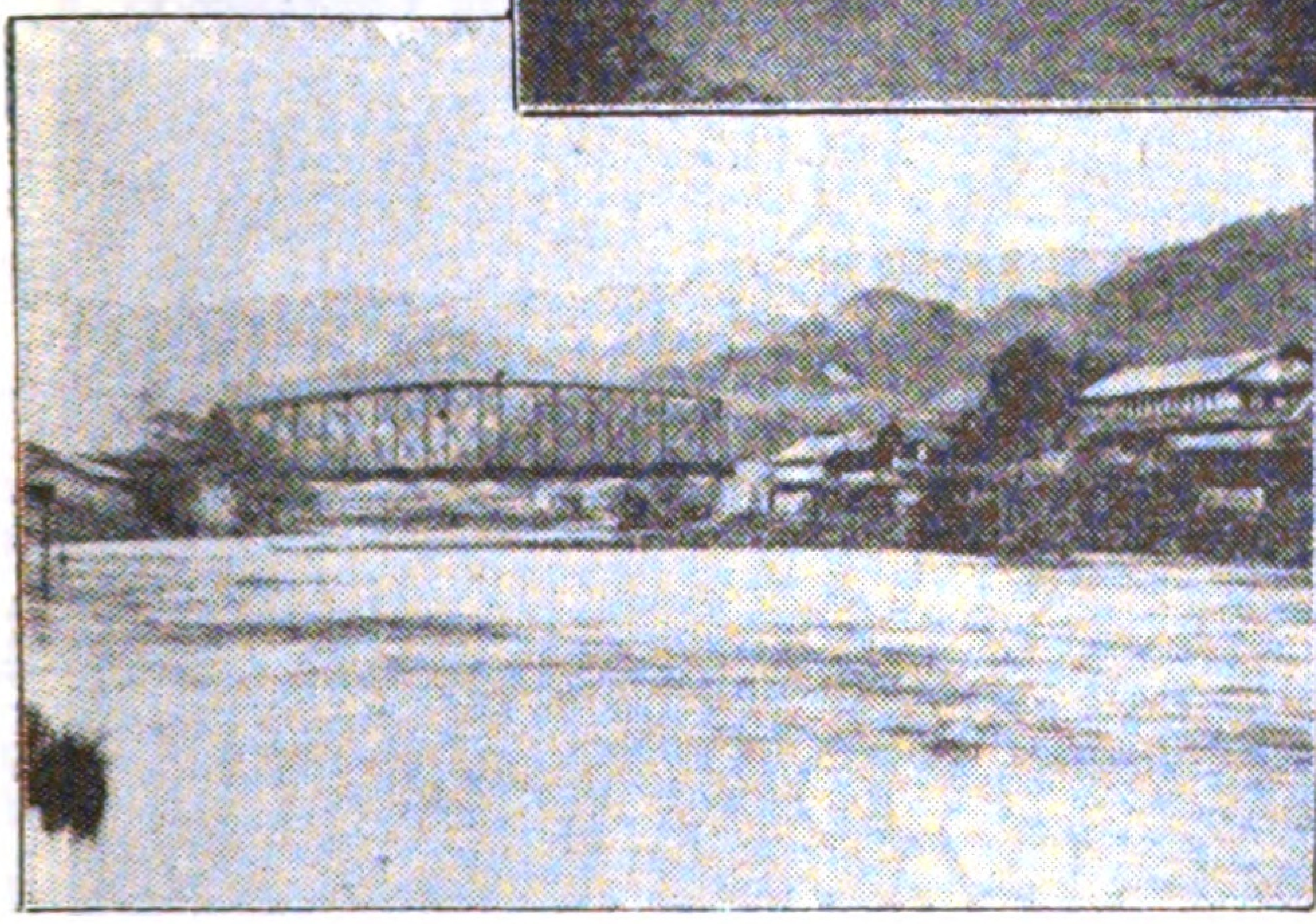
近江永源寺の紅葉

（足利きみ子寄）



木曾山中（與川古典庵の秋月）

（同上寄）



天龍の河口

（長野縣 丸山榮枝寄）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

▷見よ立身出世疑なき良書を◁

近刊豫告

十一月中旬頃製本出來

資本不要 出世の秘訣

△生存競爭の激しくなるにつれ**獨立自營**の道愈々困難を加へ世間有爲の青少年諸君が徒らに遠大の志望を抱きて陋巷に蟄居しつゝあるを慨し、如何にせばよく資本なくして**實業家**たり事業家たるを得べきか、如何にせば金満家と同じく社會に介在して縦横に其の**敏腕**を振ひ**志望**を**達**するを得べきか、如何にせば思ふが儘に**活動**し赤手にしてよく巨大の**資金**を得べきか等の問題を分ち青少年に必要なる**東西古今實際的成功の根源**を究め、**百五十項**に區別して**丁寧親切**に**指導**せる**良書**なり請ふ坊間に販賣せる杜撰なる愚書と同視する勿れ

成功良栞 立志訓（五版）

大町文學士序　長谷川天溪君閲　天風編

△正價金二十錢　郵税二錢

古今名家 短文軌範（五版）

大町文學士中内文學士序　文學博士本居豊穎先生閲　松風編

△實價金三十錢　郵税四錢

新選俳句集 附俳文評釋 最新版

高濱虚子撰序、鳴雪不折兩氏口繪（虚子廿四句木版畫入）

△正價金四十五錢　郵税六錢

發兌元　東京市神田區旅籠町一丁目　文光堂　（賣捌）東京堂○北隆館○至誠堂○東海堂

最新大秘術

全一冊

本書を出版せんとするや、實地試驗のため十數日を費したり。而して皆何人にも容易に出來得る事を認め、快く玆に發賣す。故に無責任の雜書と同視する勿れ。

▲送料共廿七錢▼切手代用卅錢▲振替二錢增▼

人造魚肉料理 くづ粉とかんてんとで珍らしいおさかなの料理が出來る。其が眞物と少しも違はぬから客として賞美せぬ者はない。近來の大發明にして婦人として必ず覺えおくべき奇法である。

寫眞ゑはがき製法 自分の寫眞をゑはがきに作るに廿八錢の原料で廿枚出來る。器械など入らぬ。ゑはがき交換用、年始狀用として最も面白い方法である。

美術印刷術 恰も石版印刷の如く頗美麗、書ても畫ても自由自在器械いらず藥品安し。年始狀廣告名刺によし。

無刀彫刻術 筆で木に字を書いておいて後藥品をぬると風雅なる彫刻が出來る。東京では看板名札柱掛など作る。

奇々妙々手帖製法 筆もいらずに竹きれ針の先で字が書けてあぶれば消えて元の通りになり一冊の手帳が何年も使はる

輕便ガス燈 僅かの藥品を用ゐてガスを發生せしめ燈火とす費用少くして石油より數倍明るし東京にて大流行也誰にも出來る。

保證發賣 本書を見てもし此廣告通り出來ざる時は何時にても返金す。安心して注文あれ。右の外奇法秘傳數十種掲載す。

●輕便ラムネ製法●ランプを明るくする法●香料製造法●木綿を絹の如く見せる法●織物に寫眞を染め出す法●人造麝香の製法●手拭に自分の名を染め出す法●醬油及酒の倍增法●いぼ及ほくろをぬく法●蠟燭德用法●皆一字千金の良書也。急讀せよ。

發行所 東京神田錦町三丁目 振替東京一六一八番 **學友社**

色白くなる新液

色黑き人が用ゆれば次第々々に白色艶美の奇効あり試みんとせば郵券二錢送れ効能書を送る

東京小石川區柳町 東洋堂藥院



●診察時間朝七時より夜九時迄●專門醫擔任診療●

梅毒りん病ぢ疾わきが生殖器病神經衰弱症

淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横兩國橋ゟ三丁

東京 中央醫院

生殖器病神經衰弱 記憶力減衰陰萎遺精早漏夢精發育不充分症等

梅毒横根下疳●**りん病**●**わきが**●**ぢ**●皮膚諸病

▲病狀を記し郵券六錢封送せば療養書と如何なる重症も誓て全治し得る特効新藥の說明書を送る

東京市淺草區瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横 **中央藥院**

一大奇法

ちゞれもくせも もはへうけあい

本法は**女髮結師安部歌子女史**の多年實地研究したる秘法にて是迄の使用者を悉く滿足せしめたる一大奇法なり照會者は往復はがきにて申込あれ

東京麹町區三番町六十七 小林濟世園

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

作文之最良材

女子文壇社編輯局選

懸賞文集 文壇の花

● 大判二百五十頁 特賣價金拾錢 郵税一錢五厘

懸賞文集 女子懸賞文集 第二

● 中判五百頁 特賣價金貳拾錢 郵税六錢

懸賞文集 文壇の光

● 大判二百四十頁 特賣價金拾錢 郵税一錢五厘

世に作文書多しと雖も、妙齢花の如き少女の手に成りし生きたる作文作歌の良書は此等を推して其優なるものとす、女子平生の心掛として優しき文章を學ばんと欲する者は來りて本書に親しめ、新時代の新文藝に接觸せんと欲するものも亦本書を繙け、此の如く廉價に此の如く容易に、作文作歌の道に入るの法は殆んど他になし、敢て之を提供す

東宮侍講本居豐穎先生題詠、文學博士小杉榲邨先生序文
下田歌子先生題歌 國學院學士小森松風君編

美文作法

● 大判二百卅頁 特賣價金貳拾錢 郵税四錢

美文の作り方を最も明瞭に解説し、加ふるに大家の名文を模範として擧げたれば、文章を作り、文章を愛する者には寸時も座右を離すべからざる良書なり

報知新聞記者 中村木公君著

實地精査

女子遊學便覽

女學校長寫眞肖像入

特賣價拾五錢 郵税四錢

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め自ら學校の選擇に迷ふ諸嬢も之を讀め、一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

東京市京橋區大鋸町十二番地 女子文壇社出版 (振替口座東京第壹七貳八番) 全國賣捌書店



第五年第十四號
明治四十二年十一月一日發行

雨に濡れた林の中の光景が照ると曇るとて間斷なく變つてゐたが、或時は其處に在るほどの物が一時に微笑でもしたやうに燦爛となると、むら〳〵と立た樺の細い幹が、ふと白絹のやうな柔しい光澤を帶びて其處らに落散つた葉が急に斑に金色に光る、そこて頭の茸々したペアポロトニク蕨の類の美しい長い莖までが最う秋だけに熟え過ぎた葡萄のやうに色づいて際限もなく纏れつ絡みつして目前に透いて見える、かと思ふとまた四邊一面に急に薄靑くなつて瞬く間に煌煌した所が滅くなつて了へば、樺の木立も光澤が失せて、宛然まだ冬の冷たい閃つく日光を受けぬ降りたての雪か何ぞのやうに白々となると――小雨が音のせぬやうに、忍んでぱら〳〵と降出す。樺の葉は著しく色は褪せてゐても流石に尙ほ靑かつたが、唯其處らに疎に見える稚木のみは總て赤くも黃ろくも色づいて、ふと日光が雨に濡れたばかりの細枝の繁みをちら〳〵と漏れて來る時には、俄かに目ばゆい程に光り出す、鳥は一羽も啼かず、皆何處にか隱れて靜まり返つてゐたが、唯折〳〵人を弄るやうな四十雀の聲のみが鋼鐵の鈴でも鳴らす如うに聞える。

亭四迷氏　『片戀』より

靜かなる冬の木立に
月光は頭を垂れぬ

風もなし
かゝる一夜
森に綴けるほの白き
路のかたへを
何處へか……
はた、いづこより……
馬車ぞ走れる

うろはしく黑き
馬車ただひとつ
都はづれの
近郊の月夜の路を――
折柄響森に入れば
行手には嵐かすかに
又聞く荒き水の音の
そことしもなく歔けるを

夢を現を斷くてたゞ
音樂のごと
月光は森を照せり

三木露風氏『廢園』より



若き婦人の根本修養

第十二　約婚より結婚まで

羽仁もと子

深く相知ることを要す

前號に純潔なる愛情は、その結婚が未來の子孫のためにも幸福であるといふ自信と共に、よき結婚の二大要素であると申しました。そうして如何にして、折々の誘惑に打ち勝ちて、わが愛情を純潔に保つべきかを記しました。中に若き男女の間には、趣味や人柄のあまりに不釣合なる仲でない限り、自分にも又他人にも多少他の感情を引きつける力のあるものです。殊にその容貌ものごしに、またはその心立に、少しでも優れたる特色を持つてゐる男女は、他の感情を引きつけることの一層に深いものでありますけれど、久しきにわたつて飽きも飽かれもせぬと云ふやうな愛情の要素となるべき相互の資格は、なか／＼に復雜なものである

と申しました。

結婚前には、彼の人でなくてはならぬと、熱心に望んでゐても、一緒になつて見ると、間もなく互に不滿足を感じあふといふやうなことは、強ちに薄情な譯ではなく、全く相手方の或る一つ二つの特色に魅せられて、輕卒に結婚をした爲めてあります。いつそ見ず知らずの二人の男女が、或人の媒介によりて、充分なる所謂聞き合せをなし、本人同士も又その近親も、共にその人物と境遇を好ましく思ふ所より、一回二回の會見をなし、間もなく緣組をするといふやうな結婚ならば、若き男女の本當に相知る機會に乏しき今日柄、まだそれもよからうと思ひますが、本人同士の愛情を基とする方のみに出るならば、前のやうななまなかな知り方のなく、長所も欠點も、互の過去も現在の境遇も悉く知りぬいてさうして互に熱心なる愛情と深き同情とをもつのでなければならないと思ひます。

互の愛情を打明ける時機

即ち最も普通の場合に於て、か丶る愛情の成り立つのには、相應の年月を要すると思ひます。その間には自らその僞りなき心情も、また人柄も境遇も分るてあります。言はず語らぬ間に、双方自然にそれ丈けの了解が出來た處で、初めて互の愛情を打ちあけることの出來る時機が來たのだと思ひます。そうして互の年齡も已に長じ、男子にありては獨立の生活を營む道も大方は緒についてゐる程の時でなければなりません。なほそれを打明けるのには、云ふまでもなく男子の方よりする筈て、婦人よりするのは恥ずべきことで御座います。そうして又その愛情は、互の間に於て打明けるとしても、男子よりの結婚の申込みに對する許諾は更に愼重を旨とするために、必ず兩親の意見を聞いた上のことにすべきものであらうと思ひます。

良緣は天にあり

折角の愛情をば長き間心一つに秘めて置く中に、意中の人が若しも他に結婚の約束でもするやうなことが

あつてはと、思ふ人もあるかもしれません。世間には此種の考のために、よき子と見れば、幼き時より兩親の間に於て許嫁をするとか、または本人同士の間でも學校を卒業した上でなければ、結婚することは出來ないけれども、氣の代らぬ中にと入籍をすませて置くといふことなどよくある事のやうでありますけれど、これと同時に、俗間にも「無理にまとめて纒らぬこともありますまいが、かく事の間違ふのも、御縁のないのでありませう。」などゝ、縁組には總て人爲的の細工を喜ばず、結婚は天縁であるといふ考も、また自然に普通の人の感情を支配してゐる樣で御座います。思慮と經驗に富む人には恐らく誰でもこのやうに思ふことゝ思ひます。よき縁をとり逃さじと、樣々の細工に苦心するよりも、寧ろ縁は天にありとして、徒らにわが戀愛をものにしやうとすることなく、機の熟する時に、天の良縁になり得るために、立派なる婦人の資格を作ること、及びわが愛情を純潔に保護することに、あらん限りの力を用ゐべきであります。

愛情の要求を棄てねばならぬ場合

よき結婚の二大要素は、相互の愛情と、その結婚は子孫のためにも幸福であるといふ充分なる自信とであるとすれば、すべての男女は結婚に際して、父として母として、わが意中の人は、果してよき資格を持つてゐるかどうかといふことを、最も愼重にまた公平に考て見なければなりません。この意味よりしても頭腦の明確にして德性の厚き人、そうして又なるべく、自分の性質の欠點を補ひ得べき人を撰ばねばならず、またあまりに身體の虚弱なる人とは結婚すべきものでないと思ひます。例へば不治の病氣に罹つてゐる愛人と、進んで結婚するやうなことは、却てその情に厚き故を以て、世上の稱賛を博することもあるやうでありますけれど、それは結婚を以て唯に當人同士の都合とのみ思ふ、誤りたる考へより來てゐると思ひます。さうして又互の愛を全ふする道は、結婚より外にないやうに思ふ、淺薄なる考へより、來てゐるのであらうと思ひま

す。子孫に對する責任を、眞面目に考へることとの出來る人は、かゝる場合に於ては、自己の愛情の要求に打ち勝たねばなりません。相愛する兩人の共に捿むことの出來ないのは、實に氣の毒なことであります。しかもそは必ずしも愛の失敗ではありません。高尙なる愛情は、徹頭徹尾精神的なるものであります。そのやうな事情のために結婚することが出來ないとしても、相互の愛を全ふする上に何の妨げもない筈で御座います

約婚中の男女は何を爲すべきか

約婚の首尾よく濟んだ後は新しき家庭を作るために兩人心を合せて、すべての準備をしなければなりません。さうしてその會合往來には、必ず兩親の承諾を得て時を定め規律を重んじ、またなるべく適當なる同伴者をもつやうにして、他人の誤解を招く餘地のないやうにしなければなりません。これ唯世間體を飾るためでなく、約婚したる中とはいひながら、結婚前の生涯と結婚後の生涯とを嚴重に區別することは、純潔なる愛情とゝもに、幸福にして嚴肅なる結婚をなすために、最も大切なることであるからで御座います。

約婚中の男女は、往來することが必要であります。餘りにかけはなれて暮すことは、双方のために不利益であらうと思ひます、家を持つことに就いても、双方打ち明けて話し合ひ、互に相助けてよき準備をするやうに、大體の打ち合せはするにしても、夫は夫、妻は妻と別々に支度をすると、出來た新家庭は、必ずゴタ〳〵と混雜したものになり、二重になつてゐるもの、足らぬもの、値段の高いもの、またあまり安いもの、すべてが工合よくゆかぬ許りか、互にそのやうな不釣合なものを集めるために、時と金とを費つたことが、全く無益になりますゆゑ、すべての事を本人同士、よく打ち合せて、初めより一定の方針のもとに、きまりよき新家庭をつくるやうにしたいと思ひます。西洋では日本のやうに、嫁入をする時に、箪笥、長持などゝ衣類は澤山に用意せぬ代りに、新家庭の大きな道具、即ち椅子、卓子などゝいふものは、男子の用意すべき

ものて、皿敷、ナフキンといふやうな布のもの、并に小道具類は、女の方て用意するやうな習慣になつてゐるさうて御座いますが、このやうなことも、又よい仕方だと思ひます。

約婚中の歳月は、長いがよいか、短ひがよいかといふことも、また大切なことであらうと思ひます。夫となるべき男子の方が、相應に忙はしき職業に從事して移り變る世の中と共に進歩する位置にあり、妻となるべき婦人は、靜かなる家庭に、なすこともなく暮してゐるといふやうなことである場合には、年月のたつ中には、得て双方思想と好みに著しき懸隔を生じて、不幸なる結果を見るやうなことも、有勝ちであります故多少の事情は繰り合せても、速に一家をなすことが、利益であらうと思ひますけれど、若しも双方ともに、なすべき仕事を持つてゐて、しかも時々相往來することの出來る事情であつたならば、男子の方に父たり夫たる精神的の用意をなしつゝ、また結婚と質素なる新家庭をつくる程の費用を辨じ、更にこの人の收入に相應して、多少の金を餘す位の物質的準備の出來た上で結婚すべきものであらうとおもひます、女子はまたその間に於て、夫たる男子の境遇性格に相應じて、その人の妻となるに就いての、特種の修養をなすことが出來る譯て御座います。勿論出來るだけ相互に勵まして、これら結婚の準備の双方ともに、一日も早く出來るやうにつとむべきことは、いふまでもなきことであります。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

娘の時代の修養に就てのお話は、こゝに終りをつげました。よき妻、よき母、幸福なる婦人の一生は偶然にして來るものでありません。私はくれ〴〵も愛する讀者方の、娘時代の修養に違算なきことを祈ります。(完)

羽仁さんの若き婦人の根本修養は一先づ茲に終を告げました、回を重ぬること十二、學校時代より結婚當時に到るまで、所謂若き婦人の根本の心得となるべきことが正しく書かれてあります、此稿の終りに臨んで更に皆さんに第一回よりの再讀をおすゝめ申します。

記者

海外に出るに就ての修養

衆議院議員　竹越與三郎

私は支那印度から、南洋殖民地をかけて、四ヶ月にわたる旅行をした、此行程一萬三千里、舟車を替ゆる八回餘、漸く先日歸朝したのであるが、漫遊の目的が政治經濟外交等に在つた爲め、家庭とか社交とか婦人問題とかに就いては研究の遑無く、考ふる處も無かつたから、從つて話す事も無い。唯萬里の波濤を隔てた異域に於いて見た日本婦人に就て、少からず感慨を催ふさゝるを得なかつたと云へば、外でも無いかの醜業婦であつて、南清南洋殖民地の到所に居るから自然と目に入る、數少い日本婦人中たま／＼存する者と云へば醜業婦では、これ實に國家の體面にも關するわけである、で畢竟是れは如何なる點に原因するかと云はゞ、素性正しい婦人にして海外へ出る雄々しい氣象の者が無いからである。

凡そ海外の殖民地にせよ、はた異鄉の雜居地にせよ新らしき生活に婦人の力微せば決して出來るものでは無い、然かる要求あるにかゝはらず、順良なる淸き婦人に、身を挺んじて萬里の波濤を越ゆる勇氣ある者が無い、自然如何しい婦人が之を了して出かけると云ふ事になる、是れは一國の體面を維持する上から云つても、取締まらねばならぬ事であるが、其れと共に婦人にも亦其れ丈けの氣象を持て貰ひたいのである、其れには讀物とか修養の上に爾う云ふ目的を執り眼界を擴めねばならぬ。

今の良妻賢母と云ふ事も結構ではあるが、婦人が唯これまでの狹き住居一つを我が天地とし、家に立て籠つて琴棋茶の湯を事とするのが婦人の天職なるかの如く心得しむる修養は斷然改めねばならぬ。それには讀物の如きも改むる必要がある、而して海外を横行する勇氣を作り、男子の助力を爲すべく婦人が卒先して赴く樣にならねばならぬ。實際細君以外獨身者と云へば醜業者で、淸き者の藥にしたくも見られない如きは情なき話しである。女は母たり妻たる以前獨身たるべき筈である、其の根本修養は如何、今日の教育は是れをして居やうか、私は時の機運に鑑みどうしても是れからの婦人は世界を相手に仕事の出來るやうに、海外に出て生活するに適する樣に、教育修養を爲さねばならぬと思ふのである。(談話)

知らぬ人

薄田泣菫

月の明い晩であつた。私は二階の書齋で寢椅子に凭れかかつた儘、乳色の空氣に包まれた附近の景色に見惚れながら、何處か人通りの少い町でも逍遙いてみようかそれとも恁うして煙草を喫し喫し、取止もない空想にでも耽つてゐようかと、其麼事を考へてゐると、女中が客の名刺を持つて上つて來た。

名刺には比企清一とあつた。これまでついぞ聞いた事のない名前だが、別段差詰つた用事があるでもないし、知らぬ人の知らぬ談話も、こんな晩には氣を惹かぬでもなからうと思つて、兎に角會つてみる事にした。

女中と擦れ違ひ樣に上つて來たのを見ると、髮毛の薄い、赧ら顔の、額に創痕のある三十五六の男であつた。

客はじろりと遠見に物を透すやうな眼付で私の顏を見て、何處かに訛のある調子で初對面の挨拶をした。そして恁麼事をいつた。

『いゝ月でございますね、恰で牛乳色をした――これが海の上ですと、この頃になれば幾らか、青味がかゝつて何だか物凄うございますが……』

私はそれを聞くと、直ぐ船乘の男だなと勘付いた。そして那のじつと透すやうに上眼に物を見る癖は永い間濃い霧のなかで、遠方を見馴れた故に相違ないと思つた。

『海においででしたか。』

『はい……彼是既う十七八年にもなりませうか……實は今晩唐突に御訪ねしましたのも、夫に就いてで御座いますが……』と男は窮屈さうに畏まつた膝を少しのり出すやうにした。そして途切れ途切れにこんな事を話し出した。

男は近江の今津在の農夫の二男で、十五の時國元を出て、一時京都の同志社に入つてゐたが、何うした事



の間違で、教師の亞米利加人を撲つたとかで退校處分をせられた。その儘ては家の閾も跨ぎ難いといふので少しの知邊を便つて神戸に出て、船乗になつた。て、十幾年かの間歐洲航路だの、南洋貿易だのの船に乗り込むで、可成の貯蓄も出來たので、船の神戸に入つたを機會に久し振に故郷に歸つてみると、親爺は長い煩ひて死にかけてゐた。そんな心配の間に、兄は二三年以來商買の手違て、片端から家財の差押をうけるとい

ふ始末で男は義理にも蓄への金を悉皆投げ出さずには居られなかつた。で、どうにかかうにか家財の差押だけは免れたが、親爺の生命は到頭取留がつかなかつた。男は葬式を濟ませて空手でまた神戸をさして歸つて來たが、途中で路金を悉皆費ひ果して了つて、今では汽車賃にも事を欠く仕末となつた。でも遠いといつたところで彼是三十里足らずの道程、歩いて歩かれぬ事もないが、明日の朝までに歸つてゐないと、今度の船出には間に合ひかねる、で、甚だ申し難い仕儀だが幾らか立替へては呉れまいかといふのだ。

『然し見ず知らずの御方に、お立替を願ひますも如何かと存じまして、實はここに這麼物を持合せて居りまするが、お買上が願へますれば、また……』

男は恁ういつて、手捷く紐釦を脱しながら、内隠しから紙に疊み込むだ薄つ片な包みを取り出した。受取つてみると、中には古寫眞が一二三枚と繪葉書が十枚許あつた。葉書は皆外國出來で、紅い腰布を卷いた黒奴が、日蔭に蹲踞つたモロッコの風俗だの、肥つた下婢が七面鳥を追ひまはしてゐるナポリの朝市だの、ジエヂヴだの、ダオルミナだのといつたやうな極あり觸れたもので、他に二三枚巴里の裸女の如何しい踊の手振が交つてゐた。寫眞はビスマルクとクルップと他に一つ或る二等國の皇族で、二三年前我國にも來た事のある方のがあつて、夫には怪しげな記名が添はつてゐる。

『御覽の通りの高貴のお方で、恁うして記名までございますのを、物の解らない輩の手に渡しても如何かと存じまして、それで此方樣をお伺ひ致しましたやうな次第でございますが……』

男は上眼でじつと私の顏を見詰めながら恁ういつた私はこれ許り繪葉書とか寫眞とかを賣りつけて幾許の金にせうといふのだらう、這麼物では神戸は愚か吹田迄の汽車賃にも足るまいと思つた。で、物好に一寸押してみると、男は極惡さうに頭を掻いた。

『いや、これ許の物で、幾らなぞ其麼事を申上げるのではございません。唯もう神戸までの汽車賃さへ出來ますやうでしたら……』と氣恥かしさうに言つたが、直ぐまた調子をかへて、『これで船に乘り込みますと、既う占めたものでございます、陸では一つ轉ぶと、直ぐ既うお金と來るのですから、どうにも行りきれません。』と氣輕さうに言つて、氣味の惡い笑ひやうをした。

私は訊いてみた。
『かういふものは何してお手に入りました。矢張その土地土地でお需めになつた、それとも……』
『は、大抵船がかりの港で、土地の商人から買ひためたものですが、皆郵便で出したり、土産に贈つたりして、今では這麼に殘り少になりましたのです。何金目にしたら、眞の些細のものでせうが、それでも私には種々な事を思ひ出させますので、葉書とか寫眞とかを買つて戴くといふのではなく、私の聯想を買つてやらうといふお思召で願へますれば結構だと存じます、それにこの寫眞は私が〇〇〇丸に乘込むでゐた時分、宮様がお手づから記名をお認め下すつたやうな次第で……』
男は日に燒けた肌理の粗い指で寫眞を取りあげた。そして型の古い角の擦れ擦れになつた臺紙を引繰覆してみた、裏には金釘流の假名文字で、譯のわからぬ歌が一首書きつけてあつた。男は口の中でそれを繰り返し繰り返ししてゐたが、何だか態と感情を裝ふやうな點が見え透いてゐた。
月は擽たさうな顔をして、流し目にじつと窺き込むでゐる。附近は靜粛した。
『さういふ風になか〳〵航海をなすつたら、色々變つた事もお在りでせうね、陸では一寸見られないといつたやうな……』
半分は物好で、半分は愛相ぶりで恁ういふと、男は待つてゐたと言はないばかりに急に調子づいて、
『それはもう、色々と變つた事もございました。海上生活の樂みつたら、まあ其麼事でせうか……』
と膝を滑り出して來て、獨で感心したやうに顎をしやくつた。そして急々した調子で、印度洋の水潜の乞食だとか、波の荒い安平沖の筏の乘心地だとか、埃及の燒土に落ち入る夕日の眺めとか其麼事を取留もなく喋舌り續けて、終ひには這麼事をいひ出した。
『一度恁ういふ事がありました。その折にある親方持の小蒸汽船に乘り込むでゐましたが、丁度夜の一時過てした。その晩は霧が深かつたので、用心して幾らか速力も緩めてゐたのですが、どうしたものか不意に船脚がぱつたり止つて、些とも動かなくなりました。私はまだ起きてゐて、仲間と花札を引いてゐたものですから、何だらうと甲板に驅け上つてみると、船首の方角に當つて、一寸先も見えないやうな霧のなかに、ぼんやり人が立つてるではありませんか、影の長い、ぐ

しよ濡れになつた洋服を着た老人が一人――幽靈なのですよ。慄然としましたね、それを見た時は。此方が皆が一緒になつてわいわい騷いでゐると、幽靈め、瘠せこけた手を振つて、頻と右手の方角を指すのです。無氣味なうちにも、何だか理由がありさうなので、楫をその方角に取り直すと、幽靈めふつと吹き消すやうに無くなつて、船はてもなく動き出しました。さやう物の一時間も行つて來ますと、霧の中で小蒸汽船が一艘沈みかかつてゐました。で、早速救助に取り掛りますと、二十人許の人數のなかに、先刻の幽靈がゐるぢやありませんか。――髭の長い、眼の凹むだ男で、ぐしよ濡れになつた儘で、何か頻と世話を燒いてゐるのです。仕合せと仲間に言語の達者な奴が居合せましたので、訊いてみると、薩哈連のもので、潮加減か何かで這麼沖に押し流されて、つい暗礁に乘り揚げたのですね。老人の當人は夢中になつて、仲間の世話を燒いてる他には、何一つ思ふ隙もなかつたといふのです。何でも彼島を逃げ出して來た罪人の仲間らしいので密と此方に連れて歸つて置きました。とにかく不思議な事もあればあるもので……』

『生靈とでもいふのでせうな、何處の海でした、それは』私は訊いてみた。

『さやう、溫禰古丹から少し左に寄つた附近でございました、恰度今夜のやうに月は出てゐましたが。何分前申したやうな大霧だものですから、其邊一躰が茫然と煙に包まれたやうな工合で、いやどうも氣味の惡かつた事と申しましたら。』

『溫禰古丹といふと、何處への航海です、樺太の附近へでも……。』

『はあ、否……ニコライスクから勘察加の方角へかけまして。』と何だか一寸曖昧な事をいつたが、直ぐ調子をかへて、『一躰河だの湖水だのに比べて、海は陽氣なものだといひますが、それでも北海になりますと、偶に恁うしたものに出會します、海上生活もなかなか貴方……』と態と馴々しい口をきいて嘆ずるやうに言つたその癖眼には得意さうな色がありありと浮いてゐた。

私は男め、てつきり密獵船に乘り込むで、勘察加の附近へ稼ぎに往つたのに相違ないと睨むだ。然う思つてみると、額の創痕もどうやらその時分土地の漁師と何かの事情で、激しい取組合をした名殘のやうでもあつた、私は然うした生命懸けの仕事で採つて來た獵虎の毛皮とかいつたやうなものが、しやらくら娘の襟卷

か何かになつて、男は今だに恁うして慘な世渡をせねばならない境遇といつたやうなものを考へてみた。客は默つて煙草を喫してゐる。私は幾らかの金を包むで先刻の葉書と一緒にその膝元に押しやつた。
「寫眞だの葉書だの私さういふものに餘り趣味を有ちませんから、一先づお持歸りが願ひたい。これは心許の印ですが、何卒お納めなすつて……」
「いや、それては痛み入ります。さういふ積で上つたのではありませんから。」
　男は頭を掻きながら、極惡さうに一寸辭退はしたが、それでも二言目にはもう受けいれて、
「困りましたなあ、ぢや御厚意を無にするも何てすから、暫時拜借致します。」
　と一寸戴くやうな眞似をして、葉書の包みと一緒にそつと内隱しに藏ひ込むでしまつた。そして冷えきつた茶を、ぐつと一息に飲み干したと思ふと、急に居ずまひを直して、
「それては御暇を申します。お忙しい間を飛んだお邪間に上りまして。孰れ船に歸りましたら更めて御禮を申し上げます。」
　といつて、追かけられてもするやうに、そこそこに歸つて往つた。
　私が二階の欄干に凭れて街を見下してゐると、男は門口に立つて、あちこちと頻りに道の方角を見定めてゐるらしかつたが、やつと思ひきめたやうに町を南へ下らうとして、ちらと偸むやうに此方を振りかへつた。私はその眼つきに狐のやうな狡い調子を認めた。
　月は何もかも知りぬいたやうな顏をして見送つてゐた……。

女の旅行

福光東衣 譯

諸君にして若し、穿鑿的態度て以て、人生萬般の華やかな方面と同時に、其滑稽的の部面を觀察することを怠らなかつたならば、束の間の退屈をもするの要は無い。
　我等は果して世に幸福なりや？これは實に容易ならぬ大問題てある。けれども、さる七里結灰押問答に日を潰すよりか、先づ「人間」といふ生物に滿腔の同情

を擲げることだ。而して其缺點には暫く目を閉いて、飽迄も其美點を稱揚し、男や女を怒らせるやうな惡口は口にも筆にも洩さぬことにして、それから「人生座」の觀覽席に這入つて芝居を見るに限る。但し、歌舞伎悲劇の幕を見ないで置くこと。然うすれば、日は終日夜は終夜、絶え間なき喜劇に心を樂しませることが出來る。

偖て、吾々男は、由來世の婦人に對して誠に慇懃鄭重を極めて居るのであるから、些は其お禮に、お庇さまておもしろがらせて頂くのも、まんざら道理の立たぬことではあるまい。婦人は何時、見ても面白い。其幻想、其虛僞、乃至其欺瞞、總て是等可憐の行爲の一つとして吾々を面白がらせないものはない。であるから、吾々は、ヅーッと貴族的な晩餐に招かれた塲合ても、又は平民的に乘合馬車に乘り込んだ時ても、兎に角行く所として何かの捕物を頭陀袋に入れて歸らずには居らぬ。

こゝに聊か念の入り過ぎたのは獨て旅行する女てある。日中仕事時の男といふものは、一ケの忙い動物て到底一々婦人などに關ひつけて居る閑は無いといふことを御存知無しに、なんても男である以上は常に自分を助けて呉れるものだと、豫期して居るのだから堪らない。

最も面白い光景は、ロンドンの停車塲に見ることが出來る。或る殷賑な市へ行く汽車の發車時間前といふので、群衆は出札口に詰めかけて居る。其中にこの單獨旅行の婦人が居て今切符を買ふ順番になつて居るとする。然うすると、自分の行先も云はない先から、いや問ふは問ふは、出札掛を捉へて實に色々雜多な質問の矢を、雨霰と放つ。

「其處へは幾時間位かゝります？」

「汽車は延着はしませんの！」

「あのう、ホリース……ホリースッて妾の友達の家の名なんですが……そのホリースは向の停車塲から遠いか近いか御存知？」

「若し遠いんならば、歩くと云つても大變ですねえ！あの、辻馬車は有りましやうか知ら？」

その間に、各々忙しい用事を抱へて居る人の群は、その後ろにどし／＼詰めかけて來て、中には隨分激烈に口撃する者もあるけれども、夫れには一向頓着なく悠々敢へて迫らざる容で以て、尙も質問を繼續して行く。

「賃錢は一等で如何程？」

「二等は？」

「さう。往復切符でも變りはありませんの？

後方の喋〳〵囂は爰に至つて絶頂に達し、氣早の連中は毆り衆ねない權幕を示す。

切符を買ふ段落が濟んで、改札口を拔けると、掲示板に「某市行は右、西線行は左」とあるが、孰のプラットフオームを行つて良いのやら、この女には、一寸判斷が付かぬ。いや、實は其某市に行かうとして居るのではあるが、掲示板の中にも時には不都合なのがあつて、出鱈目の方向を示して公衆を誤らせるのが無いとも限らぬ、と恁う思つて甚だ心許無いのだ。て、驛夫に尋ねる。これが又詳しく敎へて呉れるに定まつて居ればいゝけれど、數ある驛夫の中には、つい無言で掲示板を指して置いてさつさと行きて了うのがあるので、然うい ふ、場合には何うして安心の出來たものではない。性懲もなく、他の驛夫に問ふて、漸くにして某市行のプラットフオームに立つ。夫れでも未だ、稍ともすれば心の奥の奥の方で不安が頭を擡げて來る



ので、赤帽やら車掌やら、通り次第見當り次第に尋ねる。

愈々汽車が入つて來た。さて、孰の客車に入つたものだらう、一番後ろのから尖頭の客車まで行きつ戻りつ仔細に眺めてから、愈々といふので孰れかに這入る。這入つたところが、これは又何たる事ぞ！越人も呉人も悉く紳士の氣品を缺いて居そうな者ばかりの集合であつた。仕方がないから又下車て、新期蒔直に後から先まで、あれかこれかと見廻る間に、汽車は出て行つて置いてけ堀を喰ふ、機よく氣に入つた客車に乘り得た塲合に於て、先づ第一に爲る事は、此汽車は某市へ行くに相違無いかといふことを同乘者に尋ねることである――但し、然うしたところで、其市に汽車が着く迄は安心する氣遣は無いのだが。

　某市位いな距離の時ならばまだしも辛棒がつく。それよりかも少し遠い地方にても旅行するとなると、恐らく堪つた限ではない。動産不動産の悉皆は鞄に藏めて而して夫れを赤帽にでも渡して貨車に積み込ませて置けば良いものを、如何しても自分の側に置かなければ承知が出來ないといふところから、帽子函、袋、紙包、籐の籠、草花の鉢、雨傘日傘の絡だの・・・、まだ此外に小鳥の籠を携ることがある。あまり小五月蠅のて、呼ばれても赤帽が來ないことがある。其時には男の同乘者に聲を掛けて、其荷物を棚と席と床の上とに取片付けて貰ふ。但しこの塲合、花鉢は誰かの頭の上の棚に安置するのが定りだ。

　乘合馬車に於ても滑稽を演ずることは汽車の塲合と變はない。チヤリング通へ行く都合でキングス町行に乘る。暫くして、何んだか樣子が變だと云ふので心配になつて來て。

「チヤリング通へ行くんでしよう？」

と車掌に尋ねると、意外にも、

「いゝえ、これはキングス行ですよ、夫人」

と來る。

「アラ〱！とんだことをした！」

と叫ぶ。けれども、これが爲めに馬車の方向を變換して、この女の都合の好い途を走らせる車掌は無いから、この女はぶつ〱不平して男といふものは誠に同情の無い動物だ、と思ふ。まあ何時か汽車や馬車を女が運轉する時世が來るだらうから、其時に運轉手の貴婦人に澤山お禮を云つた方がいゝだらう。或時は又、この女、五十二番地へ行き度いと思つて乘合馬車に乘る。

所が他の乗客が下りるといふので四十八番地若は五十番地の邊て馬車が止まる。近くのことだから、自分も其處て下りてもよさそうなものだが、然うはしないてキチンと五十二番地の前て又止めさせる。恁ういふ女に限つて動物虐待防止會員だ或る。女に至つては、一片も拂ふのにどうして乗合馬車を自分の部屋に横着にしないだらうと不足に思ふ。――マックスオーレル――

壜（散文詩）

高濱長江

蒸暑い宵闇に洋燈を點けた。風は沈んでゐる、と一閑張の黒い机の上へぽんと落ちた――甲蟲が紫銅色に光つて・・・・
椽の下へ竊と放る。さあ此れからだと思つて居ると、又來た。又投る。――最初こそ斯うして一疋毎に何遍となく面倒を見てゐたが、何時の間にか、つい側にある嗽藥の壜の中へ幾疋となく投つてゐた。
ても沈むまいと壜の水面に泳いでゐるのが心の調子と折れ合はない、て手に持つペン先の墨汁を二三滴零して試る・・・・

翌朝、庭を掃かうとすると椽の下に其の壜が置かれてある。垣根の草むらへ投つて仕舞はうか――と思つたが、ふと感づいた――
それから土用三郎を中心にして一週間も經たらう、午下てあつた、其の壜を机の上へ持つて來て、横から縦から右から左から見る――
と薄い藍色の底には重り合つた骸が幾つとなく沈澱してゐる。水面の中央には脱脂綿のやうな面白いものがポッチリ浮いてゐる――黴だな？と目を欹てゝ凝視める――と樣々な餓えた聯想が一方の識末から意識の焦點を通つて他の又識末へ越してゆく。
斯うしてものゝ一時間も經つたらう。
ても其の水色が憂欝のしむぼるを湛はせてゐるな？と思はせる外には、甚麼も詩になりさうな情緒の搖らぎが足りない――と氣付いた時には、油汗さへ額に鈍染んて、腦がボーとして來た。
て可也疲れた體軀を椽先にある籐の臂かけ椅子に凭らして、遙か向ふの森を見渡す、と今まで緊張めてゐた我が何處かへ、スーと突出された、して唯見えるのは森の空に、奇態な夏雲が心快さうに漂ふてゐる・・・ボウドレールが散文詩に讀れる『客』の中の其のやうだ。

二つの抒情詩

三木露風

十月

すべてのもの我より離れ去る時、
われはすべてを愛し
すべてのものを抱く。

秋は五月の花よりも美しく、
秋は白きこと、君が腕よりも、
哀しきこと、接吻よりもまされり。
あゝ、來らんとする、ものうくして長き夜。
廢れし庭の木の間のさゝやく秋。
「昔の」秋。
返らぬ日あるがゆゑに樂し、
返らぬ日あるがゆゑにわれは愛す。
あゝ返らぬ昔となれるがゆゑに、
うるはしき秋のわが女よ…。

黄昏

われは太陽の青ざめたるを見、
われは殘る光の谿間に落つるを見たり。
いくたびか色かふる黄昏はきたり、
半圓の空は遠くのがれんとす。
旅ゆく人よ。
あゝかく靜かなる死と沈默との前に、
こゝろ悲しく君は希望を失ひしか。
われは太陽の青ざめたるを見。
われは、殘る光の谿間に落つるを見たり…。

秋の花園

川路柳虹

とり亂された秋の白晝の花園、
朗かな、冷い風が光をたゝえて、
花の一瓣、一よに輝く、
どこともなく歔欷る濕ぽい寂さが
地のかげから息をおさえて、
うすく日が影を落す草の中には
蟋蟀がしきりと鳴いてゐる。

昨夜、吹きすぎた嵐に
なほ荒れ立つて鳴る筧の水……
騒いだ心、さびしやかに濡れて、いま、
たよりなく落ちてゆく池のふち。

つめたい秋がいま目醒めて
輝いた白晝のうちに息づく。
向日葵、黄蜀葵、かすかな風に搖れる

芙蓉——白い夢を地におとして、
忘られてゆく追憶を嘆いてゐる。
おゝ、血のやうに萎んだ朝顔！
華やかな淋しみに默れた菊、半ば壊れた
かしら！なぜ、かう、つれない悲しみが
若い疲れに心をなやます？

華々しい歡樂がそこゝに、
甘い、切ない夢を泣いて、泣き切つて、
瞳に殘る濕んだ光りに、
も、はかなく萎れてゆく花の心……

光りのかげには寂しい夢がひそみ、
かゞやく晝の風の中にも
すがれてゆく心を苦します！
秋の白晝、秋の花園、
沈默のあいま、間隙に、
蟋蟀が悲しく嘆く、また嘆く……。

まくらもと

水野仙子

　義一を送り出してから、涼しいうちにと、汗になつたもの丶洗濯をはじめたが、途中で一寸痺れた足を緣側でやすめてゐるうちに、此頃の癖でぼんやりとなつて、これではならない／＼と思ひながらも、つひ小半時間經過せてしまつた。絞つた腕のものを竿に通す顏に、日は弱いながら眩しい位であつた。

　お茂登はやう／＼濡れ手を前掛けで拭きながらあがつて來た。簞笥の上の鏡臺の前に立つて、こればかりは縮れ毛の伯母達に羨れる、掻いても／＼ばらりと下る鬢の毛を掻きあげて居たが、ふと今日こそは一寸なりと坂町へ顏を出さずばなるまいと思ひついて、憶劫さうに溜め息をついたが、稍々念入りに櫛の齒を入れはじめた。

　やがて多くもない着物のうちから、銘仙の一寸したのを出して暫く考へて居たが、頷いたやうにそれを藏つて、引き出しをがたぴしいはせながら、下の方から縮みの浴衣をひきずり出した。去年一度水に通して、其まゝ藏つて置いたものである。糊の強いそれに手を通して、帶だけは色繻子の方を出して無造作に結んだ。脫ぎ捨てをぐる／＼丸めて押入れに抛り込んで、再び鏡の前に來て襟を直す。根下り氣味の銀杏返しに、ふくらんだ胸の浴衣姿、我れながら大人氣になつたと思つた。足袋を履かうと出しかけたが、それも思ひとまつて、メレンスの風呂敷だけを出して錠を下した。火鉢の火を埋ける。臺所へ行つてあたりを見廻して障子をしめる。洋傘を袋から拔いてふりかへりながら玄關に出た。下駄も其處にある内側のへつた疊の汚れたのをつゝかけて、下りたつてみて心に微笑んだ。當て付けといふのでもないが、なんとなく伯母にかうした構はぬ身なりを見せてやりたいので。

　出て見れば面白くないこともないといふやうな氣がした。買物のために電車の通りへ出ると、恰度お盆の

十五日なので、下駄店小間物店呉服店、並ぶあらゆる店々は賑やかに飾りたてゝ提灯などをつるして、行き交ふ人の目をひいて居る。お茂登は砂糖の袋の戸板の上に並んでゐる。間口の廣い乾物店へよつて玉子を買つた。

去年まで前掛けしめてよく其店先にたつた、路次角の、青物店の、道を塞げて置かれた荷車の間を縫つて、出ると直ぐに御支立物所の看板が目につく。洋傘をつぼめて石段を三つばかり登つて、格子のくゞりをついと押すと鈴が氣魂しく慄へて鳴つた。



慌てゝ奥から起つた足音がする。

「おや、お前かい」

面の長い叔母の目を受けて、お茂登は淋しい笑顔を見せた。

「お客樣?」

一二足の美しい鼻緒の間に自分のを割り入れて上へあがる。

「子供達さ、お盆でね、お暑かつたらう」

「お六さん、なんだか焦げ臭いやうぢやないかね‥‥

臺所に聲をかけながら、長火鉢の前に坐つて、

「よく出て來たね、隨分なお見限りだつてそいつてたのさ、はゝまアそんなに辯解しなくつてもいゝやね：さうともさ、これで一軒の家を持つてからは：あゝ〳〵さうでなくちやならないんさ。あ、先日はありがとよ、あんなことしておくれでなければいゝんだのに、それでもあアよく氣が付いたつてお繁として笑つてたのさ。」

「ほんのおしるしばかり……ほんとは私があがらなくちやならなかつたんだけど、此頃はなんだか何處へも出たくなくなつて……」

「あゝ怠儀だらうね」

ひらりと目が帶のあたりに來る。

「あのお目出度うござんした。男ですつてね、姉さんお丈夫なんでせう……まアよかつたわね」

「あゝ有難う、思つたよりも輕くつてね、私もこれでやう〳〵安心したのさ、そりやあ出てしまはないうちはどうなるものやら傍で第一心配なのさ、でも仕合せと曾惠がなか〳〵氣丈だつたものだからね……まア肥立もよし……そりやあ大きな子だよ」

と思ひ出してにこ〳〵する。

次の間の籬戸のかげから、二人の女の子が固つて膝をつき合せて、時々お茂登の顔を見て、何やら話し合つて居た。その中の一人が、今お茂登と目を合せて、莞爾しながら首をさげたので、

「あら！おりんちやんね」

とお茂登もにつこりする。

「まあ〳〵此人達は何をそんなに固まつて居るんですよ、おりんちやん、おさアちやん、飾りものに座蒲團を出したんぢやありませんよう、いゝ着物を着たつてそんなにすまさなくたつていゝぢやないか」

「あら、いやなお師匠さん」

「ホヽヽおさアちやんそつちへいらつしやいよ、私？私こゝがいゝことよ」

俄に女氣の一頻りさゞめき立つた。

「伯母さん、これ少しばかり姉さんにあげて下さいな私お産のお見舞ひつてどんなものがいゝんだかわからないんですもの……出ず入らずのもの……」

お茂登は包みの玉子を、今女の子達が持つて來たものらしい、砂糖の袋などの並んだ、茶簞笥の前に持つていつて置いた。

おや、またお前そんなことをして……困るねえ、

お前んところからそんなことをして貰はうとは思つてないんだから……まア折角だから頂いて置くがね今度からはそんな心配しておくれてないよ、なんても出來るだけつましくしなくちやいけないんだから」
片膝をついて茶道具を揃へながら、何事にも伯母は言葉が多い。
「姉さんこゝ？いゝでせうはいつても」
お茂登は次の部屋を指さして這入つて行つた。
「まア凉しさう」
腰障戸を開け放して、狹い庭の青葉を一ぱいに吸ひ込む部屋に、新らしい手拭ひを鉢巻にして產婦は寢て居た。今の聲に心持ち顏を動かして、
「お茂登ちやん？」
とお茂登の笑顏を見あげて莞爾する。
「姉さんお目出度う……」
安心と矜りと嬉しさを包みきれぬやうに、產婦は再び嫣然とした。
「あら、あら、まあ」
眞綿を頭に卷いて、小蒲團にじつとしてゐる赤兒を覗き込んで、

「睡つてるの？まア可愛いのね」
「えゝ今やう／＼眠つたとこ、お乳をやつたものだから……今つからなか／＼やんちやなのよ」
「まあね」
「男なのね、おてがらだね姉さん、昨日の朝ねえ、雜巾をかけて居ると珍らしく鹽町の伯母さんがすた／＼はいつて來なすつたでせう、お茂登いよ／＼出來たよ坂町へつていふんでせう、ぢやまあ男ですか女ですかつてそいつたら男だよつて、その男だよがさも／＼男だよだつたんですもの、可笑しくつて」
「鹽町のをばさんはね、使ひをやると直ぐに飛んで來たんですよ……えゝ……痛み出したのは一昨日のお晝過ぎからなのよ、でもどうしても我慢がしきれなくなつたのは、さうね十時か十一時頃だつたてせうよ、をばさんの聲がした頃はなんだか夢中だつたわ」
「曉てしたつてね、今一先づ歸つて寢てくるんだつてそいつてゝよ、あん時」
ふと暫く話しが斷れる。お茂登はその時恰度、小さな腕でもつて勞かれるやうに覺えた胎動から、肉の塊りが息を吸つて聲を放つやうになるまでの、不思議な

徑路を思ひやつて、腹のうちが揉めるやうな、妙な厭な氣持ちになつた。二つに折つて枕の下に當てがつた座蒲團の間から、脱脂綿の端の食み出て居るのにすら女で女の淺猿しさが感ぜられる。

「どうしたのよお茂登ちやん」

目を据ゑて赤兒の顏をみて居るので、かすかに胸を搖つて產婦は笑ひ出した。

「もう帶はしたんでせう？」

いかにもやつれ氣のみえる鬢の後れ毛のあたりから目をずうと下へ這はして、思ひやるやうに靜にいつた。

「えゝ」

心持ち恥をふくんでお茂登は笑つた。

「暑いからなか〳〵ひどいわねえ」

ぽつり〳〵とした話の中へ、先刻の二人が先を讓りながら恐る〳〵這入つて來た。

「さア〳〵よつくごらんなさい、此人達は赤んぼが見たくて仕樣がないんですとさ、おや、睡つてるのかい？」

賑かに伯母も續いてはいつて來たので、お茂登はずつと蒲團の裾の方に居去つた。

「へえいらつしやい」

と產婦から先に挨拶されたので、二人は溢れるやうな笑顏をして

「お目出度う！」

と其處に固つて座つた。

「あら？」

と遠くから覗き込んで、一人が振りかへると、

「まア可愛いことねえ」

「ねえ！」

と笑顏を產婦の顏から媚びるやうに師匠の目にうつす。その實どんなに可愛いかと思ふ心でみては、赤兒の赤く浮腫んだ臉や鼻が案外に思はれるのだ。

「不思議ねえ」

と突然一人が笑ひ出した。

「何が……？」

「ホヽヽだつて……だつてその一昨日、いや先一昨日まで私等が來てたでせう、そん時までなんでもなかつたんですもの、不思議だわ、お腹ん中からこんな者が出るんですもの」

さういつておさアちやんといふが顏を赤くしながら笑つたので、

「またおさアちやんの笑ひ上戸」
と果てはみんなして大笑ひになつた。
「不思議つていへば不思議さねえ、ほんとにおさアちやんおりんちやんも、恰度お湯をつかつて居るところへ來て吃驚してるのさ」
「ほんとうに思ひがけなかつたんてすもの」
「おりんちやんお盆て忙しかつたでせう」
「え有難う、今年は勝が居ないものだから、おつ母さんもお店へ出てるものだから……でもね」
「御免下さい」
くゞり戸の鈴が鳴つて涼しい女の聲がした。
「何誰？」
伯母が起つて行つたと思ふ間もなく、
「おやアまアこれは珍らしい」
「ホヽヽお久し振り、隨分お暑くなりましたね」
「まア〳〵こちらへ、ほんとにお久し振りね、何日いらしやいました」
「今朝早く來たんですよ、實家へも隨分顔を出しませんてしたからねえ、をばさんお變りはなくて？ えありがたう私はいつもこの通り」
結構さね、私もね今年しやあもう弱るどこの沙汰ぢやないんてさ」
「さう〳〵お曾惠さんがお産に出なすつたんですつてね、お目出度うござんした。今朝ね來ると直ぐに聞かせられたんですよ、て今一寸をばさんとこへもあんまり御無沙汰してたからつて出て來たところなの……いゝえ、今日も宿つちや居られないんですよおつ母さんもたまには一晩位いゝだらうつてさういふけども……」
耳を傾けて居た産婦は、この時やう〳〵思ひ出したやうに、
「あゝお榮さんだよ」
と云つた。
つひ近くの陶器店の娘で、もとはやはり仕事を持つて一年ばかり通つてゐたことがある、押上の染物屋へ嫁いてから出入り三年になるがまだ子供がないから氣も若い。
「御免なさい」
お榮さんもやがて部屋にはいつて來た。背のすらつとした人て、形の大きい丸髷に結つて居る。
「おゝ皆さん今日は」
と手をついて、

「お曾惠さんどうなすつて？おめでとよ、あゝまあさうしていらつしやいさうして、いらつしやいてば、えゝ〳〵もう私ですもの、そんな遠慮をしなくたつてよござんすよ」

「それぢや御免なさいよ」と起きかへらうとした產婦はまた枕をつけた。

「えゝ〳〵どうぞ御遠慮なく、あのなんですわね、大變お顔の色がいゝぢやありませんか、結構ですわ、よねをばさん、のぼせてるのかどうか知らないが、よすぎる程顔の色がいゝぢやありませんか」といつもながら座をそらさぬ話ぶり、

「あれ〳〵まアこんなに可愛いゝ子を生んで……憎らしいことねえお曾惠さん、お上手だよ、男だなんてはじめつから」

「ハヽヽヽお榮さん羨しくなつたと見えますね、今に負けない氣になつて造へるさ」と茶の間から伯母さんが調子を合せる。

「駄目よをばさん、私なんか……　……」

「だつてそんないゝ體をしてさ、どこも惡るいところはありやしないんでせう、まあ〳〵御覽なさい今にせい〳〵肩で息をしてさ」

「ホヽヽヽさうだと有難いけどもね……私アもう諦らめてるわ、いつそ子供なんかない方が氣樂でいゝと思つてね」

「今つから！お曾惠だつてごらんなさい、さんざひとに氣を揉ませといてさ、ひよツこりと此樣ないゝ子を造へるんだもの」

「でもをばさん、私はいつまで經つたつて駄目！下手だから、ホヽヽヽ」

「ホヽヽヽお榮さんは」

お茂登はまだこんな話に交つて、笑ひ得る程世に馴れては居なかつた。廣くもない部屋に。產褥が塲所をとつて居るので、簞笥の金具に背を觸れて、先刻から袂の先を弄ぐつて居たが、つと起つて茶の間の方へ出た。

「伯母さん、なんかお手傳ひしませうか」

喋りながら起つたり居たり、伯母は頻りに小皿ものをカチ〳〵いはせて居る。

「あゝさうだね、お前そこんとこからちやぶだいでも出しとくれな、おりんちやん達に今日は素麵の御馳走でもしようと思つて……あゝそつちの座敷の方がいゝだらう」

お茂登の後姿を見送つてお榮は聲をひそめた。

「お茂登ちやんも出來たのね――」

產婦は頷いて笑つた。

もうどの位？隨分見えるわね、義一さんはあのやつぱり番町の學校？」

「えゝ」

お曾惠はこの時ふと、姑とお茂登の間に流れて居る妙な具合の感情を思つた。

お茂登は九つの時からの孤子である。しかも戸籍の面は私生子になつて居る。相方の親達が不承知のうちに子供が生れて、悶着がきまらないうちに生兒の父親は急病で死んでしまつた。祖父祖母は田舍へ行つたまゝ行衞が知れなくなつてしまふ。氣の弱い母に抱へられて、お茂登は九つまでさる華族の大きな邸宅で暮した。その年に全くの孤子になつてからは、二人の母の姉の家で、あつちに一年こつちに二年と、女中代りに養はれて來た。お茂登は去年十七であつた。さすがに胸は躍らしたが、そのまゝくるく丸



めて置いた「懐かしき戀しき御君へ」とした手紙が、或る日お茂登の袂から落ちたのを、拾つた伯母はふと或る目的をたてた。

會社の集金か何かに出かける隣りの老夫婦の座敷を借りて、毎日番町の學校へ出勤する若い教師があつた子供々々した顔の人で、夏の夜はよくハーモニカを吹いて居た。日曜には友達になぞ誘はれて、洋杖を持つて散歩に出かける姿をちらと見て、お針に來て居る若い娘達の噂にのぼつたこともある。手紙の主は原義一といふその人であつた。

お茂登が少しも感づかぬ間に縁談は大分進められて、間もなく、意外な結果に面喰ひ氣味な男のところへ、さして迷ひもせず、邪魔者あつかひにされてるよりはと、お茂登は喜んで、嫁いて來た。夫といふ立派な楯が出來ると、何事によらず強味が出て、多少これ見よがしの仕打ちもあつた。それが伯母達には妬けもし、心外でもあり、やれこの頃は奥様氣取りてすまして居るの、今日行つて見たらば、ちやんと机の前に坐つて本を見て居たのと些細なこと迄數へたてる。行けば必と當てつけがましいことが出たから、お茂登の足は己づと伯母の家から遠ざかつた。

「さア〳〵さア〳〵おりんちやんもおさアちやんもこつちへいらつしやい、ね、お榮さんもつき合つて下さいよ、お盆の御馳走は素麺くらゐのものさ、さ、そんなに愚圖々々してないでさ、私あ愚圖々々が大嫌ひぢやないか」

「お曾恵お前もお腹が空いたらね、今お粥を煮といたからね一寸待つてゝおくれ、なんだよお前疲れたら少し休むといゝよ」

「お茂登、お茂登、お茶は私が淹れるからね、お前もこゝへ來てお座りな、いゝよ私が淹れるから」

女連はちやぶだいを圍んでお茶を飲みはじめた。お茂登もたつて呼ばれたが、妙な癖でつまらぬ意地が出て、わざと其座を避けてまた枕許に据り込んだ。

「ねえ師匠さん、赤ちやんの名はまだなの？」

「あゝ名はね、靜岡のお祖父さんに選んで貰はうと思つて、非常に長生きした人だから、なんだつてお榮さん、今年はもう九十一になつたんだからね」

「へえゝ、あのそら書を書いたつていふおぢいさんてすか」

「え、さう〳〵」

「赤んぼの名つて地震の揺らないうちに付けるものだ

つてね」
「ホヽヽおさアちやんいろ〳〵なこと知つてますね」
「だつて私、おばあさんに聞いたんですもの」
「ホヽヽいゝわねえまだ此位のうちは……みんなもうお上手に縫えるでせう。をばさん今はこの人達二人だけ？」
「えゝ二人だけ。もうね孫でも出來てみりやあ手放せないことも出來ようし、どうしても敎へ方がぞんざいになるだらうと思つて、預つてくれつて子が二人ばかりあるけれども斷つてやつたのさ、この人達はもとからのあれだからなんだけども……」
「お榮さんは知らなかつたらうかね、おさアちやんはそらあのお捨さんの妹ですよ」
「あら、さう、まあ道理で先刻から似てる〳〵と思つてたわ、まあさうですか、へえ」
つけ〳〵と顏を見られておさアちやんは眞つ赤になつた。
「お捨さんはどうなすつたか知ら、慥かなんでしたわね、高輪に居らつしやるんだつたわね」
「いゝえ、こんどあの品川へ越してよ」
「お捨さんも赤ちやんが出來ましたよ、お榮さん」
「まさう、みんな豪いわねえ、男？女？」
「女よ」
「早いものねえ、お捨さんお嫁にゆくのが厭だつてあの時泣いたつけ……」
「一度、さう〳〵今年のお節句前でしたよ、赤ちやん連れて見えましたけどね、それは〳〵痩せて、ねえおさアちやん、髮の毛なんぞ可哀いさうに拔けて〳〵仕樣がないつてさういつてましたよ」
「まどうしてそんなに……」
產後が惡るかつたんだつてさ、なんでも三月近くふさ〳〵しなかつたつて」
「へえゝ」
「お產てものも怖ろしいものさね、棺桶に足を片方入れとくやうなもんだつてよくさういふから……まあ〳〵うちのお督惠なんかは輕くつて大仕合せ、私が八ケ間しく言つて働かせときましたからね」
「あのなんですつてね、懷妊した人は體を動かした方がいゝんですつてね」
「えゝ〳〵そりやあね、あまり重いものを持つたり、手を上げ下しするやうな仕事こそ惡るいけども、體

が重いに委せてのらくらしてるのは一番いけないんですよ、昔からさういひますからね、だからお嘗惠なぞも酷い姑だと思つたか知れないけれど、それが誰れの爲めでもない、みんな自分の爲めなんだからね、私が宗吾を生む時なざあ、つひ生れる二三時間前まで山のやうな冬物の洗濯をしてたものでさ、家内が大勢でしたからね、そりや八ヶ間しいお姑さんだつた」

お茂登の胸には犇々とあるものがあたつた。私に聞かせるためにあんなことをいふのだなと思ふと、齒ぎりしたい程なんの譯でもなく口惜しくなつて來る。常でない體になつてからは、時とすると多愛もなく躁いで、夫に甘へかゝつてみたり、さうかと思ふと着物の褄が思ふやうに縫えないといつて、焦慮て〳〵袂を嚙んで淚さへ溢して居る時がある。そんな時には我身をよそにして人が憎まれてならなかた。「私が好きでかうなつたのではない」と叫んで、世の中の男といふ男を呪つてやりたいやうな氣がした。

隣室の話しに耳を傾けて、時々に微笑みを洩らして居た產婦は、波紋のやうに寄せてくる疲勞に、知らず〳〵弛んだ瞼を閉ぢて、やがてすう〳〵と幽かな寢息をたてはじめた。

其枕許に、お茂登は脣を嚙んでつくねんとして居たが、安らかに息をひく寢顏をみまもつて居るうちに、何處ともなく獨り殘されたやうな賴りない淋しさを覺えて、思はずハラ〳〵と冷たい淚を溢した。

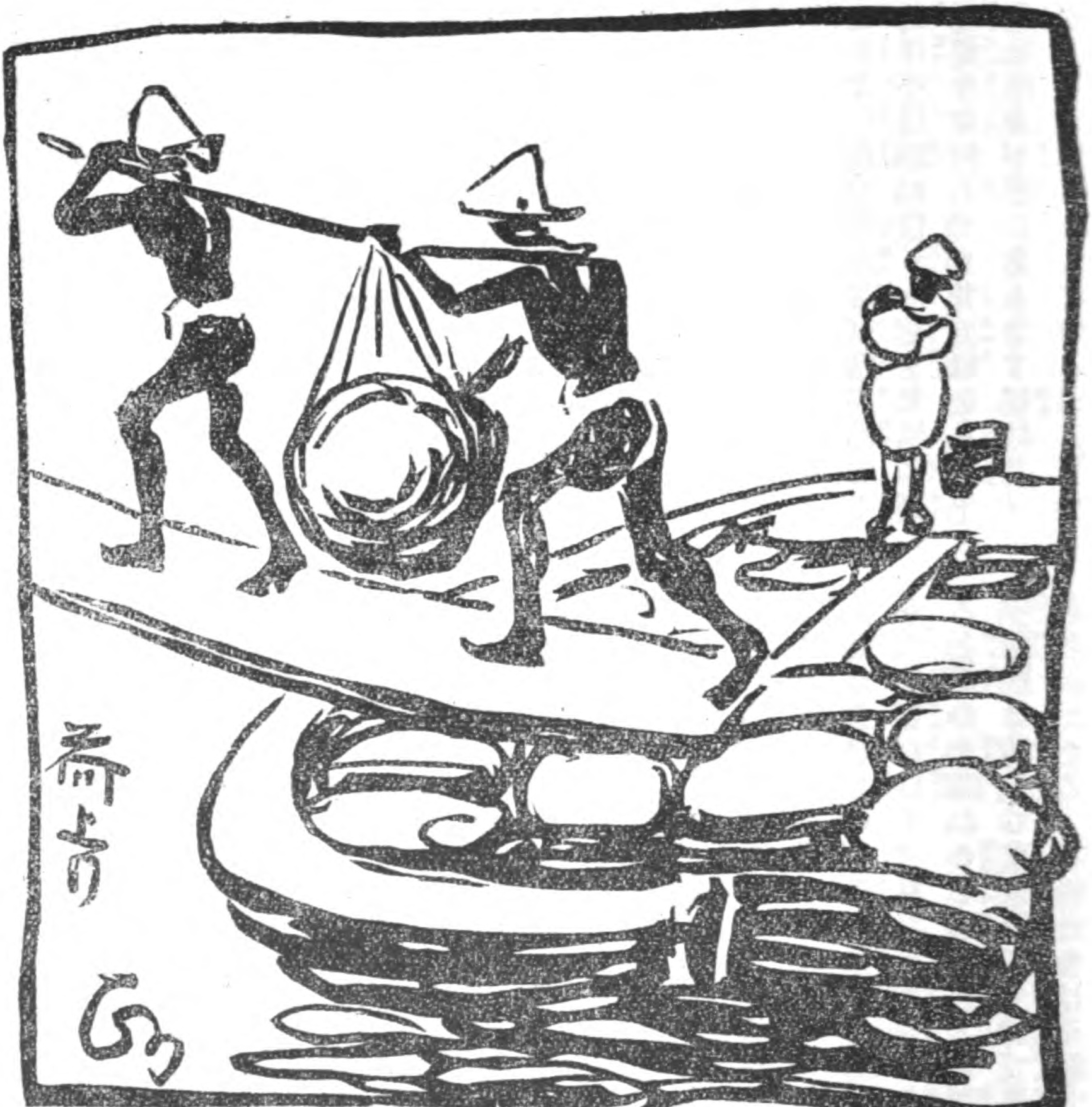
臺灣の變遷及最近の生活

三井榮次郎

臺灣では如何にして婦人が暮らして居るか、と云ふことをお話しするに就いては、其前に臺灣はいかなる女子に依て開かれたかと云ふことを申して置く必要があります。御承知の如く臺灣が日本の新版圖となり、總督府が出來てからでも、最初の程は婦人の渡航は禁ぜられて居た、明治廿九年の春頃漸く許されましたがまだ〳〵家族の者を呼ぶ人はありませんでした、で最初に何者が來たかと云ふと、島原あたりの人三化七的の、それは〳〵大變な婦人達であつた、そうすると

香港邊からも淡水方面に上陸した一群がありました、即ちこの新領土は先づ醜業婦の足跡によつて、女子部の開闢が、出來たわけてありまして、どうも私共は恥辱と思はざるを得ない次第てあります。

處で今日では既に十四年と云ふ短からぬ星霜が經て參りましたから、すべての樣子が隨分變つて居る、今臺北の人口八萬と云ふうち日本人が一萬餘ある（兵士



はすべてこの統計以外）、十年餘から經てば當時の赤ん坊がやがて物心つく程である、で居住の人も旅人的腰掛の態度がだん〳〵改まつて來た商賣にしても一攫千金を極めこんで引拂ふなど云ふ事が事實駄目になつて來たものですから、自然着實に落着く樣になり、いつでも身輕に動ける樣にと是まで行李とトランクで濟ましたものが、新らしく簞笥の一つも作ると云つた風

に、家具からして變つて來た、七年前に出來た高等女學校からは既に幾回も卒業生が出た、臺灣育ちの若い者同士が結婚すると云ふ新現象もありますし、又國元の老人も遙る〳〵と臺灣の土になるつもりで息子の家庭に來ると云ふやうな向も、此二三年前から著るしく見らるゝのであります。

　何にしろ新らしい殖民地の事で、すべて初めからやつて行けるから、家庭の中にも舅姑に對する配慮は無し、親戚交際の面倒な氣苦勞も無し、若い細君等は其れこそ學校で學んだ事を憚りなく應用しても、干渉するお婆さんも無いわけで大變都合が好い、新舊思想の衝突なぞ云ふ現象も無い、周圍は大抵似寄つた同趣味同階級の者で自然交誼は親しくなる、まづ理想の家庭を付る人には結構です、よしそこまで六つかしくなくつても兎に角暢氣ですから、新婚の夫婦などは愉快に暮らすことだと思はれます、生活は元より內地に比して容易でしやう、固定しない社會だから貧富の懸隔なども無い。呉服とか西洋小間物の價でもそう矢鱈に高くも思へない、たゞ理髮は如何しても廿五錢から三十錢のしか無い、湯は大抵浴室が家にありますけれ共、錢湯に行くと二錢五厘――三錢は取らないと思ひます。大抵高官紳商の如きは一年一二回東京其他內地へ出掛けますから、其の歸りに細君が然るべく流行の魁を島に輸入するのです、髮の結ひ方の如きも此邊から見れば半年程は遲れるけれ共、なか〳〵氣の早いハイカラ連もある事ですから、雜誌の口繪や何かでちやんと其結び方を學んで、一代の流行に後れは取らぬと努めて居る。昨年でしたか春頃夏物の仕入れに三越や白木屋が行商にやつて來たので、土地の商人は大打擊を蒙り其對抗運動をやる、同時に又亭主連の懷中には少からぬ恐慌が來て狼狽いたと云ふ話しもあります。

　臺灣に住むと、其表徵として顏の色が變つて來る、それは日に燒ける爲めか、潮風の所爲か、又はマラリヤに犯さるゝ關係もありませう、一種臺灣色とも云ふべきもので、或は蒼白く或は蒼黑くなる。つまり紅味が失せて、素地の白い人が蒼白く、黑い人が蒼黑くなるのです、で血色のいゝ人を見ると、あの人は新しく內地から來たのだとわかる、其紅味のある白い顏が誇りになるわけで、私共の如きも是れ丈け東京に居て歸ると幾分か誇れるわけです。言語は我等官吏會社員等の階級は通じて東京辯です、で臺灣の江戶ッ子と云ふ新名詞がある、花柳社會は全然大坂辯を使つて居る樣

です。
さて家庭の婦人はどんな事をして暮らして居るかと云ふと一寸返答に困ります、それは東京の婦人はどんなにして一日を暮らす乎と尋ねて一寸纏まつた速答が出ないのと同じでしやう、いくら臺灣が暢氣でもそんなに怠屈で困まる樣子も無いやうです、まづ第一に思ひ當るのは來客の多い事でしやう、內地から人が來る。勿論旅館もある事ですが、宅も廣し、變つた土地と云ふところから、泊り客が內地の家庭に比べると隨分多いのです、爲めに怠屈を感ずる樣なことはあまり無い、其れから臺灣は一種奇妙な氣候で、其の轉換が急激であります、臺北地方は十一月末から翌年四月初め位までが雨期で、冬は何も出來ません、一日の間でさへ、朝夕の不順は元より、雨が度々降る、降りかけと雨上りとで大變違ふ、日が照れば暖かく雨が降れば寒くなると云ふわけで、其度毎に着衣の加減をせねばならね、大きく云はゞ、何時も四季の着物が必要なんです、又濕氣の甚いと夥しいもので、簞笥にしろトランクにしろ、したゝかに濕める、柳行李の中の書物でもベト／＼に濡れたのかと思はるゝとがある。簞笥は梢楠木と云ふので作る（樟の木材は用ゆるとを許されない）これは、虫除けになり濕氣も防げます、かゝる仕末にも家庭の主婦の一仕事あるのです。

娛樂の機關は少ない、劇場が臺北に三個所、舊劇もやれば新派のもある、演藝館と云ふのは大阪改良喜劇と云ふ風なものをやつたり活動寫眞をやつたりする、外に淡水戲館と云ふのがある、これは支那の芝居劇場で近頃新築になりました、興行物はまづこんなものでしやう、家庭で雜誌や新聞は隨分讀まれる。書籍の賣價が定價通りで、雜誌には定價に郵稅を掛けたものには閉口します。

郊外遊びには臺北から少し汽車で行つた處の竹仔湖此處は櫻桃などが咲く、しかしまづ女學生位が行く處です。臺北から北東半里には全島に名高い圓山公園がある。近くの劍潭山は臺灣神社の在る處で、麓を廻て劍潭川と云ふのが流れ、平野の中に兀立して居る、て參詣旁々出掛けるものが多い、臺灣神社は全島の氏神で、子供のお宮詣りもするし、近頃は日比谷の太神宮と云つた格で、結婚式を此處で擧げる人も出來ました。臺北の中央に新公園と云ふのがある、そんなに大きな規模では無いが兒玉總督の大理石像が建てられ、音樂堂も設けられ、臺北倶樂部などもあります。臺北城の南門を

出て、八間幅の坦々たる道を半里程行くと一淸流に出る、そこは古亭庄と云つて夏には水泳をやる鮎釣りが出來る、近頃は其邊に別莊も出來追々納涼に出掛る人も多いので、川開きが行はれ煙火などを上げる。其れから臺北苗圃と云ふのがある、總督府殖產局に屬する植物園で、芝生があり池がありベンチがあり四阿屋がある、よく小兒の運動會を其處でやる、作つた草花は拂下げもするので、自宅に花壇を作つて居るところも隨分あります。

一年の行事として尤も盛んなのが始政紀念日で每年六月十七日にありますが當日は官吏に休暇が與へられ兒玉總督の創意にかゝる――賜餞は例を今日も取つて居る、其の日は總督官邸に夜會が開かれ、基隆淡水邊に至るまで官吏は素より、民間に於ける重もなる紳士紳商を招待して立食の饗應をする、又餘興には演劇の一齣、藝妓の手踊り、能狂言等がある、近頃は這麼ことを當てこんで、熟練した手品師が渡つて來たりする事もあります、で餘興を見る爲め夫人も招待を受ける、是れにはお鮨と茶菓位が出る丈ですが、其招待が名譽なわけで、一年の噂の衣裳は此時に飾られるのです、其日は紀念の繪端書が發行される。天長節にも同樣夜會があります、臺灣神社の祭禮は十月廿八日に催ふされます、これは隔年に大祭があつて、その大祭の時が一層賑やかです、其大祭にも紀念繪端書が出ます、其祭禮頃は冬着ですけれど例の氣候ですから汗が出ます。

婦人の公共事業は例の愛國婦人會で、是れは歷代民政長官夫人が支部長であります、臺灣の方は內地と全く別な會計ださうで、今事業としては專ら生蕃討伐負傷者の爲め物品を送つて慰問をして居る、雜誌も「臺灣愛國婦人」と云ふのが每月一回發行されて居る、これは內地發行の新聞擬ひのに比べて遙かに立派な雜誌で百頁餘もあります。それから婦人慈善會と云ふのがある、この會長が歷代民政長官夫人で、事業の一例を申せば打狗に棟割長屋を建て、土人には六十錢、日本人には九十錢と云ふ廉價で貸して居る。是れはペストの巢窟の樣な處を恁うして漸々改良して行くので、其の長屋を平和家屋と云ひ、其の街を平和街と呼んで居ます。

在住の支那人は直ぐ向ひの福建省の泉州、漳州邊或は廣東邊の者です、土匪は三十五年の大討伐で全く跡を絕ちました、よく人は土匪と生蕃とを混交して云

ひますが全く違ふ者で、土匪と云ふのはつまり強盜をしたりする土人中の惡者で、それには臺灣人もあり支那人も居ました、生蕃は山に居住するので其數約十萬中で害するのが二萬、多く北部の險に據つて居るで、今日討伐方法としては隘勇線と名づけらるゝ歩哨線を張つて、其間に隘寮と云ふ小舍を設け、土人を巡邏として備ひ、日本人が監督してだん／＼生蕃の區域に進み、かうして追ひこめ鋭意討伐に努めて居るのですが、其間にもチョイ／＼と害をする。生蕃の居るのは深山で、樟樹なども殊に多く、いろ／＼物產もある筈ですが彼等が妨げていけない、しかし今まで生蕃が居た爲めに、支那人がやつた甚しい濫伐も遁れたのですから、一方から云へば富の守護者であつたかも知れません。

土人の生活と云ふものはよく知りません、たゞ月夜を非常に喜んで、その時は戸外に出て胡弓をひいたりして何か歌ふ、その中に『アイヨ、アイヨ、アーアイヨ』と盛んに云ふ、丁度朝鮮の『アララン』と云ふのと同樣で、我々が聞くと何だか亡國の歌の樣に感じます。『アイヨ』と云ふのは平常何か失策つたりした時にも云ふ、其意味は何のとか分らぬが、土人の研究などしたら面白いとがありましやう。

附記　三井氏は年來臺灣總督府税關鑑定官たるお勤めになる方です、今夏以來病氣治療の爲め上京せられて居たのを訪ねて以上のお話しを承りました。

月の快感

尾上柴舟

曾て雪月花の中で何が一番好きかと問はれた時、自分は即時に月であると答へたことがあつた。その後、自分は何故にかく答へたのかと考へて見ると、まとにぼんやりとして居つて、とりとめたところがない。幸、その時は、この反問にあはなかつたので遂に、このぼんやりとして、とりとめのないことを自白せずに濟んだのであつた。

ところが、このごろ、ふと、この事に就いて考へねばならぬ少しの必要が起つて來た。

元來、自分の生れたのは山奥の國であるから、いはゆる花の美しさに接したことが多くない。花といふものが無論ないではないが、野生の薔薇や後園の瘦せた梅や、いぢけた櫻や、手入れのされない海棠のやうな

ものであつて、自分の郷里に居つた短い間はこれに對して非常に快感を起したことはなかつた。快感は敎化の如何に應じて起るものであるから、當時の低い敎化に應じて起つた低い趣味識はこの荒凉の間に多くの感興を惹き起し得なかつたためであらう。そして後來の趣味識の基礎を作るべく尤もよい記臆の強い少年時代は、匆忙の中に過ぎ去つたのであつた。

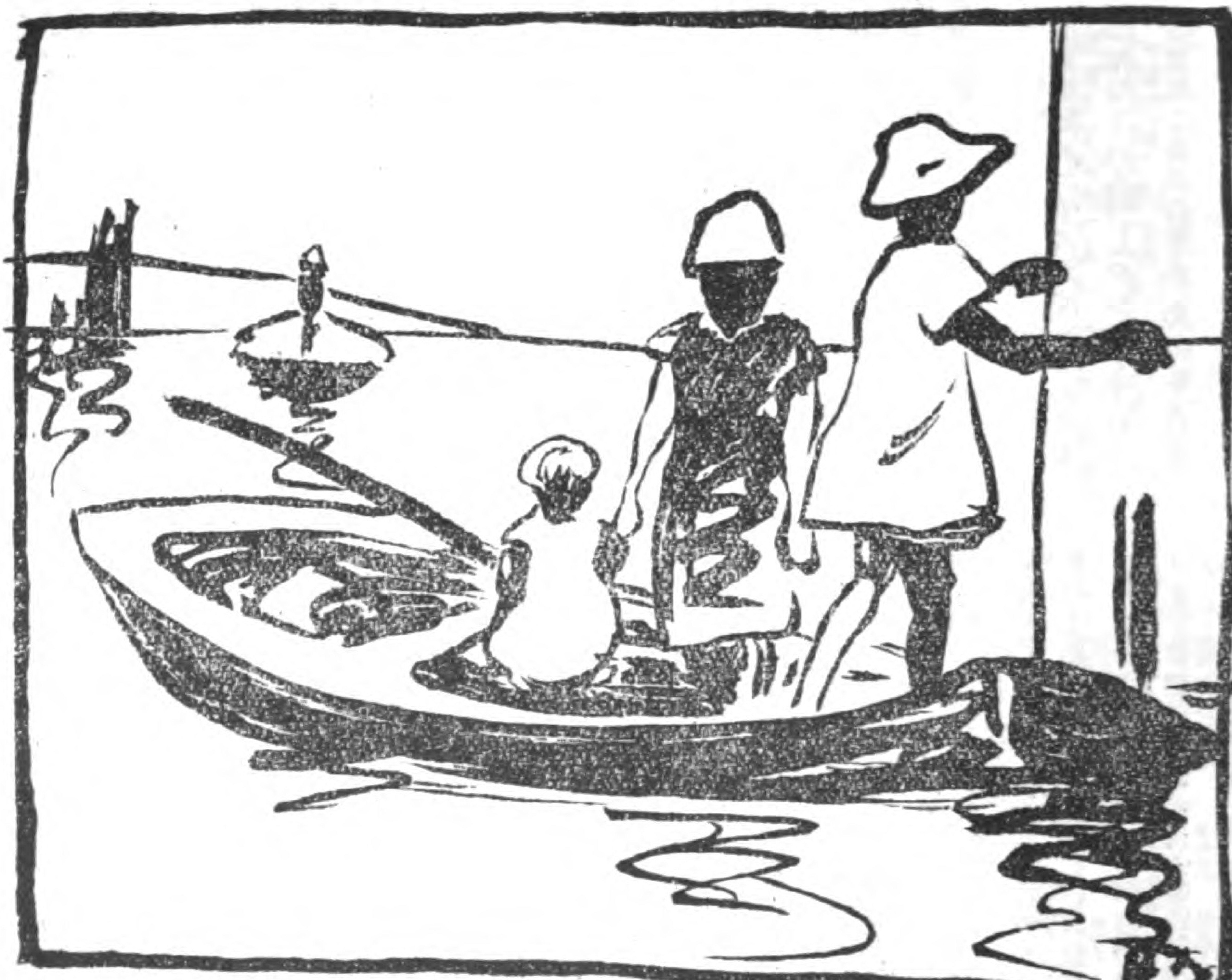
山國ではあるが比較的暖い地方なので、こゝにまた多くの雪を見たことはなかつた。非常に降る〱と云つても翌朝になると、殆んど奇麗に解けてしまう。降つて居る間は、奇麗だと思つたことは、あつたとはあつたが消える方が早いので、その汚いところのみがいつも、眼に殘つた。ことに周圍の山の雜木にまじつて胡麻鹽頭のやうにぼつ〱殘つて居るところは、何としても、いゝものだとは思はれなかつた。こんな事で雪もおもしろくはなかつたのであつた。

如何なるところにも、月の光の及ばぬとはない花の少なく開くところ、雪の汚くのこるところにも、月の光は夜毎に、匂つた、ことに荒れはてた城山の上に出る月は、そのころの唱歌の中に在つた磨いた鏡、琢いた玉とばかり思はれて、神々しい、しかしなつかしい心持がした。ことに、夜小用に起きて、戶の隙間などから見た有明の影は、艶にもあり凄くもありあをく冴えた光が、心の底までしみとほるやうであつた。梟があちらの藪、こちらの林からぼつ〱と唄ひ交はして居る聲遠いところで師走狐のきやん〱と鳴く聲、今もなほ聞いて、淋しがり、しかも幽しがる少年らがあるであらう。

こちらに來てからは、雪には勿論、花にも月にも、特別に感興を惹起したことは少ない積である。ざわ〱とした、落ちつきのない處では何でもが早く早くとめぐるやうな氣がする。雪は無論早く消える、花も早く散る、月もなんだか、早く廻るやうな、心持すべてが御手輕〱といふ鹽梅である。

しかし、學校もどうやら濟んで、世の中に出るやうになつては、しみ〱月といふものは、いゝものと思ふやうになつた。煙突の煙の上にあつても、物干台の上に懸つても、電線の間に挿まつても、見るといつも一種のゆつたりとした、しかもの寂しい心持を持つて來る。ことに、この山の手に移つてからは、月はいつも木の間にあらはれる、梢に上る。銀の光は、絶えず露の光る青葉の上を流れる、一日の勞作に疲れて

ひだるい腹をかゝへて歸る。机によつて讀み殘しの新聞を讀む。家内の少ない食卓に向ふ。ヤッと自分に還ると、見るものは樹上の影である。しかし、その光の美しい神々しいのを愛するのではない。この光を浴びてこゝに居るわが身の小安を喜ぶのである。この世では得惡い安樂求めがたい休息の中にしばしなりとも自分の居るとの出來るのを嬉しむのである。しかもこの、心持を持つ世の幾人かは、眞の自分の友であるかの思をするのである。この考はこれから自分の一生を通じるとであらう。そしてその昔、



月その物を愛した心持は永久に自分には歸りこぬとであらう。

月に對する自分の考はこんなものである。何故月が好きかといふ問題に對しては落第點なることまたかくの如してある。

オールドミスの僻み根性

菫葉

多くの女學生は無邪氣……別の世界に住んでゐる人……實は二十八九……所謂學校がらす……周圍のものに及ぼす影響……先生の批評から違つて來る……若い

西洋人……他をそゝのかす……オールドミスの心持……要するに獨身は考へ物……疑問。

「今の若い女は、若い女はつて、二口目には然う仰しやつて、何でも袴を着けてゐる種の人は、みんな大人てゐて致方のない者のやうに仰しやるけれど、全く然うばかりてはありませんよ。高等女學校程度の方て、少年少女の雜誌をお購めになつたり、フェアリーテールスに興味を以ておいてになつたりするのを見ても、大概分るてはありませんか。よく女學校の秘密だの、寄宿舍の何だのと、さも仰山らしく御穿鑿だてなさる方がありますが、之を同じ年輩の男子の方なんかに比べましたらいかに淡い、無邪氣なものて御座いませう。そりや女は、境遇一つては十七八ても結婚せねばならぬとゝありますが、それだからと云つてその年輩には、みんなそんな事ばかり考へてゞもゐるやうに御推察遊ばすのなら、私達はお氣の毒樣と申したいのです。僞らない所を申上げて、十九になつてもマガレットが結ひたい、二十になつても肩上げが下したくない、自分と同じ脊丈位の女教師に甘へついて、「燒芋ても欲しいの」位云つて頬を撫てゝ貰ひたい、とまあ全くの所が然うなのです。

斯うして私共は子供〳〵した無邪氣な世界に、世間がどうの大所がどうのといふ煩ひもなく、樂しい明け暮を送つて勉强してゐたのですが、ふと或る日、私共と全く變つた世界に棲つてゞもゐたといふやうな人を、私達の寄宿舍に迎へたのです。

其の方はM――子さんと申しました。お年齡が二十八九てゞもありましたらうか、御自分ては廿六七のやうに仰つていらつしやつたてすが、何か彼か綜合して推察しても、それては算用に合はぬ所があつたのてす。

鳥渡申上げておきますが、私の學校はアメリカンボードのミッションスクール、普通部の程度が高女以上て、關西てはまづ名高い女學校てしたので、高等科には隨分年嵩の人もゐましたがそれでもエム子さん程の人は一人もありませんてした、暫くする内に自然と御經歷も分りましたが、何でも東京て立派な某女學校を正式に卒業なすつて、それから語學の學校とか研究科とか彼方此方の學校へお出になつたり、それて以て他の學校の教師をして見たりと、何でも今まて五つ六つの學校をお渡りになつたやうてすが、私達はこんな方を『學校ガラス』と申しますのです。

それにしても何の必要があつて、關西下りまで勉强にお出てになつたのてせう、いかに私達の學校の高等科が程度が高いにした所て、御自分は最早あちこちの學校をお修めになつたのですし、立派に御自活も出來ること、それに年齡から申しても既う好い加減に御自分をお極めにならねばならぬやうに思はれます。私共は然う考へて、どうしてもあゝした方の心中が分らないのです。ですからあの方をオールドミス〳〵と云つて、私共の世界よりは別な人て、私共と違つた心を有つてゐる人だと思つてゐたのです。

ですがオールドミスも餘り好ましいものてはありませんね。所謂老孃といふものになると一種異つた性格が出て來るものと思はれます。私共若い人は、エム子さんによつて色々ませた智慧をつけられました。謂はゞ靜かな淵へ石が投ぜられたやうなものです――波立つべき可能性を有つてゐるのは、淺間しい弱點てはありますが。

エム子さんの周圍にまづ集つて行く者は、やはり年嵩の組てはありますが、自然と其餘波は一般の生徒に及んで來ました。一例を申すなら、是まて私達生徒が、先生を批評したりする事があつても、それは極く淺

嫌な、皮相な、罪のない、無邪氣なものでして、やれあの先生は威張るの、採點が嚴しいの、歩き方が家鴨のやうだの、と唯だそんな事でしたが、エム子さんが來てからは、其批評の爲方まで變つて來たのです。

「長渡〇子さん、△△先生は此頃大變派手な衣物でめかしてらしやるわれえ。」

「然うれえ」

と何の氣もつかぬから、唯だ冷淡に答へますと。

「然うれえつて、御挨拶だわ。」

「どうして？」

「どうして？」といふ疑問しか此の際私共の心には起りません。と申すのが其の△△先生といふのが又、獨身を通して教師を勤めていらしやる方、其外に他意あらうとは思ひませんもの。けれど其疑問について、エム子さんは唯だニヤリとなさるばかり、此のニヤリは、嘗て私共が心に思ひもした事のない或ることをハッと閃めかさればおかないのです。

「ほんとに教場なんかでは、あんな立派なことを云つていらつしやるけれど、心の内ではどんな事を思つてらつしやるか知れはしないわ。」

「あんな六つかしい顔をしてらつしやり乍ら、男子の方の訪問でもあつたらどうだらう、ほんとに見られたものではないわ、饗應ぶりだつて。」

「何故あんなに異性に對しては、顔の相好まで崩れるのだらう。」

是等がエム子さんの常套語なんです。エム子さんはそれ以上の説明はしませんけれど、いくら子供だつて十八九の私達、意味あり氣な言葉の中には、其言外の意味をとることが出來るのです。ですから中には「まあいやらしい。」とエム子さんを毛虫のやうに嫌ふ人もありますが、やつぱり十人の内の三人はそんな事に興味をもち、百人の内の五人は同じやうなことを口にして樂しむやうにもなるのです。

學校には教師にミスの西洋婦人が澤山ありました。其頃さる下町の倶樂部なんかでよく、西洋人ばかりの會合がありましたが、多分其時に新しい交際が始まつたのでせう、その會でもあつた後は、若い男子の西洋人がよく、學校へミスを訪問に來ましたのです。するとそれを見たエム子さんはすぐ私達の肩を叩いて、

「あれ、あれ。あれが「ミス何々」のこれよ」

と然も一大事件でも發見したやうに目を睜つて人の注意を呼びむけて、そして拇指を出すのです。何いふ下品なやり方でせう。あゝした年の老つた方には、そんな事は何でもないのですかしら。それ計りならよいですが、やれ堅い〳〵握手をして迎へたの、今頃はベーゼで接吻をしてゐるのだらうの、乾度もうエンゲーヂでもしたのよのと、私達を捉へて色々油を注ぎかけて、智識をつけるのです。

だもんですから、平生から、チヨイ〳〵仲間でも毛色の變つてゐた連中は、何かなしにエム子さんに親しんで、握手とか接吻とかに大變な興味をもち、自然其のいたづらが同性間の親愛（チンチメー フレンドの略語なんです）を造るやうにもなつたのですが、中にはその握手や接吻の現場視察の爲に、隨分馬鹿げたことをなさる方があるんですが、其話は略しませう。こんな事からして私は、オールドミスの氣持といふものを、エム子さんに於て始めて見たのです。

花言葉

水野葉舟編

ら

ライ、グラス、　變り易い、性質。
ラゲルストレミア―印度の――　雄辯。
ランタナ、　強直。
落葉松　かの部（からまつ）を見よ。
ラヱンダー　疑念。
蘭　美人。
蘭―「胡蝶蘭」（バッタ―フライ、オルチス）　艶麗。
ライヴアー、ウオルト、　信任。
ラブ、イン、エ、シスト、　迷惑。
ラブ、ライス、ブリーディング、　希望なき。

り

林檎、　誘惑。
林檎の花、　選擇。名譽は彼に美と善とを告ぐ。
林檎の刺　人を欺く魔力。
リラック――野の――　謙遜。
リラック――紫――　初て戀する心のゆらいだその心持。
リラック――白――　青年らしい無邪氣。
リチニス――赤――　輝ける目。
リリー、オブ、ゼ、ヱレー、　すの部、すゞ蘭を見よ。
リント、　私は自分の義務を感じます
リユーカーン、　生命。

る

るりはこべ、　變化。委任。

れ

檸檬、　香氣。
檸檬の花、　戀の信實。
レナンキユラス、　あなたは種々なチャームを閃かせる。
レナンキユラス――園の――　あなたは人の心を惹き付ける力に富んで居る。
レナンキユラス――野生の――　忘恩。

花言葉

水野葉舟編

ろ

蘆薈、 悲哀、宗教上の迷信。

ロンドン、プライド、 些事。

わ

藁——破れた—— 契約の樂。

藁——完全の—— 一致。

吾木香 ものを含んだやうな微笑。

補遺

あ

茛芀屬(アカンサス)、 美術。

巴旦杏(アメンドロ)(はたんきやうとも言ふ)——普通の—— 愚鈍。無分別。

巴旦杏——花の咲いて居る—— 希望。

アムブロヂヤ、 戀の復活。

アイスプラント、(氷樹——氷のやうに輝いて居る樹) あなたの様子が私を氷らせる。

え、ヱ、ゑ、

エンヂエリカ、 靈感。

お、オ、を、

オレンヂ——の蕾—— あなたの純潔なのは、あなたの愛らしさと同じです。

オレンヂ——花—— 貞節、婚姻の饗宴、

オレンヂ——樹—— 寛大。

紫茉莉菜(オシロイバナ)(マーヱル、オブ、ペリユー) 怯懦。

(をはり)



bert said in his prayer tonight?" "Was he afraid of the storm?" I asked. "Not in the least. He said, 'Dear God, I thank Thee for lightning, because it is so beautiful.' Is he not a dear boy?"

My heart was pierced to the core, and I blushed with shame. His pure, fearless heart and trust in God taught me far more than many sermons. Since then, whenever I see a flash of lightning, I think of Robert who has made me to see the awful beauty in the work of Nature. "The little child shall lead the blind," says a proverb, and how often we see it actually practiced in our daily life.

「嵐で怖はかつたのでしよう」と私は問ひかへる。「少しも其樣事どころですか。愛する神樣よ，私は雷光の爲に御禮を申上ます，眞個に雷光は綺麗で御座います，と云ひましたよ　實に可愛らしい子供じやありませんか。」

私は心の奥底迄も刺通されて赤面いたしました。彼の淸き，恐のなき心，彼の神に信賴する其信仰は，幾多の說敎にいや增したる敎訓を與へました。爾來雷光の閃を見る每に，自然界に於ける畏威ある美を觀る事を敎へ吳れし小兒を追懷いたします

諺に「幼子が盲目を導かん」と申ますが，我等日常，確に此を實見して居る事が屢々御座います。

A Little Flower.

Nay, I wrong you, little flower,
Reading mournful mood of mine
In your looks, that give no sign
Of a spirit dark and cheerless:
You possess the heavenly power
That rejoices in the hour,
Glad, contented, free, and fearless,—
Lifts a sunny face to heaven
When a sunny day is given;
Makes a summer of its own,
Blooming late and all alone.
(St. Martin).

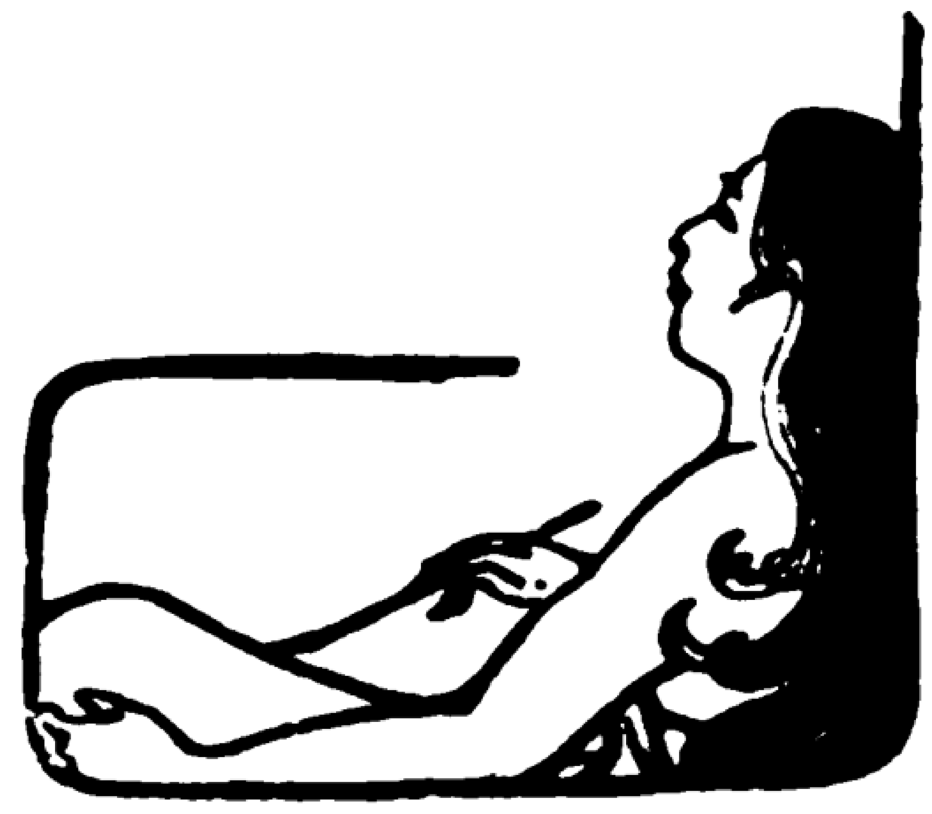
小さ花

否，小さ花よ，我は汝を損ふなり
己が悲しき心情を
汝の顏に讀まんとは，
汝には憂欝，悲哀の色なきに。
天の力はなれにあり
時々刻々を樂しませ，
愉快，滿足，自由，大膽みちみちて，
喜悅の顏以て空仰ぐ
晴れたる日好の授からば。
かくて己が夏をば造るなり
獨後れて開くとも。

英文

(第五年第十一回)

女子英學塾講師 河井道子



Little Robert.

Little Robert was only six when I saw him at his grandmother's house. He was a loving little fellow with blue eyes too big for his tiny innocent face. One summer evening, we were sitting on a big porch watching the coming storm. The rolling thunder was rather deafening and a keen flash of lightning had no charm for me, for I was very nervous, but the family including the old grandmother, and the tiny boy were enjoying the scene very much. There was an old dog which was as cowardly as I and we two alone retired into a corner of the parlor wishing the storm to be over. When the bed-hour came for Robert, he said "goodnight" to all and went upstairs to his room. Very soon, his aunt came down and said, "What do you think Ro-

幼きラバート

幼きラバートが六歳の時，私は初て彼の祖母の家で彼に逢ひました。小さき無邪氣な顔には大き過ぎた空色の眼を以てゐた可愛らしい子供でした。或夏の夕暮に皆一同，段々近づく嵐を見守しつゝ廣い椽側に居りましたが，轟く雷鳴は聾せしむる樣であり，鋭く閃く稲妻は私には何の興もなく，只神經を激さするのみでしたが，家族は小な小供も，老たる祖母も共に，其光景を樂しんでゐました。其處に老耄れたる犬が私と同樣な臆病者ですから，二人で嵐が早く止めばよいと願ひつゝ，客間の一隅に縮まつて居りました．軈て，ラバートの就床の時間が來ましたので，一同に御休みなさいと挨拶をし，寢室へと二階に參りました。間も無く伯母君が降りて來て云ふには「今夜，ラバートは寢る前神樣に何と御祈をしたと思ひますか。」

月光と音樂

森川葵村

一

潮路の果を白銀の
雲は崩れて洩るゝ月、
ま白き君が手をとりて、
心の啞は狂ひ泣く……。

半ば眠れる君が眸、
なかば開けるわが心、
その張りつめし思をば、
如何にか君に別たなん。

盛りあふれたる高潮の、
熟み潰りたゞ滿月の、
滿ちたる戀の歡樂の、
そのかなしみに泣く心。

二

行き行きぬ、月の磯、
かく二人たゞ行きぬ。

白き月、波の上を、
白き泡、ま砂地を

その明き心を君は、
その闇き心を吾は、

行き行けど、月の磯、
あゝつひに通ひえぬ、
こゝろと心。

小栗風葉選



○規定　題材凡て自由なり一人一篇を限り半紙又は罫紙に振假名をつけて明瞭なる楷書にて認むべし長さは二十四字詰八十行以内とす賞は甲種に據りて送呈す▲本欄以下本誌の投稿は凡て女子に限るものとす

○手紙（天賞）

神奈川　矢野きみ子

昨日家を出たぎりで未だ歸へつて來ない。どうしたのだらうか。別に變つた樣子もなかつたし、何時ものやうに機嫌よく勤めに出て行つたのに……。もしや變つた事でもあるのではないかしら……。

母はもう五十を越してゐる。昨夜、所に出たきり歸へつて來ない息子の事を思ひ續けてゐる。——初秋の午後の日は、心地よく窓の障子に照つて、裏の方からときたま冷やかな氣を含んだ風が訪れる。

母は今迄根氣よくやつてゐた縫物を、つと膝からすべらして、脇の煙管を取り上げた。

今年二十三の息子信一と二人きりで、淋しく其日を過ごしてはゐるものゝ、信一が若いに似ず、よく母を慰めてくれるのを、何の位嬉しく賴母しく思つてゐるだらう。母は淋しい事も、早くから連れ合に亡られて、つらい事も何も斯も一切思はず、ひたすら信一の成人——早く好い嫁でも持たせて安心したいとばかり、明け暮れ思つてゐる。

其矢先、此一月許り、信一がそわ／＼しだした。時には所から何處へ廻るのか、夜の十二時近くに歸へつて來た事も一二度あつた。強い風の吹く淋しい物凄い晩、一人でじつと信一の事のみを思ひ續けて、其歸りを待つてゐる母の心の中は、甚麼であらう……。信一も其麼時には思はず「すみませぬ」とかすかに繰り返へすのである。

日が大分傾く。母の後方の柱にかけてある時計が、五時を報じた。心がゝりの顏を上げて母は時計を見た。何だか急に衰へたやうに思える。

心地よく照つてゐた日も、夕の名殘りに西の雲を、茜に染めて、見へずなつた。母は膳造へをして、又、膳にもつかず先つきの塲所へ座る。

座敷には洋燈の光がきらめいて、淡い灯影を障子に投げる。——

六時過ぎに信一は歸へつて來た。申譯ない顏付てあつたが、母を見るなり、

「お母さんどうもすみません。つい同僚に誘はれて喰ひに行つたものですから‥‥。つい‥‥どうもすみませぬ」と斯樣言つて、一寸母の方を見た。

母は待ちくたびれてゐた信一が歸へつたのにやつと安心して、笑顏にはなつたが、直ぐと又信一が惡所通ひでもしてゐるのではあるまいかと思つた。けれど別に何とも言はず信一を膳に着かせ、自分も食事をした。もう何事も思はず、二人は晴れやかの面持ちて、樂しさうに灯の下に夕飯を終えた。

翌朝何時もの樣に信一は所へ出かけた。

母は膳のかたづけやら、掃除やらをしてしまつて、洗濯にかゝつた。

襦袢や着物を盥へ一杯つけて、一つ〳〵丁寧に洗ひ始めた。昨日の如く美しい日で、空には白い雲が所々に浮いて、ゆつたり靜かに流れてゐる。

柔かい日を浴び乍ら母は信一の着物を洗ふ。と。袖に何か紙片のあるのに氣がついた。何かは知らず母ははつと思つた。濡れた手で直ぐ取り出して見ると、もうぐつしより濡れてゐる手紙らしいのだ。で其まゝ勝手の板の間へ置く。

すつかり洗濯を終えて母は、板の間に置いた手紙を持つて座敷へ來た。手紙は水乾きだけしてゐるので、擴げられた。

女文字の染んだ、大分長い文句てあるのを見て、母は讀まずに驚いた。而して讀まうかどうしやうかと考へて、不安の念に襲れたやうに顏色を變えた。

母は遂に其手紙を讀まずに、よく乾した後て箪笥へ大切さうにしまつた。

信一は五時頃歸へつて來た。母は何とも言はず顏色も變えてゐなかつた。何時もの樣に夕飯を樂しく食べた。

月が好く冴えてゐる。二人は椽側へ出て、月を賞め乍ら茶を飲むだりした。

其後信一は決して遲く歸らなかつた。以前のやうに母を慰めいたはつてゐる。母は手紙の事をおくびにも出さず、矢つ張り同じやうにしてゐた。

翌年の同じ頃、信一に美しいやさし相な嫁が來た。母はほく／＼喜んでやつと安心したらしい面持ちてあつた。信一も手紙の事に就ては何とも言はない。手紙は一生否や、もう世に出る時はないであらう。

（評）一體に此節の應募小說は振はないやうだ、諸子の奮勵を望む。今回のては此作など先づ勝れた部て、兎角同型の作風のみ多い中に、幾らか其選を異にしてゐるが面白い。母が胸一つに藏めて了つた手紙が、忘れらるゝともなく葬られ去る運命と云ふやうなものが、讀み終つて輕く讀者の胸に殘る、所謂ライト、タッチ風の作てある。

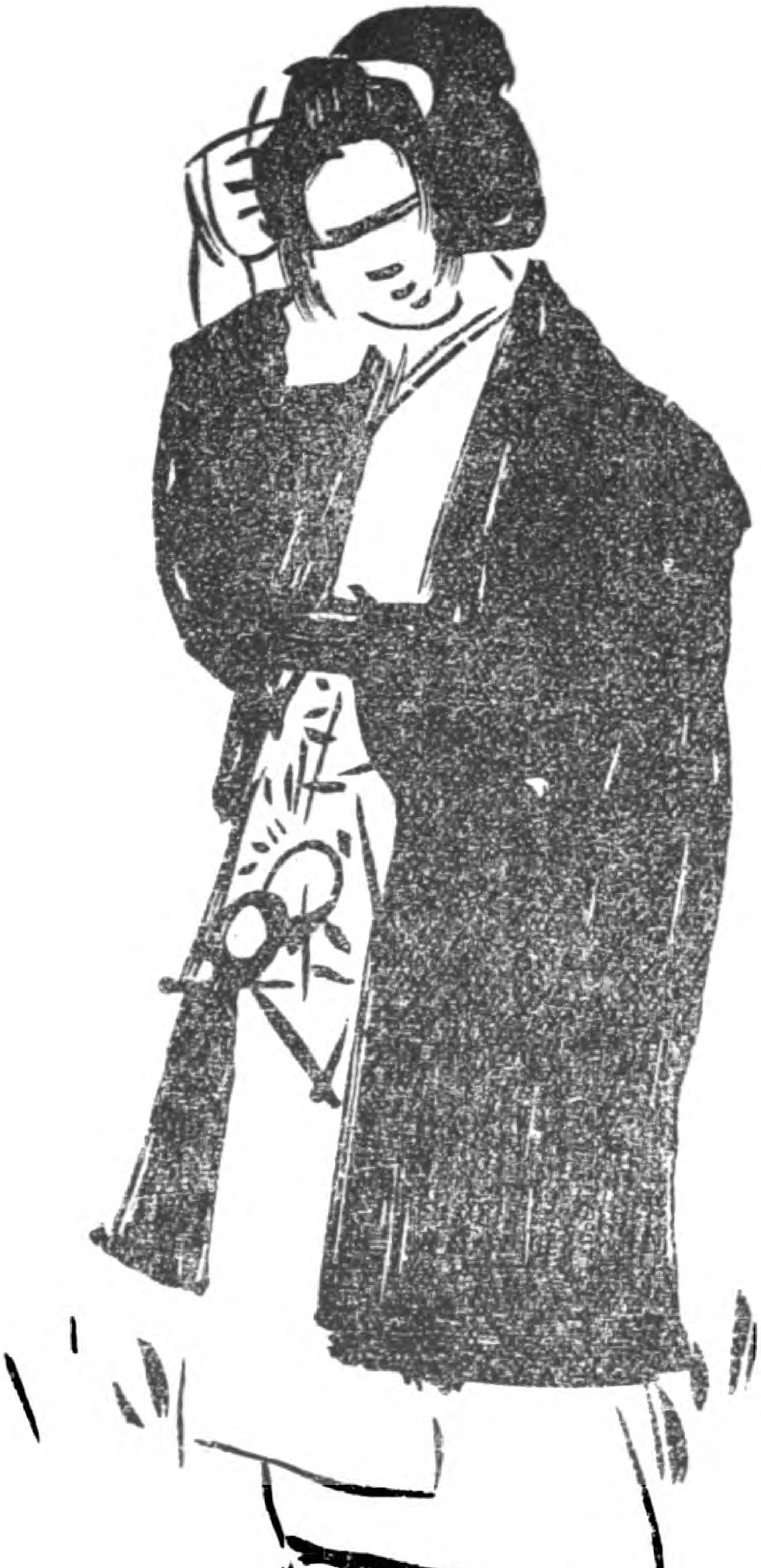
○美代子（地賞）

信濃　優梨子

美代子は今日も賑かな大門町を俯いて、横町へ出た。眤と足許を見詰めたまゝ、岩石を上つて新町を眞直に長野の町を端れた。そしてさつと息をついて顔を上げたが、其顔には暗い色も見えた。

四年前土地の女學校を卒業してから二十二の今日迄、毎日同じ道を通つては、一里許りある村の小學校へ通つて居る。

此頃は自分が何の爲にこ



（天賞）湯あがり　青森　松尾千代子

うして居るのだかわからなくなつて來た。不安の思ひが毎日の樣に迫つて來る。
母校を出る時、級の友は種々の方面に向つた。華な望みを抱いて遊學する人、温順しく家へ這入る人、小學校の教師をする者も五六人あつた。美代子は其一人である。別に外の人を羨むでもなく、自分は神聖な職業につくのだと思つて滿足して居た。それから四年になる。自分はやはり小學の教師で居る、其間に多くの友は變つた。大方は人の妻となつて居る、高等の教育事業について居る者もある。こんな事を思ふ度、聞く度に不安の思ひが增して來る。たまに元の友にあつても「貴女やつぱりあの學校に？」と聞かれるのが、非常に自分を蔑視む樣に聞えてならないのだ「えゝどうせ私見た樣な者は一生田舍のヘボ教員で終るのが適當ですわ」なんて皮肉を云ふ「丸山樣が此間結婚なすたつてネ」友が云ふと「そんなに急がなくたつて、早い人が幸福か遲い人が不幸かわかるものですか、まア何しろお目出度いわネ」なんて云つて居る。
夏の始め頃同窓會があつた。無論行かないと定めて居た、が又、皆どんなに變つたか見てやりたい樣な氣もしてふいに行つた。色の少しさめかゝつた紫紺の袴に、桐の日和下駄を履いて母校の門を潜つた。五年間通つたんだと思ふと、懷しさが犇々と迫つて來る。ひなげしの燃える樣な美しく咲いて居る花壇の傍を通つて玄關を訪つれた。藍附の下駄、空氣草履などが綺麗に列んで居る「又着物の品評會か」と思ひながら長い廊下を會場へ行つた。もう二十人許り集つて居たが皆下を向いて居る「皆樣、お久しう御ざいます」勉めて笑顏で云ふと、一寸此方を見て皆頭を下げた。丸髷が七八つ見える「見せびらかしに來たな」と思ひながら、美代子は端の椅子に掛けた。
二つ三つの話から間も無く皆打ち解けた。さすが昔の友が懷かしくて、お晝後には思ひ〳〵に固つて終つた。「清水樣の良人は何して被在るの？自由結婚なんですつてネ」「そうでせうよ彼の人の事ですもの」「幸福な家庭なんでせうか」窓の隅で四五人聲を秘めて話して居る、と、白いコスモスの挿された花瓶の傍で、其清水樣が「鳥渡！藤本樣ネ、例の彼の方と婚約が成立つたんですつて、お目出度いわネ」などゝ喋々と語つて居る。皆自分の事は棚へ上げて、人の事許り云つて居ると、美代子は思つた。お姑樣が十九世紀式で困る事、子供は可愛いが世話なものだ、などゝ大人びた話

も出た會は終つた。

四時頃、納豆や小豆色の洋傘の後から、美代子は二三の友と話しながら學校の門を出た。辨天坂の處で、別に名殘惜しいとも思はないで、皆と別れた。

獨になつて氣が落着くと、いら／＼する程理由のわからない思ひがして來る。「私だつて未だ青春の血が漲つて居る人だ。構ふものか、思ひ切つた事をしてやろう」こんな強い／＼閃きを胸の底に見せて、毛繻子の洋傘に夏の日を避けながら、善光寺の傍へ出た。

人通りの多い處へ出ると、又何時もの樣に脇見もせずに、すた／＼と家路についた。

それからもう三月餘りになる。美代子は相變らず、戀をするでも無く、色のさめた袴をつけて、村の學校へ通つて居る。

（評）獨身の女教師が同窓の女友の結婚を羨むと云ふ材は、是までにも飽くほどあつた、本誌の應募小說には陳腐たるを免れぬ。唯此作は「私だつて未だ青春の血が漲つてゐるのだ、構ふものか、思切つた事をしてやらう」と云ふ念をムラ／＼と起して見るものゝ、相變らず無味單調な女教師生活にグズ／＼してゐると云ふ、其結末が幾らか新しい

○小さき者（入賞）

芝　やゑ子

初奉公の十日目の晩、女中部屋の古新聞を張つた壁に凭れて、お清は前掛の紐を繙けて居た。針が鳥渡曲んで居る。

ホロホロホロとこほろぎは鳴いた。其聲は砕けやすいと思つた。

とそれに誘はれて、胸の底に潜んで居た想ひが一時に突き出た。

洋燈の際の薄暗い部分を見瞶めて居た。然し見やうと思つて見たわけではない。其眼にはランプの火から、幾筋かの細い光を見た。自分の白地に棒縞の浴衣が、只薄白く見えた。縫ひかけの前掛は點々と濡れた。お清は是れも氣付かなんだ。もう堪らず袂を顏に押しあて、咽んだ。

二分心のランプは、黒く濁つた室裡の中央に燻んだ、弱い光を投げて、泣く人とそれを包んだ冷い空氣を照して居る。

「奉公人！」

十日間張りつめて居た氣が一時に緩んで、只泣いた。意味も知らずに泣いたのだが、「奉公人」其聲に愕然と身を起した。前髮が亂れて居た。

頭を持ち擧げると、新らしい事實は劃然とした。今朝だつた、「清。清。」奥樣の聲は呼ばれるだけて痛く響く。

「はい」忘られた頃、ひよこり行つた「早くしないか。清。坊やに小用を遣して遣るんだよ。お丶坊や！小用してお出て――ね。さあ清」奧樣の妹の子である。毎日のやうに來る。奧樣には子が無い。

子供嫌ひのお清は、何よりの厄介物と思つて、厭々乍ら受け取つて椽側に小用をさすと、イャーと泣いて後に反つた。狼狽て膝を宛行つたが晩かつた。椽側に頭は落ちた。コツンとお清の足に響いた。

氣の小さいお清は最う逆上ちまつた。

奧樣は叱る。お妹樣は恨む。子供はヒーヒーと泣く。

お清は何時迄もオト／＼して居た。

その悔しさに今泣く。第二の泪て有る。

…………ツ、………ツ、と吃逆り上げて天井を仰いだ。

大きな黑い節と小さな黑節を見た。え――ツと又泣き入つた。

斷念めて泪拭き／＼考へた。

高等科の二年の時であつた。理科の時、盥に水を注ぎ大きい物と小さい物を浮べると、大きい物は小さい物を引き付ける――小さい物は大きい者に適はない――と教えられたつけ。……お清は又悲しくなつた。

此家に來る前の日、お祖母さんは「長い物には捲かれろつてね。ね。能く辛抱して……」繼ぎ物の手を熄めて被仰つた。

せめて高等科なりとも終へて居たら、事務員にでもなつて實家に居られやうものを、とお清は口惜しかつた

「ちよいとお清さん」

一時日近づきになつた隣りの女中の聲、お清はハツとした。

「なアに」まご／＼として目を拭いたり、襟を搔き合せたりして窓から首を出した。

「あの――お不動樣の緣日!! 行かない事？お暇頂いて――ね。」

「あ。然う。……ぢやア――伺つてね――」

頷き合つてお清は内に隱れた。其時の顏色は耀いて居た。

月夜だ。女中部屋は母家の二階の蔭になつて居る。又其影に隣の下女は肩をすぼめて立つて居る。

（評）初奉公の心細さを書いたもので、情趣は一通り出てゐる。而し小說としては餘りに材が單純過ぎる。唯其の筆致の簡明にして印象的なるを佳とす。此の筆で今少し味のあるものを見せて貰ひたい。

【秀逸】

獨り者

芝　暇てる子

お保は今朝郵便配達夫に叩かれて起きた、顔をしかめ作ら寢衣の儘て出て見ると、一枚の端書があつた。取り上げて見たが讀めない。つと庭の木戸を開けて隣りーと云つても垣根一重隔てた、自分の持家ーーの庭へ來た。隣りでは今、主人が會社へ出勤するので朝飯の仕度に忙がしい。主人は此間縁日か何かで買つて來た七草をいぢつてゐる、



（地賞）秋の朝　京橋くに子

「ご免下さい……ー」おやすの聲に振り返つて、

「や、お早う……」と挨拶した。そして其寢姿を見た。洗ひ晒しの眞岡の單衣、五十位だろう、頬のこけた。其癖短い顏の、拔け上つた髪を上の方へ丸髷に結つてゐる。

「誠にすみませんでございますが、一寸これを何卒……」と端書を出した。

主人は受け取つて、默讀してゐたが、讀み終つて端書

をおやすに渡し乍ら、
「お名前は解つてゐますか？」
「えゝ解つてゐます、」
「そうですか、此方が明日上るから、先達てお約束した事の用意をして置いてくれといふのです」と簡單に說いた。
「此間の事？」と屈託顏して考へてゐたが、ふと主人の顏を見て、
「旦那樣！妾是非ご相談申したい事がございますが」
「は、何ですか？まあおかけなさい」と何氣なく、緣側へ座布團を布いて進める。
「ご免下さい、」と腰をかけたが、未だ云ひ出さない。
主人は何か面倒な事では？と思つたが、
「甚麼お談してすか？」再び訊ねた。
「外でもございませんが、悴の事てね」
「ご子息樣が？、はあ左樣ですか、少しも知りませんて」
始めて知つた樣に其顏をジロジロと見た。
「いえ養子なのてございます、」と口切つて「それが此度まあお蔭樣てご主人の方から店を出して貰ふ事に成りましたので……」
「左樣ですか、それは結構です」
「それに就いてねえ、お願ひがございますのですが……」と口籠つて、左樣成つたのは宜しいのですが、まあ何にしても先達つものはお金でございますからね、てご主人の方から半分位は荷物て貸して下さいますから、後を何麽にかと妾も此間から、いろいろ心配して歩いて居るのですが、それがどうも貴方なかなか佳い具合に參りませんので……」
主人は愈々！と思つた、で始めつから斷はる心算だがそうかといつて素氣なくはねつける譯にも行かないので默つて聽いてゐる。
て仕方がございませんから、後の家ても低當にしてと思ふのですが、どうも矢張り——談しがつきませんので……」餘程困つた樣子だ。
主人は吸ひかけの煙草を緣先て拂つたが。
「何の位ですか？」と手取早く訊いた。
「なあに、二百圓もあれば宜しいので……」
「二百圓？」と一寸首を傾げたが、
「なにしろ餘り突然な事ですからなあ」考へた、「切めて一週間も間があれば、又、何とかお談の出來ないこともありませんが、お端書ては明日といふのですから

なあ……」程よく逃げるのを、
いゑ、なに、二日や三日延びましても」とあはてて、期限は必ず違へぬ事や、後の家が四百圓もした事など、くどくど述べ立てた。
主人は如才なく、到底駄目だが又、萬一今日中に出來たらば御世話するが、まああきらめてくれと、體よく斷はつて了つた。
端書を持つて、歸つたお保は、床を上げて、顏を洗つてから、朝飯の仕度をしようてもなく、火の氣もない火鉢の前に坐り込んで考がへて居る。
「全く困ちまふ、仕方がない、――あの金を……」
起つて用簞笥の中から、銀行の通ひ帳を取り出して元の坐へ戻つて、廣げたが、何時か膝の上へ置いた儘、火鉢の中へ頭を突込む樣にして又考へ出した。
儉約家といふより、も、吝嗇家といふのが適當だろう、夫の死後、茶や活花の師匠をして、十五年來、食ふ物も食はず、交際もせず、家の二軒も買つた上に漸やく貯めた此金！と思ふと愛も情もない養子の爲に遣ふ事が無闇に惜しくつてたまらない。
知り合の人から借りれば、期限が來たからつて直ぐに抑へられる樣な事もあるまい。自分が金がある事を知つたらば、氣も弛むだろう。
隣りの主人の靴音が向ふの横町へ消えた頃、漸やく寢衣を着更へて、門口の牛乳函から牛乳を取り出して、小さな鍋へあけた、そしてそれを持つて又隣りの庭口へやつてきて、
「奥樣誠にすみませんが一寸お火を拜借さして……」
妻君は又かと思つたが、厭ともいへないので「何卒……」と云つて、女中と顏を見合せた。
これから又出掛けるものですから、危なくつてねえ貴女……」
此麼云ひ譯を云ひ乍ら、上り込んで、長火鉢へ鍋をかけた。火が澤山あるので、二言三言話し[illegible]る中に、プーッと臭ひがして沸立つた來た。禮を云ひ乍ら袂で持つて自分の家へ歸つた。
お保はそれを呑むと、やがて、がたがたと戶締りをして又例の樣に家を出た。

（評）獨り者の女娘の、イヂケた性格や境遇が巧みに描けてゐる。筆も相應に熟してゐる。

○靜代さん

土佐　もゝの花

靜代樣は妾の家とは一丁ばかり離れた、妾とは生れた時からの友達、中高の面の頰の紅くボケた眉の長い目に何とも云へぬ魔力を持つた笑ふ毎に白い糸切齒の出る口元の亦なく可愛らしい愛嬌ある美人です、橫町の靜代樣と云へば此邊で知らぬ青年は無く、銀行の重役の、おつとりとしたそれて面白い父樣と、さばけた當世氣質の母樣とは青年には受けがよく、毎晩御氣嫌伺に伺候するお客樣が澤山ある、妾の御兄も靜樣には隨分熱心て毎夜の樣に蜜柑箱なんか持つて通つてた、事情を打明けられて文の使させられた事さへあつた、けれど靜樣は誰れに何樣と云ふ事なく誰れにも「一生美しいお友達になつて頂戴」と云ふだけださうだ、それだけ皆我れこそ彼女の戀人たれとあせるのだ。

何かの話の緒に、貴女の博愛主義にもほんとに驚いて終つたわ、それて居てほんとに大丈夫!?と顏を覗くと何日になく眞面目に、「博愛主義?成る程其樣かも知れないわね、ても妾のは別物、安全博愛主義だから何卒御心配なく、」一寸嬌態を作つて會釋したが、「夏樣これても妾、意志は強いつもりよ、昨日もね、貴女も知つてるてしやう、務樣を、え高商の、あの人突然私の部屋へ這入つて來てね、公園へ行きませんかつて云ふんでしやう、妾は自分の意志の強いのを知らすは此時と斷然はね付けちやつたのよ、皆と一緒なら公園でも緣日でも何處へでも行きますけどたつた二人なら行くこと出來ませんつて」と例の糸切齒を出して優しい誇を示した。「まあ、貴女に其樣事を云へて務樣びつくりしたんでしやう」「え、無言つて出てゆきましたわ、男つて者は割合汚い者だわね、初は此人ばかりはと思つてもすぐ、何や彼や云ひ出すんですもの、其れを柳に受け流してるとすぐうとくなつてくるんですものもう嫌になりますわ」とホツとした、此人の太息を聞いたのは今日が初めてだ。學校を卒業でから急にあらゆる方面から緣談の口が掛つた。けれど靜樣は一も二もなく謝絶つて終ふ、妾も驚いたが母樣の心配は亦大した物で「靜代は一體何樣心意でしやう、貴女とは親友でもあり何か御心あたりは御座いませんてしやうか」と問ひに來られた事もあつたが、妾も之ばかりは解らない。靜樣に逢つた時母樣の御心配の事から話すと事も無げに笑つて、「まあ、私の母樣も馬鹿らしいわね、貴女に問ふなんてホ……、私ねもう一層一生ミツスて暮さうかと思つてよ、私の樣な氣儘者が何樣して家庭なんかへ這入られるもんですか、ね夏樣然うてしやう

此間もね従姉が離縁されたんてす貴女も知つてるてしやう彼樣望まれて嫁つたのが何樣した事と思つたら其原因がほんとに馬鹿らしいわ、初戀の人の寫眞がね何樣かしてつい晴着の袂から落ちたんてそれて何か嫌らしい關係でもある樣に夫に嫉妬されててすつて、それも何も故意に寫眞なんか持つてたんてはなく、今はもう其人の所在さへ知れ無いさうてすよ、それて居ゝ此樣ことになつちまつて、全く馬鹿らしいわ、妾は矢張り結婚なんかせず聖き交際にしやうと思



（人賞）落葉育森　立花ともゑ

ふわホヽヽ」と無邪氣に笑ふ。

此十日程前、二年前までは靜樣に煩悶したが今は忘れた樣に生きた人形に父樣と呼ばれてる從兄夫婦が來たので何思はず靜樣の話を持出すと、從兄はさすが頭を掻いで、從姉への白狀旁々の話では「靜樣は實際女には珍らしい女だよ、大抵の女なら、殊に夏樣なんかだつたら」とカラ〳〵と笑つて「まあ普通の女だつたら男が近付くとワイ〳〵必死になつて騷ぐんだが其處は靜代樣は一步上だ、冷然として見下すでもなく、靜かに遇つてゐる、實際感心だよ」とさも感じたらしく「あの松川つて醫學士知つてるだらう彼奴も靜樣には隨分煩悶してたがね、遂う根負けがして此間結婚したと思召めせハッハッハットそれがさすがは松川だ婚約つた時すぐ靜代樣に報知したさうだ、すると結婚の場へ長い祝電を發して、新婦への花向けは亦大したものだつて云ふことだよ、それが亦誰れにでもだよ、いはゆるミス靜代式さね、僕も長い祝電は不用が此妻君のダイヤの襟止は欲しかつたねハッハヽヽ」と笑つて居た。

此間から靜代樣は隣の子供を集めて琴を敎へて居る。

母樣は緣談の口が次第に減るのを心配してるのに父樣は「いゝさ〳〵嫌な嫁入りなんかせんてもいゝよ此樣して父樣と隱居暮しやるさ」と笑つてらしやる。

（評）雖も讀者なれば、讀んで面白いが、靜代なる女主人公が如何にも拵へものらしい。作者の理想的女性かも知らぬが、それにしても性格が不明瞭だ。

○形見の日記　金澤むらさき女

みつ子は二三日前大事な父を失ふたので、家族といつたら今年五十二の母と、みつ子の姉と甥ばかりなので女學校三年までやつたが、之からは家計が許さんといふので當分學校を休んでゐる。何所か奉職口があつたら敎師にでもなつて、家を助けやうと色々奔走して見た。今日は久々で朝から家に居つて洗濯物をしてゐたが氣がつまる樣に思つたので、本箱を捜して。見ると黑い表紙の小形のノートがある、みつ子はすぐ父の旅行日記だと悟つて、見樣か見まいかと大分迷ふたが、思ひ切つて開いて見た。鉛筆の薄いので書いてある。讀んで見ると、父が越後の金鑛山に聘せられていつた時の日記である。所々に俳句や漢詩が口吟んである。

「ほんとにこう云つては勿體ないけど、家のお父樣位氣の知れない方なかつたわ。此時だつて報酬は非常によかつたし待遇も充分だつたので、此分なら二三年つとめたら元の樣になれるだらうと、樂しんでゐたのに

上役の方と氣が合はないて飛んで歸つてしまうんだもの。折角貸りたお金が半分程になつたと思つてたら元よりもまだ澤山借りて「もう月給取はおやめだ。宜しく實業家となるべしだ。」なんて不成功と銘うちの鷄をどつさり買つたりなさるんだもの……とみつ子はつくづく思つて又次の頁をかへした。條蟲療法が簡單にかいてある。みつ子は次の圖に目を移すやボロ〳〵と淚を落した。

「これだ〳〵。いつかも俺の一生の中に是非病院を一つ立てたいものだつて、云つていらした事があつたつけ。其下圖なのだ。お父樣もこうした理想を畫いていらした事もあつたかしら。それにもう今は……。」といとしさが身にしみ〳〵て、又一しきり淚が湧出る。もう止めやうかしらと思つたが、手は次の頁を捲つた。「思ひ捨て思ひ捨つ身は東雲の星の光りに心照して。」と云ふ歌の思ひ捨てと捨つ身はの捨とは切れと切るとのをなほしてある。お父樣はきつと榮華を夢見ていらしたのを、或動機から捨てしまはれた時詠まれたのだらう。「人の身の一の寶は何と知る心に勝るものはあらじな。」といふのはあの唯心論をしきりに私などに聞かして下すつた頃お詠みなすつたのだらう。と思ひ作ら次を捲ると丁寧に墨で可需書籍として醫學の書を著者の名と發行所と定價とを書付けてある。氣の小さい綿密なと思ふ。「中村氏非常に泥醉して無禮をなす。心外なり。」とある。そう〳〵中村と云ふのは御父樣と一所に行つた藥劑師だつた。あんなものなんてよい加減にしておけばよいのに、わらびしいすぐ怒るんだもの。短氣だつたわ。失敗者になるのも原因があるんだわと思ふ。「貝拾ひ吳し童子、島木、小川。」これは能登のある村へ招かれて開業せられた時なのだ。寂しい夜も晝も日本海の荒い波が岩に衝あたる音ばかりだつたつて。著書目錄と次に書いてある。おやまあと驚き作ら見ると何々製造方といふのが澤山あつて、間には養鷄書類、日本文浪の枕といふ題目のもある。小說三五月と云ふのもある。みつ子はもしや此中の一つでも書いてはないかと、云ひしれぬ心强さを覺えて早速日記を其儘にして本箱を皆出して、細かに搜した。けれど書さしだに見つけられなかつた。みつ子はほーつと長い息をして「御父樣情ないわ。」つて又ボロ〳〵淚を流した、がすぐ「みつ子。お前だけでもせめて此家を興して吳れ。」と臨終の時じいと顏を見てしつかり手を握られた事を思ひ出して、ブル〳〵と身を顫はした。

奥からは抹香臭い空氣がフーッと流れ込んで來た。

（評）斯う書いた丈では小說と云ふのも如何と思はるゝが、日記を通して見たる亡父の性格色がある。此亡父を當面から描いたら嘸ぞ面白からうと思ふ。

○衰

釜山　富永清子

お留は、洗洒しの双子縞の袷の袖口に、突込んだ兩手を、前に重ねる樣にして、可成寂寥い街をと、選つて歩いた。始終俯向勝なので、頭の中央の赤く禿げた塲所が、遠慮なく見えて居る。

妹の家の前まで來ると、鳥渡立止つて、躊躇つてる樣子だつたが、思ひ切つた風に、窃と扉を押した。

妹のお雪も、長い間の所帶の苦勞に、廿餘年前村切つての、美女と、若衆に持囃された影は、目鼻立にこそ少しは殘つても居るが、老る年齡が皺と表はれて了つては、昔を偲ぶ人もない。

紺の香が鼻を衝く、久留米飛白が膝から流れて居たが、姉の姿を見て、隅の方に押遣つて、散張つてた、物尺や鋏を片附けた。

「姉さん、由三から手紙が來ましたよ。永らく熱病を煩らつて、入院してたさうてす。最早快くなつたから安心する樣につて、山本にも宜敷と書いて有りました。」「……此手紙かい？」火鉢の上に有つた、青い封筒の手紙を手に取つて、暫く裏や表を眺めて居たが、投附ける風に下に置いて、「誰も彼も、人を馬鹿にして、此麼腹の立つ事はない。内には一本も出しやしない。彼麼に世話に成乍ら」と口惜しさうに、門口の人通を見た。お雪も、何と接穂も無く、默して居ると、お留は太い留息を吐いて、「噫！此麼事ては、命がもてぬ。借金取からは、毎日責められるし。收入の道は無し。思へば〱達夫が憎うて……彼奴さへ居なかつたら恁う迄も成らなかつたらう――家賃も、何ケ月ても拂はないので、今日は家主から、片を附けるやうにと言つて來た。無言て出すなら、今ても出やうけど、倒底固まつた金を出さねば、出しもすまいし……」「……「お前持つてれば、六圓だけ遣つて置かないかい。今日他から入る金も有るし、一緒にして、幾分かも入金したら、暫くは、喧しくも無からうから……まあ！何の因果で此麼有樣に成つたやら。」「えゝ上げますとも、他から取る金が有りますから一寸待つて下さい」とお雪は、殊更に笑顔よく、引上の帯を締め直して、荒れた指て、髮の解を掻き上げ乍ら出て行つた

お留は、凝乎とお雪の下駄音を、聞いて居たが、全く

横街に消えて了ふと、術なささうに、近邊を見廻はした。臺所の押入が開いて居るのに氣が就いて、閉むべく立つた。

押入の隅に、茶色染た絹張の蝙蝠傘が、塵塗れになつて、柄も離れてる。去年まで、お雪が用した物だが、最早此麼に汚れてる、丁寧に藏つておくと今年は買はなくとも、濟まされたに。と思ひ乍ら、親指と人差指とを立てゝ、カチンと擴げたが、パッと、臭い芥が立つたので、眉根に皺を寄せて縮めた。



先づ一眺め　仙憂　佐藤はいづき

此度は、新らしい籠に目を付けた。卵が澤山入つて居る。一つ手に取つて、隨分大きな卵だ、と呟いた。

險しい眼で中を覗いて居たが、お雪の跫音らしいのが聞えたので、周章たやうに、軀の場所を代えて、又傘を手に取つた。

「此傘も駄目に成つたね。」と鳥渡擴げて、押入に藏つた。「卵も大きいのが手に入つたね。」「え、韓人が持て

來ました。何程でもお持ちなさいな」――「それぢや、六圓」と幾枚かの紙幣の中から、六枚數へて姉に渡した。お留は無言で受取つた。六枚重ねて、二つに折つたのを、黒繻子の解目から、白い物が見え掛けた、帯の間に挾んで、ポン〳〵と上を擲いた。

「これで漸と救助た。主人は何時迄も、ぶら〳〵してるし：：それぢや此れも貰つて行くよ」とお雪が手布に包んで呉れた、卵を提げて、力なく身を起して外に出た。去年息子の達夫が、經驗も無い仕事に手を出して、時の間に、僅乍ら父が作つた財産も、不動産も、失くして了つた揚く、何處にか、姿を隱した。夫の甚太は、其後仕事に手もつかず、一年になる今日迄も、毎日よい儲口はないかと、探すばかりで、ぶらぶらして居る。

お留が女に稀な勝氣な性て、男まさりだつたからこそ奈何にか、恁うにか、今迄は過して來たものゝ、近來の衰へ方、何事でも直ぐ、僻んで取るさもしい心！境遇がした罪とは言へ、出來得可ば、元の如な快活な姉にして上げたい。とお雪は火鉢に、兩肱突いて、想に耽つて居たが、ホロリと落ちた涙に、火がヂユーと消えた音に、驚ろいて柱時計を見ながら、襷を掛けた。

（評）年と共に衰へ行く身心、性格境遇二つながら零落し行く中年過ぎの女性のミヂメさが同情に値する。筆は蕪雜である。

○深き怨恨

胡蝶

後を見返つて私は、思はず見慄ひした。齊は獰惡な顏をして、尚此方を見つめて居る、それは、こう云ふ譯であつた。

「ヤーイ笑可しいなア、小川は歌子樣が好いんだとさ。ホラ向ふへ歌子樣が來た、小川、彼方へ行つて早く機嫌を取るんだ」と腕白盛りの、小學校の生徒等が、ワイ〳〵云つて居るを、チラホラ耳にする私は、もうもう嫌で〳〵ならなかつた。齊は私の顏さへ見れば、ニタ〳〵と氣味の惡い、笑ひ樣をして居る。その度私はわざと三郎樣に語をしかけて、これ見よがしに、齊を尻目にかけるのを、せめてもの、腹癒せにして居た。全體、この小學校は、三年前の大水以來まだ舊體に復さず、假教室として、五十人計りの生徒を收容するに過ぎぬ破れ學校であるが、校長の人物を見込んで、補習生として、來るのが、十人ばかり、山間の事とて、男女合併なので、私も、三郎樣も齊も補習生の一人、私は十五、二人は一つ年上で、齊はその内の憎まれ者

なのだ。今しも本科の生徒は歸つて了ひ、補習室でも、めい〳〵復習を了つて、教場の流れ跡の空地で、テニスをはじめた。尤も不完全なので、ラケットなぞも一組しかない。私に節様に、君ちやんに、よし枝さんとて一ゲーム終つて、君ちやんが、交代して三郎様と、私と並んで球を鬪はして居ると、何思つたか齊が、突然進んで、三郎様の、ラケットを奪はうとした。不意の事で三郎様は、「君、何をするんだ、まだ勝敗が決せんぢやないか、交代まで待ち玉へ」と云つたが頑固な齊は、いつかな聞かぬ、無理に引たくらうとするので、日頃憎いと思つて居た私は、もう堪へ切れなくなつて、前後の考へもなく、齊の持つた、ラケットを力任せに引くと、よろ〳〵としてラケットは放したが、線を修繕した、針金で、引かゝつたと見えて、手首から、血がたら〳〵と流れた。私もさすがにハッ……と思つたが三郎様が「小川君、許して呉れ玉へ、僕だ、僕が引いたんだから、君も無理だつたけれど……ねえ、許し玉へよ、大した事もなからう」と手首を結へてやつたり、いろ〳〵して居たから、默つて、節様の方へ行つて、「好い氣味だわね――」と、負け惜しみを云ひながら、齊の方を見ると、さも怨めし相に、私の方を見て居た。

その後、私は都合で、梅林小學校の、補習室に、半年ばかり姿を見せなかつた。

一年程過ぎて、私は大阪の方へ行く事になつて、只一人初秋の涼しき風に送られて、旅立したが、丁度梅林小學校から、十町ばかり下手の、可成大きな貯水池の邊で、五六人ばかり、子供が遊んで居る、私は何の氣もなく、子供の群を通りすぎる機。かゝりはしなかつたけれど、小さい手桶の水を、ザンブと私に掛けた者がある、同時に子供が一聲に「ワーッ」と鬨を造つた。ハッと思つて後むくと「俺ア、一度彼女にね、まだ痕があるがひどい目に逢しやがつて」と大聲で罵つて、手首の傷を見せて居るのが、紛れもない、いぢけた齊の姿であつた。

（評）材料が一寸異つてゐる、齊と云ふ子供の性格をもう少し明瞭に突込で書いたら可かつたらう。

○妾といふ者　　清子

「それや、あんな嫁つて又と得られはしませんよ。何一つ申し分がありませんてなあー、ねえ貴郎」

「あゝそうとも彼れの手にかゝつて死ぬなら何も思ふ事がないなあ」

「ほんとうに結構ですよ、妾所のなんか」

臺所にいそ〳〵働いてゐた妾は今の姑の言葉。叔母の羨しがるのが、飽き足らず嬉しい。

幸福と苦痛は實に交る〳〵來る者である。

三年前である。愛の權化ともいふべきお母樣が逝かれた悲しさが、快活であつた自分を全く一變した。

その後お父樣は剛兄樣の言葉に御賛成なすつて少からぬ田地田畑を悉く賣り掃つて慣れぬ商法に見事、八ヶ月の內に、失敗に終つた。剛兄樣は相談の上、お若嫂樣と別かれ便りを得て福岡の會社に出られる事となつた。固より薄給、何をいつても道は遠し願つても會つて談る事は出來ない。

お父樣は一番上の榮吉兄樣の宅に移られた。「此の年になつて榮吉の許に行くのは奉公よりも辛い」と言はれた。妾は父の意に從つて衣服や調度を、お金と換へて六ヶ月間の學資を支へた。が遂に跡四ヶ月の事で高女卒業の名目は得なかつた。勿論兄の宅から通學した。兄は、それは、自抱心に富んだ——資本なしに、今可成の家計を立てゝゐるのを、人に吹聽して得意がる。妾はその都度思つた。親に財產分配をされるのが、即ち、その身の恥ではないか若い時の放蕩費を資本としたら‥それ故家の柱がゆるいだのではないか。お母樣のお死なりになつたのもその本は——」と思ふと、もう。ムシャクシャして來る。

「お花どん」姑の優しくはないが愛のこもつた頼母しい聲。行くと

「喃、叔母樣はねえ、二三日はお泊りだから、特別に何も、しないでいゝよ昨夜お湯に行かなかつたから御不禮して行つたら宜からうのう」と叔母を見る

「それが宜うムいますよそうなさいな」叔母はいふ。

「はい有りがたうムいますが今晩伯母樣方の御供を致しまして」一寸退いてお茶受を膳にのせて出す。

「どうも鹽梅が惡くムいまして」と叔母に會釋をする叔母が子供の樣に扱つてか頻りに譽るのが妙に羞しい

「あゝそうかい、では昨日から疲れたらうから、何他人じやなし叔母樣だから——お部屋でゞもお休みな」

叔母も是非休めといふ。何か御用事はときいてもない。

媒介から「二度目の嫁に」と聞いたとき些の空想も、虛榮もなかつた。只。今の苦境から脫したい許りに承諾した。先の嫁が堪え得なかつた姑——雷婆と綽名された姑でも、今の嫂さんの機嫌をとる樣にしてゐたら兄に支へる樣にしたらと自分の柔順を恃み姑の識者を却つてうれしく思つた位。かくて新生涯てふ者には、少しも、慾望——虛榮の滿足等は思はなかつた。おぼろながら夫の愛は豫想したが。

此家に來てから八ヶ月になる。兄の宅まで步いて一時間で行けるのに、未だ一泊した事がない。父樣が時々遊びにゐらしやつて滿足して下さるのが、何より嬉しい。——舅は人の噂に違はず佛樣の樣な方。往々姑と「早く、初孫の顏が見たうてなあ」といふとき妾は妙に嬉しく自分も早くと祈つた。

(評)「妾と云ふ者」の心理は一通り描けてゐるが、書き方が恐ろしくゴテッイてゐる。

今回の懸募は甚しく不結果で、辛うじて以上の諸篇を採つた。諸子よくれ〴〵も奮勵を望む。

新體詩

横瀬夜雨選



○秋（増賞）

丹波　鹽見きよ子

秋は來りぬわが庭に
ひともと清きあぢさゐの
花の姿をながめては
ひとしほ君のしたはしき。

秋は來にけり我室に
衣桁にかけしさまざまの
青紫のいろごろも
それも要なくなりにけり。

秋は來にけり我胸に、
露にしづれてさきそゝる、
あけの戀草早やうせて、
野は末枯れとなりまさる。

あゝしたはしき我君よ、
かくまて君を戀ふるものを、
…………あはれなほ、
野はそのまゝの秋ながら。

夜更の月に思ひ出て、
涙も枯れしすがれ頰を、
はしなく月にそむけては
我も要なきものとなるべき。

誰しも時によりて出來不出來のあるのは當り前だけれど、實力を疑はせるやうな作を寄せるのは考へものだと思ふ、岡山の高木清子君とあなたとは同名異人ぢやないか知らん、よく似てゐる。

○規定　題意も材料も律格も凡て自由なり要するに風情を歌へば可なり三十行を越ゆるべからず一行には一句以上を書くべからず凡て振假名をつけること字體は明瞭を要す乙種の賞を送呈す

○わが身（入賞）

横濱　さゝ川

たとへられしはくれなゐの
綠に映ゆる色なりき
紅の花をとのぞみしは
容姿ゆかしき男なりき
花が昔の色ならば
紅にそむるも惜しからじ
たゞま白きと思はるゝ
われは染みたるむねなるを。
必破れたる身なれども
すがたに順ひ女心に
髮の飾りは捨てざれば
また愛しとも人は見む

思はるゝ人思ふ人
いづれか胸にふかからむ
思ひし君は灰色の
戀を殘して去りましぬ
人は紅をばのぞめども
香もなき胸の戀しぐさ
ふたゝび萠えんときあらば
灰の醜花さきいてむ。
「與へんと」そは罪なるを、
しづみしまゝの胸なれど
なつかしきかな思はるゝ
人の情も忘れえじ。

やさし、うつくし、されど君にいふ、ひと度壇の上に捧げたるいけにへをもて、ふたゝび他の神をまつることなかれ朝に離人を迎へ夕に與客を送りて一つなる汝のたましひを辱かしむることなかれ。

【秀逸】

○悲しき詩の譜　岐阜　篠田とみ子

世に遅れたる我なれば、多くは他人に語らじな、

あゝされど……

町を練る音樂の譜に、胸の血しほのみなぎりて常は覺えぬ爪の血も、白くなりけり。

何とはなしの悲しさに眼を閉ぢて歩みしか、

うすれる太陽の影なれどまぶたにせまる赤きもや、紫に黄に金に、はては暗の木繁る森の奧、

かや〳〵と夢のどよめき、

他人は惜まぬ命なれども――生につく悲しさは不安にはたと眼を開く、

埃たつ街、建ち並ぶ高樓、眼覺むる美人、おの〳〵を薄絹にすかしみて、

人をうるさく默し行く。

かたく結びし唇に悲しき詩の譜を秘めて。

東近江の地に地震があつた、虎御前驛が滅亡した本願寺が壞倒した、岐阜大垣の人々まで戰々兢々として、日を送つた時だ、震死したところで惜む人は無いのだと作者は語る、樂天家だけに面白い、先生、妹の祝儀に出くはしてうたうて曰く、都やならひか御國の作法か、姉が妹の酌に起つ。

○窓に凭りて　金杉　細谷鏡子

いかになり行く運命かと
思へばくらむ夕ぐれの
窓に倚りたる我が心よ
一すぢの毛だにみだれぬ島田して、
まさぐる絹の紫の、
比翼の褄は重けれど、
ねじけ心の我ならば、
今滅びゆく瞬間を、
仇人の手のさはれば
髮振り亂し素はだしの、
夜叉ともならむ心なるを、
やさしき君が一言の、
慰め言葉給はりて
とめむとすれど瞼より、
落つる涙の弱きかな。
ああ君だにまさば、はじめより、
羞恥の少女なるもの。

危いかな紅爐盤上一點の雪、落つれば消えてあとなからんとす。君だに遠ざからずしてあらば、わが戀は圓滿なりけむを、君去つてわが涙つきず、君去つてわが心すさめり、あゝ君だに在さば。

○いつまでも

しらさく

いつまでも
夢に居りたし
ひろやかの、
自由の　天地に
くびきなく
囚ふる手なき
のびやかの
はかなき　なかに。

われ、たゞ
涙ぞわき來
得しらぬ
つめたきなみだ
はては　此身　消なばとおもふ

人、ひとりあらぬ里にゆかばや
日の
せまるはうし　たゞ永久に



秋のおとづれ　京橋　くに子

ゆめよ覺むるな　いつまでも
得もしらぬ涙さへ、まゝならぬ　日よ暮れずあれ、

夜よ明くるな
時よ、時よ
時よ　永遠に靜けくてあれ、
かくてわれ　いつまでも
夢の少女と生くるべき。

嗚呼この君また斯の涙あり。

○落　人

越後　雲井の雁

破れたる胸荒みたる心のはてのおのづから涙ながるる。露深き野、寂しさ迫る夕暮、目をあげて人を招けど、見はるかす山あゝ、山と山、中を流るゝ、いさゝ川棹さして行くとも舟人もさぎりに包まれて、ひしの實とるとあやまりて水に溺れしわれなれば、肌は氷と冷えきりて唇の色さへうせけむを、あゝ君何なれば我頰にあつき涙を落すらん
……

仔細あるべし。この君家を捨てて遠く山に入り、樵に伍してたき木こる身となりぬといふ、姉なる君は玉をかしぎ桂を焚く名門の人なるに、數奇なかるな運命見。

○安息あるかげ

こすもす

肩にかくるあやの衣をも重たしと
雨にも風にも心して育まれにし吾なるを
ふみにじくれし戀のむくろと告んか
母なる君に
おゝ、おそろし其は悲し
置く露にもくづれんとするいと弱き
吾は少女ぞ
わづらひ給ふを見るに忍びざれば
なげき給ふを聞くにたへねば
あゝ吾はいゆべからざる胸の傷手を
永久に涙に抱きて
安息する死の影にこそ憧憬れ行かめ
晨の光　星の瞳
仰ぎ得ぬ吾なれば
僅に夕ばえの入日をうらみ
紺青の夢にかこちて
花咲くも吾は笑はじ
鳥なくも吾は語らじ
あゝ吾は泣いて泣いて
空なる胸を抱きて
あへぎ　あへぎ
安息ある死の影をしたひ行かまし。

悲しからざるに悲みをよそほふも女、泣きもせぬに泣くと語るも女、戀人に別れて肥ゆるも女、きのふは刃に血ぬりて死なんとしながら、けふはべにさすも女、女はかくの如きのみ。借問す君が涙は眞なりや。

○小島の人

和泉　金田香雲子

風起り、濤荒らだてば、
のまれんとする冲なる小島
人の住めるか——
夕の煙細く立てり。

雲ならで通ふもの無き
かゝる小島に住む人は
波の中より生れ出たるか、
晝は白き鳥を眺め
夜はくらき波の音聞き
淋しき夢を結ぶらむ
嗚呼なげくまじ
一人の身いく世ふるとも。
小島にも少女在るものを――。

女らしい詩です、

○何とはなしに

信濃　花崎なつ子

かよわきはわが性ぞ
榮にほこりしは昨の一時、
あはれ其甘き追憶――
『み空にかゝる下弦の月、光はいと
も冴え〴〵に、あはれみの冷たき光、
物凄く――
花みな萎えし神無月、枯れし千草
に置く露の、愁の泪拂ひつゝ、
素足にしだぐ輕き裾。
……あゝわれは瀬の音たゝぬ水ゆ
るき小川の土橋に佇めり……
螢を呼びて皐月闇、
君と語りし橋ながら……
あゝ此水鏡わが、容面の今はの寂
れ、げに甚き。』
微かなる夜風にだに、
ふるひをのゝく蘆の葉の、
强きわめきのとゞろきと、
われは怖びゆる夜の萬象に、
されど聞け、其おびえし胸に、
たえ〴〵にさゝめく蟋蟀の
あはれなる歌を、かれし聲の嘆を、
さはれそは勇しき努力、
しかすがに、心ぞ弱き乙女なれば、
「聲張上げて歎き得ぬ」其かなしみ
も歌ひ得ず。
月の光にそむきつゝ、
秋の夜每を森にゐて、
落葉のからむ黒髮の、もつるゝなべ
に泣く吾よ……

この人實は本名赤津某、太田水穂窪田空穂と同郡同村にして中學文壇秀才文壇文章世界などに散見する青年投書家の一人なり、さきに谷某を斥けしとき注意をこの人に及ぼししかど平然として省みず、三たび覆面のもとに少女の群に闖入し來れり、陋劣なるかな。われかくの如き男性あるを耻辱とす。

○我の心

郡山　小針

男の子の心われは知る
迷ふぞ彼のこゝろなる
狂ふぞ彼のこゝろなる
鼻上僅かに一寸の
肉なかりせばこの我れを
如何でかく迄思ふべき
あはれなる哉五尺の男子

貸座敷めかした屁談まで屑書に書いてある。よしんばまこと娼妓にしろ、「鼻上一寸の肉」などとクレオパトラぢやあるまいし、愛憎がつきる。

○妾のおもひ

君津　山口　薫子

去年の今頃は慕はしい友達と
幼な語りを或時はきのこや蕨びとりに
貴ひ日を毎日　無に暮したが
今年の今は　パスパントある身は
はや子供も出來　浮世の辛酸を
これからなめる體は……

あゝ過去は夢　友と數里を隔て
薄情と殘忍のいたましき世に
ながらへると……思うと　哀はいやましに
うそな、おつしやい、

○眞珠

大阪　横山靜子

或夜星姫戀なりて
月の宮居に嫁くと聞き
水星妬みて雲をよび
星くずあまたしたがへて
十二階、大理石
銀燭まばゆき月宮殿の
奧へしづかに入るせつな
うしや浮き雲、姫おほひ
むら雲燭をかくしければ
神水星を惡しみて
いかりて下界に降したり
元は流石に星なれば
戰き走る荒磯の
陸は同じき潮路の
水底深くかくれしか
海亦神の御領にて
珊瑚の影に貝を見き
星にこやかにさゝやけば
女貝は解けて門開き
其の和肉に抱きたり
星と貝との戀なりて
女貝よりそひ天の上の
様や如何にと問ひければ
昔し戀しの時折を
眞珠靜かに物語る
春うらゝかの磯日和
もとより影はおぼろにて
今も見すなり蜃氣樓

これがほんとにこの人の作なら、特別賞をあたへても足らぬけれど、つけ燒刄はすぐ落るから情ない。

○歌反古

赤坂　福島さよ子

桐の花の甘き香迎ふ宵月夜
栗の木茂るダニユーブの
流れの音を譜にうつし
聲を合せて歌ひてし
幼き妹今いづこ

栗の花匂ふダニユーブの
流れ淸しと聲かぎり
歌ひて見れど彼見えず
花も彼の夜の影はなし
月さしそふるダニユーブの
流れ遠しと聲かぎり
歌ひて待てど彼は來ず
月もかの夜の影はなし

花の朝も月の夜も
妹が面かげ忍びては
片身に殘る歌の譜に
呼びなれし名を呼ばふのみ

○『廿八宿』希望の方は郵税共五十一錢小爲替にて送附せらるべし。東京にては殆ど絶版の品なり。（茨城縣眞壁郡大寶村　横瀬夜雨）○神戸、白萩女に、うらみを詩に寄すると共にすゝんで文藝の道に生きよ、君の痛恨はかくて忘らるべし（夜雨）○越後なる櫻井の君にいふ、君の詩はいづこにかへすべきや（〃）

美文



○規定　抒情、叙事、叙景等凡て他欄になき文章一切を含む字體は明瞭に認め必ず句讀を切るべし一人一章に限り半紙又は罫紙に認むること匿名を要する者は本名を別記せよ二十四字詰三十行限甲種の賞を送呈す

○大原女（天賞）

本所　橋田倭文子

「花や番茶いりまへんか」と、天然の美音の語尾を、長く引いて朝々京の町に花賣りに出る大原女。盲目縞の半天に、裾の方だけ三寸斗剩せる、同地質の四巾前掛一寸した花や山水に、和歌などを絹糸で縫取したのに村々によつて、染めわけられた木綿四つ折位の、長い紐を帶の代りに締め、美しい友仙縮緬の、丸ぐけ絹房の澤山ついた襷をかけて、白の手甲、脚絆わらじばきて、髮は特有の、根〆低い割島田といふのに結つて、極年若いのは、赤と白との丈長を用ひ、新らしい手拭被つて、大きな箕の中に、番茶御佛花又時々は、釣葱や「はつたいの粉」(麥こがし)など入れたのを、頭に載せ、手にも二つ三つ持つて、「花いりまへんか今日はお花どうどす」と、優しい聲と共に清々しい其すがた。

朝の商が終ると、皆加茂川上流の出町橋に集り、大勢列んで橋を渡る。

梯賣りに來るのは、八瀬在からとか。しかし土地では何れも畑の姥といふ。風姿は花賣とはずつと質素で、裁着袴を穿いて、それに年もとつてゐる故か、皆きまつて革の煙草入に、長い一尺五寸斗りの煙管を脊中にさしてゐる。頭には野原の草を刈つて作つた、釜敷の樣な台の上に、二間もある長い梯や、鞍かけ、前後には打盤や槌などをぶらさげて、ゆる〳〵と、少しお臀を振つて「梯や鞍かけはいらんかいな、田舍から持つて來た、目出度い九つ梯やがなあ、安うまけとくよつて、買うて給も、なあもうし奥さん。」此者に限つて、如何な裏店のお神さんつかまへても、奥さんてある。が此畑の姥には、よく擔がれる事がある。人を魅する樣な優しい雄辯に、つい其氣になつて買うと、後で人に聞いて、馬鹿〳〵しい、もつとねぎつてやればよかつたと、思ふことが度々ある。

此外深泥が池附近から、「すいぐき菜」の漬けたのや、奈良漬を賣りに來るのもあるが、割合に少ない。

大原女の風俗はいろ〱の書物でも讀み、人にも聞き、又實際にも見て知つてゐますが、さて此れほど詳しく書いたのは稀です、珍重すべき一篇です（評）

○すゞむし　（地　藏）

き　く

「どうせ私は一生裁縫が下手なんで御座いますッ！」思ひ切り大きな聲で云つた、女中等はきつと呆れて居たのだらう、ほんとに我ながらこう短氣にのぼせては困ると思ふけれども。

男帯を博多の筋二本づゝ拾つてくけた事もある、五厘づゝに一針ぬきて鯨帶を縫つた事だつて一度や二度ではない、それはみんな學校で壓制されて出來たのだ、すき自由の今の私に、あんまり面倒な事を仰せになるから、ついもうカッとなつてしまつて、「出來ないものは出來ませんっ」なんて云つてしまつた。

神田の伯母様から特に私に仕立てゝくれと御頼みの男羽織、なあに紋さへちゃんと合つたらあとはいゝ加減ぞんざいでも可いなどゝ思つて、づん〱縫つて行つたのを母様が側からやい〱仰しやつて、その縫目が荒いから縫ひ直せなんて、私はもう〱五月蠅くてたまらないので、「躓きかけるといやなもんで御座います！」つて大きく云つてさつさと風呂敷に包んでしまつた、そして部屋に入つて文章世界の盛夏號をあさり出した、母様は何とも仰しやらない、それやあ何しろ御年寄りですもの、時々せきばらひを少しあらくなさる位なのよ、諸家の日記を一生懸命によみ出したけれども胸は何だかわく〱してあんまりはした無かつた今の所爲がたまらなく悔まれる、いつそまた縫ひ出さうかしら、でももう庭には打水もすんだ、せみの聲も日中のそれではない、御飯とよびにくるのを眼の前にひかへて物さし手にするでもあるまいと我と我胸を落ちつかせてぼんやり軒の蟲籠をながめた、あゝ親にわかれ子にはなれ、心細くかはれる鈴虫よ、むなしく枯れるきうりを其まゝにして居るのは味がないからなのか、寂しいだらう、鈴虫、私も今によそに行つたら：：：あゝ勿體ない、母様は私の上を案じて、案じてあんなにも仰しやつて私の恥にならないやうにと心つけて下さつたのに、私は。これがもし姑君であつたらまあ如何であつたらう、私はそう思ひ至ると悔のおもひよりゆくさきの不安、たゞ心細く、心細く、何となく泣き度い樣なのをぢつと唇をかんで、そつと胸をおさへてみた。

偽らない女性の告白、女と生れて一日でも斯う云ふ感情に支配されない方はなからうと思ひます（評）

○禮法室（入賞）

常陸　撫子

チーン、チンと時計は八時を報じた。今まで雀の樣に騷がしかつた人々も、靜まるとまるて室は水をうつた樣だ。今から我等四十人は禮法室へ行くのだ。皆髮をなほすやら衣紋を正すやら身の廻りをなほして居る。やがて先生と共に禮法室へ行く、まづはき物を列よくならべ、ふすまを靜かに明けて音せぬ樣に入いつた。お床の間にはクラスの三村たづ子樣のいけた、七草が品よくいけて在る。すみに茶盆茶菓子茶碗がそろつて居る。兩側に靜かに坐した。硝子窓からすつきりと澄み渡つた大空が見える。何んの鳥かおかしい聲で啼いて居る。あつくるしい風が顔をなでる。やがて先生はせきにつかれた。そしてぐるーりつと、一廻り見た。猫背の私も背をのばす。先生は正しく朝の禮をなさる私等も正しく禮する。おもむろに先生は、目のつけ方、身體のとゞまりをこま〱說明して下さる。そして茶碗の出しかたを敎えて下さる。四十人の中五人づゝやる事にした。蠅のさゝやくのも聞える樣な靜かな室に五人は靜かに步み出した、先生は立つ工合、步く工合を心の奧まで見やうと、ぢつと見ていらつしやる。きつと、今は四十人の魂は先生に奪はれて居るのだら



登美ちやんの顔の印象　陸奧　稲垣かほる

う、きつとさうだ。私等は今先生に魂をうばはれて居るからこんな蒸し暑い室もいとはず正しくして居るのだ。

二十人程やつて鐘はなつた。其時先生は未だ魂を歸してくれず、やはり正しく終りの禮をなさる。禮がおへてから、てん〳〵に魂を歸してもらう。思出した樣に體をくづす。今まではさのみ思はなかつたが、何んだか急に暑くなつた樣だ。

先生に魂を奪はれたり返して貰うたりするのは面白い（評）

【秀　逸】

○私の寫眞

西多摩　三ケ島　よし子

この間東京へ行つた時、淺草で撮つた寫眞が屆いたので、濡手拭き拭き開いて見ると、思つてゐたほど良くもなし、惡くもなし、氣に入らないけれども自分の眞の顔と心とが僞りなく映されてゐるのだから、しかたがないなどと思ひながら、さて、忘れぬうちに日を書きつけて置かうと、机の上に伏せて筆を把つた。

明治四十二年八月廿七日撮影、おや、二十七日、家の先祖の石塔にはこの日附のが二つある、私の母樣の逝かれた日も、ああ、いやだ、が八月は私の生れた月ちやうどいゝと思ひ直して、あとの二枚へは月だけ書いて、三枚並べて又表を見る、あの朝結つた時には、かなりにまとまつた束髮だつたに、兩國橋を渡つたものだから、川風に目茶々々にされてしまつて、鏡の前でさんざ撫でつけたのだけれども、やつぱりこんなに後ろの毛がそそけ立つてゐて目障りだ、消したくつても消せない、こんなものまで寫してくれなくもよいのに、えゝ誰に見せるものでもないと文庫に納めて、洗つて置いた單衣をバケツに入れて、前の川へ持つて行つた。朽葉一ひら浮いてゐない、底の小石の動きさうな水へ、ざんぶり入れると、浴衣地の淺黄小菊が鮮かに沈んで、又浮いて流れる、押さへては流し流しては引き留めなどしてゐるうちに、きれいに濯げてしまつたから、いよ〳〵絞らうとして立つた時、ふとこんな所を寫眞に撮つたらと思つた「母樣は何してゐるの？」と聞かれると、いつも「お洗濯」とより外には答へなかつたといふ私の幼いころ、母樣はきつとこの川の水が凍る時にも、毎日こゝへ來られたのだらう。

人に云ふまで、私の心に映つたそのうつしゑ、今は塵ほども殘つてゐない、單衣のしまひ洗、何となく思ひ出される、この白地を着はじめた時分、この岸に咲いてた白百合は影もなくて、みそはぎ、野菊、みづひきなど、川幅も狹るほど咲き亂れてゐる。ああ春夏の花

は今咲いてゐないけれども、その姿をよく覺えてゐる秋の千草は痩せてゐるけれども年毎に咲く‥　などと思ひながら、私は今日の天氣を祈つた。

單純だけれども眞實です（評）

○不動樣（外二篇）

本郷　千　と　せ

月はよし風は涼しいし、月の廿八日で不動尊の御緣日ですから初めて深川へお參りした、處がお堂の廻りは十重廿重に人垣を築いて、おろう、おみくじの聲、拍手の音振鈴の響が入り亂れて、宛然火事場のやうな騷ぎ、是れでは如何に不動樣だとて一々願事をお聞き入れなさる事は出來なさそうに思はれて、只お印にお叩頭を一ッ仕たぎりで歸つて來た。

全燒五戸半燒七戸の燒跡へ行つて見たら、一夜の内に幾千幾百の財貨を烏有に歸した火焔の餘勢が猶ほ、積み重ねて有る燒木杭の間からのろ〳〵と火を吐く、黑煙の中には頻りと燒土を堀り返して居る、彼方には夜具の黑焦、此方には器具の毀れが山を成して、實に目も當てられぬ慘狀だ、丁度私の傍へ町家の娘らしいのが二人、風呂歸りの手拭を下げて「本當にこんな處を見ると着物も何もいらないわねー」「だから江戸つ子はふだん着の晴着なしがいゝのさ」語りながら行く二人の後姿を見送つて、そう思つた、乾度あゝ云ふ口の下から呉服店の前へ立つて「マアいゝ柄だ事、お揃ひに欲しいわね」なんて云ふのだろうと。

「たつた是しきの洗濯物が未だ出來ないのかい、何をぐづ〳〵仕て居たんだろー」、又裏のお内儀さんの尖り聲、遂此の間迄は一人娘の可愛さに、光ちやん〳〵つて三ッ兒でも扱ふやうに大切にして居たつけが、此春養子を迎へてからは、がらり變つてさゝいな事にも罵り立てる、一寸はたから見ると家付娘は氣樂そうだけれど、もし養子が親の氣に入らない時は、何かに付けて當られるから災難だ、寧そお姑にいじめられる方は實家へ行つて云付けるとか、優しい母樣に慰めて頂くので又我慢の仕やうも有ろうけれど、實の親にあゝされるのでは誰に訴へやうもなし、慰めて呉れてもないのだから嘸辛らかろうと思ふ。

世間の實際を見て、直ちに感受する力を具へて居られるやうです、此三篇に限らずいつでも然うですが、此方面に文才を發展させて行くのも、女子としては適切なゆきかたらしく思はれます（評）

○口惜しい中の一年間

越後　木島のぶ

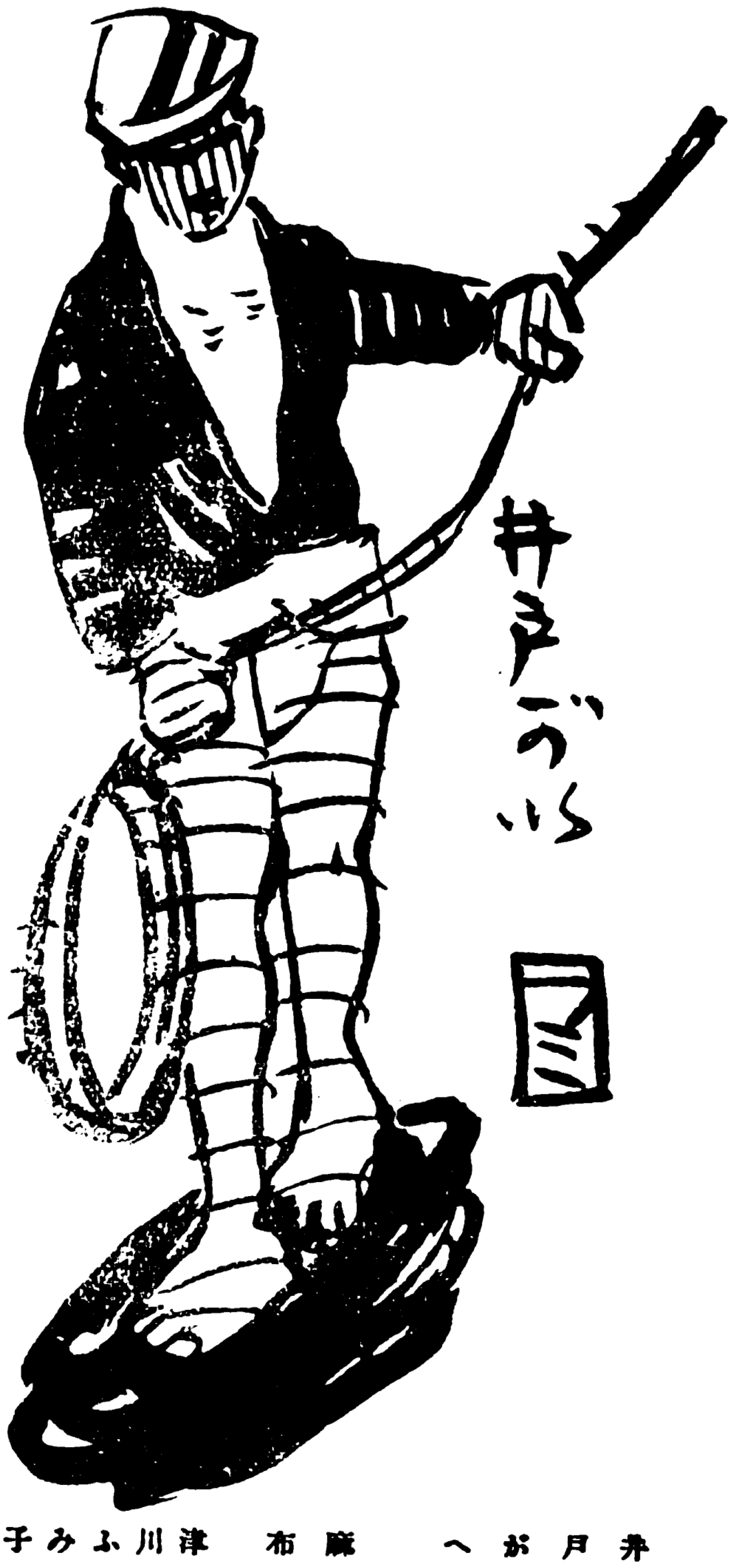
口惜しい〳〵て一年を過しました、私今未だ口惜しさ

が胸に一つぱい殘つて居ります、一體何が口惜しいのか譯も話さないではお分りはムいませんから、逐一お話致します。何を包みましよう私は去年の七月、兩親や兄姉に無斷で出京致しました、何故又そんな大膽な事をしたかと云へば、私には兄が三人ムいます、中二人は東京に居ります、さうして東京の有樣を始終手紙に書いて送つてくれます、それが私の病氣の始まりで二年前即ち十七歲の時、とう〳〵東京病にかゝつたのです。それからと云ふ物は家に居るのが厭で〳〵仕方ないけれど、兩親から許される見込みはなし、獨り悶えに悶えて居りました、思ふ事は筆に表はれるて、二人の兄へ上京したいと云ふ事を書いて送つたのです、もとより淺學な私が遊學等は少し生意氣かも知れんが其時は其樣な考へは少しもなかつたです、さうして昨年の七月、二人の兄から上京を許されました「自分等さへ承知なら一同へは無斷でも構はない」と云ふのでした、少し考へれば良かつたのに前後も顧りみず七月十六日に二番の上り列車に乘りました、上野驛の切符をしつかり握つて居りました、向ふの見えぬ程大雨が降りました、汽笛が鳴つた時流石に淚が溢れました胸のどうきも止んで目がはつきりした時は靑々とした武藏の野を限りなく眺めて居りました、午後十時に上野へ着きました、二人の兄と電車で赤坂の下宿迄卅分許りで參りました、其間の目に入つた事は用がないからぬいて置きます、其翌々日大兄が迎ひに參りました私は小さくなつて詫びました、兄はやさしく私を諭しまして、どうでも一度歸れと云はれましたけれども、頭を振つて居ました、けれど「母が御飯も食べずに心配して居る」と聞いた時、私の目は何も見えませんでした「自分さへよければ後はどうでもいゝなら己等はとうに家にくつ付いては居ないよ」斯う云はれたので今更身の愚を耻ぢました、末語に「いざとなればさう云ふ氣でなくば駄目だ」とおつしやつたので、いかに私でも以上兄に氣兼ねてさせる事が出來ませんで、遂に意に從ひました「來年はきつとよこして吳れ」と約束して其日の午後十時の下りて刻一刻に二年間憧れてた東京を僅三日で遠ざかりました、夫れから引込み勝に居ました、一月半許り經て校友會があつたので、私も出ました。多勢集つて四方八方の話が始まると〇〇さんが不品行で逃亡したと云ふ事が出たのです、すると側に被居した先生が「皆樣よく逃げるに上手ですねえ」と仰被いました「皆樣」――此中にひがみか知らんが私の外にはないやうに思はれます、本當にそんな方がないんですもの、他の方の目も私の顏に集りました、私は赤くなつて踏板を睨むより外はないのです、幼い時から大恩ある先生ですもの、露お怨みは致しませんが、他の多くの人に誤解されてるのが口惜しいのです、私の心中をよく解して同情して吳れる友

は一人しかありません、其人がいつも「いつか貴女の心は人に知れますよ、元は貴女だつて一時にはやり過ぎたのだもの、後悔したつて仕方ない、夫れより昔しの快活に戻つて下さい」と慰めて下さるのです、無論人に云はれそ所てない私の未熟は十分さとつて居ますてすから此頃てはいつも嬉し相に、ニコ〳〵して居ます、然し決して嬉しいや楽しいて笑つては居ません、「僞の笑」てす、「ヤケ」になつたのです

皆様ヤヽに僞の笑を表はす私の心をお察し下さい、人様の誤りが解けたならどんなに心が晴々するかと夫れ許り楽みに待つて居ります。

若い女が動きまへすれば、世間ては兎や角と良くない噂を言ひ觸らします、つまり地方などては見聞が狭いからてせう、此間に居て少し覇氣ある女性の誤解されてゐる事は珍しくない話て、一地方に於ても是等若き女性の行動に正しく味方する者が、もつと増加しなければなりません（評）



井戸がへ　　麻布　津川ふみ子

○火葬の夕

徳島縣　吉田古磨

ア、今夜は岡山病院で昨日亡くなつた兄様を火葬にする晩でございます、コンヤヤクと云ふ電報を見た時の妾の胸は千切れるやうでございました。悪疫で死んだものの外は火葬にはしない我郷のならわし、殊に何事にも心弱い妾は、火葬と聞くと死んで居る上にまだ焼き殺す様な氣がして堪へられないのでご

ざいます、既に死んで居るもの、火葬水葬埋葬何にしやうと冷たい骸は何の苦しみもない筈なれど、人の體に火を付けて魚の樣に人の手で燒くのが悲しうございます、兄樣は醫學校の四年生、聽て卒業の體には燃ゆる樣な希望が一ばいてしたろうに、ア丶其博愛の尊いお胸、此妾の此血此肉此骨を同じ親から分けた其お體は今夜灰と骨とになつて仕舞ふのですもの、何て泣かずに居られませう、涙に生くる命はなけれど、せめて泣いてでも居りませう、もう八時と云へば岡山とても矢張り八時頃でせう、オ丶今頃はもう棺に火を放つた頃ではあるまいか、足が燒けてか手が燒けてか、慕はしいお顏も燒るのか、廣い額、高い鼻、慈眼の輝目にチラ付く、それも今夜限り、明日からは廣い宇宙を尋ねても同じ體は二つとない、もう〳〵じつとしては居られません、門を走り廻つて居ります、どこか劒の山があるならその上て轉げて居たらせめて心やりになるものを、離れ座敷に集つて居る人は何を思つてゐるのてせう、澤山な洋燈の心をねじ上げて精一ぱい明るくしてあるのだがまだ心細い、家に火を付けて燃したい無神經になりたい、もう疲れ果てて驅け廻ることも出來ません、岡山と思ふ方角へ向いて土に座つて手を合して今夜中泣いて居ます、然し思ひ返せば生者必滅は人生の常、何も天下に兄樣一人を火葬にするといふてはなし、滅びし肉體を來世に送る一つの儀式、泣き悲しむではなけれども、兄樣はまだお獨り身ですもの、永い〳〵あの世の荒原をいつまでも〳〵お一人旅かと思ふとそれがおいとしいのでございます、それを泣くのでございます。

何うも恐ろしく强烈な感情を持つてゐる方と見受けます、今まで見た諸篇も、此篇も皆然うです、抑制することはありませんから、何處までも此感情て押通してごらんなさい（評）

○根岸めぐり（一）

鏡孤

電車を坂本町終點でおりて、角の飴屋で御行の松へてる道を尋ねると四十格好のおかみさんが親切に敎えてくれた、何しろ此近くへ來たのは生れて初めてだからまるきり方角がわからないのだが、思つた程まごつきもせず、何うにかこうにか御行の松も知れた。名に聞いて居る笹卷すし屋も見たが意外に汚ない家で驚いた、御行の松の名物松風せんべいは毎度味つて居るのてふと其美味を思だして買にはいる是は又名にふさはしい風流な家作りなので、さては住む人も定めし茶人めいた人でもあらうと思つて居ると、是も又意外二十二三位の束髮美人が「入被いまし」と出て白キヤラコの前掛をいぢりながらチロ〳〵私の樣子を見て居る、餘りに現代的だつたので少なからず興醒めて出た。元

六間行と松月と軒燈がてゝ居る、さすが待合だけあつて門内の掃除は宜く行屆いて、御定りの掛燈籠がゆら〳〵と人待顔に下つて居る、待合について細い道を出ると突當りに小芝居がある、今丁度開場前と見へてしきりに人寄太皷をたゝいて居る、たしか金杉座とかしてあつたがまだ出來上らないのかまるで小屋立見た樣う、屋根がブリキなので此間中の雨の爲か、赤錆が流て家の廻りでも何でも板を打付たと云ふに過ぎない。其汚さは此所ならてはとても見る事は出來ない、ふと桝の下にみどりと矢張待合のガスが立て居る、側の二階から爪びきの三味の音が芝居の太皷に打消れて折々聞える、どこからか蓄音器が春雨をやつて居る、此近邊は閑靜な處とばかり思つて居たらなか〳〵そう〳〵しい處だ、雨上りのぬかる道を通り過ぎると小さい遊田が有て、靑い蕾がニヨキ〳〵幾本となく現はれて居る、其所をどん〳〵通り過ぎると、やゝ廣い道へ出た角に江ノ島料理とガスが立て居る、そこを左に折れて半町程行くと有名な徑の雪へ出た。

東京の或る一部分を歩いて、深く觀察し、細く描寫するのは確に面白いことです、思ひつきが好いから先づ第一回を此處に出す、二回以下も念入れて書いて御らんなさい（評）

○片眼を失ふた子

鳥取　安木はる子

異樣の物音に私ははツとして思はず立ち止つた、露にぬれた寢衣の裾がひつたりと足にからまる、「おんころ〳〵せんだいまとうけそばか——チーン」もの淋しい鐘の音が夜の空氣に冴はれてすみ切つた心の底にひゞく、おゝそうだつた、隣の靜と云ふ子、年はたしか十三だ、「昨日竹で目をついて片目つぶれた」と下女からきいたが——私は垣根にひつたり身をよせて中をのぞいた、一枚あけた障子の間から行燈の火がぼんやり末ひろがりに此方の垣根をてらしてゐる、床の間に祀つたのは一烟藥師の像でがなあらう、線香の烟のゆら〳〵と上る前に座つた親子、母はわづかの間にやせさへ見えて束ね髮は亂れに亂れてうるさく頬にたれてゐる、靜は右斜に繃帶して母の膝によりかゝつてゐる、「おんころ〳〵せんだいまたうけそばか」幼い透徹つた聲はともすればふるえ勝に母の聲をうち消す。「南無！　お藥師樣、生先長い身であります、私の兩眼はお召し下さつてもよろしう御座いますて、此子の目をおなほし下さいませ、見えませんてもせめて目の形なりと元通り變りませんやう、どうぞ〳〵お藥師樣！」母はふし沈んて顏も得上げずくり返す、靜は母を見返つて「わたいねむいわ、母やねよう」「おうおねむかろうもう十一なんだもの目が痛くはないかえ靜」「ちつとも痛かないよ隣の姉やだつて前のおばあさんだつて可愛想だ〳〵ちや泣くんだよちつとも痛かないのに」下

の子に取られて殘念にあつた母さへ此頃は我にのみついてゐるし菓子だつて桃だつて自分が一等澤山貰ふたもの、片目くらゐつぶれたつて何が悲しかろう、靜はかう思つて母の顏をいぶかしそうに見上げた。

何も…知らぬて!! 人目だけでもしてやりたいけど…身も世もあられずむせび泣く「何故泣くの母やねようつたら、よう母や」淚聲になつて膝をゆするに「あゝも少しお祈してねさ…もう少し」思ひ返して「おんころ／＼せんだいまたうけそばか」途絶勝な母について靜は唱歌でもうたう氣持で節面白くくり返す。死にも勝つて悲慘なのは生れもつかぬ不具となつた身だとしみ／＼思つた、なまじ美しと云はれた女の身は殊に――　眠られぬまゝのそゞろ歩きによしなき事見て今宵の夢はまた安くなからう。

あはれに思ふ（評）

○死ぬる前

福岡　高橋佳水

私はこの暑さに、着物はびつしよりあせにぬれたので、一休みとは思つたが、もう四時過ぎ、それに半年も會はない從姉が、どんなに、待つて居やうかと思ふと、それも氣がかりて、すぐ、福岡の大學病院へと車を走らせた。

私は室の番號を讀みながら廊下に立つた。すると、すぐ向ふの室て、看護婦の聲らしい「おや、お一人てはおあぶなふございますよ、まあ宮崎さん」私は電氣にでも引つけられるやうにかけていつて扉口に立つた。扉は內より開かれて、やせた人が現れた。私は、だまつて其手を握つた。まあ…この冷たいこと、「敏子さん私ですよ、幸ですよ、」後は嬉しさに聲が出ない。

敏子さんは、物をも云はず、私のふところへ手を入れて泣いて居らつしやる。看護婦が「あなたはお身內ですか、今日は宮崎さんも御氣分が、たいそうよくつて、今あちらの室へ、おうつりなさるとこです」と先へたつて行くので、私は、敏子さんを助けながら後へついて。大ぶんはなれた、ごく靜かな室へ行つた。「敏子さん、あなた、御氣分は」「たいそうよくつてよ、そして、今日はよく來て下すつたねえ」「私も早く來るつもりてしたが、學校の都合て、とうとう、遲くなりまして、ても、早くよくなつて結構だわ」とは云つたがこのやせやうは、これが、九十斤近いとじまんした敏子さんと思はれうか…豐かなほうはかげも止めず、高かつた脊は、いよいよ高く見えること、ても、今日は大分よい方とか「幸ちやん、先日は御手紙下すつてありがたう、一日とは云はず一時も早くといつて下すつたね、私も、そう、ねがつてゐたのてすよ…てすが…てすが、もう…」あとはふるへて、私は、語尾が氣がかりてならない「私、もうあきらめたの…え

ゝ何故つて病氣を知つたんですよ」私は手を握りしめて「何ですねえあなた、そんなことといつて、院長もいつてゐらしつたでせう、もう、すぐなほるつて」「いゝえ、もう、ちやんと何にも知つてゐますのよ。昨日ね、お父さんの御命日だから、お母さんが宅へお歸りなすつた其あとで胸を押へて苦しさう「私あなたの御手紙よんでゐて、聞くとはなし他の話しに耳をかたむけてゐましたの、するとね…私の事ですの」「どんな事ですの…え」「それが宮崎さんは、養生がよいから今までつゞくつて、それでなくば、もう、とくにつて」私は聞き得ずに「お話は又あとにしませう、今日は、めづらしい物もつて來ましたから」「私もう面白い物も何もいりませんのよ今しばらくですもの、それで今朝宅へ手紙を出しましたの、いろんな事をかいて、室もね、わざと靜かな所へつて…もう一度、お母樣や、お姉



釣る人　青森　立花とも

樣へお會ひ申した上て、早く早く、お父樣のおそばへ行きたいの、そればかりたのしみにして、待つてゐますのよ」そしてふところより、手帳を取出して、私の手に握らせながら、泣いてゐらしつたが「幸ちやん、之は今朝から書いたので、讀みにくいでせうが、私の心に秘してゐた事や、考へや、おたのみ申たい事やらごつちやまぜに書いてゐますので、今でなくて、淋しい夜に、一人よんで下さいね、私、之をあなたへ上げたから、もう、心殘りはありません、早く、お父さまのところへ」私もうたまらなくて、顔色のただならぬを、恰ど、看護婦がはいつて來た、がすぐ出てゐつたが院長と一しよに、院長はしばらく診てゐらしつたが「御宿へ早く、急と、電話て」と小聲、私はもう夢中て宅へ電話をかけた。

室には、私と叔母さんと只二人、死人の顔をのぞいては狂氣のやうに泣いてゐらつしやる。それも無理ならぬこと、昨日の手紙に、心もとなく、急いで來ればもう息はたえだえ、やつと死目にあふたばかりだもの宅が遠いので、まだ外にはだれも來ない。付添の、たれかれが、湯て死體を淸めたので、私はあり合せの新らしい浴衣と着かへさせ、あたりに、ちよと見あたらないので、私の單の下帶をとつて、それにしめさせた。そして私は、天使のやうな、友の死顔と、立ちのぼる香の烟とをながめつつ、深き、深き、想にふけるのである。手にかたく握りし手帳さへ、忘れたやうに。

手帖を渡す處が實に哀痛、小說以上の感動を覺えます（評）

○内と外

山口酒向とし子

緒が強くもないのに私は足袋をはかなくてはこう何だかすごい樣て御座敷一つ掃くのも大儀な位、末さんの羽織お裁縫仕樣と思ひ出してはしたものゝ何だか氣が浮かないてお學をとつてしばらく彈かなかつた道成寺をさらつたら一寸もわすれて居なかつたばかりでなく思ふまゝ彈かれたのて嬉しくてならない、清姫が狂ふ樣がいかにも氣に入つたてとう〳〵二度迄もさらつた、松竹梅も意外もつれざつたのでいよ〳〵自分乍ら浮れきる、つひでにと思つて大内山を彈ひたら惜しい哉合が一寸思ひ出されない、すぐ譜記帳を出してにらんだらすつかりわかつて來たのでいよ〳〵嬉しさがこみあげたお天氣が續くので糸がカン〳〵してるから柱を除つて置いた、とドンがなつた。

午後は祖母樣とお寺參り、ほんに春になつた事よ、久しぶりに郊外を歩くのでほんと氣がのび〳〵する、るりの空に碧の峯が恰好よく立つて居る、私は思つたあれはやはり天上の櫻の滿開ぢやあるまいか、こう思ふといかにも床しくておてんと樣ばかり眺められる、あぶないよと云はれて自轉車の來るのに心づいた、何だかホッとした、自轉車に乘つてる人は中學生だつたまるて汽車の樣に走らして居る、走りぬいた風が電氣の樣にサアーッと私の顔をなぶるすさまじい風だと思つた、もう影は見えない、あらまた後からチリン〳〵やつて來るしかも四五人、マアー此頃の自轉車の流行る事、そうそとら子樣はお稽古だとか聞いたがまあーいや、女が自轉車とは、いかになんてもこればかりはおことわりだ。

ポカ〳〵暖かいので前からも後からも人が來るそしてそれが皆私を見る何だか目のつけ處に困つた、いつやらお寺の門をくゞつた、あの廣い前

庭へ總出で雛を見て入つしやる、まあーご覽下さいつて坊守樣が愛想よく云はれる、見ればまあ可愛、手のひらしかないひなが十四五羽も親鳥と遊んではかなだらひの中の餌を喰べて居る、私は只うつとりと見とれて居た、方丈樣も坊守樣もさも嬉しそうに笑つて見て居られる、坊守樣のきれいなのが私にとつては何よりも見もの、そこへぢいが出て來て何だかわからない事をさも得意氣にばちやのる、坊守樣が私を見ては笑つて居被る、ほんとにぢいはおてさばりだ、ものゝ三十分も立つてやつと母樣のお墓へお水をまへつた、そして島田がよくうつるつて云ふ事やらすそ樣の重れをこしらへて頂た事など細々とおつげ申したら何だか悲しうなつてこゝて思ふぞん分泣いたらばと思つた、とどこやらて鳴く鶯の聲を耳にした、

もう鶯の處には誰も居なかつた、ひなも牛れむつて居る其靜けさは何とも形容し難い、と垣根の八重の白椿が靜かに／＼散つて來る、あーお寺がいゝなーと思つた私は何者にひきつけられたのかまたほろりとした。お寺境をはづれると日はいよ／＼暖かく祖母樣のおせなへも私のへも平和に／＼、さしてゐるこれにもう一人お母樣がいらしたらば……

夢のところと、お寺の庭のところとがよろしい（評）

○釣橋

金澤　むらさき女

草深い中に白い一條の路がある。草履の跡が疎だ。幾度もこれてもう行かれぬかしらと思ひ乍ら出ると、岩石が恐ろしく險はしい。眞白なしぶきが霧の樣に立上つてゐる、見ると釣橋が少しさがり氣味に霧の中に消えてゐる。危ないあそこまでしかないのじやないか……と躊躇つたが思ひ切つてしつかり捉まつて渡つた。中頃と思はれる所まで來た時、向の岸に又白い細い路が一條スーッと通つてるのを見た。

一瞬の後

人々は來るべき危險の如何に大なるをも、知らず顔に一生懸命戲れ遊んでゐる——浪はます／＼大きくなる。遠くの沖の方て浪が白く蛇のやうに立つのが直ぐ消える——水底深くくゞつた樣に——。風は黑雲を誘ふて水平線上に現れた……川が怪しく瞬いた。それても人々は醒めぬ。きやつ／＼と小兒を水につけては妙に吃驚するのを、父も子も喜んでゐる。浪は惡魔の樣に悉皆の人を呑みつくさずば止まぬ勢て走つてくる。遂に其中の一人は倒れた。人々はまだ氣づかぬ。かくて黑雲は空一ぱいに擴がつて今にも大嵐がきそう——どうなる事やら……。

散文詩風の筆力はいつもながら鋭いと思ひます（評）

○名古屋の嫁入り

名古屋　胡　て　ふ

廣間はすつかり金殿に換る、床の間には鶴龜の大幅がかけて島臺、重れ盃長柄の銚子を飾つて、こゝは客間である、お婿君の五郎樣も今日は眞面目にりゝと澄して被在る、遠くて嫁りーよ——いよ／＼御起しとお女郎役の信樣と芳子が玄關まて御出迎い、召使は手をついてひかへる、一番さきが小本と吉田の祖父樣、お媒妁にお附きがお二人り後ろが嫁君、黑縮緬に白く初霜菊の裾模樣の振袖、赤白の三枚重れ、高島田の美くしい御線結びの印に五郎樣からお送りになつた、ダイヤの指輪がお扇子をかう持つて被在るお手に光つて、お恥かしそうにうつむいて被在るお姿が勿體ない程お美くしい、三十人許りのお客樣は廣間へ、嫁君はお休息の間へ御案内する、暫くして姫君は白無垢の振袖、裲襠を召して角かくしをしてお女郎が式場の佛間へ御案内する、御先祖には御燈明が上げて見るから神々しい、婿君もお一緒に座が定まる。お媒妁がお盃をお定めなさると御銚子役の、健太郎樣と私が長柄の銚子を持つて兩方から三度につぎ入れる、おつい立の影から祖父樣の、高砂や——がはじまる、かくて三々九度のお盃は廻される、極々靜かだし涙のこぼれる程、恙がなう御緣は結べたお媒妁より御祝詞申し上げると附添ひも出て祝詞申上る、嫁君は恥かしそうに美くしい手をついて靜かにお頭りが下る、介添へがお供して化粧の間へ案内する、此度は婿方の紋の付いた召物て、介添連れて、父母兄弟の御盃がすむ、それから婿君とお二人りて廣間へ御挨拶に被在る、とくう無禮講て大騷ぎ、信樣と芳子樣がお琴の合奏、祖父樣の

お臨典、館太郎樣の小鼓で私お種々舞を舞ふ夜も白々と明けかける頃、嘗御芽出度〳〵の御挨拶でお開きになる定紋の提灯、五十張りつけて登上るお車が三十臺、西に東に別れて走る、外はまだ少し暗い。
何と云つても婚禮は花やかです（評）

○三浦三崎

本所　木幡きみ子

月のない暗い晩であつた、二町谷の汀を獨り默つて歩いて行つた、サク〳〵と云ふ砂を踏む足音と、寄せ來る浪と妙に拍子がとれて、妾は海に突き出た岩の上に立つた。「三崎」「三崎」と云ふ深い深い念が胸の中を右往左往に走て、追想は女浪が男浪を追ひ、男浪が女浪を追ふ樣に、現在より過去へ、過去より現在に追るのであつた。久子樣！……面識もない、赤の他人だが記臆す十年の知己の如く明々と殘つて居る、草深い故郷の儘、夕べ野良より踊り、獨り机に向ひ、薄暗い三分心の影で、どの位御作を拜見したか知れやしない、田舍娘の姿の眼には唯「柔い御方」と……、そして始終「お會ひ申して見たい」と心に掛け、降ふる晨も、雨ふる夕べも忘るゝ隙間とてなかつた。世諺ぞ常ならむ。ことわりは知れどよもやお亡くなりになるとは、假そめにも思へ樣、されど死ちようイビルを無窮に遠ざけ、そして未だ見ぬ人を遂に見ざりし人として了た、妾は余りの奇蹟に自失して了た。緣は異なもの時は幾度となく廻轉して故鄕の消き山川に憧れ生涯鍬とつて果つべき運命もいつか廻轉し、都に漂浪ふ身となつて、今夏計らずも三崎の海岸に立つた。遂に見能はざりし人は此の地に病軀を横へそしてあの干き行く浪に云ひ知れぬ、長い、長い、恨を乘せたのだ、去年の春の熊上に「母樣に撫すつて頂き乍ら寐うと〳〵と眠りかけると直ぐ恐ろしい音に脅えて眼が覺めて了ふ。」と云ふた、お可愛そうな痩せ衰ろへた、病みの姿が髣髴と浮んで來て、知らず〳〵涙を落した。おゝ氣閑な闇――直ぐ眼の前の歌舞島でさえも見え難い、此の闇の底に久子樣は睡て居はしないかと思ふた、蹤も無く虚榮もなく妾も闇の底に葬られて了いたい樣な心持ちがした、
中久子の靈、冥するに足る（評）

○二小品

美作　靜子

小猫

雛卵のからの中に殘て居る白身と黄身とまざつた汁を三毛猫がうまさうに、赤い舌でペロリ〳〵となめて居る、土肥を積み上た高い所へ眞黑の小猫が居る。柿の木でジーーと鳴て居る蟬をキロリと光る黑い目で、ふしぎそうに眤て居る。はき寄せの中の餌をあさつて居た背の高い雞が恐さうに、黑いのを見上て居る。黑はつるつるつと柿の木に上て股に成て居る所に止てつと下を見た。連の三毛が、可愛い頭をもたげて味い物が有ると云ふやうな顏つきをした、黑は飛おりて來た、二匹は頭を並べてなめだした、三毛が尾を振て我家へかけ込だ。黑もまけぬやうに尻をうけて走た。コケッコーと雞が驚いた。

お仕度

矢絣の紺上布にとき色絽の長襦袢、ながい袖をひらりと風になびけて、衣紋を心持ついて、伊達卷をきゆうとメた。姿見の前に衿をなをしてお島田を大切そうにさわつて見る。自分乍ら此處と思ふ所はない樣だすらりとした立姿、肩のあたりがしんなりと襟すぢが一きわ白う、ひらりと身を交す剎那に定紋の平打がピカッと鏡に映る。でも秀夫さんは何と御覽なさるだらう、背の高いのがよけいに高く見えるだの、お島田が善くはうつるけれどちつと老けて見えるだなど惡口ばつかり、けれど今日は色の配合やお化粧に氣を付けた故ずつと引立て見える事はたしかだ、次は帶の段、厚板に絽の打合せ、きゆつと廻して長い帶をたぐると。今迄殤の陰で顏を洗て居たくろが、どつと走て來て、可愛い手につつと手玉を取る。これ白や爪でもひつ掛ては大變だよ、ぽんと一つ頭をぶつてやつた。
嬌態（評）

○田舍の電車道

こすもす

林も畑も一吹きとばかり烈しい木枯が頬もちぎれよとたゝく、私はショールを鼻の下までかぶせてうつむき勝に歩いて行つた。

先まで黄金色に映えて居た太郎大藏の森がもうすつかり灰色になつてしまつて、烏が三羽西の方へ寂しげに鳴いて行く、何やら後からく……く——と腦を痲痺する樣な不快な音がしてくる、ひよいと見るとわびし氣な單線のレールが横つて居る、あゝこれだなと思つてるとチンチンを先に電車は御免とも御先へとも云はずに行つてしまふ薄暗い車の中には二人しか乘つて居ない樣だつた。

田は一面にひゞわれて刈取つた稻の跡が凍つて白く光つて居る、乾き切つた砂は烈しい風に卷き上げられて一間の先も見えない、私の立つた小天地はたゞ眞黄色だ、丁度地球の混沌時代と云ふのは此樣じやなかつたらうか、ふと話聲がするので其方を見ると、落葉かきの歸りらしい大籠を肩に熊手をかついだ田舍娘二人、昨夜の里神樂の風評でもしてるんだらう。

此所は電車の待合所だ、レールが二十間ばかしの間複線になつて居る。呑氣な田舍人は電車が來るまで小休みをするのだらう、茶店四五軒ある所では御休息所とでも書く所を此所ではすゝけたしぶ紙色の行燈に千客萬來看うどんと不風流に書いてある、然何處から來たのか小さな風呂敷包をはすに、もうろくづきんをかぶつた爺さんが二軒目の家へ入つたぼつぼつと湯氣の立つ御鍋をかき廻して居た媼さんはあいそう善く「御出でなさいましよう——今日ははあいかい寒さであすよ」等と云ふのが聞えて來る。

香しい香のする家並を過ぎると兩側は畑ばつかしさへぎる物とて無いから風は益〻強いあぜに植えてある桐の實ばつかし殘つたのが風のまに／＼ヒューヒューと音を立てゝ居るのが丁度奈落のそこから聞えて來る哀音樂の樣だ。

悲しい／＼思ひを込めて行く中に日はすつかりくれて此所彼所の林でたき火してるのが能く見える、何だか普通の火と色が違ふ樣だ、私は胸



猿芝居スケッチ　本郷　鈴木とみ子

を抱いて立ちすくんだ。

若い胸に抱く怯怖、不安、畏怖などを強烈に言はうとしてゐる、一局部に好い所があつて、全體にはまだ情調がたるんでゐます（評）

○怪我人

京橋　夏濤

一時間掛つて漸々髮が結び上つた、いつもは卅分で後片付迄出來る物を。おまけに根が少し下て氣持の惡い事寧そ一思にもう一遍結直そうかしらけれども腕が痛くて手が上へあげて居られない「イヽワ別に何處へも行のでないから、やつと髮道具を片付て鏡へ布を掛ようとすると、何だか氣になつて又櫛を出して前髮をかいて見たけれど、やつぱり無益、今度こそほんとうに思切て布を掛てしまつた、そして臺所で手を洗て居ると、お店でゴタ〳〵云てるので何と聞いたら「遞信省の怪我人」私はゾッとした、又怪我人、遂先日斗前だつけ、廿七八の男が中間らしい人足五六人に抱れて頭と口から血をだして、ムー〳〵とうなりながら時々痛イ……と云て居た、あれを見た日氣持が惡くて御飯が食べれなかたから、今日は見ずに居よう……でも何だか見たいような氣もする。もし氣味が惡かつたら傍向けばと思てお店へ行と、此間のように五六人で抱へて來た、其後へも五六人附て、牛町斗先の御醫者へ往た、今日のは四十位な人、血はどこにも見えなかつたが、其顏色と云たら青いとも鼠とも云樣のない……私は思はず毛穴が立てしまつた、ちようど新宿町へ使に往た正治が歸て來て「今長田へ遞信省の怪我人が來ました、もうだめですつて、何しろ高い處から落ちたのでお腹の機械が滅茶〳〵になつてしまつたんですつて、そして今怪我人の家へ知らせに往ましたよ」ちようど其遞信省から人足が戸板の上へ薄い蒲團をのせて持て往た。きつとあれへのせて家へ連て行のだらうが、其家では嘸吃驚するだろう始め報知の人位ては屹度まさか〳〵てほんとうにはしまい。所へあの様な姿した夫……親、見た妻や子の心地はまあどの樣にあろう、唯アッと云ふばかり涙も出まい。朝はいつもに變りなく往てらしやい往てくるよとか云て出て行た者がわづか四五時間の内に冷たくなつて歸て來たなら……

○秋

徳島縣　西野花びし

石地藏

村外れの石地藏樣の後の、まばらな雜木林、踏むとかサ〳〵音のする落葉の中に、二三人の女の子が木の間洩る秋の日を浴びて何か頻りに拾つて居る。それは樫の實がこぼれて落葉の蒲團着て寂しくしてゐるのを、さがしてゐるのだ、幼い時私もよく拾つておはじきなどして遊んだのを覺えてゐる。

セッセと拾つてる小供に背を向けて、昔ながらの石地藏樣は淋しう立つて居る、首には不似合な新しい赤いよだれ掛がかけられてまだ鳥のふんにも汚れて居らぬ。私も一度、乳母が縫つてくれたのを掛けたが、これは何所の母親が可愛い子の爲に掛けたのであらう。

夕日は地藏樣のかげを次第に長うして空は美しう〳〵くれかゝつてゆく。

俥上の人

初秋の夕ぐれ、甘い思出の歡樂に耽つて身ものび〳〵と、二階の東窓に靠れて微かな風に吹かれてゐると、近くの小學校は晝間の務を了へて、靜かに眠りにおちるらしう、黄昏の帷に包まれてゆく。

がら〳〵と向の神代橋を二つ三つ――五つ俥が通る一つは幌にかくされて。

どこのか嫁さんが花の姿と優しい心をのせてゆられてゆくのであろう。

宵の明星が俥のゆくへを見守る樣にかゞやき出した。

○歌舞伎の家

香子

其時分よく遊びに行つた。三十疊程の通し間に長う置いた棚、其上に圓い角な鏡が一人々々に並べられ、白粉や紅、との粉の類が散らばつてゐる。何之助、何藏の名張のみ正しい處を通りすぎると、東の隅床山部屋にぼつかない字で臺詞うつしに餘念の無い直ちやん。いつかもだつた切狂言が重の井子別れ、舞臺は靜かに、揚幕から見ると見物場からはすゝり泣きの音がもれる、坂は照る照るの悲しい歌、涙に曇る馬子姿の直ちやん、あゝ彼時の直ちやん、なんでも私より一つ下て十だつた、五つの時

まてお母さんだつたと云ふ人は大阪在の素家の娘て其時分には北國のある郡長の夫人になつたとやら、父は田舍廻りの書出し役者て一昨年の秋狂死しましたと、女形をする叔父だと云ふ人の話だつたと、ずつとずつと後に母から聞いた事がある。あの子役、今はもう一昔となつた、變つたてあろう、あゝ私も變つた、何不自由なく座主の一人娘と皆に珍重せられた私も變つた、と見上ぐる空には早や星の二つ三つ、咲き殘つた晝顔の花一つ鶏頭の葉にかくれて白萩の上には露が重い。娘のうちの樂しい思ひもなくて、他見には花やかにのみ見ゆる此今の浮き身、兩親が健在なら、兄がたつしやならと忍び音の折柄、飛石傳ひの離亭ては仲居の呼び聲がする。後には只、紅の唇もれし晝顔の花のみ　………。當る廿一日より町の芝居小屋て大阪初下り青年俳優の名のもとに開演する書き出し役者は坂東重松とて今年十九、辻番附の染別手綱、重の井の紋は花びし模樣、あはれお三の役は誰がつとむるのてあろう………。

○きりぎりすの最後　越後　佐藤浪子

一

きりぎりすを五尾買つたので小籠に入れて椽先へ風鈴と並べて釣してやつた、涼風がスーツと吹いて來る、チリン〳〵と風鈴がなつた、――キリギリース…チロー〳〵と宛ら重い荷でも引く樣な啼き方、ブル〳〵と透綾の羽を慄つて啼き出した、音は入り亂れて美しい涼しい、只呆然と聞ほれて、キリ〳〵ス…チロ、…キ、キリ〳〵ス……次第に何となく胸にしみ入るやうな、强いこゑ、〟悲しい音――、

二

赤いのがムザ〳〵と青の側へ寄つて口を開けた、すると青も身構へした二疋してクズ〳〵して居ると一番强さうなのがやつて來て赤に加勢した、當時は爭つて居た、キ、キリ〳〵スと、節だらけの肢を絞つて十と×は長い足をきうりの實と青草に乘せて淋しさうに外を眺めて居る、しばらく、青は弱つて仰向に籠の底へたふれた、無慘其羽はかみ取られて、細いあしはバラ〳〵に、只僅かに息するばかり、あゝ死んだ、勝ち誇つた、赤も大將も十も×もみんな寄つてたかつて喰ひ始めた、千切られた足は籠から落ちた、丁度迎り懸つた蟻が五六疋して引づつて行く、四疋は入り交つて大儀に籠を廻り始めた、また一頻りなく、斯ふしてまた共食をするのてはあるまいか。

○廢屋　阿波　西野いさを

むごき運命の黑い手は村て半分の我が家を兇うて、十數年住みなれた家は、夜見の國のしこめとも思はれる荒くれ男の手によつて今こはされてゆく。屋根瓦をめくつて男は手繰りに古瓦を運びおろす。折々こちらを見て、小唄まぢりにめくつては運ぶ。秋の日は弱々しく照る。苦悶して病をえた父、一と昔前に逝きし母、行への知らぬ兄、あゝ私は今やつれた小弟の肩を擁して、空虚になりゆく我家を見つゝ茫然と立つてる。想ひ出や悔恨や憂鬱や悲哀や憤怒や、すべて皆鉛の樣に沈んで心に壓されてゐるので茫然と生きた屍骸の樣に立つて見てるばかり。荒れてのくわが家の光景が脆弱きわが眼の網膜に映るのを無意識に感ずるに過ぎない。今もしも心うつろの生きた屍骸てなかつたなら、怎うしてこの光景をじつと見てゐられよう。冷りとする夕風が鬢をなぶるのも知らぬ顏。ガラ〳〵と凄じい音させて、壁土をおとし始めた、姉樣、埃がするあちらへ行かう、と弟が垢じみた私の袷の袖を引ける。やゝわれに歸つて風上の稻田の畦に立つて猶見まもる。思ひ出の絲が少しづつほぐれて、涙が頰を傳はりはじめる。あゝ今落しゐる座敷の壁、懷しいお祖父樣が世盛りにぬらせたとか、左官が塗る樣を後手組みつゝにこやかに、眺めゐませしとぞ覺ゆる御顏が幻しの樣に浮かんてくる。お墓の下て今日の有樣どうお思ひなされてか。お祖父樣が親しく塗らせされた壁土！さうだ私は後の思ひ出に心ゆくばかり其の壁土の埃を吸うて置き度い――鉛の心に火が入つて熔けてくら〳〵おどり始めた。私は一分毎に狂熱せる悲みに支配せられて、身も世も無くもだえ出す。日は傾く、料理した鳥の樣に、家の骨があらはになつて來た。あゝ落日！堪へかれて弟と弟を抱いて、轉ぶやうにくづおれた、黄金の穗の稻田に――もともと私の家の所有の稻田に………。

○遠ざかる俤　備中　紅薔薇

「まあそんな處で何してるんです早くお寢み」ってお母樣の聲。ハと我に返た。まあ私はこんな處、眞暗い縁側に何してたろう。寢てもゐなかつた、何も考へてやしなかつた、何も見てもゐなかつた。どうしてたんだらう馬鹿々々しい。と思ひながら雨戸に手をかけた。杏の葉越しに青い星が妙に光る、懐しくつて堪らない「この上風ひいたらどうしますほんとにどうかしてるんだよ」つて又お母さまの聲、ほんとに私どうしてるんだ、今、はゞかりに行くつて起きたのだつたけ、もう止さう、と思つて雨戸を締めて床の上に座つた。細くしたランプの火はポッポッと青い烟を吐いてる、いやに恐ろしくなつたので吹き消した。眞暗になつちやつた、横になつて胸の上に手を載せた、怪しう動氣が早い。ぢつと氣を落ち付けて思ひ浮べやうと思つた、懐しい俤を。けれど駄目！如何にしても思ひ浮ばれなかつた。あゝ斯してもう私は私はあのあの俤を忘れて仕舞ふのではなかろうか？否々死ぬるまでも忘れまいて誓つたてはないか、あゝどうして忘られやう、だのにどうして思ひ出せないか知ら。「遠ざかる者は日々に疎し」とか、吁！私は今この言葉を痛切に感じるのである、と同時にまう胸が迫つて……あゝいやだ、母樣はもうお寢りなさつたやうだ、私も早く眠りたいものだ。

○夜　道

遠江　鈴木こぎく

日はとつぷりと落ちた。月も未だ光が薄い―歸りが斯遲くなろうとは思はなかつた。これから又長い〳〵茅叢を過さればならんかと、ぞつとする家でも迎に來さそうなものだ―何と思つて居るだらうと思ひ乍ら弱つた氣を勵まして茅叢内の路へ歩を進めた。

―再び歸れない地獄へでも落込む樣―氣味が悪い秋風は妾の堅くなつた胸をかすめて行つた、

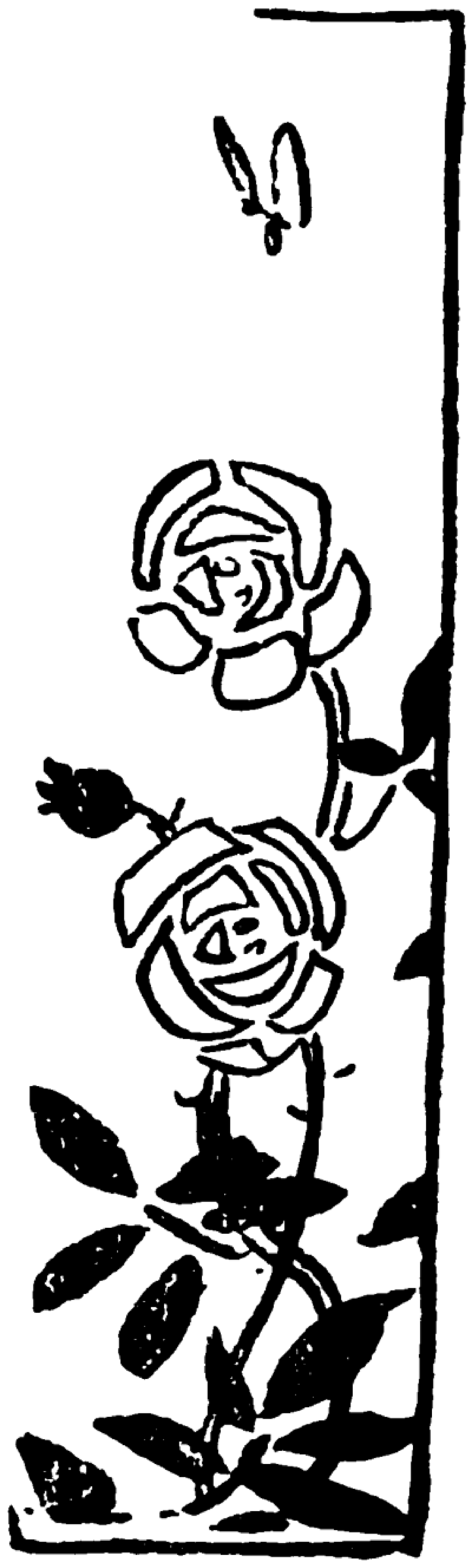
ふと彼方を見ると路傍に何やら立つて居る樣―月の光で、ぼんやりと見える―増々氣味が悪い止まつて透かす、どう見ても人間だ―けれどもこんな所に默つて立つてるとは變だ、正か戻られもせず―と怖る〳〵近づいて見る、馬鹿〳〵しい「もろこし」の殼が立つて在つた――先づ〳〵と胸撫で下して急ぐ―未だ何やら追いて來る樣、駈ける―彼ても駈ける樣もう胸は堅く〳〵石の樣になつた――又彼方に黒いものが見えるはこん度は確しか、「もろこし殼」では無い―動く〳〵だん〳〵此所へ近づいて來る―もう二三間しか無い吁絶體絶命―妾は思ひ切つて「誰ですッ」と叫んだ―更に返事が無い―再び「どなたですか」―と叫んだ―「ハイ妾」―聲がふるえて居る――ヘテ聞き取れん聲だ―、度胸を出して自分からスト〳〵と行つてピタリ會つた、―美喜―美喜やが妾を迎えに來たのであつた「地獄で佛」とはこんな時でせう―妾は堅く美喜やの手を握つた。美喜やも隨分怖かつた風――もう氣強い――二人で高話し乍ら手を引き合つて家に急いだ。お月樣は妾等の頭の上で笑つてる樣。

○紅葉狩

大阪府　寺部君子

精一杯美しくお化粧仕て、色の配合にも氣を揉んだ上、いつちよらな着飾つて、お友達四五人と樂しく箕面山へ行た。谷間の楓が薄く濃く染めたのや未だ青いのや、色々取り交ぜて、目も届かぬ迄で奥深く紅葉斗りの美さ。言い合した樣に立ち止て眺めて居ると、俄に風が吹いて來てみどりの空は何時の間にか灰色に變て居る、其癖向の山に日は見えて居ながら、颯と時雨が仕てご――と恐ろしい風が吹くと追い掛けられた様に雨が強く成る。谷川に三脚据ゑて、一心に此の景を寫して居た人のスケッチへあつと言う間もあらず雨は模樣に掛つたので吃驚仕て仕舞ひ慌てゝ崖を滑り乍ら上て來た。もう一寸行けば瀧だのにと殘り惜さうに振り向くと、今迄白糸の樣に見えて居た瀧は白烟が立て物凄い事、靈れ草履てハネが上る、着物は濡れる。只一軒の茶店は人のすし詰め、入る事も出來ぬ仕方無しにペチャ〳〵歩いて居る間に雨は止んで日が見えた、思はず人々の顔に笑が浮んでやれ嬉しやと思う間も無く向うの山から暗くなつて又雨が追掛けて來た、其度に寒さが強くなる。最初の勢は何處へやら、皆の顔色は變て居る、惨目な事だと思ふと泣き度くなつて来た、漸と山門まで歸て來てほつと息、家へついた頃はからつと晴れて好いお天氣。

家庭日記



○規定　家庭を主として書いた日記文を云ふ實際的の日日の出來ごと又は心得となるべき事若き奥様の新しい經驗談も宜し二十四字詰三十行限り半紙又は罫紙に認めること乙種の賞を送呈す

○大根まき（地賞）

岡山縣　山田靜野

九月五日、いつもより早く起きて大根まきをする、日曜日の事だから弟妹が妾も僕もと總勢五人で出掛ける、長弟が肥桶をかつぎ自分が種をもち、次弟妹は名札を持つて來る、跣足に朝露を踏むと非常に心地がよい、十坪足らずの大根畑は昨日男によつて土はこなされた、所謂膳拵へは出來てゐる、先づ弟が通りを切る妾が種をまく、其跡を妹が歩く、弟が叱る、すると次弟が大聲して笑ふ、其騷がしい事つたら、もう子供は嫌だと思つた、蒔き終ると名札を立てる、宮重大根は妾だのチリマ大根は僕だのとわい〳〵言ふ、少さい畑に幾つも名札がたてられた、何の事はない農事試驗場だ、長良川で足を洗て歸ると八時、臺所の食卓には母が自分達を待つて被在る、食後長弟と次弟が辨當持參て門福寺に劒術試合を見に行く、末弟と妹は舊暦二十一日だから大師様に參ると言つて、三錢づゝ貰つた小遣錢を各々袋に入れて嬉し相に出て行く、其の無邪氣なことと參られる大師より參る弟妹が佛の樣だと思つた、何だか急に淋しくなつたやうに思はれた、お母樣と二人で晝飯の用意をしてゐると女子文壇が來る、何はさて置き見ずには居られぬ、部屋に入つて一一讀むいつも乍ら諸姉のお筆には感じ入る、夕食は一家揃ふて談笑の内にすまして、一同母の前で今日の反省をする、妹の三錢小遣を皆盲目の乞食にやつた事が一番筆頭に出た、末弟は次弟と墨のつけ合ひをしたことを言つて笑つてゐる、母に代つて妾が　皇孫殿下の御近情を話して聞かせると、皆姿を正し熱心に耳をかたむけてゐたが、話終ると四人とも頭を下げて有り難ふございました、此後は腕白は致しませんとひどく感心したらしい、五人聲しづかに三皇孫殿下の萬歳を唱へて十時頃床についた、庭にコホロギの啼々のが耳につく、夜はしん〳〵とふける。

全體にわたりて妙味あり、讀んで一種高き感興を喚ぶ、平和なる家庭に祝福あれ（評）

○初秋四日（八歳）

徳島縣　上野浦筆子

九月二日、今日は稻刈の爲めに例日より早く起きた、本宅から下男の六さんが手傳に來てくれた、母と兄さんと四人、黄金色になつてる前の早稻を刈る、皆云ひ合した樣に莞爾々々してゐる、六さんは額から汗をタラタラ落して刈るが兄さんには追つつかない、負け嫌の六さん閉口してゐた、川向から稻刈節が聞える、六さんは自慢の聲で唄ひ返す、すると今度は一層大きな聲てくる、六さんは負けぬ氣になつて又唄ひ返す、唄ふ唸る、水清き飯野川を隔てゝ歌の競爭が始まつた、私の胸には言ひ知れぬ平和な田舍の有樣が滿ちて來て、嫌だ嫌だと思ふてゐた農夫が、此時始めて面白いと感じた。九月五日、父は讃岐へ牛買ひに、兄さんと弟とは山畑へ甘藷の蔓分けに、私と母とは前の小川で洗濯する。夜來の雨は全く晴れて、空はさながら洗ふたよう赤蜻蛉が數限なく飛び廻つて、耳をぢつと澄ますと遠き鳴戸の潮の響が幽に聞えて來る。實に心地のよい日である、夜兄さんが三つ四つホゼッテ來た甘藷を燒いて少々分配して下さる、初物の味は又格別だ、誰の顏見ても笑ふてゐない者はなかつた、大阪の姉さんに新米や初甘藷が食べれられて嬉しい……まだ喰べない新米までつけたりに書いて送る。

九月九日、此間早稻刈つた跡へ大根種を蒔く、例の六さんに、饒倖にも話好きの石井の伯父さんが來合して手傳ふて下さる、歌の競爭はないが負け嫌の六さんと伯父さんとの話が中々面白くて、稻刈よりは猶一層賑て面白かつた、爲めに日暮迄かゝると思ふてゐたのに、二時頃迄に蒔ひて仕舞ふ、大阪の姉さんから返事が來た、私し筆さんのように新米や初甘藷がまだ喰べられなくて殘念だわ　」それからお隣の愛子さんと半道程ある隣村の八幡樣の市があるのでお參りに行く、歸路で急雨に逢ひ、一枚しかない晴着を濡らして、お母さんに叱られた。

九月十日、天氣が好いので弟と二人北野へ夏粟の穗を切りに行く、昨夜風呂に行て、お友達の房子さんが郡役所の書記さんとかへ、お嫁に行くと云ふ噂を聞いてゐたのを、今日又思出して、羨ましいやら恨しいやら私も急に嫁きたい樣な氣が起きて、穗を切る手を止めて考へてゐると「姉さん何してゐるの――……」と云はれて、ハッと顏を紅めた。

秋の田園の日記として尤も上乘、テキハキした筆に愉快な心持が出て居るのが殊に面白い（評）

【秀逸】

○つまらない日記

山口　酒向とし子

此頃は起床が六時、今朝始めて白のあやめが二つ程咲いた、瓣はまるで鹽瀬羽二重の樣、何だかあの重ねが思ひ出されたつぼみの數を數へかけたがどうして一寸の事には數へきれない、紫の方は數は少ないけど、丈も長いし葉も廣し活花にはもつて來いである、でもまだ〳〵封じ目が堅い、さあ―もう三日もしたらあの中の花が咲くだろうか、とにかくやさしいお花には違ひない、さうそ去年の此頃はお床へ幾度も幾通りにも活けたてはないか、おゝあの矢筒へも、そして君待つ色はこむらさきなど〻、しやれた樂書を半紙に幾枚となくしては、ひきさき〳〵するのが何とはなうつい面白くて仕方がなかつた、それにまあ本年は實のらぬ山吹の露を硯に受けてなど〻强ひて悲觀めいた事ばかりつい書きたい、其くせ思ふ樣筆が運べばこそ、そこで腹が立つはがゆ〻て仕方がない、そしてしまひには何もかもめちや〳〵にまるめて、あたりかまはずなげつけ度い樣な、ぐちとも作り事とも自分乍らわけがわからない、そして可笑いてはないかいろはがるたの中の、ぬかにくぎ



店頭　本郷　鈴木とみ子

とうふにかすがひ、此二つがつい思ひ出される、なぜこんな事をよく思ひ出すだろう？わからない、わからない馬鹿なッ、私はどうかしてるのぢやないかしら、つまらない！――冷えた頬の涙をそつとふいて机に打伏した。

――おゝ今日は日曜だつたに、秀樣の被任る日だもの姉樣もお歸りになると云ふ待ち〳〵日ではないか！私の心はどちらの人を待だろう？どちらもついはついだがほんの少しでも心深く待のはどつちの人たらう、いく度心に問ふてもサア―そうですネーとためらつて居る、でもそつと一口きかして呉とせめて〳〵せめ返したらほんのかすかにひ……ひて……秀樣！と答へて呉れた、ぢやあもしも今日が日曜でなかつたならば？それは〳〵姉樣ぢや!!と强う〳〵いつた、私は思はず紅くなつた、てはかうしては居られない、勢にとび立つてあのやさしいあやめをとつてすいに活けて置いた、そして形式的に針の手を運んだ、……だめだ！もう十時だもの、から遲くなつてなんて秀樣が居被ろうぞ、それでもはがいゝ！心の叫びは高ぶるてないか折から待ちもしない思ひもしない米さんが來た、――例のお琴をさらつて呉れと云つて――もしも此琴の音の合ふ時に秀樣が入らしつたらあゝ私はどうし樣、私はうきた心で彈くのでは露ないのに、……米さんはよろこんで禮をのべて歸つた、もう一時！私は臥つたまゝ泣いた、恨んだえゝまゝよこの心はいつか見せずには置ないから……漸くにして吾に歸つた私はこゝに始めて姉樣をお待しようと氣をもんだ、おゝ私はあの優しい姉樣の御歸宅をばきれいに、といつてはばちがあたるけれどもわすれて居たすまない……と思ふと涙のやる瀬がなかつた、あゝ私は姉さんに充分謝罪つたつもりだ、おゝあのお床のお花を見て來よう……手落のないのに安心して玄關に耳をそばだてた、が車の音はおろか大路通る人もない、チン〳〵〳〵〳〵あらッもう四時！四時には歸着と御手紙には書いてあつたに……折から電報!! ハッ！どうひらいたやらまるで夢中だつた、靑ざめた顏が元へもどると同時、馬鹿なッ！と私は電報をうちなげた――十二三日カヘルムジまあ何といふ腹の立つ日だろう、ほんとに！よくもこう誰もかれも私の美しい心を無にするばかりである、――馬鹿なッ、つまらないーしばし此叫びが連續してやまなかつた。

つまらないと云へばつまらないが此中にうひ〳〵しき處女の情が溢れなくこもつて居る、口語の方面も面白い、（評）

○ありのまゝ

神戸市　岡　靜子

八月一日、おつひたち早々御飯の出來方が不味だと云つて叱られた、おひるからお客樣が入らした、お馳走

の料理は母樣と二人で拵へた。
二日、精出して糊付けや洗濯をして少し疲れたので、二時間ほど晝寢をさせて頂いた、夕方町へ女子文壇を買ひにゆく。
三日、少し頭痛がするのでお仕事を休んだ、とう〳〵ぶら〳〵して日を過した。
四日、昨日の病氣は何處へやら、今日は大そう氣持が宜い、精出して裁縫した、夜になつてやう〳〵、くつろいで机の前へ來ると、私の本の上へ何か紙に包んで置いてある、あけて見ると私の大好きな餡パンが包んであつた。
五日、一番親しい友から玉章を頂いた、うれしかつた早速返事を書いて出した。
六日、八百屋へ副食物を買ひにゆく、歸る途中で友に會つた、しかも二年あまりも逢はなかつた同窓の友に互ひに手を取つて三丁計りあるいた。
七日、お父樣が出張先から歸られた「腹が空いて目がまひさうだ」とおつしやつて――私は早速おむすびを拵らへて出した「コレは〳〵千金を得たよりも猶有難い」と私は此の言葉を深く悟つた。
八日、友達に誘はれて楠公樣へお參りをする、社内の池のお龜に麩を投げ與へると澤山の龜が集まつて來て誠に面白かつた、社内あちこち巡り乍ら過去現在の事を語り合つて心のまゝに樂しく遊んだ。
九日、お肴の料理をして居てあやまつて左の人指ゆびを深く切つた「痛いだらう」と父樣が仰しやる、私は「いゝえそんなに痛くもありません」と云へば「アヽア靜さんは大分豪らく成つたネ」などお父樣はいつまでも私をまだ子供の樣に思つて居らつしやる。
十日、据え風呂に水を汲み入れて置かねばならぬ、今日は私の汲む番だから、水道が遠いので風呂に一ぱいになるまで汲むと中々辛度いから、小言を云ひ〳〵汲みにゆく途中で學校の先生に出會した、其の時きまりが惡かつたので、知らぬ顏をして、うつむいて通つた植木に水をやるのを忘れて夜十時頃に水をやつた、父樣や母樣はよく眠つて入らしつた。

日記の妙味はかうした處に在る、作つて無いのがいくら面白いか知れない（評）

○寂しい日記

本郷　琴聲女

九月十八日。五時起床あゝ今日はお母樣の御命日だ、明日は御父樣の御命日！月は異つても兩親の命日が二日續くなんて？因縁とでもいふのか、朝からこんな事は考へまいと思ふても直ぐ寂しい氣が滿ちて來る。御座敷の掃除も終へ髮を結び、庭へ下りて、美人草を切つた、お佛前へ供へようと思つて。私は若いくせに佛いじりをするのが何より好き、尤も兩親はなし冷か

な兄樣や嫂樣に教育されまだ家庭のあたゝかさといふ事を知らぬ、たゞ亡き兩親が戀しいばかりに佛いじりもするのである、御線香を上げ、飾つてあつた寫眞を抱きしめ〳〵見入つた。思ひは幼かりし過去に返り思はずも聲を忍んで泣いた。ふと人の氣はひがしたので驚いて後を見返つたら兄樣だつた。私は何氣なしに、につこり笑つて何か御用と云ひながら寫眞を元へ返した。兄はじつとくゝり付けの人形見たいにこわい目を見はつて突立つていらつしやつたが、又ふいと茶の間へおはいりになつた。何の御用だつたらう。

あゝ此の頃も又御機嫌が惡い、何が御氣に入らないのか、私丈けには口も聞かぬ、私のひがみでは無い、矢張り嫂さんが告げ口なさるだわ、でも昔はいゝ兄樣だつたあの母樣が御在ての時分は嫂樣もあまりひどい少しぐらいの事は一々兄樣の御耳に入れないでも惡い事があつたら直接にこうしてはならぬ、あゝしてはならぬ。と敎へて下さればいゝのに矢張り義理があるからだわいくら長い年月一所に居るとてどうしたつて兩親の妹とは思つて下さるまい、私は實につまらぬ一番末子て兩親には早く別れるし、女の實の姉妹は一人も無く、考へれば考へるほど寂しい氣が增す、こんな悲しい事ばかり考へてゐるより今日は裁縫も御休みだし短文でも書いて見たい、でも兄樣は何より机に向つて居るのが嫌ひいつもたゞ忙しさうに下女と一所になつてたすきでも掛けて家の中をかけまはつてゐればそれで働いて居るものと思つていらつしやる、嫂樣だつて兄樣の前だけだわ、兄樣のいらつしやらない時は小說も讀むし買喰ひだつてなさる、實にいやな家庭……每日裁縫からの歸途にはあゝ家へかへるのかと思ふと何となしに情けなくなる、每日こんなに兄樣の御機嫌が惡く嫂樣もあまり告口なぞなさるならいよ〳〵例の事を斷行する、こんなに家で皆に氣兼をする事を考れば何それくらいの事、それは親や兄姉の傍には居る樣なわけにはいかない辛いだらう、併し家てはら〳〵氣がねして何から何まで猜疑の目でにらまれ、自分宛の封書まて開封されるし實際情ないと思ふ、幾ら無神經な者だつて多少考へる、私が家を出たからつてまさか兄樣だつていゝ氣持ちはなさるまい、それに多少世間にも知られてゐるし、あゝ成る可くこんな事はしたくない、あゝ頭痛がして來た、何時まで考へたつてつきない、又お小言の出ない內に少しお勝手へでも出ませう、さう〳〵冬子さんの所へ御返事を出さなければ……でもまあ晩にしませう、何も夜になつてから、夜床にはいつたらさん〳〵泣きませう、さう〳〵明日も一日戀しき兩親を思ひ、悲しい寂しい思ひに耽りませう。

實に寂しい日記（評）

○初盆日記

伯耆　佐々木　とさ子

八月十二日。七歳になる妹は去年の暮れゆく秋の淋しい夕暮に此の世を去つた。今年はその初盆と云ふので四つになる末の妹を連れて草市に出ていつた、朝顔、溝萩、桔梗、とり／＼に購めて、草籠に一ぱい、妹に持たせてかへつた。

八月十三日。お母さんと私は、朝の程から佛迎の用意に忙がしく、臺所で迎團子をこさへてゐると、妹が來て「私し小さい姉さんのを大きくこさへて」と雑返しながら、大きなのをこさへて無理やり彼方へ持つていつた、それつきり忙しさにまぎれて忘れてゐたが、暫くしてお母さんと團子を佛壇へお供へにゆくと、妹は大きな團子を一つ位牌の前に供へて、そのまゝ佛壇の前にすや／＼と眠つてゐたお母さんはそれを見て何か思ひ出したやうに眼に涙を浮べてゐられた、嗚呼無邪氣な妹の夢は白い、淡い線香の烟の行方のやうに今は何處をさまよつてゐるだらう、私しも思はず涙が出た。



縁側　青森　松尾千代子

八月十四日。すが〳〵しいお天氣、朝八時頃顔の白い、頭の可愛らしい小僧さんが棚經に來た。

八月十五日、今日は最早佛送りの日となつた、夜十時頃から程近い濱邊へ佛送りに出た、お母さんと私と妹とお向いのお伯母さんと四人。藁で作へた送り船に物の數々を載せて、お燈をつけて波に浮べると、折からの引潮に船はズン〳〵と沖へ沖へ、妹はあれあれとさも、うれしさうに。無心の波は沖へ沖へと引いて行く

淡々しい哀愁に充ちた文字（評）

○團子のまどゐ

神戸市　田中落葉子

臺所の時計が八つなつた。

澁紙の上にひき臼を置いて、それを中に、私と菊が向ひ合ひに座を占めた。笊の洗米を、三合計りざら〳〵と菊が臼に移す。穴へ指の先て、米を落して、一イ二ウ、三イ、て廻しはじめる。ゴロゴロと重味のある音がして、臼の間から眞白な粉がバラバラと落ちはじめた。母樣は、「今日は客分だ」つて向ふの室から見てゐらつしやる、菊が何も構つてくれるから、私は上を向いて「挽いて粉にして」と、團子の唱歌をうたつてゐる。「孃樣も少し本氣におなり下さいましな。」菊の聲におどろいて無暗に力を入れる。白い粉は澤山積つた。私はたゞ廻してゐる計りだけれど。米は全くなくなつた。菊は篩ひをもつて來て、その粉をふるう。荒いのが殘ると、また臼に入れて挽く。全く粉が出來たのでそれを器に入れて、私がねりはじめる。そこらを眞白にする。上手に出來たので、それを手で揉んでまるめた。齋盞上には白い球が行列する。菊はそれを沸してある湯の中へポスン〳〵とはめる。跡を菊にたのんで私は、火の方へ行く。やがて湯氣がたつ。蓋をとるまあこれは〳〵、まるいのがみなういてゐる。菊が走つて來て籠に、ひきあげてくれた。かねて用意の餡と、豆粉を出して、その中へ球を入れると、白いのは化して黄色と、小豆色になる。それを箸で一つ〳〵拭つた膳の上にならべると、色の美しいこと私はうれしくてならぬ。先づ佛樣。それから母樣と、初のをあげた。母樣は「よく出來て居る」と大變おほめ下すつた小さな朱の重箱に入れて、弟隣へもつてゆかす。も一つは叔母の宅これは妹に托た。時計は一時をつげたさあさあみな早くと大きな皿に私が盛る。皆まちかねた顔に出て來てお膳につく弟も妹もかへつて來た菊も座る私も。こゝに樂しい團子のまどゐがひらかれた。

團子の唱歌と云ふのは知らなかつた、私の知つて居る唄ては『うちの姐さん粉な挽きつ眠る、團子喰ふ時ゃ眼が光る』と云ふのです、しかしこれは一生懸命らしいので幸ひ上出來いやう、結構に存じます（評）

○瘤とお小言

備中　篠原しげ子

八月六日、毎日淋しくて困るから今日は一つお隣の妻さんを借りて來て遊ばうと思ひ立つて、行つて頼んだら、さあ〳〵つれて遊んで下さいと悦ばれるので私は妻さんを脊負て小走りに裏に歸つた、くゞり戸を開けて這入るとたんコッンと音がして同時にワッと背中の妻さんが泣き出した、私は吃驚して妻さんを下して抱いた、可愛い妻さんの頭が戸に打たれたのだ。

あゝどうせう〳〵妻ざんの髮をそりたての柔かい頭の右の方に小さい瘤が出た、見る見る間に大きく膨れて來る、こぶ〳〵すつこめ〳〵と私が幾ら手でなでゝ見てもさすつて見てもすぼまない、妻さんは大泣きは止めたけれど未だシク〳〵云つて悲しそうな、私も一緒に泣いた、すぐ母樣を頼んで私と二人隣に行つて斷りを云つた、氣の毒で〳〵つらかつた事はもう一生忘れない。

八月九日、吉原の叔父樣が昨日豊後から歸つたと知せがあつたから、私は遊びに行つた、叔父樣は新聞を見て居られたが、私を見て、おゝよく來たお前によい土産をやる、と柳行李の中から博多の單帶を出して下さつた、藤色の地に秋草の織込があるので嬉しく大に氣に入つた、其から叔母樣と裏の座敷に涼んでると、早や叔父樣は例のお小言が始まつてる、己が居らねば何もかもしまりはつかない、いや築山の掃除が惡いの金魚鉢がどうだのと、頻りに一人椽側に立つてお小言云つて被居る、叔母さんが、まあゝの通りですから、もう歸るとすぐ小言許り云ふのです、其ですから毎年溫泉に行つた留守にはくつろぐのです、あなたのお父樣はちつとも小言云はない方で良いですねえ、と仰有る、其かはり母樣がよく云ひますよ、と私が云ふと、あゝそう其は私方の人と兄妹だから、よく似るものですねえ、と云つて笑はれる、私も非常に笑つた、私はもう歸りたくなつて來て、此頃は休暇だからちつと泊れと云はれるのも聞かずに其晩歸つて終つた。

なか〳〵振るつた日記で面白かつた、しかしひどい事しますねえ、かい頭に瘤なんかこさへて、瘤すつこめ〳〵たつて、すつこむもんですか、冗談ぢや無い……（評）

○賞品

藤澤常盤幸子

九月二日曇。「叔父さん、今月のも出ましたわ」と大に自慢する心算で、女子文壇を持つて、畑づたいに、叔父の家に行つた、叔父は雜誌をチラッと見ると、「七月の賞品は、屆いたらう御見せ、ナニまだ、そら如何だ、お前なぞに賞品がきて、堪るものか。記者に擔がれて、嬉れしがつてる、所謂鼠六疋の部類なのだ。」「まあ酷い其麽事無いは、鼠六疋つて何」「六チユーてえのさ、さもなきや、今に剽窃だと、素ッパ拔れる位が落だ。餘りこれに（天狗の眞似をして）なると、險呑だよ。口惜しかつたら賞品を持つてお出、横濱のお土産は其

時迄お預りだ。」と、皮肉な叔父に、油を取られプン〳〵家へ歸つてきて、堪らなくなつたから、兎に角一つ照會して見やうと文壇社へ端書を出した。

四日、晴。紫のゴム印を捺した葉書一枚舞込む、まあ女子文壇社から。「御手紙拜見――中略、賞品の方は今少しおくれ升故御氣の毒ですがお友達に合せる顏がないなんて、餘り悲觀せずに、もすこし御待ち下さいませ」と御親切に、丁寧な御返事、私は是で澤山賞品は頂かなくつたつて、もう誰にも、馬鹿にされはしない大した味方をえた樣に嬉しくつて、直に叔父の許に飛んで行つて御目に掛けた。「とう〳〵催促したね、お前は賞品が目的で文藝を樂しむのか」つて、一昨日は賞品を見せろ〳〵とさんざ私を困らして、お土産も下さらなかつたのに。「お約束のお土産頂戴」「諸小さいのと云つたから是ならよからう」と一寸にも足らない樣な豆人形を下さる、叔父樣は、飽迄も皮肉だと思つた。

五日曇、母樣に叱られやしないかと、心配しつゝ人形の着物を縫ふ。小豆色秋草の友仙に、緋縮緬の裏が、美しく榮えた。着物をきせる時、ついお豆さんの右手を折つて仕舞て、可愛想で堪らない。嘸慘酷な母さんだと、お豆樣が、恨んでるであらう。お豆さんては名が餘り變手古だから婦美子として、叔父樣の許へ初見參させた、今日から私が婦美子の母樣、だけども父樣がないのよ、叔父樣なつて下さいね「コラッ馬鹿にするな俺には、孫が三人あるぞ」あらまあ、僞ばつかり。鯔の樣な、お鬚を撚ぢりながら孔孟の倫理主義がどうの陽明學がどうしたので、廿八の秋がきてもまだ獨身で被在るくせにと云はうと思うたけど無理に我慢した。

讀み去て不覺破顏、お催促の賞品は既に着きましたろう、知らず右手を折られた人形は今も猶殘酷なる母のもとにおまめてすか、不幸な運命なる哉（評）

○妹の日記

靜岡市　さ　ち　子

九月廿日

お父ちやーん、柿取つてェ、れェ柿取つて。愛坊がシャリに柿なれだつて居る。

「何故お前は急に柿が欲しいんだ、未だ坊りユンピを兩方廣げただけ子ン子しないぢや、澁くつて喰べられないよ」「イヤ〳〵、ツク〳〵チーシが今裏の木て啼いたもの、イヤダ〳〵」「やあ、是れは什うも……。お婆さんは不可ん事を敎へた――」

私は書齋に小さくなつて愛坊がモット〳〵おねだりするやうに兩手を合していいいいいいいいいいいいして拜んだ。

十月五日

今年は兄さんがお留守て柿も蜜柑も澤山喰べられて嬉しいわれ、私と愛坊とお玄關て、こんなお話しをしてゐると、郵便やがハガキを二枚置いて行つた。

「種々の果物は僕の腹へは入らない丈皆のお腹を苛める譯だ、醫者の厄介になると不可んから僕の處へ澤山送つて異れ玉へ」これは兄さんからだ。「最早果物も熟したらうから下村家及び鶴雄へ可成く味好き處を撰抜き澤山送り遣すやう――。」とはお父樣。お母樣に讀んて頂いた、そしてお講釋もして頂いた。私は愛坊と二人、急いて裏の畑へかけて行つた。

和歌

与謝野晶子選



○（天賞）　青森　小野寺みの子

かにかくに來よと云ふをばきゝしかど君が心をしらぬなげきす

○（地賞）　大阪　京谷政野

わがいもと河原撫子つむといひ桃色の袖くさにかくる

○（人賞）　大阪　梅本龍子

みざる日もあへて寂みしと思はざる淡き心を君は知らなく

【秀逸】

○　伊賀　山村龍子

ひそかにも七八度ほど問ひけるに其片端を宣ひて泣く

○　岐阜　日野歌子

女馬子われは都の大道に白駒ひきて秋雨にあふ

○　府下　芳子

紅の花われも一度口吻をなしぬ昔のその昔の日

○規定　別に新派舊派の名稱にかゝはらずと雖も成るべく清新の作を迎ふ一人一首限りにて必ず半紙又は罫紙に認むること一人にて二首以上ある時は沒書とす丙種の賞を送呈す

○　麹町　牧野きみえ

美しき男來りてこの人の手とり袖とりしづ心地なし

○　紀伊　小草女

我怨む人ありてふも毒虫に胸刺されしも夢なればよし

○　龍子

秋の雨涙にすこし眼のふちの腫れしをうつす古鏡かな

○　大阪　山内とめ子

夏の夜や床几の人にうち雜り團扇つかひぬ戀さめし人

○　磯の舎浪江

大方の男子の樣にざれ言は未だいはざる君と知れるに

○　京都　寺井芥子

わが友は雞頭咲ける尼寺に終日經をよむ人となる

○　秋田　石井いし子

我胸はいまだ少しも穢れずと黒き衣かけ君を秘め置く

○　千葉　金井うてな

鐘が鳴る又なる黄泉に一歩づゝ近づく心地枯野を行けば

○ 京都 伊藤ふじ子
大船に積みし寶はなになにぞ此わが胸のたからは何ぞ

○ 美濃 篠田きん子
我君は山をも拔かん猛者なれど我には優し何くれとなく

○ 門司 鈴木靜枝
秋の暮旅立ち給ふ伯母君の切り下げ髮の寒げなるかな

○ 遠江 鈴木小菊女
秋風は野を吹き來り我胸をかすめてゆきぬ兄の御靈か

○ 高岡 みゆき
白き頬に涙流して立ちませる汽車なほ見ゆる秋の夕暮

長野 津金春枝子
燈火は薄れて消えて白菊の香のみ一間に廣ごりにけれ

○ 神戸 阿山とし子
よき色の小傘かざしてうすものゝ人二人ゆく京の街かな

○ 大阪 田畑靜枝
淋しさに里の童をあつめては歌をおしへてうたはして見ぬ

○ 甲斐 網野や子
栗の花の泥にまみれしきたなさを二心もつ君にたとへむ

○ 下關 森ゆり子
物思ふ人の心も慰めてはた悲しさもよびぬ虫の音

○ 小石川 朧汀
何事のかくも悲しく佗びしきと思ひても見ぬ秋雨の夜に

○ 越後 芝武子
秋の野に咲きみだれたる七草をおきても見ばやくれなゐの露

○ 越後 谷靜江
淋しげに萩の花咲く野の徑に心の弱き身をなげくわれ

○ 茨城 須崎せい子
秋の暮紅葉散り來る山寺に一人淋しく歌など書きぬ

○ 春風
文机に頬杖つきて夢の如まだ見ぬ君をおもふ春の夜

○ 呉市 碓井呉竹
百合の花手折てわれは香をかぎぬおんくろ髮と香をくらべつ

○ 下總 小出保花子
幸のとはにえがたき事などを思ひなげきぬ二十の秋に

○ 相州 澤田春子
我胸の戀もる器小くなりぬとく吸はせ君あふれぬ隙に

○ 水戸 越ケ谷くに子
君戀ふる夕のまどにさびしくも秋の雨ふる山もとの家

○ 長野 淺田千代子
古きとを戀ひし心の追分をぬすみぎゝせしにくき兄かな

○ 熊本 秋月澄子
闇の夜の庭をあゆみぬたゞ一人はそき虫の音なつかしみつゝ

○ 三重 吉川澄江
わだつみの風薫る日を欄により遠方見ればこゝろよきかな

○ 日本橋 桃園敏子
戀ひもせぬ人に向ひてことさらにほゝ笑み見する日の寂しさよ

○ 磐城 繁子
亡き母のわすれがたみの三つの子をいだきて寐ぬる秋の雨の夜

○ 臺北 稗貫英津子
いつまでもつれなき人に憧がれて夜も朝もなくわれにかあるらむ

○ 德島 野澤紫水
隣りすむ友のかなづる琴の音に我身なげきぬものをおもへば

○ 横濱 星の花
白菊は王者が笑みて日を仰ぐ姿に咲きぬ十月の朝

○　茨城縣　喜嘉子

只二人むかしがたりをなしつゝもましろき濱の砂地ふむかな

○　岐阜縣　古田連子

秋の雨淋しき夜なりわれしらず君戀ふる歌あまたになりぬ

○　たか子

君と云ふ人を思はぬ日もあらばかばかりむねのくるしからじを

○　徳島縣　四野ひさし

はなやかに笑ひさゞめく白き顔三つ並びくる黄昏の道

○　日暮里　細谷鏡子

秋のくれうすくらがりの道ゆけばたゞ何となく人のこひしき

○　静岡縣　清子

しづみはてぬ君とながめし美しき春の夕日は大わだつみに

○　信濃　秀枝子

若き日のほこりの人の黒髪の一とすぢ落ちぬ初秋の風

○　大阪市　鹿島綾子

餘の言葉をもてしよわき胸刺さんとするを男といふや

○　長野市　山口あつ

赤き星流れぬ今やさびしみに默しゝ我は顔おほひ去ぬ

○　長野　敏子

女郎花萩も尾花もさき榮へて筑摩の野には秋の香の充つ

○　大阪　平尾とき子

はなれ家の琴のしらべの床しさに村雨にすぎし草分け入りぬ

○　山口　酒向とし子

參らする文も書き終へ病む吾は初秋の日の晝も寢るかな

○　東京　飯塚稜威子

杣小家に一夜やどりて飛驒人と柴栗焼きて京を語りぬ

○　美濃　加藤芳子

仇のごと君を讒ずる彼の少女病めりと聞きてうれしきこゝち

○　美濃　ときわ子

月はよし歌ひ給へとのたまへる君の御前にうつむきて居し

○　美濃　淺野里宇子

纜のきれて漂ふ舟のごとわれはたゞよらむ何ものもなし

○　四多摩　三ヶ島よし子

君もまた文のしげきをはゞかりてとだえ給ふやわれと同じく

○　丹後　松本たき子

諸人は秋は悲しと云ひぬれどわれは悲しき秋を知らなく

○　越後　吉田かほる

我爲めに君は斯く迄傷めると想ひ悲しむうき宿世の子

○　兵庫　群子

かなしみの涙かわきてわが胸は雲を出てたる日のごとおぼゆ

○　静岡縣　平岩白菊生

たのみつる君は世になし今ははた誰に語らんこの思ひ出を

○　千葉縣　篠原きん子

夏の朝清く咲きにし朝顔の花にも似たるをさな子の君

○　千葉縣　安井秀子

情ある一人の君に心かけ夕暮毎に戀つもりゆく

○　下總　相川みよ

そよ風や一雨過ぎて木がくれの星の光の涼しき夕

○　みつ

大鳥の翼に眼おほはれて萬里の谷に落ち行く心地

○　本所　武林風子

西の方黄金いろなす雲を見て鸚鵡かたれりゆく春の家

○　淡路　加藤菊子

こと問へど答えもせずに默し居るこのもの云はぬ人をあはれめ

○　牛込　平塚白百合

故もなく涙ながるれ別れこし十日計は夜も晝もなく

○　加賀　勝崎きく子

朝の霧やがてもうすれゆくごとく君をわするゝあさましさかな

○　信濃　川端しげ子

少女子よ汝のくろがみはいくたりの男の子の胸に燃えけりと云ふ

○　信州　若林千代

初秋や我が乘る汽車の犀川のはし渡りゆく朝月夜かな

○ 上總 黒坂一子
ひとひらの雲もうかばぬ武藏野の空にひばりの高くとぶかな
○ 羽後 野の花
つくづくと友忍ぶるゝ此夕ひそかに散りぬ海棠の花
○ 牛込 かへり花
君に合へば山程云はむ事ありと幼子だきし女の云ひぬ
○ 波島 伊東小百合
むかし見し唇ににし紅百合にそと接吻てさびしき夕
○ 麻布 江森美子
あゝ君と手を取りかわし深山路に名知らぬ花をまたつみし日
○ 遠州 富永靜子
涯しなき大海原に漂よへる小舟に似たる少女とおぼせ
○ 長野 はる女
里はづれ文字も消えたる石ぶみにからめるつたの秋の色かな
○ 群馬縣 志美津
あゝ君よ御手とりかわし白雲にのりてゆかなん天の御國に
○ 阿波 西野いさを
七生のうち一度は彼の君のみ手をとるべき幸をたまひれ
○ 東京 藤掛常子
わが口びる君をにくみてかみくだく薔薇のとげに血はほどばしる
○ 藤澤 常盤幸子
甘き言さゝやく子らの舌をみなきりて雀のごとくはなたむ
○ きく
この君にみせまじとする涙なりふかくも園に月はてらざれ
○ 上總 森ふみ
讃人の花にこがるゝ春の日を獨淋しく物思かな
○ 筑後 梧桐知登子
さかづきに戀の酒もりまゐらせむあまりかしこきこの君なれば
○ 麹町 島田夢子
うき事も樂しき事もかたらひし友にわかれし秋の淋しさ
○ 愛知 うめえ

思ふ事さらになけれどふけし夜の月見てなきぬ秋にしあれば
○ 伊賀 山村龍子
何處ばかり別の世としも何事も忘れて戀の話をぞきく
○ 紀伊 槇本千鳥
日に向ふ眩しさならておん目の底の光りに心魅せらる
○ 麻布 花子
戀りきぬ心ばかりか姿までも吾れに笑をたまはるまでに
○ 和泉 金田文子
秋の日や十年も古きこと思ひ今なき人のおほきに泣きぬ
○ 常陸 木村那賀子
恥かしき君とし逢へば我魂はたゞいたづらにぶるひおのゝく
○ 長野 竹内愛湖
君まろで淋しき我を松虫の細き聲もていたましめけり
○ 讃岐 小野定子
わが君は涙に似るかもいちはやく來るとも見ればはやいにてなし
○ 靜岡 波多野いち
うつけたる如き樣して只獨り熱きほこりの中をあゆみぬ
○ 播摩 鉦舟
今日もまた惱み勞れしと訴ふる弱き男をわれにくみ居り
○ 和泉 谷ふじ枝
秋の夜の淋しきまゝに窓開けて月を鏡へ映しても見ぬ
○ 信濃 藤澤里子
あなけうと幾十人の男の子等の日は輝きてわれを射て居ぬ
○ 信州 野中たけ子
露置ける花野の朝をしづしづとくるまして過ぐ秋のもゝ姫
○ 下谷 八の子靜枝
なき母に手向けんものと手折にし萩の小枝に蝶のとまりぬ
○ 福岡 建部眞久子
思はじと希ふ心もあだなれや君が御姿日毎目にうく
○ 遠江 みどり子
おほ神のかざしのみ玉こぼれたる秋の朝野を友とわれゆく

靜岡　鈴木いわ子

○月の夜や物影づたひ君追ひて近きによりてもの云はずきぬ
靜岡　須部たまき

○君が笛胸にひゞきて堪えられず琴はしめりぬ月は曇りぬ
豐後　友永つた子

○或る本ないとなつかしく讀みをへぬわが身の上にあまり似る故
本郷　渡邊喬子

○絵すだれに通ふ夜の風身にしみてなき母しのぶ秋は來にけり
備後　粟陽花

○白百合のそれにも似たる淸きひと戀知り初めて二十になりぬ
本郷　木嶋きみ子

○今告げん今告げんと對ひ居るわがこの心知るや知らずや
紀伊　白蓉子

○わびしさに涙ぐまるる夕ぐれは秋さく薔薇を紅さして見し
函館　山鳩

○忘れむとつとめし君にふとあひて心いためり初秋のまち
大阪　守部君子

○我むれに咲く白うばらさびしとてきみくれなゐの息ふき給ふ
靜岡市　さち子

○我お顔の今宵終ると知りつゝもなほにくからぬこの人やなぞ
長野縣　山本操

○埴の庭に人のなくとし思はるゝ蚯蚓の聲のさびしき夜哉
尾張　梶田久子

○はら〳〵とせきあぐる涙ぬぐひえずいまはの君がみ胸によりぬ
羽後　すみれ子

○相見ては相よろこびぬ相見ざるいく日の胸のおなじつかれに
上毛　小澤卯の花

○何となく只何となく君來ると待つ心有り虫鳴く夕
廣島縣　藤花

○月によりて見入る花野の夕月夜少女はありぬ霧もやの中
埼玉縣　長澤せつ子

○ひや〳〵と秋風の吹く朝にして昔の人をおもひいでたる
高岡　峰月

○草むらに虫としなりて死ぬるまで泣かばと思ふこの月の夜を
石見　千代乃婦

○物語見る心地しぬ薄月夜流れのありて萩さける家
肥前　清子

○くれなゐのしづくぞおつる紅あふひ五月ひと日の小雨する朝
秋田　大山愛子

○わかき身の生命に似たる綠葉の朝の光をわれは喜ぶ
神戸市　岡靜子

○今は唯つれなき君と恨むれど昔たまひし文はにくまず
和歌山　木澤てる子

○さゝがにの糸のすだれのゆらぎては露の玉ちるあかつき月夜
徳島縣　上野浦峰子

○み瞳は我に向ひてうるほひぬゆるせとばかり云はむけはひに
佐渡　長島綠子

○伊豫簾月にさゆらぐ灯の前の欄光りてやゝ青き海
佐渡　中川敏子

○なつかしくかたみに手に手取り交し泣かんとすればさめにける夢
丹後　堀内文子

○今朝見れば君が植ゑたる朝顔のわかむらさきに花咲きにける
釜山　富永清子

○喜もなげき怒も己が手に包みて眠る朝のもや哉
岡山　桐本悦子

○われ君を愛でのさかりに死にゝ鬼このなきがらをあはれみ給へ
常陸　倉田欣子

○兄君よ歸り來ませとぬかつけばおくつきの空雁啼き渡る
四谷　笹原芳江

○化粧室の障子に朝の鳥かげのけざやかにさす三月一日
四谷　咏方てい子

○坑夫たち爆烈彈の傍らに平然として笑ひ興じぬ

茨城　鳳見良子

○野も山も行くべき道の絶ゆる迄亂れて咲きぬ八千草の花
大分　原田浮子

○ほこりてふ毒きものゝ犠牲としてすがりし人は君なりしかも
本郷　望月霞子

○鐘の音に淋しき夢破れはたわびしかるひとりぶしかな
長野縣　丸山峯子

○初秋や眉あげとれば何となくさびしみせまる秋の頃かな
遠江　島花子

○湖帆片帆夕日うすれてゆるやかに繪の如くれぬ松原のをち
神奈川　矢野きみ子

○舟行くや松は吾が里ひんがしの君ある方は夕靄のして
大分縣　一法師八重子

○火を明くせよとしきりに興がりて君わかやかに歌をうたへる
四谷　柳の人

○よく語る男と人は皆云へど我にはおほく語り給はず
土佐　竹島紫子

○濤の音のよきは越後の秋の旅松前節の關山の里
土佐　桃の花

○青春を血に染めたる如き大楓樹草もとに立つ君と見しかな
麹町　紫涙女

○今日もやと化粧して待つ日は積めど君遊びに來ず秋風立ちぬ
小石川　春子

○離れゆゑに妹のこゝろのさわぐらむ知るやと云へどいとどつれなき
弘前　森山つや子

○われ歌ふさやさや秋の風かよふ黑髮なぶる夕ぐれの丘
弘前　川村露子

○やはらかく言ひくる男いとたけく言ひくる男をかしからずや
遠江　小林とし子

○つと胸に響きし音の消え殘れてわなゝき慄ふひとときののち
牛込　本間花一枝子

○亡き友の秘めしすみれの今ありぬ春の日かげに文ひもとけば
越後　佐藤浪子

○朝の海其の想ふ如浪打ちてうかべてありぬうすき星かげ
大阪　藤井まさご

○おもふ事思ふまゝいふ男より云ひ得てかへる心につきぬ
信濃　花子

○今日もふとばらの香嗅ぎて泣かれつゝやがて絶ゆべき戀を思へば
鳥取　文子

○來ん世にはまたも女と生れましゝかはあれども人に見られじ
靜岡　秋楓女史

○ひたひたと潮さす川をかもめどりあし分けかへる夕まぐれかな
平戸　伊知子

○萬物は眠れるかはた天地の神の秘言聞けるか何れ
信濃　松崎よし子

○駒が嶽そのふもとなる里なれど虫の哀れは秋々に知る
沼津　中村松愛女

○あな戀し送りしうたをいちからき少女は人に誇りありける
麻布　石井蘆葵江

○柳陰燈火あはくそとゆるぎたゝずむ人の白きほにてる
神戸　水原みつゝ

○哀愁の思浮べて夢さめぬ蓮の燈籠のさむしき影に
豐後　工藤榮子

○蟬取ると竹ざほ持てる男の兒らのまろき面に青嵐吹く
伯耆　佐々木とき子

○まづたまへ解かむ深みのえもわかぬそれが中なる一の心を
大阪　吉井つる子

○わがしらぬおほかた人のそしるとも吾は忍ばむただ君がため
千葉　よし子

○川ぞひのなでしこかれて虫のなく夕となれば水の音戀し
北海道　千草子

○罌粟ちりぬ薄らに匂ふ月かげに物思ふ子の歩むが如く

○　　　　　　　　埼玉　良子
村時雨桐の一葉にふりそゝぎしかの音遠し秋の夕ぐれ
○　　　　　　　　下野　宮田いち
なくせみもいつか林に聲絶えて世もいつしかに秋とはなりぬ
○　　　　　　　　福岡　仲道靜子
我れやに虫來て鳴きぬ月の夜中逝きにし君の夢さめし時
○　　　　　　　　伊豫　たつた女
ひもとけるふみをいつしか枕にて玉のうてなの姫ともなりぬ
○　　　　　　　　福岡　古賀彌榮子
わが背子よ君にとなりて住ひしてまた初戀の日をばつくらむ
○　　　　　　　　尾張　長尾信子
旅人か黒き頭巾の若者が心の鍵を奪はんとする
○　　　　　　　　常陸　田村波津子
何事も涙の前になしと云ふまことなりせば泣かせませ君
○　　　　　　　　京都　井上晉子
いとあまき酒にしあれど猪口につぎしばしうたがふ性得きわれは
○　　　　　　　　樺太　森　龜代
朝露にもすそぬらして花の園に初秋の日をよろこびぬわれ
○　　　　　　　　府下　中島きよ子
堪られず涙こぼしぬ去り乍ら笑ひ給ふな少女子なれば
○　　　　　　　　能登　近江加能惠
我胸にいと〳〵深き海のあり流れて盡きぬ涙呑むべく
○　　　　　　　　飛驒　眞砂子
處女てふ若きうれしき名を秘めし胸の扉に火矢うちし君
○　　　　　　　　長野　四條宇女子
くれて逝く淋しき秋の心には笛吹く主の噂嬉しき
○　　　　　　　　樺太　とき　わ
とりとめて何かなしきか知られども哀れ身にしむ秋の夕暮
○　　　　　　　　奈良　福島楓水
白露は白銀なせる天の川の岩にくだけて散りしかと思ふ
○　　　　　　　　信濃　紅百合

來む世には眉美しき女と生れ百人の男の心うばはむ
○　　　　　　　　北見　今村りせ
この悶え眠れる稚兒に訴へて一人泣き居ぬ雨細き夜
○　　　　　　　　紀伊　田中富榮子
萩の袷に秋きたりぬかきそへて遠き旅なる君に送りぬ
○　　　　　　　　黒澤とよ子
空のいろ夏めきそめてしろがねの笛ふく音する七月の朝
○　　　　　　　　羽後　三浦ふみえ
ふるさとや蘆の花うく十月の水ひやゝかに馬洗ふ人
○　　　　　　　　上總　黒坂董子
夜と云ふ怪しの者は黒き手をひろげて我に迫るとも見ゆ
○　　　　　　　　上澁谷　藤掛常子
黒みたるまゝに更け行く夜の森の下に一つの家居するわれ
○　　　　　　　　信州　こ　め　子
むつましき二人の中にうたがひの石を投げたるいとにくき魔よ
○　　　　　　　　信濃　寺尾呑子
ある人の亡くなりてより又吾をこひける君と知るがかなしる
○　　　　　　　　大阪　山内溪子
瓦斯の火の青き光りの三階に三味線ひける人をにくみぬ
○　　　　　　　　上澁谷　藤　常子
青草のなかに倒れて眼をとじて戀てふものをうたがひて見ぬ
○　　　　　　　　長野　若林眞佐子
秋の野や露のかゝりてくろみたる草むらに鳴く夕ぐれの虫
○　　　　　　　　大阪　梅本八重子
朝の水汲む少女等の黒髪をうつさ泉の白百合の花
○　　　　　　　　麴町　牧野銀杏廊
風ふこゝといはて別れし夕ぐれの此戀しみは人の知らなく
○　　　　　　　　佐渡　長島綠子
皐月風十九ばかりの水色の衣して立てるたわやめに佳き
○　　　　　　　　牛込　山縣琴子
天つ神戀のみかくも思はざるよろしき胸をわれに授けよ

新論文



○規定　論文と云へどむづかしきことにあらず諸嬢が考へしこと思ひしこと文學上又は一般女子に就いての平易なる論談を歡迎す二十四字詰三十行以内一人一事に限る乙種の賞を送呈す

○何事も善意に解すべし（地賞）

丹後　香菫女

俗に「女は氣が小さい。」と申しますが之れは我々女として誠に恥づべき事であります。元來女子の性質は感情的でありますから少しの刺戟を受けると直ぐ外貌に現はれるのでありますが、其結果わけも無い事にでも、泣いたり、笑つたり、頬を膨らせたりして遂には對者の感情を損ずる事が往々有る樣に考へられます、女の表情は或る程度まで大切で有りますが、要するに愼重の態度に出でねばなりません。

凡て怒る事は何か自己の慾心を滿足させる事の出來ない塲合に生ずる熱烈なる反感でありますから、此の塲合によく反省して、何事も善意を以て解したならば腹の立つものではありませぬ、殊に一家の妻となりますと、家庭内の和合上の舅姑は申すまでもなく媒介者の樣な者で「しゆと」「しゆとめ」下女下男までも又は親族の方々より近隣の人まで交はらねばなりませぬから、少しの刺戟を受けても直ぐ憤怒心を起す樣な事では到底一生を滿足に送る事は出來ませぬ、それ處で無く己れの本務を全ふする事も出來ぬのであります。故に事に當つては自己と對者との眞相をよく考へ、何事も善意に解したならば、憤怒の念は決して起りませぬ、これ一生を愉快に己れの本分を盡す事が出來るのであります。

穩健なる論、老成なる見（評）

○はゞかりの手拭（人賞）

大阪　高山米子

私は何處のお宅へ上りましても、先づ第一にはゞかりの手拭が目につきます、よしや室の隅々に塵一本なくとも、庭に箒目正しく打水がしてありましても、只一筋此の手拭が鼠色でしたなら、まあどんなに不快を感

じますてせう。こう云ふお宅に限つて、臺所の流し下が乱雑てあつたり、紙屑籠があふれさうに成つたりして居ります。いくら清水て清めましても、あとてふく手拭がじめ〳〵して居りましたら、何の役にも立ず返つて不潔を増す様なものては御座いませんか。皆様は毎朝必ずランプ掃除か、或はお髪をお上げになりますてせう、其の後て石鹸をお用ひに成る時、一寸此の手拭をしかえて洗つてお置き遊ばせ！お宅の方々がどんなにかお喜びなさるてせう。初めの中こそ面倒にも思へますが、習慣に成つて仕舞へば、返つて洗ひませんと心持が悪うございます。



書見　三重縣　川原みさほ

お宅に因りますと、はゞかりの手拭は使ひ古しをお用ひになりますが、私は大不賛成てあります、日々幾度となく使用するのてすから、最も地質のよいものを撰びませんと、ぢきに損じて仕舞ひます、てすから品の良いのを少なくも五筋か六筋程きめて置きまして順々につかひますと、衛生にもかなひますし、且又經濟にも成りますから、私の經驗を申上げて、敢て皆様にお勸めい

たします。

有益な具體的好論文、尤も女性の筆に適つて居ます（評）

【秀　逸】

○讀書の趣味

野の花

日本の婦人は一體讀書力に乏しいやうに思はれます、即「讀書の趣味」といふものを、持つて居ないやうです。一小部分の人は別として、一方皆様方の御話をきいてましても、つまらない人の噂や衣服髪飾り等のことで持ちきつて、文學藝術其他我身の修養上のことの様な御話は殆どないといつてもよい位です。心ある人に聞かれましたら實に恥づかしい事じやないでせうか、かくて自分から品格をさげてしまいます、改まつた席へ出ますともう何の御話も出來ないで、窮窟な思ひをせねばなりません、ですから世の人に日本の婦人は話せないものだと價値をきめられてをるのです、もし常に讀書をしてますと、第一に智識が豊富になり隨つて、どんな時でも御話の材料がつきませんから、決して恥かしい事もなく窮窟な思ひもせず快く御話しして、御互有益にすごされませう。

更に此讀書をもて一つの娯樂としたいものです、娯樂にもいろ／＼ありますが之は物質上のものと異つて、食べて居る中から工合がわるくなるやうな事はございません。讀んでる中にいよ／＼面白くなつて、高尚なつきぬ慰藉となる者は人生恐らくこの讀書の趣味、之より外に何もなからうと思ひます。どうか私共の様な若い中から讀書の趣味を高めて、日本婦人の欠點たる處を補ひたいと思ひます、かく申ますと「とても暇がなくて、等と被仰いませうが、それは暇がないのでなくて、暇があつても成さらないのでなからうかと存じます、諺にも「勤勉なる婦人はよく暇をつくる」とか申ますから時間を利用しましたら一寸の時間位は優につくり得られませう。

皆様よ！どうかこういう御考へて讀書の趣味を高め、日本婦人の欠點を補ふと共に、つきぬ慰藉を得て時勢におくれない處の婦人とならうぢやありませんか。

珍らしき論議ではないが、有益です、筆づかひも殆んど完璧です（評）

○融通のきく人間

滋賀縣　磨　志　緒

私の知人にかういふ人があります、幼い時から非常に勉强して今では近所に肩を並べる者がないといふ程になりました、處が、どういふ物か此人は何所へお嫁にいつても、一年か一年餘りで自分で歸つたのか離縁されたのか知りませんが歸つて了ふのです、私は不思議でなりませんでした、あれだけ學問がお有りなさるし

御氣質も、なか〳〵優しく、どこに一點雜のうち所もない方が何故三度も四度も此樣な病になるのかと、いつも思つて居りました、或時私が舊師を尋ねて、いろ〳〵話の後「兄弟が少ない上に私の身が弱いのと其上父が昔質氣で女學校だけ卒業すれば充分だ女は餘り勉强するものでないと常に申しますので志して居るだけの學問も出來ませず殘念です」と申しますと先生は、そうだらう東京へでも遊學して女ながらも社會に出て立派に立働ける人間になりたいだらう、と仰つて下さると思ひの外「いや女は、もう貴女位で充分だ、あまり學問をすると理屈計りの人間になつて、家庭を作つても家風にあはん、否合す事が出來ん、つまり融通が利かぬのぢや、丁度家の建方と同じ事だ何所に一分のすきもない地面に、きちつと、くつついた家は强い風が吹くとすぐたほれる然しすきを作つて、そくと何風が吹いても吹いて初めて地面に、つくのだから、なか〳〵たほれぬ」と仰しやいました私も初めて前の不幸な婦人の事がわかりまして何うぞ融通の利く人間になりたいと思ひました。

半面の眞理はあらうが緻案として充分でありませぬ、學問なして理屈を云ふは學問の爲めでは無く其人の性格が生意氣なからでありましよう、それを思はずして直ちに女に學問は禁物と云ふのはあまりに保守的の考へではありますまいか、頭のあると云ふを必ずしも融通の利くとては無く、融通の利くと決して絶大の幸福とも限りません、論じて充分ならぬと思ひます（評）

○寶わけ

福島市　齋藤田鶴子

ぶるなの笠、らしいの杖、あゝ何といふよい寶でせう。忘れもしない、十三の春、愛せられた師の君から、片身として、戴いた、この無形の寶。私は、この笠を、頭に頂だき、この杖にすがつて靜かに、此の世を、送りたいと共に、親しい諸孃にも、お裾わけして、共に〳〵たのしみたいと思ひます。この寶は、世の凡ての事に、用ひて、非常に、効能がありますが、殊更心の圓滿でない不平病などは、たちどころに全快します、しかし、長くなりますから、女についてのみ、一言申しのべます。一體今の女の方を、昔に比較しますと、昔の方が、私は、女らしく、凡てに從順で、よく父母夫に仕へて、忠實な方が、多かつたやうに考へます。そりやあ、今だつて、ずゐぶん、昔に劣らない方も、おありでせうが、ほんとに、途方もない、男女同權とか、參政權を得たいとかつて、口角泡を飛ばして、演ずる女學生連が、多くなつたのですからね。こんな病氣に、おかゝりの方は、よろしく、私の捧ぐる、この寶を、服用して健康體になつて下さい。幸に、病に冒かされぬ方々も、上を見ては、限りない世をぶるなの笠ま深にかむつて忍び、たゞ足もとに心して、つまづかぬやうに、らしいの杖にすがりつゝ、どこまでも、女の美德として、あふがる、從順貞操の道を守り、

昔のやうに盲目的でなく、而かも、二十世紀の、空氣の滿ち充ちた精神に、清い〳〵滿月を宿して、ゆめ不平の雨など、降らせずに、たのしく、嬉さうではありませんか。あゝ、ほんとに「女ぶらずに、女らしくせよ」とはなんと、よい教訓では、ありませんか。

私は過日、旅行しました時、汽車中或る女學生が、多數の人の中で、冷笑されるのも知らずに、堂々たる有髯男子を、相手どつて、肩をいからし、女ぶつて、女權擴張の議論を吐いてるのを見て、汗顏に堪へませんでした。幸に、趣味を同じうする諸孃にして、この實の、意義を解し得、價値を知り得て、服膺せられるお方がありましたら、私は、無上の誇です。

ぶるなの笠らしいの杖、はひとり女と云はず、誰に取つても結構な寶てせう、それは結構ですが、此論文たゞ昔しの樣な從順な女となれと云ふ樣にも見えるし、又「昔の女のやうに盲目的でなく云々」とあるのを見ると、新らしき自覺も必要とするらしい、そこに新舊過渡時代の苦悶煩悶があり、一方に男子の壓制から解放さるべく女權擴張等の議論も出るのだらうと思はれます、いづれも道理があらうと思ひますが、此文今少し其邊詳しく論じて欲しかつたと思ひます（評）

○感じたそのまゝを

京都市　井上登子

二十五日の夕北野天滿宮へ參詣しました。あまり澤山の人なので、足を踏まれたり押されたりしますので、道を外れて燈籠の傍らに暫し佇んで見てゐますと、かうころと勢ひよく參つて來られる澤山の人の中で、御神前まで行かれず、途中で立ち止まつて、人に押されつゝも手を拍つて一寸拜んで、引き返へす人もありました。また甚だしいのに至りますと、もう歸らうか、の言葉を交換して、拜みもしないでさつさと出て行つて、見世物や、駄菓子屋、玩具屋等の中へ身を隱くしてしまふ方もありました。

私はつく〴〵思ひました。途中でたゞ形式に拜まれた方や、拜みもしないで歸つた方等は、たとひ美髯を有してゐらしても、パナマ帽子を被つてゐらしても、將た丸髷でも庇髮でも、悉く常識のないあはれな人間だらう……と

彼れ等の目には、その御門前に大きい字で、「皇族下乘」とまで書いた札の立ててあるのが見えないのでせうか、それともその腦裏には、神樣は尊いものであるといふ觀念は毫もないのでせうか　私はその了解に苦しむのです。それは中には、心だに誠の道にかなひなば、祈らずとても神や守らん、の古歌を氣取つてゐらつしやる方もあるかも知りませんが、あんな樣子では、心だに誠の道にかなつてゐるやうには思はれません。

これはひとり天滿宮だけではありません。名にしおふ御社のお祭りにさへ、この種の人を見受けます。

昔から日本は神國であるといつてゐるではありませんか。そして神樣のお祐けのあつた戰爭も度々ある位ですもの、も少し神樣を尊び、且つ敬ふやうな心を養つて欲しいものです。

貴嬢の信仰はいかにも一應御尤な見てありますがそれを以て直ちに敬神の態度を缺くとも云へますまい、宗教心も進み理性も發達した人は、さう云ふお宮の前に形式的な稽首禮拜なんかしないかも知れません、殊に當節のお宮には此文にもある通り、見世物やおもちや屋の店で充ちた俗惡なものが多いてはありませんか、要するに敬神と云ふのはさうしたものぢやない、更に一等を願ひたいものです。（評）

○盆栽について

堺市 なでしこ

自然界の物を動物植物鑛物の三種に區別する事も出來ます、そして其の中で鑛物を除いた外の二つは理學者等が生物と稱して生命を有してゐるものとして扱つてゐます、それで私はかういふ事を考へました。

動物だから虐待してはいかぬ植物だからしてもよいといふ理はなからうと——同じく生命を有してゐるものとして考へますと——、

世の中には動物を虐待する事を何とも思はぬ人もありますが、植物を虐待する事を何とも否名譽の樣に思つてゐる方が澤山あります、動物は虐待しますと悲鳴を擧げたりその外哀し相な動作をしますから人として憐愍の心のある人は誰もその動作に同情を寄せると共にその人を憎みます。またこんな行をするのは主に下等社會の人達ですから誰もそんな眞似をしたくはありません、けれども立派にそだてさへすれば二間も三間も延びて立派な材木となる松や杉の苗木を小さな鉢に植ゑ込んで廣がらうとする根も廣げさせず、枝とても少し大きくなつて上に延び樣とすると曲げてわざと横に延ばしたり、針金で縛つたり、甚だしいのは鋏で切つたりして當人勿論誰一人この植物に同情する人はありません、のみならず反つて「熱心になさいますな此の枝振りは宜しいですな」などゝ賞める方もあります、植物は虐待しても悲鳴を擧げませぬ憐れみの心が起らないと最う一つはそれをする人は大抵上流か中流の人達ですから世の人は反つて宜い事の樣に思つてゐます。こんなにして植えた松や杉よりも自然のみ手に育てられて山に育つた松や杉の方がなんぼ私達にいゝ感じを與へるかしれません、私はこんな事は自然に對してある罪を犯してゐるのではないかと思ひます、同じく鉢植にするなら、朝顔の樣なその鉢の中で十分に成長の出來るものを植ゑたらばと思ひます。

至言至理、論者の深き同情も見えます、しかし此主張を擴張すると遂には自己の生存が觸になつて了ふのですからあまり嚴しい論も吐けなくなる。大觀すると、かう云ふのは要するに若き日の感想て、そんな事よりも人間が一番大切なものを虐待して居るのが氣がついて來るのです（評）

○こてふ樣の白粉論を讀むで

花

こてふ樣は白粉を以て婦人が自ら欺くと仰てすが、私

ば御同意を致す事が出來ません、世の中の事を左樣に極端に解釋して來たならば、婦人が兩髮よ丸髷よと種々似合の格好に苦心結髮するのも、矢張り天然の美を助長せしむべく施す手段てはありませんか、此議論に從ひますれば、此結髮も時間を費し、元結や油を消費するから、是をしも全廢して、油氣なき髮を只クル〳〵と卷き付けて置かなければならぬ理屈となります。斯くなつたら世の中は如何に乾燥無味になるてしようか、抑々婦人の天職は何かと申すに、社會の融和機關たる美的元素に外ならぬのてす、婦人あつて始めて平和も保たれるのてす、其婦人が如斯實利的に走り、殺風景極まる風采てあつたなら、丸て世は枯木の林と同樣、何を以て異性を慰め得らるてしようか、斯く論じたなら如何にも、自ら玩弄物に甘んじて居る樣思はれるか知りませんが、そうてはないのてす。卽はち、人といふ字を御覽なさい、兩性もたれ合ひて、始めて人生を形造るとの意義てす、去れば男子が飽く迄强者たる情狀態度に依て婦人を保護します、其報酬として婦人が肉體の美精神の美を發輝し、男子に慰安を與へるのは義務だと思ひます、其精神の美を發輝すべく、修養が必要なると同時に、肉體の美をも發揚すべく、白粉を用ひ化粧するのは、敢て批難すべきてないと考へます。但し精神の美は措いて只容色を以てのみ生命とする遊女輩の如く、過度に化粧三昧に消光するのは、絕對に不同意てすが、總ての婦人が家事の寸隙に、每朝手早く薄化粧して奧床しく容姿を繕ふのは、むしろ社會に對する禮儀だと私は思ひます。

條理の通つた筆致を以て優るもの（評）

○白粉に就いて

長野　女郎花

九月號、本誌新論文の中『白粉に就いて』、と云ふこふさんの御說、私は其の御質素なる御心がけに深く感心致しました、誠容儀さへ正しくして見苦しからぬ樣に致したならわざと白粉など付ける必要はありませんでしよう、然し評にも有ます樣に、俳優、藝妓の外は白粉など付ける必要の無いと云ふのは、ちと私共の頭には、分り兼ね升、恐多くも高貴の御方々の日常御使用遊す品ては有りませんか、其れを氣が知れぬの無用だなぞとは、餘りに出すぎはせんかと、私には思はれます。

扨、私共におきましても時と場合に依ては、どうしても此れを缺く事の出來ない事が有らうと思ひます。

凡そ世の中て美と云ふ事を好まぬ人は有りませうか、別に自分を欺て美人に見せると云ふのてなくても、自

分に對する人に心持を惡くさせんため、また失禮にあたらぬ爲に、白粉を付けると云ふのでは無いかと思はれます、私が或時祝儀の席へ呼れまして來た時、とある立派な御婦人が、目もさめんばかりの御召物にて御顔は赤黒い樣子、素顔のまゝ、平氣な風にて御席へすう〳〵と出て御いで遊した時には、誰一人其方へ目を付けぬ人は有ませんでした。私はそれも、他のしとやかな奥樣方に競べて失禮な、餘りな動作ではなきかと思ひましたが、されば一がいに無用だなどとは、私には申されません、然しこの樣な心がけを以てすべての事を。つゝしんだなら何程か國家の爲に成るだらう、と私は思ひます。



釣り　麻布　津川ふみ子

前號所載こてふ氏の「白粉論」に就いて異論の來たもの十五六篇に上りました、一々載せることが、出來ませんから其中一二を出します、大抵同じ樣でした、まづは妥當な見かたかと思ひます（郎）

○お孃樣の足

大分縣　本田一枝子

私は所謂深窓にお育ちになつたお孃樣方の連中が、今に達磨にならねばいゝがと心配でなりません、試に御

寛あそばせ、宅に居てお召しの着換は勿論化粧水まで、そら、下女だ女中だとお使ひ遊ばす、遠方に行くのは猶更隣に行くのも汽車だ電車だいや俥だとお乗り遊ばすと云ふた有様です。

水中に棲んで居る獸の足は、退化して短くなつて居る、之は長い足が必要ないからでせう、太古には人間にも大きな尾が、ぶら〳〵と垂れて居たと云ふが、今は無くなつて尾骨丈が殘つて居る、是赤尾の必要を感じなくなつたからでせう。

不用なお孃樣方の足……否使はぬ者は不用に近い。此の世は實によくできた者で、用のない者は漸々減退して來らねばならぬ、不用に近いお孃樣方の足が、此有樣で行けば五十年百年二百年とだん〳〵短くなつて、終にはだるまさまになるだらう思ひます。

是れはちつと厳びしい議論ではありますが、四肢の發達を怠ることは嫌ひだと思ひます、それを思へばかう云ふ痛罵も面白いです、どうです足弱のお孃樣方!!!（評）

○本誌投書家の皆樣へ

土佐　秋澤花涙

私が本誌を讀んでたへず心もとなく思ふのは投書家の皆樣が規定を重んぜられぬ事てす、こう申す私も早そうですが、それはお互に御注意しあつて、是非本誌の規定は守る樣に致したいものです。

まことに規定には外れやすいもので、今かりに短文を作りました處て、七行以內に定めてあるのに八行にも九行にもなるのです、そうするとそれは最早いけないはづてすのに、何一二行ぐらゐはと勝手な心からして投書するのです。

記者樣はそれを何のお咎もなく、折角苦心して、作つたのだから沒書にするも不憫と思召して、誌上に載せて下さるのです、その有難いお心も察しないでそれをよい事とし、規定違えと知りつゝ平氣で投書する方がまゝあるのです、これは誠に悲しむべき事です。

ねえ皆樣こんな事では第一記者樣に對して、すみますまい、記者樣は私等を信用せられ、規定を守るべき事は最早心得て居るだらうと、默して居らるゝ其のお心に對して實にお恥かしい事でありませんか、又これは本誌の體面にもかゝるのです、見玉へや、男子の方の投書雜誌には一人として規定にそむく者がないのではありませんか。

皆樣男子の方が行はれるのに女子が行はれんのは實に殘念ではありませんか、女子の恥辱ではありませんか、ねえ皆樣こんな事は記者の御注意を受ける迄もなく、お互に謹みあつて本誌の美風を永久に薫らさうてはありませんか、否キットそうなくてはなりません、これ私等投書家の本誌に對する、責任なんてす。

記者の言はんと欲する所を代て云つて下すつたやうなものです、せい〳〵さう願ひたいものです（評）



○規定　詩歌的情緒を口語を以て綴るべし形式は問はず凡て自由なり所謂口語詩の類にても可なり二十九行以内にて凡て振假名を要す賞は乙種

○夢のくちづけ（天賞）

東京　夕ほし

玻璃窓を漂ふ綠の香に醉ふ女の心は、眞晝の風にゆら〜〜動く鞦韆に乘つたそれのやうな心地だ。
と何だか二の腕に物が觸つた……やうだ、右の手を上げながら振り向くと、男が立つてゐる。
つと女の頰へ口づけした。
冷たかつた笑つてゐる「もつと」
祈るやうな願ふやうな女の目
男はまた續けて三度口づけした
矢張り冷たかつた、女は物足りない。
「もつともつと強く」とそゝられるやうに叫んだ、「きつと？」男は問ひ返した「エ、どんなに赤い血が啜ひ出されてあなたの胸に入るまで」
女は狂はしく呼吸をする「ぢや！」
男は矢庭に火のやうな唇を震へる女の頰へ吸ひ付いた「あッそんなに……………」
夢中で、男の手を握つた。
男は一層、力を入れた。
「ああ、あ、放して………」

烈しいから採る、外には何も言はない方が好い（評）

○板（地賞）

金澤　むらさき女

日當りのよい庭で大工が板を削つてゐる。厚い板だ。氣に入らぬのか幾度も〜〜削りなほす。だん〜〜薄くなつて少しの力でもかけたら、すぐ折れる位になつた。私は其傍でじつと見てゐる。鉋屑があたり一面に散つた。……と私はいつの間にか鉋屑に埋もれてしまひさう！吃驚して撥のけ樣とするけど妙に重くて力が足らぬ。……大工はまだ一生懸命に削つてゐる——。

一寸考へさせる作だ、散文詩とは斯んな形式を云ふのであるが、內容がもう少し充實してゐれば申分はない（評）

○破壞（人賞）

神戸市　田中落葉子

目を閉ぢる靜かだ——靜かだ——
これでも晝かしらと思ふ
けれど私の魂計りは非常に騷いで居る
湖水の底の樣な室の中で——
瞑つて居た目は無意識にひらく
と何も見えない——何も——

赤い燃える樣なインクと
青い淋しい色のインクとが
一時に目に入つた。
熱々と見つめて居る赤―青―
私の心と俊さんの心とを並べた樣
何だか氣が變になつて二つの瓶を
窓から屋根に投げつけた―カチン―
―
二つとも破れて黒い汁が流れる、
いやだあゝいやだ黒い色
心は破れた。

女子の作品は大抵室内の描寫が多い、境遇が然うだから已むを得ないと思ふ、此等は室内の心持でも、よほど烈しく溢れてゐる力だから、詩の心持に同化し得られる（評）

【秀逸】

○霧がたつ

播州　さゝ舟

霧がたつ
ぼーつとしてわからない
少し明るい方に若い女の姿が見えた。
向ふをむいてゐる、
何してゐるのかわからない、
派手な浴衣を着てゐるやうだ、
黒い髮がくづれかゝつてる。
誰かに似てる姿だと思ふけれど、
一向思ひ出せない。古い記憶をたどつてみるけれど……
まだぢつと動かない。
一體何してるんだらう、わからない
だん〳〵霧がこめてゆく、と女の姿はかくれてしまつた。
魔のような
深い〳〵霧は
とー〳〵彼女の魂も肉も
呑んでしまつたんだらう。

斯う云ふ作も好い、型にはまりさうだけれど面白い（評）

○病院の印象

相模　若きそんな

濁み色にどんよりと、
低いくもゝ、
蒸暑い空氣、
ぼんやり、夕暮の窓によると、
云ひしらぬ不安が、
身體にまとひつく。
黯んだ森、
澱んだ河、
あらゆる生の努力は魔醉して居る、
風も疲れて居る―――其中に、
赤い壁の病院が、
懶さうにへつたり座つてる、
何といふ暗い吐息、
目をつぶると
青い顏の白衣の看護婦が……
病人の囈言が……
四角な繃臺、護謨の手袋
さまざまにこんぐらかつて……
重い頭は依然
抑へつけられるやうに痛い
空はどんより曇つて居る。

今の口語詩そつくりだ、眞似だけれど先づ好

い（評）

○夜の雲　芝　やゑ子

薄く光る夜の空の下に夜の町は默つて沈んで居る。

その東の方形の家の眞上に縮髮の、亂れたやうな雲が一かたまり。眞黑なあらゆる光を吸ひ盡した如き、見瀆めると。——

その雲と、その空との、うつすらした淡い境劃線が、明るくなつて——くつきりなつて——眞白に輝いた。

雲は黑い。緣は光る。雲の向ふの半面を想ふ。

冥想好の少女獨り。默つて屋根で見て居る。胸の内に秘めた情の迸しつたやうな眼光て——。

僅ながらも作者の情緒の動いてゐるのは嬉しい（評）

○穴　熱海　木村綾野

或暮方神社の後に一つの穴を見出した。

穴は細いが餘程深いらしい、

底はまつくらだ。

陰濕な闇の香がする、

私は思つた（何の爲の穴か誰が堀たのか、人の力で堀つたものか）

耳を傾けてみた。

何か囁いてゐるやうに思つて……

闇の忍び音、精靈の私語、遠音にひく心地——神經かしら？いや何ともわからぬ音がしかも絶え〴〵に微かに——あゝ望なき穴——光り無き穴——大きなおほきな秘密をかくしてゐる。

私の靈は秘密をさぐらうとしてゐる。あゝ又私語……が。

穴——だけは要領を得ない、わざとらしくて眞實に遠い（評）

○濁流　信濃　紫影

今日も私は野をあるいた

何の爲か自分にもわからない

あたりは次第に夕暮の色がせまつてくる。

ふと聞ゆる河の響

千曲川の邊だ

黑く濁つた水がぐる〳〵まはりながら

凄い音を立てて流れて行く

岸に白く月見草が開いて居た

つと取つてなげて見る

やはりぐる〳〵まはる

美しい花瓣はだん〳〵ちぎれて

いつか見えなくなつてしまつた

作者に告ぐ、削除の分は餘計なことだ、散文詩は餘計な說明や、くだらぬわきみちへ入ることが禁物（評）

○蜘蛛　越後　佐藤溟子

夕まぐれ、大空は綿をいつぱいに擴げた如。

土藏の廂と松の枝へ巣を懸け始めたんだらう、蜘蛛が彼方此方頻りと動く、でも糸は一寸も見えはしない、けれどヂッと見て居ると面白い、いつか心も輕くなつた、——、スーッと飛んで

きた黑い影がパッタリとまつた、と思ふ間に蘇掻き出した、すると蜘蛛はチヨロ／＼はい寄つて其影を包んで終つた、「食はれるんだな」と思つたら戰慄とした姿の心はまた、何者かゞ來て攫ふて終つた、沈んで行く、底へ底へ、——蜘蛛は小早く片隅へ寄つて縮つた、殘された黑い者は幽かに動く、見まいと瞳を地に落した。

○裸銀杏　四谷　柳の人

葉が落ちる、
銀杏の葉が落ちる、——靜かに、
一片、又一片、
ハラ／＼落ちる
黃くなつて、

風が吹く、
パツと一度に葉が落ちる
ヒラ／＼と舞ひ上つて、
二三度、クル／＼廻つて、
又靜に落ちる。

鳩が啼く、
プレーンチーブな聲て、
繪馬堂に、
別れた鳩が、只一羽。

「御前にも今に、
こうした滅亡の日が來るのだよ」
銀杏が語つて居る。

又風が吹く。
落ちた枯葉が一所になつて
地上を走つて居る、

○淋しさ　備中　紅蕊微

淋しい
ほんとに淋しい
何故姿はかう淋しいのだらう
秋が來たから？
でもない
何故今年ばかりかう淋しい？
ぢつと柱に凭つてあてどもなく視つめた、
淚が止め度なく溢れる、
あゝその淚
何の淚
針の手止めて母さまは
何故と眉を寄せられた、
けれど私は答へなかつた、
想は絕えず何者かを追ふて行く、
あゝ其何者かゞ私の淋しさを解くか知ら、
幻のやうな何者
あゝやはり淋しい、

○夜のおばしま　こすもす

夜のとばりはようしやなく四方を立て込めた。見ると白い顏の細長い女が欄干によりかゝつて居る、
欄干は今にもくづれ相だ、
女は段々前へのめつて行く、
あゝ……と思ふ間にくづれてしまつた、
と女も梢もぐる／＼と廻り始めた、
靜に／＼廻つて居たが段々急になつてはては見えなくなつてしまつた、
はつと思つて見たら女は依然として立つて居る、女は深い／＼ため息を一つした、
又一つ又一つ、
あゝ彼女は其ため息の一つ毎に身をきざまれて行くのではあるまいか。

○朝顏　大阪府　寺部君子

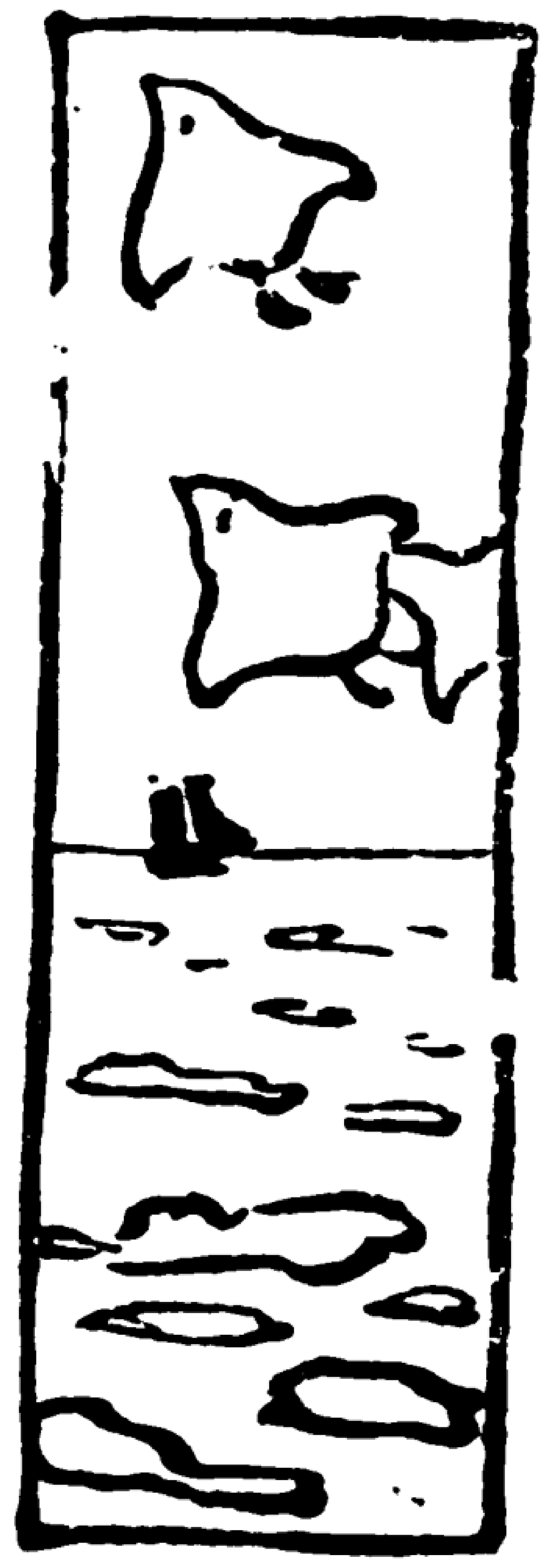
今朝は珍らしく、五鉢とも朝顏が咲いた。其中大輪の一鉢が怎麼仕た物か、尖がかたく縫れて旣う日も高いのに未だ咲き兼ねて居る。ほんのりと濃紫が見えて居るのに。外の花は皆心地好げに、ひら／＼と少さい瓣に咲いて居る。咲かれぬ花の心を思ひ遣て、そつと手で開かすと、花片が二所切れて、ペロンと成つた。其を他の花が笑ふて居る樣に思はれて、皆なつんで遣らうかと思つた。

○頰が燃える　信濃　東條しう子

頰が燃える、自分の頰が
何か云はふとすれば、もう云いつまつて、直に頰が熱してくる
對ひあつてる人は、たえず——わたしを、睨視して居るようてどうしても頭を上げる事ができない。——
あゝあゝ——
頰は增す／＼熱してくる——其れは火の中のきはめて熱い火を自分が枕にして居る樣に——
目がくらむ、惱が痛む——

短文

中村文學士選



○規定　短くして氣の利いた文章を募る十六字詰七行以内凡て振假名つきハガキは許さず一人一章に限ること賞は丙種を送呈す

○暗鬪（天賞）

小石川　ぎん子

今の一言、見事胸を貫いた、サツと變たお顔色をホヽと輕い笑で巧に隱して妙樣は默つて了つた、「可憐想に其樣に苛めて」と何も知らぬ清樣が優しく私をお睨みなさると芳樣も「いゝわ餘り仲がよすぎるんですもの」と笑つていらつしやる。私と妙樣は小學校から此四年迄いつも同級でお休み時間にも離れた事はないけれど。

扨て最後の勝利者は？

○柿（地賞）

信濃　東條しう子

猿の樣にはい上がつて行つた弟は、峯の三ツ股になつて、居るところへちやんと腰をすえて――ぢろりと一見みまはし、さて其の白羽は一番手近に赤く熟して居た、柿の實に立つた。

いたづら小僧の面目躍如たり。

○私の思（人賞）

金澤　むらさき女

戀！私は此樣な悠長な事の出來る身分か。私は大い責任を持てる身ではないか。それに……エヽ自覺した、冷淡なと自ら誇つてゐた私が、あの昨日の胸の高鳴り樣は何だ。情けないじやないか！と私の意志は強く責めます……けどあゝどうしませう。

困りましたれ、

【秀逸】

○ばら

加賀　勝崎菊子

少女子は、垣に咲いて居る白いばらの花を、罪もないのに、取つてははなびらをむしり、取つてはむしりして、雪が降るのだとチラ〳〵と散らして嬉んで居る。噫、彼少女も私等のやうになつて始めて、花の運命を知るのであらう……。

言味ふべし。

○黒い蝶

讃岐　田中まさ子

何所からか黒い大きな蝶がとんで來て今を盛りと開て居る想夫蘭の花に止まつたそして其毒々しい口づけを仕樣と仕た風がそよそよと吹て花がゆれたがやがて蝶は思ふ樣甘き物を吸てしまふと又新しのを探すべくとんで行た想夫蘭は首をぐつたりとた

れた、妾の心は暗くなつた。

意味深長

○障子の穴　岡山　おや子

病める身は、天井、襖障子と終日眺めて居るのだから倦きて／＼たまらぬ。障子は穴が三ッ有る、これが七夕の三ッ星の様に思はれてならぬ、天の川を想像してズーッと線を畫く、一枚の障子では足らない、二枚かける、凝つと見ると、人の顔が三つ並むで居るその首の下に、着物を繪がく、障子の紙のシワを合せて、今度は犬になつた。

床上の悶々察すべし

○壓殺　遠江　鈴木こぎく女

私は何欄讀むとなく文壇を繰つた憐れ!!!一羽の蛾が壓殺されピッタリ、紙に張付いてゐる……不斗自己の運命に就いて考へた、自分も此の蛾と同様に、僞りの灯に誘はれて—捕へられて—果は両方から壓殺されるのだ……とこんなこと考へたらもう—心細くつて堪まらない。

着眼面白し。

○あし音　小石川　つゆ草

コーロギが微に！夕暮のぞめきは嘘の様な靜けさ。柳町の方から近づくまゝに高く成る下駄の響が手に取る様。此度は御門の鈴が鳴るだらう、此次こそと針の手止めては耳を澄ませた。必と契つた人は御ざいませんけれど、只何と無く……

はてなぜでせう？

○暴風雨の前　三重縣　吉川浪江

真黒な雲は、むら／＼と空を覆うて、西に向うて走る。じつとりとした、重くるしい空氣は、そよとも動かず、息ぐるしい潮の香は、ひし／＼と肌に迫る。海は只、どう／＼と絶えず、高いわめきの音を立てる。私の胸には、いひ知らぬ不安の念が閃めいた。

世の終末の様です、

○月夜　本郷　千とせ

民様と此の森で別れた晩も丁度今夜の如な明月で有つた、其時は木の葉が生ひ茂つて居たのでお顔さへ定かには見えなかつたが、月は三度満ちて雁の聲さへ淋しい今宵、瞭明りと自分の影が地に寫つた、吁此の影の見える間は民様に會ふ事は出來ぬのか。

お氣の毒様、

○蠶　信濃　紅百合

手一杯に掴むだ桑をパラパラと振撒くと、さわさわと頭を振つて待ち兼ねた様に喰べ初める、是れを地球上に齷齪して居る人間だとすると私はそれに一日の糧を與へる慈悲の女神—等氣取つた事考へてると兄様が「美代はハイカッた手付で桑をやるなあ」て。

女神を氣取た身ぶりが見えるやう。

○矛盾　熊本　秋月亞子

小さい時分、お茶碗をお茶てすゝいだ、私を、叱つた父は、今、コップを御酒てすゝいて、呑んて居ます。淺學ながら、小學校に教鞭を取つて居る私は、決して、こんな矛盾した事を云ふまい、と、自ら行ひを愼んてゐます。

何時までもこの決意てお進みなさい、

○看護　赤穂　森中千鈴

枕元の豆ランプがチーと悲しくなく、置時計の秒針が鈍く、秋の夜の寂寥を貫いて、破れた胸を徇もく〳〵と掻拔るのてある、ア、かつては人に羨まれたまひしお顏も紫の唇今や閉ぢなんとしてたゞかすかにうなづきたまふのみ。窓外には白衣せし死の神の待ち居るかとばかり、

風おぞつと身に泌みろ。

○野の露　臺北　稗貫みつ子

雲の色怪しうたそがれて幽冥の空を凝といつまでもいつまでも見つめさうしてやうやく一二點の星の影を見出す頃、萩亂るゝ野末に打ち伏して思ひのまゝ冷たい冷たい白露の香を吸うてみたいものてす。

およしなさい、冷たい心になつてしまひますから。



未來の大將　青森　立花とも子

○朝顏　秋田縣　良子

大方枯蔓になつたので最うお仕舞かと引いて見ると、疎な青葉の蔭に明朝咲くのは猶三ツ、オ、命短い此の朝顏、今このまゝ咲かずにとられたら……とふとはかない少女の運命を追想して、私はもとの樣に絡ませた。

よい御心掛け！

○雨後　山形縣　鈴木とゝ

一頻り降つた雨は美しく晴れ沖の白帆に虹がかかつて七色の半弓は美の神の手にはりつめられた、庭竹の下には二三匹の小蛙が可愛い、眼を光らし庭面を掩つてる松の枝からは水晶の樣な雫がポタリ〳〵おちてゐる、往來の百姓は「よい雨だ」と語つて行つた。

自然の美

○お磯さん　甲斐　綱野やす子

芋蟲や胡麻蟲を袂に一ぱい入れて、私を追い歩いたのは十年前のお磯さんだつた。十年後の今日橋の袂で不圖逢つた、見すぼらしい姿に、やせおとろへた背の子を氣にしながら、うつむきがちの目に涙を浮べつゝ話されたのもお磯さんだつた。

感慨無量、

○山里　四多摩　三ヶ島よし

あちらの山腹に一つ、こちらの谷に二つ、赤い灯がついて、足元から始めて蟲の聲、銀河が前の嶺から家の屋根へ架かつて滿天の星が一時に瞬するのだらう、電光、ああ月はなくともこの夕稻田のはてしない地が思はれる。

佳

○何でもないよ　栃木縣　細井つる子

老杉古松高く聳え、四邊鬼氣然として、時々明月が隱見する「ねいさん何！あれは」小聲に弟が。見ると黒い動めきが微かに。息を懲らして徐に歩む。突然弟は石を投付けた「ねいさん何でもないや」私はホッと太息して「何でもないよ」

あなたの筆が面白い。

○秋　牛　平塚白百合

木犀の香が靜かに輕くたゞよつて蟲のねむさうなうなり聲が何處からともなく聞えてくる。唯靑々と無意味に生へてゐた草に花や實が結ばつて、だれた頭がどこかしまつて來たやうだ。やつぱり秋は一番よい。

同感、

○夕暮　筑後　柴田百枝

オレンヂ色をしてゐた西の空も、大安寺の鐘の音と共に、次第に消えてきた、釣瓶の、はねぎ臺には、烟に似た烏瓜の花が淡い夢のやうに笑み出した、稻田から落ちる水の音が鈴を振るやうに響いてくる、倒れかゝつた垣根には、鈴虫が、しきりに鳴いてゐる。

烏瓜の花の形容がいゝ

○母娘　安藝　手島まさ子

桃栗は三年柿は八年、柚子さへ九年て實になるものを、最早十八の指折る娘どうしてそう子供でしようと母樣のお小言、聞かし乍ら聞きながら尙ほ遊ばせ度遊び度のです、噫いつ此のお小言が絶る樣に成るだらうと母娘一處に思ひますの。

もう程なく願が協ひませう

○サシワタ　沖繩　かれ子

私が尋常科たしか二學年の時だつたと思ひますが初て夢の字を敎はられて先生が皆さん夢と云ふ字はサ四ワタと覺えてお出でなさい」とお仰た事がありました、それが今でざつ

と七八年も立て居りますが今でも夢の字を書きます時はすぐ思はず知らずサ四ワタと獨出に浮んで幼かつた小學時代を偲ばせます。

面白い敎方です、

○夫婦喧嘩

秋田縣　園　子

「行け」「行かぬ」これでもか」コンと敲く音、續いてワツと女の泣聲、障子を漏れて奥の方から聞えてくる、オヤ又始つたなと私は聞き兼て仲裁に行く内ふと思つた、二人連落ちて我家にかけ込んだ當座はそれは憎い程よかつたあの中、想の内にかうとは…… 好運は泣運？やつぱりそうだなと。

○豊　年

呉市　碓井　呉竹

野路行けば垂穂の稍は、黄金の波を打寄て、豊かにみのつて居る、雀は嘻きながら、稍の上を飛んでをる、丁度白波の上を、千鳥が飛んで居る様に。村の露場は、ほく／＼喜んでをる、若人は今年も、豊年踊を踊らうと、言つて居た。

○私の希望

のぼる子

見渡す限青々とした廣い原、此の中に清らかな小川は絶ずサラ／＼と流て居る、其邊に大きくもない小さくもない家を立てゝ、ヴヒヤノヴアイオリン等の樂器を具て置て、私の最も愛する妹と只二人で氣樂に此の世を送つて見たい、これが私の希望です。

○今度ばかり

長野市　西條宇女子

マアーあんな方がと思ふ人でもお白粉をおつけになると見違へる程お美しくなる、自分だつて此れてもつければ――、イヤ／＼容姿の美よりも心の美、かくして今日まで白粉は一度もつけし事はないが、どう化粧今度ばかりは、つけずとも蜍ける工夫はないかしら。

○お化粧

樺太　と　き　わ

鏡臺の前に坐ると變白粉のローズの香今朝までも頭に額にしたゝか殘つて居るまづ辭直しをして髪搔てふわりと鬢の毛を搔くと小波寄つた様な緑の黒髪に櫛の跡がつく毛筋棒の先でそつと膨らますといゝ格好の鬢になる白粉をつけて紅を點じて、合せ鏡をして見るとふつくりした桃割がパツと對つて白い衿足がくつきり目に立つ。

○影

備中　篠原しげ子

今宵は滿月だ、私の影が一つは濃く小さく地に映り、一つは大きく薄くぼんやりと倉の白壁一ぱいに映て居る、ザアー――と吹いて來る北風にプツとランプの光を取られた、途端、プーンとガスの臭氣が眠に鼻を打つた、私の大きい影は消えて了つて小さい影のみ一つ殘つた。

○晝　寢

熊本市　武田　ふみ

横になつて居たがつい眠むつて仕舞つた、驚いて起きると姉様と弟と母様迄がころげてお笑ひになる、腹が立つてたまらない、ぶつ／＼云ふと、姉様が鏡をお見せになる、思はずふき出した、私は下女になつて居るのです、餘りの事に弟をにらむと又笑ひ出した。

○悟　り

麻　布　き　み　子

柔かい光に包まれて居る様な心持て、私は、戀の、如何に美しい事であるかを想像してゐたが、一度現實に觸れてみた私……こと／＼く空想であつたことをつく／＼悟つた。

これから自分は淋しい、暗い闇を、永遠に辿らなければならぬ、

○初　秋

大阪府　寺部きみ子

煩さかつた蟬の聲も聞えぬ様に成ては、何と無く寂い。毎日も騒々しい雀の鳴き聲が妙に沈着いて靜に聞える。遠い／＼地の底で啼て居る様なこほろぎの音が折々聞える、早や何處かで、早稻田の鳴子が鳴て居る。

○初秋の朝

牛込　塚原けん子

寢起の儘私は、赤や紫が美しく咲いてゐる朝顔の傍によつた。折柄曙方の柔風がスーと肌涼しく吹いて來るせぎの岸を雛が二三羽騒ぎ乍ら歩いてゐる。向ふの稻田の中に雀脅し銃聲が響いて、其の四邊から雀がパツと粉の様に舞ひ上つた。

うす赤く染つた霧の中を朱塗の盆の様なお日様が縫ふて東天へ上る。

○紙一枚

和泉　金田香樂子

紙一枚を下女の清やに與たなれば鼻取となり、狄に下光ちやんに與へたなれば消背紙となり、さつたなれば半分を和歌に半分を短文の投書用紙となす。若し入選したなれば……現今の大

家に繋ぎ付けられると幾圓の價。一枚の紙にも大差ある哉

○まゝ子　　溢江　波多野いち

「親を馬鹿て言たな此の餓鬼……」えいとに突立て、四寸許を、六ッ許りの男の子の面上目掛て投げ付た、此凄じい勢に「御免なさい、御免なさい」と土間に手をついて泣きながら謝つてる子のいぢらしさ。聞けば貰の子ぢやないとやら。

○送火　　牛込　さかえ

お庭の小松が枝に懸つてた、消い七月十五夜の月は、今盤に入りました。妾は一束の藁を門邊に持ち出して、火を附けて、手を合せました。「お母様、此の煙に乘つて、お歸りなさい。而うしてまた來年……」妹は泣きました。空には、星がまたゝいて居るのであります。

○幹ちやん　　京成　宮迫ろしふ子

幹ちやんは、うんこ、するとき母様に抱ひてもらつて、ーンノ〳〵といつて下さると母様がいつたつて私のうんては出ないから默つていらつちやい、と云ふ一人て出來もしない癖に生意氣なつて、父様と母様とは顏見合はして一せいに笑はれた。

○我が家　　土佐　山口　薫子

空の澄み切たとき、展開せる、我が家の裏へ出ると、芙蓉峰は少しお化粧して、屹然として聳てゐます、其の下に横濱、横須賀、眞帆のゆきかへする東京灣が見え、更に南方を瞬望すれば、伊豆の天城や鹿野の山更に北に轉ずれば筑波の山、稻波は前方數町にたゝへてゐます。

○豊年　　東京　飯塚稜威子

夕照が赤々と、鉾杉の天邊へ輝てる鎭守の森から、馬鹿囃子の鼓や笛の音が眼に聞える、村の若衆や娘達は揃の服裝に赤襷掛て、豐年ぢや萬作ぢやと熊踊て狂ふとてあろう、千町田の黃金の浪を戰がせてる稻穗から、群雀がパッと飛立つた。

○染ぬきたい　　大阪　平尾とき

帶をしませうと思ひオリーブ地縞の散らし模樣の博多に打合す積りて空色縮子を拾ひろげ不圖庭を見ると眞白の夕顏が是見よかしに咲てゐるあゝよき模樣ポカンと染めぬきたい、なろうものならそのままを。

○秋の朝　　美濃　古田遷子

朝起きて見ればまあ好いお天氣だこと顏でもあらはうと、井戸に近づけば池の面にさし出たる柿の枝に止りたる百舌鳥、きゝとにげ行くとたんドブンと水けむりをたてた、あらまあ柿を一つ落した。

○片栗の花　　横濱　星の花

片栗は不幸な花てす、可憐の花てす、定めし人間の偏頗を恨んてゐる事てせう、私は片栗の二字を見ればまづこの花の不幸を思ひ、そしてひどく其を可愛がつた亡妹を思ひ、更に樂しかつた昔の春を思ひ、更に〳〵不幸の今の身を思ふて小さい胸が一杯になります。

○ながし舟　　長野縣　浅田千代子

私しの笹舟には籾を十粒程、京様のには草の實を入れて、さつと流れに浮べました。京様のはずん〳〵先へ私しのはどうも沈まうと許り…若し沈んだならば、京様とは永遠になど、淋しい思ひを抱いて、ぼんやり見送つて居るのです。

○秋の印象　　岩代　藤　玲

裁縫にも飽きて、ぢつと青い空を見つめて居ると、白い雲が、ぽーつ、ぽーつと浮いて來ました。さは〳〵と風に木の枝がゆれて、お隣の桐の葉が、バサリと庭に落ちた。あつと思ふ瞬間、私は、逝く夏と共に、深く深く胸に刻まれました……秋の印象を。

○學士の奧様　　兵庫縣　竹　梨女

學士の奧様それが何？お隣の小母さんいつも來て自分の娘の事ばかり、正當の結婚ても無いのに、胸がわくわくする、云つてやろうかしら？小母さん娘が大變な功てもした様に思つていらつしやる、そう女學校もろくにいつて居ない人がなれたんだからいくらかは……。

○法螺の聲　　紀伊　白蕣子

私の方ては魚を滿載した舟が掛聲男しう浦に着くと、事務所ては商人を呼び集むる爲に法螺貝を吹鳴らす。而も此法螺が盛に吹かるゝ丈それ丈浦が賑ふので浦の賑ふのは町の、町の賑ふのは郡のといふ風に考へて、祭りますと何時も此法螺の聲を喜と希望と趣味とを以て聽て居りま

す、

○峠路　本所　木幡きみ子

山の横腹をウチ／＼と廻た、赤土の熱い入日に照らされて、白く見える峠路を夫婦連れの旅樂師が派手な姿して、囃ぎ乍ら通て行く、白い雲や、鼠色の鳶がフタリ／＼と、山の連らなつてる間を縫ふて、風は僅かに葛の葉を搖してゐた。

○七夕　筑後　靜子

姉さん一寸見て頂戴な、……と裏から。隣の絹ちやんなので、急ぎ行つて見ると、「芋の葉の露を硯の水として、青ながしたる七夕のふみ、」まあ絹ちやん立派に出來ました事つて、褒ると、少しは書ける樣に成ましたれ、御陰てと子を思ふ親心。……何時に無い叔母樣の笑顏。

○鈴虫　備中　紅薔薇

毎朝鈴虫に餌をやるのが私の役目。斯して隆くと私が夕飯のお仕度する頃から。それはそれはいゝ聲て啼出す、夜に入つて讀書に飽いた頃も、色々の想に亂れて寢られぬ夜半までもリーンリーンつて優しい聲て。鈴虫は何を訴へてるのでせう？。

○秋風　淺草　酒井ふく子

鈴なりになつて居る柿の實に、今にも、こぼれそうな露が、太陽の光をおびて、宛らルビーのようてあります。今秋は、椽側の柱に身をよせて、ぢつと、見つめて居るのてございます、折から、さつと吹いてきた秋風に、何やらほゝへ冷たいものが、おちました。オヤ雨か知らと、聞きましたら、それは、ルビーが美しく散つてこぼれたのでありました。

○同窓會　上毛　千代子

村の小學校へ今年の八月初めて女子同窓會が開かれた三年振て同窓の友に逢ふのだから滋々語らうと思つて行つたら意外――默まつて互ひに人の頭から足の先等計り見下してる。

○夕雲　神戸市　興靜子

私は、じつと涼み臺に腰をかけて、夕雲を見て居ますと、赤い雲が黄になつたり叉灰色になつたりするかと思ふと直ぐ琥珀の如な色になる。赤瑪瑙のやうにも變る、夕方の景色程變化の早いものはありません、私は人の心も彼の樣に變つて行くのてはないかと感じました。

○坂路　四谷　柳の人

エンヤラホイドッコイシヨ、と掛聲男しく、親子三人の農夫が一寸計りの霜柱を踏みながら、荷車を引いて坂路を上つて行く、父は前に、母は後に五ッ計りの子供が半纏に包まれて、襟卷を頭から冠ぶり赤い頰に水鼻垂らして、車の上に乘つて居る。三人の吐き出す息が後の方へ、白く消へて行く。

○氣質　釜山　富永清子

例へば、束髮の櫛にしても、未だ、誰もしらない中に、自分一人して、廣く流行さすのは、大好きてす。が誰も彼もした揚句を、眞似るのは、大々嫌てす。然し、人が厭いて來て、ポツ／＼捨たり初めた時に、さして復興さすのは、流行さすのより より好きてす。

○ねざめ　越後　ふく子

留し夕燒の雲美しう、澄せた大空も今は、一點の曇りもなく蒼み渡つて遠い郡と思ふあたりに星一ッ、淡く顏を出して居た、近い垣根には夏をたぐられた儚の朝顏に弱々しい蝶が二ッ、冷たい夢を結んで居る――と足下に、コロ／＼が泣き出した。

○母樣　神戸市　田中落葉子

私の母は、御飯を頂く時に、「まづい」、とても申しますと、大變叱ります。そして「甘く頂かれない」、と申しますと「それは、わるい事だれ」と氣の毒さうに、いひます。

○悲しき別れ　名古屋　秋闇

「じや姉さんどうしてもお實家へお歸りになるの？母樣は何故あんなに邪慳てせう、云ひも終らて「勿體ない皆私がわるいの、けれど園ちやんわ、私悲しくつて……」いぢらしの鵺姉妹ひしと抱き合つ今宵限の別れを惜しむ樣のいとも哀れなるよ。

○午後　本所　木幡きみ子

悪闘つて悪闘つた坊は乳を咬へた儘睡てしまつた。そうと手枕を引く、胸を合せて蚊帳を掛けやる、振り返り乍ら忍足に茶の間に行た、乳母は針を持た儘睡て居る、戯縫に懸ろうとするとひよつと眼を醒まして極り惡るそうに顏を見上げた、臺所の大皷が頓りと鳴つてた。

俳句

内藤鳴雪選



○規定　同じ材料で二度以上使へば陳腐になるとか剽窃になるとか言ふ人もあるが餘計な心配である前の人と異つて他に轉換して活用して居れば幾度同じ材料を使つても差支たい（鳴雪）一人一句限賞丙稿

○（天賞）

鼻毛ぬけば涙出てけり秋の暮　東京　藤掛常子

○（地賞）

遠山の小春見て掃く二階かな　千葉　宇井花月

○（人賞）

明月や障子に草の影五尺　三重　川原みさを

【秀逸】

衣そゝぐたらいに滿てり春の水　和歌山　木澤てる子

水藝の美人涼しく燭を剪る　島根　夏子

秋雨に倦みし女や戸を下す　播磨　笹舟

琴断れて徒らに我が夜ぞ長き　名古屋　桝尾よし子

月わびていさゝ小川に米あらふ　石川　かずの

秋の蝶佛の顔をかすめ飛ぶ　京橋　國分さゆり

古寺の雨騒がしき落葉かな　水戸　和地小波

來ぬ人を待つほの浦のおどりかな　長崎　堤にち子

名月や松に光るは蜘蛛の糸　廣島　横谷素女

河下に霧晴れて舟のつゞく見ゆ　神戸　田代一惠

小雨降る夕闇に啼く蛙かな　藤澤　鳥居俊子

秋風や里の子守の何唄ふ　下總　小出保花子

馬もなき厩舎に鳴くや轡虫　相州　澤田春子

なか〳〵に夏瘦の君うつくしき　水戸　越ヶ谷くに子

月の下に塔の高さや渡り鳥　赤穗　令子

朝顔のはるまで咲くや秋の雨　德島　野澤紫水

大屋根に猫の叫びや秋の風　横濱　星の花

名月や松の下なる笛の音　山形縣　鈴木とく

月あかり畑の中にて打つ砧　尾張　まさ

秋の雨今日も閉ぢたり峠茶屋　京都　天野春子

木枯に一葉殘らぬ柳かな　京都　伊藤ふじ

顔あらふ水に霧立つ晨かな　岐阜縣　古田蓮子

秋風に木の葉の如きちどりかな　紫水

愛らしき野菊の花やかんざしに　山口縣　宮原たか子

柿の木に柿のみ赤し空屋敷　靜岡縣　清子

松茸の名所は近し乳母の里　千葉　金井うてな

獸ありや月にほゝ笑む尼法師　東京　飯塚稜威子

草喰て月に嘶く二才駒　美濃　ときわ子

籠の蟲啼きつゝ人に賣られけり　美濃　篠田欣子

大寺の堂静なり虫の聲　美濃　加藤芳子

靜の月處々の砧かな　大阪市　山内渓子

逃池に魚狗鳴いて秋に入る　大阪市　京谷政野

女子文壇俳句

電燈の靑き光りや秋の波　尾張　廣瀨かなえ
萩咲いて鈴虫聞きぬ乳母が家　茨城　初澤さく子
虫を聞くろうたき尼や萩の庵　山城　木の花
夏の夕舟に寢て聞くほとゝぎす　下総　相川みよ
たそがれて急ぐ河路の野菊かな　兵庫　祥子
はぎの風障子はゆれて虫のこゑ　加賀　勝崎きく子
草刈の少女が呉れぬ百合の花　府下　芳子
秋草に滋賀は幾夜の虫の聲　岩代　波流子
穗折々かざす子もある月見かな　群馬縣　良子
宿直衆の醉たき顔や夜寒し　阿波　西野いさな
島千鳥僧都の袖を掠め飛ぶ　千葉縣　鶴岡一枝子
鳴く虫や文かき終へて夜は更けぬ　森婦美
よき雨や野山洗うてけふの月　遠江　大林あさ子
露深やこゝにも飛べる秋の蝶　秋田　花女
古びたる盃ゆかし菊の花　秋田　豆子
我が垣に卯の花さきて風も吹く　渡島　伊東小百合
紡績の笛がみな鳴るあつさ哉　伊勢　朝野子
秋の雨ねむたくなりし机哉　信濃　若林眞佐子
大水のひきたるあとや朝の虫　信濃　東條文江子
姉妹のはだし參りや初時雨　上総　黒坂邦子
山門や月見て怒る大仁王　門司市　鈴木靜枝
ころもがへ君に遲れしうらみかな　牛込區　木間花枝子
鬼灯や誰が手すさびのくゝり猿　下野　矢澤志毛子
老の身の虫籠も編む秋初め　紀伊　榎本千鳥
露冷々秋とゝのひて初月夜　三春　橋本ふさ子
髮洗ふ里の女や月明かり　靜岡　杉山よう
寢にもどる竹は都なり雀の子　靜岡縣　池田くに子
星祭果敢なき戀もある夜哉　備中　小見山春子
いつも見る山の景色も秋のくれ　麻布　花子
初秋の空遠く行くつばめ哉　常陸　水村那賀子
時雨るゝや石垣殘る奥の院　奈良縣　中富よしみ

秋風に迷ふて來たり蝶一とつ　長野縣　竹内愛子
秋雨に草の庵の灯影かな　讃岐　小野定子
蟲の香や物なつかしき秋日和　横須賀　齋藤松代子
恐ろしき雲に鳴くなり不如歸　遠江　鈴木小ぎく女
秋風や古都の夕を吹き荒む　靜岡　波多野いち
鐘ちぎれ〳〵風月夜かな　紀州　白蕣子
一陣の朝風に秋を知る日哉　鳥取縣　松浦春江子
名月に絲なげてけり酒の醉ひ　長崎　蝴越ふゆの
芭蕉葉に又雨を聞く寢覺め哉　山口縣　河村靜子
手いれして淋しうしたり秋の松　信濃　藤澤さと子
朝寒や白雲の上に山か見る　長野　丸山榮枝子
夏のあした初見參の小侍　埼玉縣　長澤せつ子
初汐に江を上る舟の勢ひかな　名古屋　月女
都出て虫なく里に入りにけり　遠江　みどり子
磯岩に遊び出る蟹や朝寒み　靜岡　須部たまき
赤蜻蛉黑蜻蛉水石をうつ　豐後　友永つた子
秋雨や琵琶の人に物問はん　近江　大角うた子
天の川其石は皆圓からん　越後　藤原汶黒子
秋晴れて菊咲く寺に遊びけり　本郷　渡邊香子
雨晴れて月片割れぬ畝の上　岐阜縣　日野歌子
關越えて稻妻多き夜となりぬ　石見　あせん
笠ぬぎて紅葉の下に別れけり　神戸市　田中落葉子
別莊や雨戸とざして萩の花　德島縣　上野浦ふて子
爐に寄れば猫も寄り來る今朝の冬　讃岐　福家ますゑ
霧晴るゝ大佐渡颯し鳴子ひく　佐渡　長島綠子
紫陽花や海も見ゆなる山の茶屋　佐渡　中川啟子
朝顔に妹が手入の絞りかな　丹後　竪内文子
こけの上に紅茸はえぬ杉の木　大阪　寺部君子
宮城野は虫の啼いてぞあけにける　仙臺市　古川廣子
添へ竹を力に雨の小萩かな　茨城　中田ちん
虫の音もいつかやみけり小夜時雨　新潟　長谷川咲子

餘　興



○規定　毎號課題を出して諸嬢の餘興に供す十六字詰十行迄一人一章に限丙種の賞を送呈すべし新題は欄末にあり見落す勿れ

病　氣（課題）

○主婦の心得（天賞）

京城　富迫ろしう

隣りの奥樣は十一を頭に五人の子供を一人の手で育てゝいらつしやいます先日中の二人が間食か何かで下痢を起されましたら早速腰湯して、すつかり腹部を温め、自ら藥を調へていらつしやいましたが翌朝は二人共元氣で飛び廻つていらつしやいました。つい昨日も末子の方が、發熱したといつて、濕布で胸を卷いて熱を取つて居られました、一家の主婦として、母として、一通り諸病に對する應急の手當を心得て居るのは非常によい事だと感じました。

女子たるものは誰しも心得て置いてよい

○寄宿舍の病氣（地賞）

四谷　石田則子

昨夜寢冷えしたせいか、頭がふらふらして氣分が惡い。舍監にお屆して學校を休み、二階の寢室に入つた。ふと氣がついて、此間母樣から送つて下すつた紫雪を行李から出して呑む。何とは無しに心細くなつて來て、淚が止めど無く頰を傳はる。机の引出しから、御兩親や弟妹の寫眞を出して、抱いて床に入つた。授業始めの鐘が、澄んだ氣を通して、遠く迄遠く迄漂ふて行く。ガラス戶から天を見ると、一片の雲も無い。

最も眞面目なるもの

○お豆が食べたい（人賞）

神奈川　鈴木いく子

今から丁度一週間前の金曜日、私と同じ級のすみ子さんが、國語の點取があるのに、病氣だといつて、お休みになつた、私たちは、御氣の毒に思つて、點取がすんでから、御見舞に行つたら、かたい豆を食べて居らつしやつた、私たちは驚ろいてどうしたの、と問いたら、お豆が、食べたい爲めのずる休みとおつしやつた。

これは眞面目てないが矢張一部の女子を代表してゐる

【秀　逸】

○寢　言

埼玉縣　青　葉　女

同級の宮さんが、私は寢言を言ふてし方がない一寸氣にさわつた事なんか有るとすぐ寢言に言ふのよつて悲しがつた、いつぞや日光へ遠足に行つた時も瀧へとびこむのだと言ふて體までゆすらしたとやらて、隣りに寢て居た人が、僳へ

たと言つて話した、私はそれを考へる度、今どうして居らつしやるだろう今でも寢言を言ふかしらなほす工風はないかしらと、氣の毒でく〳〵涙を落します。

○桔梗の花

茨城縣　初澤さく子

なんだか白い霧のやうなものがフハ〳〵してゐる、家の色も搖れて見える、とそれがだん〳〵見えなくなつて仕舞ふ、さくさんさくさんとなつかしい聲がする、私は驚いて目を開いた、枕許に姉の芳枝さんと看護婦がのぞいてゐる、從家の桔梗の花が美くしく生けられてある、白いのは看護婦だつたと思ふ。

○腹が立つ

愛知　佐分華影

金の樣な銀の樣な長い光る物が、あゝ欲しい雖然私をくゝる紐ぢやないか知らずん〳〵此方へ來る樣な、現から醒めた光る物と見たのは少し開けてある障子から秋の日がさし込んで入るのお天の川の樣に壁に、枕頭に立てゝある屛風て私なのけ物にされた樣な　又しみが鬼の顏の樣、てにらんで居ると　下女が朝飯を間に來たうるさい何ても好いのに、　寢た振りする、どさ〳〵と來て大きな聲て縦になつて了ふ病人に関かなく共皆がちや寃にして居る樣な　腹の立つ事ばかり又妹が走つて居る

○鳥

麹町　紫涙子

忠雄はひどい惡戯をしてはいつも　お母樣を泣かせた。其お母樣が肋膜で枕が上らなくなつた時の事、　忠雄はいつもの元氣なく茫然と枕下に座つて庭を見てゐるとどつからか　鳥が飛んで來て公孫樹の頂上へとまつた、　それを見た忠雄は俄かに大きな聲て軍歌をやり出したので　姉が臺所へつれて行つて小言を云ふと「だつてお母樣は鳥の鳴き聲が嫌いなんだもの……」といつた。

○氣づかひ

信濃　野中たけ子

先日妾は腸の具合が惡くて寢ました。　腹がひたゝるくて居て、　お母樣が、　牛乳は……卵は……氣は……カステラは……と自分の好きな物を枕邊へならべて下さいましたが　食ひたくないのです。　そして妾が死んだなら……と思ひ、　もう死んて仕舞うのては　なかろうかと思はれて悲しくて寂しくてしようがありません。　一寸弟や妹が風邪て寢ても死ぬ樣に　思はれて悲しく寂しいのです。

○星も落ちよ！

尾張　鈴江子

妙に怒りたくなる。　阿母樣がやさしくあゝ斯ふ仰言つて下さるのにも反抗して拗れて見たくなります。　後から思ふとお氣の毒て泪が出ます。　お友達の手紙を見ても、　何だか勝ち誇つて嘲つていらしやる樣な氣がして　引き裂いて終ふ事もあります。　天も碎けて星も落ちて、　人と言ふ人皆死んだ時私も死にたい。　とこんな事を思ふ。

○定期病

北海道　千草子

秋も深い、　或る日曜でした、友の貞子樣の許へ遊びに參りましたら折り惡しく、　御不快で、　御寢て戯居るので、　お見舞を申上たら「腰がしびれて成りません」　淋しい笑みて下腹を抑へて戯居るのでお暇まのおり、　お玄關の處て下女の松さんが見えたので、「御病名は」と尋れますと「何に御心配遊すな孃樣は定期病ですよ」　と頰笑まれたても私は當時、　如何考へても解かりませんてしたが間なく翌年初めて、　其の理を解する樣に成りました。

○百合の森

阿波　西野いさを

どうせ癒らぬ私の胸の病氣。　孃さんなられば生きたい生きてゐたい。　すべき事が澤山ある。　けれど灰色の霧は次第に私を包んで若々しい色を吸うて行く。　寧そ花の中て死に度い。　好きな白百合を森の樣につくつて、　白衣を着て坐つて、　心ゆくばかり泣いて笑つて歌つて、　そして精腔の鮮血を一度吐いて　白衣も白百合も皆唐紅ゐに染めて死にたい。——

○妹

牛込　平塚白百合

胸がいたむので何といふ事もなく　床がはなれらない。　もう彼れこれ半年になる。　方々から頂いたお菓子や何か山のやうに　枕元にあるけれど、　手が出やうともしない。　時に妹がくると、　姉さん私病氣になつてこんなに澤山のお菓子をたべて見たいわ。　ポツ〳〵小さい口で平げてゆく。

○病中旅行

常陸　木村那賀子

此春肺を病んだ時、　三日三晩殆んど昏睡狀態にありました、　其時今迄新聞や雜誌で讀んで見た、　倫敦や巴里や伯林等、　それは〳〵にぎやか

な外國の都を、極めてハッキリと旅行しました四日目の朝正氣付くと、急に身體が疲勞し、其所此所が痛み出して、動く事も出來ない、其れ迄面白く旅行して來た事は、夢か現つの様に、自分にはわかつて居て他人に話る事が出來ない、此れから寧ろ今迄の如ふに昏睡にあつた方が好ひと思ふと、家内の人は大喜びて居る。

○心持

熱海　木村綾野

私は病氣中て、最惡い時は無中てす。唯死をまつてるのでございます少しよくなると喔もう勉強など致しませう、命あつての物種、自然を友に餘生を樂しみませうと思ひます。が床を離れる様になるとそろ〳〵目的を立派に成功したいと云ふ心がおこります。

○清ちやんの病氣

大阪市　吉田勝子

きれいにお掃除をした、六疊のお座敷て、清ちやんが、水枕をしてすや〳〵眠つて居る、清ちやんは、今年六つの可愛い子てす、此二十日前から熱におかされて、うわ語を云ふのてす。今も又いやな聲て寄咲く花の梅田よりと、歌つて居るのてす、あゝいつになつたら、人形のお守をしつゝ可愛い聲て歌ふのてせうか、

○どうも

靜岡市　さち子

床上げをして十日目の今日、何んだかやうにも物憂くて仕方がない、物を言はふにも口が億くいこれても學校へ行つて勉强もし、又ラツケツト持つてゼロ、ゲームを競ふ男氣が出るだらうか――どうも案じられて。

○白い衿かけ

東京　夕ほし

頭痛がして、それに熱があるやうだ。床をとつて貰つて伏せつた。頭がづん〳〵するので、兩手で顔と抑へて目を閉つた。外は大變な風。一風吹く毎に障子へパラ〳〵と砂が當る。ふともう九月なのだと思つた。去年の今頃も十日程病床にあつた。一昨年も、それに今年。あゝ何かの前兆ぢやないのかしら。淡い哀愁に溢る涙をそと白い衿掛けの布て拭ふた。

○喧嘩

府下　さゆり

今朝姉様と喧嘩してあまり口惜しかつたので、一日空病氣をつかつて寢て居りますと、すーとふすまがあいたのていそいて寢る振をして居りますと、そーと姉様がはいつて入らしつて私のあたまに手をあてて見たり、脈を見たりして又そーツと出ていらしつた私は今更姉様のおやさしい心が胸にしみて涙がとめどなく出ました、

○美人でも

京都市　井上澄子

隣にゐらした奥様は所謂美人て、そしてハイカラな方てありました。餘程お琴がお好きと見えて、度々お彈きなさるのを聞きました。私は、あんな身に一度でもなつて見たいと羨んでゐました所、一月程前から、顔が蒼くし、髮を亂して床についてゐらしたが、つい此間なくなられました。私は、美人だつて同じこと、病氣には敗けるものだと思ひ、そして何だかうれしく感じました。

○窓

堺市　なでしこ女

こゝは病院の窓だ。私は空を眺めた小さな白い綿の様な雲が輕く海の上の白帆の様に浮いてゐる。私は疑平と眺めた。白い雲片がだん〳〵と集まつて山の様になつた。野牛の様になつた。鬼の顔の様になつた。ずつと兩方に大きな翼が出來た大鳥だ。怪鳥だ。私はあの鳥のために心臟をいためてゐるのでは有るまいか？

○全くの赤坊

清子

去年の夏でした。熱病にかゝつて、回復期中に食慾が頻りに募つて、仕方がありません。けれども此時が最も注意せねばならぬと、いふので母がいろ〳〵と慰めて、呉れますので、そう、無理もいへず。でも全く諦らめるのは、妾にとつて、死より辛いてせう。或る日一策を得て爺に托して「お母様只今れ學校の食堂て、お團子とおすしを沢山喫べて、それは、實たおいしかつてよ」十七になる妾が三ッ子の様に、謎をかへて甘へたんてす、

○脚氣

兵庫　祥子

毎朝東がしらむと素足て裏口から鹽田へ行きます。世間が靜かで空氣が清らかて何ともいへぬ心持ちがします。歸りには人も漸く起きて門口に楊子をつかひながら誰も〳〵私を見て笑ひます、大方おてんば娘とでも思ふのてしよう。脚氣の療養法を知らぬものばかりと私も亦心の内で笑つてやります。脚氣は二週間て治りました

○病人でない病人

牛込　かへり花

ある夜の事、弟がをそく歸つて來て翌朝いくら起しても起きません、どうかしたのときくと頭

がいたくつて目まいがしてひどいと申しました。それから家中大騒ぎになつて藥をのませるやら玉子を食はせるやらして。奥の間へ寝かせてくれました。晩方になつて行つて見ますと弟はありません、便所へ行つたのかと思つて便所へ行つてもをりません、後で分りました其は弟が餘り夜遊びをするのでねむいものですからわざと病氣と云つて晝間寢て居たのです、家の人は皆な笑ひました。

○時間

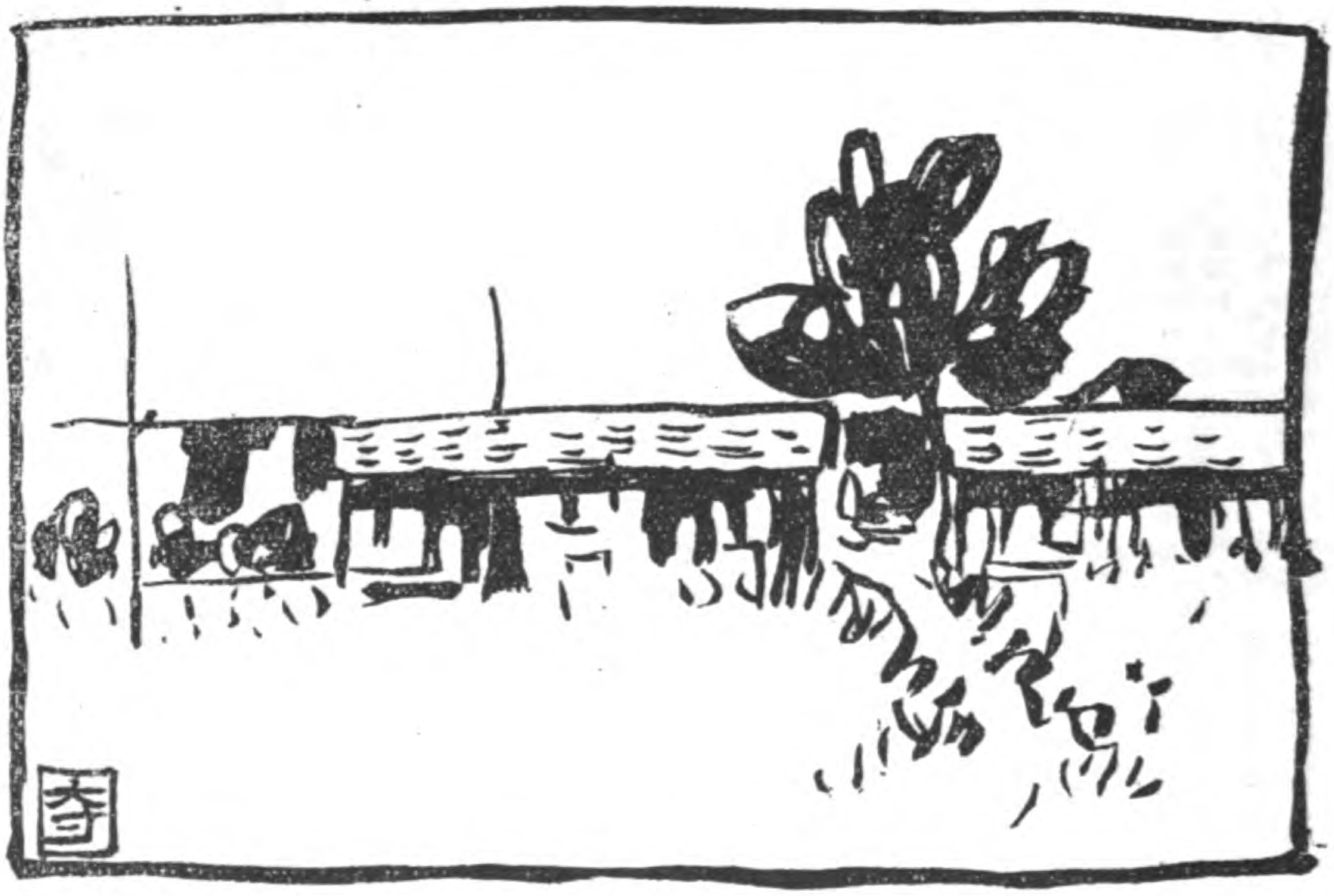
府下 三ヶ島よし

老衰病とか又は絶對に治療の見込のない病氣は知りませんが、私は病氣中何が一番樂しみであるかといふとただただ時の經つことであります。全くこの時にはどんな美しい花でも、早く散ればよいと思ひます、それから少し癒りぎはになつた頃の、夜の明けるのの待ち遠しさは　とても健康の人の心には比べるものがないと思ひます。

○湯

長崎市 島田しげ子

湯氣で鏡がぼうつと、曇つて居る。濡れた手拭で拭くとすつきりと磨れて今前、湯から上つたほんのりと、上氣した顔が美しくうつる。病氣の時少し快い時は丁度、此樣ないゝ氣持だらうとかう考へると一日も早く治つて、あの奇麗な、陶器を敷き詰めたお湯に入りたいと思ふ。



すたれゆく家　京都　井芥子

○今度の題

丹後 文子

今度の題は病氣といふのだよ、と云つて、お隣家の靜ちやんと、病氣が什麼の態のと、病氣話に實が入つて、果は亡くなられたお母樣の事まで持ち出し、臥牀に入るのは、十二時にも及んだ。翌朝起きると、昨夜の故か、少し風邪氣味になつて居た。

○病氣の世界

佐渡 中川敏子

世の中に何がいちばん苦いと云へば病氣の世界であります。私も此苦しい世界へ幾度となくはいつたのであります。いくらうまいものを食ふても、いくら面白いものを見ても、うまいやおもしろいことはない。苦しいばかりであります。なんといやな世界ではないか此世界の神樣は、食物や其他のものに住んで居て、時々人の體内へ入るそうです。

○落葉の音

信濃 佐々木繁子

おゝ。汗びつしより。まあ夢でよかつたと胸なで下して。一心に目を塞いで見ても中々眠れぬ秋の夜は更て哀に淋しい。未だやつと一時だ。細いランプの光に青白いお母樣のお顔が見える。

嗚呼すまない早く癒つてと。思へばなんとなく悲しく成て來て止めどもなく涙が出る。病疲れた體をやつと寢返る時。靜な外にパサリと落葉の音嗚呼私の運命の音か。

○燈火の下

高知　香代子

毎日十時頃定まつた樣に入らして下さる御醫者樣を門口まで御送り申してさて今日の容體伺ふのが何よりの心配。不治の病だとは疾うに聞いていましたけれど今少しは保つだろふとのお言葉が私には全快だと樣に響きます去年の秋病葉のはら〳〵と散つてゆく頃病床に就れた母樣、馴れぬ私の目にも此頃の御苦しさはあり〳〵とみえるあゝおいたはしい母樣のお運命は今宵この燈火の影よりもまだ〳〵薄うございります。

○つまらない

信濃　優梨子

此間裏庭へ莚を敷いて、内の澄ちやんと御隣の雪ちやんと嫁樣ごつこをして居ましたが、其内に澄ちやんが、「れお雪ちやん貴女が母樣よ、そして私がお鹽梅惡くし、母樣ビスケット頂戴なつて云つたら「さあ〳〵おあがり」つて呉れるのよ」ゝ云ふに「あらそれじや私許りつまらないわ」

○不思議の縁

大阪　平尾とき子

リローマチで百五十日余、床に就いた時、血色はよし、食事は進むのに反對に足は自由叶わず痛み甚しく千本の針で寛がさし廻る樣、筆にはつくされぬつらさ、遂には親弟妹に迄氣つらく明暮涙で過し一層此儘と迄思ふた時、女子文藝を讀んで感じた事がある、それは一生忘れぬ、病は全快した年月矢の如く五年今尚心變らぬ文壇を友として交際して居ります不思儀の縁ですこと。

○お藥

山口　酒向とし子

日に六度のお茶頂く度に先に三錢、後にお菓子、こんな風でなくては頂けなかつたのが三十日目頃からはどんな苦いのでも口なほしなしに水藥なら瓶口からクククッと頂く樣になりました、何でもなるればこんな者かと今更感じました、猶お藥頂く事なら名人だと賞められる樣になりました、＊、、、

○病氣

佐賀縣　交野小萩

ストンと谷底へ落ち込んだのでぞつとして眼がめた、體一面冷汗がじつくり出てゐる。自分が眼さましたのを見て母上が氷嚢を取かへて下すつた時枕元の時計がチン〳〵と淋しう二つなつた隣りの室で昨夜入院された盲腸炎の患者が苦しさうに唸いてゐられるのが幽に聞える、足許の障子のすきから空をのぞいてみると眞暗だ、明日も又雨かしら、あゝ自分の魂はあの暗空に飛んでゆくのではあるまいか。

○病氣になりたい

尾張　秋月

私は少さい時から、至極壯健な質で風邪一つ引いた事はなかつた故姉樣が青い顔をして、毎日遊んでいらつしやるのを見ては、自分も一度よい病氣になつて見たい、そして遊んで許りゐて欲しいものを買つて頂いてと思つて居ましたが、此頃は願がかなつたのかとかく病氣勝で不自由を感じます、で只今では暱病氣の樣なつらひものはないと、つく〴〵姉樣を羨やんだのが、何だか濟まぬような氣が致します。

○ろくまく

横濱　しらぎく

彼の君もおなりなすつたといふろくまくになつて！未來永劫變らざるこの切なる心情を彼の君に訴へて彼の君がもとのあたゝかき御心になつて下すつて強くしレつかと手をとられたい。

○旅の空で

德島　伊藤浮女

私が九州まで一人旅てまいります途中、船中で俄に病氣にかかつたので、船から上りまして宿屋に着きましたが疲の上に猶更ら旅の獨身で心細く手足を縮めながらウン〳〵と呻つて居りますと、ゝ女の聲がしたので見ると、コヽ四年前わが宅で女中をして居つたお春であつたので、私は嬉しくつて思はずお春の手を固く握りました。お春を神か佛かと思ひました。

○こゝろが引きしまる

神津芳翠

女特有の月に一度の病氣！此時の私は自分乍ら驚く程きつと心が引きしまつて身じまひから動作迄がおのづとつゝましやかになりますして神經が馬鹿に過敏になつて少しの物事も感じ易くて仕方がありません、十六の春はじめて女になつた時の御母樣の御教訓がつく〴〵心の底にしみておる故でございましよう。

書簡文

○規定　手紙又はハガキの通常の音信文を云ふ韻文口語體何れにても隨意なり成るべく意味の透徹したる作を採る二十四字詰二十行以內とす一人一章に限る卷紙を用ゆべからず乙種の賞を選與す

○渡淸して（天賞）

淳子

其後は何といふ御ぶさたを致しましたでせう、實は着早々出すつもりでしたが、扨用といふものはない樣であるもの、取わけ交際の華美な土地柄日日訪問客が澤山でついおそくなりましたの、しかも去月二十七日に出した筈の手紙が召使の支那人が忘れた爲に思はない御無沙汰、今朝ひよつくり新聞の中から出て來ましたの、私ほんとにどうしようかと思ひましたわ、御赦し下さいましよ、あゝもう御別れ申してから一ヶ月にもなりますのね、どんなに御懷かしう思ひ暮したでせう、道中日記なりと御目にかければよろしう御座いますが其ひまもなし殘念で御座います、浪を切る舵機の凄まじい音に二日三日と安からぬ旅ぢの夢を過して艙に見し韓人の小さな舟に乗つて、木の葉の樣に激浪の中を行くのを一目なりとあなたに見せておあげ申したらと思ひました、黃海の浪の色の赤く變つたのやら、大連の棧橋の壯大な事や、處變れば品變る、電燈の光にイルミネーションつけた樣な夜の景色、支那人の人力車引くおかしな姿、一つとしてふるさとの人々を忍ぶ種でないのはありません、梅枝樣、幸か不幸か私は幼い時羨んだ小說中の貴婦人の樣な生活を致してをります、廣い壯大な洋館に住つて萬事西洋風に目もはるかな花園には、ありとあらゆる美しい花が咲きみだれて居ります、かくれば何處にあるやと思はるゝ許りの丈高き櫻草ばかりの一町もつゞいた畑もあります、馬車小屋、うまや、支那人の家は花園の中にあります、どんなに詩的でせう。あけくれ樂しい境堺にあり乍、私にはやはり小さな雨親の家の方がしたはしくてなりません、梅枝樣どうぞ折々はなつかしい古郷の變化や友の身の上、御洩らし下さいませ、縱らかいてもつきま

せんが今日はこれて筆おきませう。

一讀して華やかな思ひわき再讀して底に流るゝ愁ひを見るやうな氣がする、すべて金にいぶしをかけた樣亦容易に得難い維です。（評）

○妹の許に（地賞）

四多摩　三ケ島　よし子

きのふはあんな重い荷物を、渡舟場まで持つて來て下さつて、手が痛かつたでせう、あの園さんはいつまでも棧橋の上に立つて見てゐたでせう？姉さんはねえ一番後で乘つたものだから、舟をぐるつと廻されてしまつて、園さんの方が見えなくてくやしかつたの。それに朝だつたものだから霧が降つてきてねえ—それでも河岸へ上つてからふりかへつて見たら、そらそこにしめておいでの、赤い帶が、だん〳〵遠ざかる所でした、知らなかつたでせう。あれからぢきに石油蒸汽へ乘つて、東京へもどこへもよらなかつたものですから、思ひの外早く歸着てきましたの、あの大夕立の時には、もう着物を着換えて、玉蜀黍の御馳走になつてゐたのよ、ですから無事に着いたと父母樣に申上げて下さいこちらの皆樣も御機嫌がよいつてねえ。母樣のお齒はまだお痛いやうですか？どうしても肩をお使ひになるとなほお惡いやうですから、園さん一生懸命働いて下さいね、學校から歸つたら光ちやんをよくお守して、夕がたなんかあまりぐづらせないやうに願ひます、だんだん涼しくなるから夜は勉強するでせう。もすこしたつと栗が熟るから送りますよ。この手紙讀んでしまつたら、お机の左の抽き出しをあけて御覽なさい、私が昨日の朝いゝものを入れて置いたのだから。もし何かあつたら一寸知らせて下さいさよなら。

書き出しがまづ宜い、結びも非常に興味深い、一つは才氣ある維にもよるが旨として眞情發露の爲めに外ならないのです、感服、（評）

○逆境にある人に（人賞）

しらきく

此頃はいかゞ渡らせたまふや、事につけ御上のみしのび居りながらたゞお無音に過し候罪、さるかたに御許し下され度候、うき事のなほ此上につもれかし、御力ためさせん御心組のほど雄々しくも承り候ものから、さてもさる御決心遊ばされ候ひしは幾多の御涙そゝがれて、そゝがれ候ひし後におはすらんと、たゞ悲しく候御父君樣御逝き遊ばされ候てよりは一日も安き御日暮しとてもなくやゝに窶れさせ給ふと皆々かげながら御案じ申居り候ひしを此度の事、誠に何と申上げ候言葉も存じより申さず候、御二人の御子樣までおはす仲にして、何故さるあさましき御心になり給ひつらんと

濟まぬ事には候へども私は其御方うらめしう、まして、あなた樣、御胸のうち、はりさけんといふは愚の事と存じ上げまゐらせ候、人の世のうさ辛さ、今にはじめぬ事には御座候へども、あまりにもふり縮みし御身のうきに、もらひなきの涙さへかれはてんと致し候ものを、御からだいとはせ給へ、やがてまた御子樣方御成長の折には嬉しき御事かずく\いて來申すべく御おもひたちの繪畫の御研究、よき御いさほしあげさせ給ふ日を待ち居り候、御母樣お病氣追々御快方との事うれしく\存じ上げ候なほ何卒御養生のほど祈りあげ候、久々にてゆるく\御めもじも致したくちと御まはりみちながら橋本先生の御かへり路に御たちより下さらばうれしう存じ候御弟御樣折角御勉學のほど切に祈り居り候思ひのみあまりてたどく\霑くし申さず何も御まのあたりにて、あらく\かしく

なほく\健吉樣御行衛につきては父もいろく\御力添いたし居り候間左樣思召したまわり度候いつまでか心強き事仰すべくも存じよらず候まゝかならずく\御喜びの日の來る事をはるかに望み待ち居り候、



舞妓　陸奥　稲垣かほる

例によりて抑揚頓挫、照應推移の妙を極む、筆も亦強き力とみづく\しき生氣を添えて、よそながらにも心強くも思はしめる、感服の外なし（評）

【秀逸】

○兄樣が歸つて被入てよ

小石川　つゆ草

今朝早く車が門前で止つてがやく\云つて升の見ると兄樣が車夫達に大籠二つも運び込ませて被入る處。中は生魚が澤山、烏賊だけは死んでましたが鰕もお魚もピンく\はねて居り升。大瓶に水を入れて其處に放しまし

たの、ゆすつても／＼ねて居た健がとび起き升やら、おばあ様も出て彼入るやら、游ぐ／＼つて皆で夫を取り巻いて大騷ぎ。夜漁のお話は面白う御座ましてよ、お魚は黒鯛に似て居り升。ムヂナと申し升つて、妙な名ぢや御座いませんか：生きたのを皆に見せ度い計に夜汽船で苦しい思して來たのさと兄様が．有り難いわけなのねヱ：。美しい貝もどつさり拾つて來て下さいましたの。姉様のお好な櫻貝も御座升わ。今、澄子と健は八疊一ぱい貝を散らして選り分に夢中！三崎勝地の繪葉書もおみやに二十枚計。最これは前から私が願つて置いたのてす。中々よい眺が御座升から此度姉様に出して上ませうね、樂しんでゝ頂戴。夫から一尺位の小松を十本裏の崖下にお植えに成りました、矢張あちらから持てらしたのい、紀念ですは、まあ姉様もびつくり遊ばすは。兄様がねヱ：：藥罐と思へば間違なし。歯の白さが氣味惡い程立ち升。でも夫より上ての御客様を連れて彼入いましたよ、兄様の宿つた家の主人てすつて、六尺に一寸足り無いと云ふ大男、いくら漁師の親方だつてよくも／＼染つたものと感心致し升。其くせ胃病て上京したのは赤十字で診察受ける爲とか、當分宅に居りませうよお魚はねもう料られてしまひました。俎の上てピチ／＼はねるんてすもの、母様が手を御切り遊ばしさうでひや／＼しました。本郷の兄様は夕飯に入らつしやる筈、兄様にも御越し願い度けれど書きかけて居らつしやるからだめでしやう？徳に持せて差上げ升。鰕はわざと生きたのを御覧に入れ升、砂のまゝ暗い處に置けば二三日は慥で御座升つて、未だ籠から出ようとして居り升は。烏賊はかう云ふ風に丸煮にしたのが一等だとの話。とに角召上つて御覧遊ばせ。頰をおとさぬ御用心を願ひ升と兄様が仰しやいました。どうぞ皆様によろしく。

生々潑溂、文も亦魚の跳れる樣に生氣がある、興氣津々たる書（評）

○椿の御所に滯在の姉君へ

尾島千代子

只今無事に着きました。あの晩御別をして艀に乘ると棧橋に見送り給ふお懐かしいお姿が八日餘りの淡い月あかりに薄り見えて、何だか悲しう御座いました。本船に乘り込んでからでもなか／＼出帆せず次ぎへ／＼と魚船が來ては積み込み／＼して、漸く「ポーポー」と殺風景な汽笛に黒い烟を吐き出したのは、彼是十一時て御座いました。月は山の端に落ちて、空には星が降るやうに輝き、海には夜光虫がきら／＼光つて、まるで寶石をまき散らしたやうでした。三崎の街からチラ／＼見えた灯影も次第に消えて仕舞ひました。私は獨り淋しく甲板に彳んで、御病體の姉さんに御厄介かけ

て嘸御疲れ遊ばしたらうなどと思ふとハーモニカを吹きながらすや／＼と眠り玉ふお姿が眼に浮んて、眞實に懷かしう思ひました。夜は段々と更け行くばかりで、汽船はがう／＼と音凄く白浪分けながら進行を續ける中を乘客は皆獸のやうに行儀惡しく寢そべつて居りました。觀音崎へさしかゝると船は恐ろしく動搖を初めました。不圖目をさますと早や品川のお臺場も過ぎて、我が家の裏庭の愛宕のホテルが茫然と霧の間からにょつきり頭を擡げて居りました。曉の風涼しう東雲空は快く晴れて、都の生温い風が心地あしく吹きました。靈岸島へ着くと、からりと夜は明けて寢ぼけた人達の顏が明瞭と見えました。電車道へ出て茅場町行を待ちながら、不圖後をふり返つて見ますと、赤黑い手や顏や亂髮で手鞄を下げて居る自分の姿が煙草屋の柱に懸けてある鏡に寫つて「まあ、恥かしい」と我れながら驚きました。都の塵くさい風に吹かれて、蹌踉する身軀を電車に搖られ／＼ながら漸く家へ歸つて、冷水摩擦をやつて居ると、弟が出て來て「やあ黑い躰……」と叫びました。お母さんは「何直ぐはげるよ」と仰有つたので安心致しました。お肴すきな母さんはお肴の話をすると喜こんで被居います。十七八日頃にいよ／＼定まりましたから、何卒波止場までお迎ひにお出て下さい

餘は後便に讓ります、お躰を御保養おこたりなく。さよなら、

暢達の筆づかひには少からず感心しました、但かう有りふれの材なるといささか損な感じが致されます（評）

○小包のお禮まで

牛込　平塚白百合

毎日からじめ／＼と秋雨が降りくらして、板塀や竹垣に白銀の文字が一ぱい、無花果の葉をうつ雨の音がつく／＼いやになりました、何處を見ても灰色の雲がかぶさつて、晴れたと思ふともうザアとくるのでしやう、肌襦袢が三枚たまつてしまつて着心地のわるさ、どの部室でも障子をピッタリしめてヒソ／＼して居りますの、歸京したては皆樣がもつてゐらしつたお土產があつたので寄合つては頂きましたけれどもう此の頃は品切れでしやう、こんな日は口さみしくつてそれはをかしい程ご馳走のお話しが出ますのよ。

今も今私の部屋へ十人計り集まつてゐた處でしたの、そこへ母からの小包でしやう。大包ですわ。さあ皆さんが開けないうちから大さわぎですわ、一包はあなたからの柿でしやう。いゝ色ねえなんどゝいつてゐる内とう／＼皮と枝ばかりになつてしまいましたわ。皆樣

からお禮を厚く申して居りますの。私の口へも三つは入りました、けれど最少しほしいと思ひましたわ、大鍵ゴマが多くて結構でございますの、あとの栗は母からの衣服と一共にしまつて置きました、そのうち皆さまが寄つて平らげるのでしやう。今年はお祖母様のリヤウマチはいかゞでございますの、こう降りがつゞきましてはおさわりになりませう。何卒ご大切に、今日は御禮までと此の頃の寄宿舎のさまを一寸お笑ひ草までに、いづれゆる／＼あとはおしらせ申します。

しめ／＼した秋雨の日の寄宿舎が目に睹えるやうです、そのうち輕ひユーモアもある、何しろ老錬お手に入つた筆致（評）

○喪中友に

鳥取　安本春子

降りつゞく秋雨にしめり勝なる袖のいよ／＼ぬれまさる心地して昨日も今日もたれ込てのみくらしました、離室の前を通りかゝりては「母様如何」と云はうとして障子をあけて八疊の間のがらんとして只廣きに今更のやうに泣き伏し遺愛の針箱に鏡臺に皆涙を誘ふものはかりてほんとに辛う御座います、親子は一世の契りときゝますものをこんなに短い緣と知つたなら一二年位學校がおくれたとて家にゐて存分御仕へするでしたに友の誰彼におくれるのを殘念さに泣いてすねて無理に上京して、思へば不孝の子でありました。最後の御床にさへ三日しか居なかつたのですもの幾ら思つても及ばぬ事ですが佛壇の前に行つては泣き／＼致します、墓参りの外外出致しませんので友の誰にも逢ひません、どんなに悔いたつて仕方がないのですから思ひ諦めて早く歸らうとは思ひますけど體も少しはいためたやうですし何彼と用事もありますので四十九日をしまつてから歸校致します、どうぞ憚り樣ですが舍監の先生や同室の皆樣によろしくお傳へを願ひます。

哀音をこめたる情調紙上にわたりて讀む者の胸にひゞきます、而もそれに少しの無駄な句なく冗くならざりしがなか／＼に哀みを惹きます（評）

○今度の宿はお寺にて候

羽前　浪江

白幡樣、久々にてお伺ひ申します、

寶國寺と云ふ封筒にお驚きなさいますな、尼になつたんでは御座いません、風のまに／＼彷徨ふてる私が、こゝに止つただけですから、最初は百六十年も續いたといふて、古色蒼然といふよりはかび臭ひ百姓家に二度目はさる後家さんの小綺麗な家、三度目には、名のみは立派な白龍山寶國寺、實は小さい田舍寺で御座います、それでも豫ての望みが叶つたわけ、先づ／＼お喜び下さいませ、

室は本堂の西隣の六疊に、夜具に着替に愛讀書十五六冊、それに炊事具一式持ち込んでありますが、普通の家とは違ひまして、押入が一つもないには不便至極、その間代が一圓といふのですけれども、氣に入つた所ですからだまつて居りますの、

蚊帳の中にたつた一人、勸行の鐘に悲しい夢や嬉しい夢を破られて耳を澄しますと「南無妙法蓮華經觀世音菩薩普門品：：」と落着き拂つた寂のある讀經が終るまでその儘身じろぎもせずぢつとして居ります、しかし、ご飯のない朝は、惜しくとも勝手に立たねばなりません、何故なら、邪魔になるのが氣の毒で、誰も居ない間を占領するので御座います、これも借家人の氣苦勞といふものでせう、來春お目にかかつた時に貴女のお宗旨と同じのをお聞かせ申しますよホ……。

それから下駄を引つ掛けて裏門から左手の方に出ますと、白森川といふ川、兩岸に葦が疎な間々に、河骨がそれは繪のやうに、クックッと飛んで居るのは黑い小さい鳥二羽づれ、ていて御在います毎朝顏を洗ひますのは、また川に添ふて小一丁ばかり下りますと、田圃が開けて、黃波十里の空の彼方に出羽富士が、中腹に霞のやうな雲をまとふて、朝の世界を耀くやうに彩つて居ます、歌も詩も隨分出來ましたの、駄作でも：：いづれそのうちにまた、今日は一寸御報告まで。



田舍少女　筑前　坪井よし子

奇氣横溢した文、又奇妙な生活に見える、濱江さんとやら定めし世にすれたおん姐御にやあらん、如何〱　（評）

○父上の禁酒

長野縣　神澤みな

姉妹！御喜び下さいな御心配下さいました父様の御酒も此月の初めからきれいに御禁酒、こゝ一ヶ月たゞの一滴さへ御口に御入れなさいませんの御禁酒後の家庭は春の花の咲いたやう、みな〳〵うれしさが顔にあふれております、姉妹も御存じのとほり一昨年の〇〇事件からめつきり御酒の量がふへたのですもの、其御酒つたら以前と變つて御不機嫌なんてしよう、もう〳〵この時許りは家中ひつそりしてしまひますの、口數の少ないお父様は御口にこそおつしやいませんけれど、〇〇事件の不平!!!御懸念を毒惡な酒を以て一時も忘れやうとなすつたのです、此様を目前に見る私と母様のあゝ此御痛はしい御心中を何と御慰め申そうしてこの御酒をどうして御止めさせ申したらよかろうかとこれ許りに日夜どんなに心を痛めましたらう、たしか一日の夜でしたよ筆を御持ちになるとどうしても手がふるえて書けないんですつてこれを御らんなすつた父様、母様と私を御呼びなされて「あゝこれがまさしく酒の中毒よりからだが大切だ」つてつく〳〵おつしやつて其夜から立派な御覺悟の下に、あの御好な〳〵御酒を御止めなさいましたの、當時の御晩食時は御氣の毒ほど御淋しそうに見えましたけれど、目をつぶつて見ぬふり致して居りました、之れも皆御父様の御身の爲ですものね、もう此頃じや宴會などへ御出でなすつても御歸りはいつも〳〵御早よふ御ざいます。以前の暗さ家に引きかへ笑ひの聲は家中にみち〳〵て平和な〳〵家庭を結んで居りますもう〳〵何だか夢の様です姉妹このお月見には一家揃ふて心行く許りお父様の御禁酒の御祝ひをいたす筈になつて居ります。どうぞ御都合遊ばしてこの喜しい暖かいまとひに一段の光榮を御そえ下さる様御入來を御待ち申して居ります、萬事は御目もじにゆづりて……。

喜ばしいおとづれ、快よくひゞきます（評）

○おばさんに

岐阜市　篠田とみ子

おばさん、暑い〳〵つてましたけどとう〳〵、ようおばさんが仰有りようをつた、何とかで身を切る薄でも露にはちん〳〵何とか、てゝんつて口三味線をなさつた秋になりましたねえ、秋は淋しいの悲しいのつていひますけど私には嬉しうてなりませんの、夜は永くなる本はよめる、もう氣候のいゝ中遊びに來んとおいて下さいな私の邪魔ですから、その代りには繪端書、

これは暇ざへてないから兩得と申しますもの、私の新發明てすよ、それから秀ちやんおかしいのよ昨日もお茶碗を放つて叱られて笑はれてますの、姊様がねえ、お茶碗を破つた方はだれ、……秀ちやんてしよう、と仰有ると、あんかうんかついて秀ちんだつていひますの、おやあおもち上げてよ、てゝに、どちらつてつりもちを左の手にそつとさへなさつたら、右の手を出して、母ちやん、こつちのてゝだつて右の手を出すの大笑ひてすのよ、來てみて居てごらんなさい、毎日面白い事ばかりありますのよ、さよなら。

思ひ切つて飄輕な文、とれ〳〵そんな面白い事があるなら行かずばなるまい……と叔母さんの獨り言（評）

○奉公先より故郷へ

日本橋　桃園とし子

おなつかしい御玉章たゞ今頂戴いたしました。わなゝく胸をうちしづめ、くりかへし〳〵拜見いたしました。そしておん文抱いたまゝお父様やお母様、美根ちやんのことなど、さま〴〵に思ひ浮べて見ました。

妾がこちらへ參りましたのは、七月の始めで、まだ桃の果の熟みそめたばかり、夏とは云へどまださして苦しくをぼへぬ頃てございましたが、早くも世は秋立ちて、こほろぎの鳴く音悲しうおぼゆる頃となりました。田舍の秋はいかゞて御座います。今年は稻の實りもゆたかで、笑ひ興ずる聲は家ごとにうれしくきこえ、いかにも平和なたのしい事てしよう。妾も御當家樣へ上つてから三月、病氣もせずに、おやさしい旦那樣や奥樣に、と おようこび下さいまし。

しよ〳〵とこよなくおいつくしみを受けた、初奉公の身ながらも、辛い悲しい思ひを知らずにお勤め申して居ります。

旦那樣の會社へ御出勤遊ばしたお留守には、奥樣のお膝元近くて、近くお產れ遊ばすお子さまの着物や、旦那樣の浴衣など縫はしていたゞくので、小しは針つすべも心得る身となりました。その上、夜は一時づゝ勉强せよとてお暇をたまわり、折々は奥樣から親しくみ敎へを受ける事もございます。

故郷を出る時には、世間知らずの身には奉公と云ふが只恐ろしく、泣きの涙でございましたが、幸にも旅の寂しさを忘れて、お主樣のおん爲と一途に、骨身をしまず働いて居ます。あゝ、どうしてこんなにやさしくして下さるのかと、嬉し涙にむせぶ事さへございます。近い中に淺草とやらへお供するとの事でございます。その時にまたくわしく申上ましよう。今日はこれでお別れ致します、くれ〳〵もおん身御大切に祈り上ます。

――母上に――

取り出てゝ是れと云ふところも無い文體の調子がいかにもこの題に應つて居て宜ろしいてす（評）

○靜より

（第十二號乳母の子へを讀みて）

越後　佐藤浪子

全く毎日根氣も好く降り續きます事て、お嬢樣お手紙は昨夜くり返し〳〵拜見仕りました、母の事を彼の樣に迄思召し下さる有難さは堪らず泣きましてムいます、——まア左樣てムいますか。私どんなに驚きましたてせう、何にも識らぬもので御座いますから、華族への御奉公なぞは奉公とは名計り半分は遊びのお合手のやうなものと計り思ふて居りました、只今伺ひましては眞實に恐ろしうムいました事、……（今の私此儘て大きくなつて、）と思召して、此樣に御心配下さいますものを、お嬢樣私の想ひ違ひてムいました、ほんとにお情深いお言葉に嬉し涙がこぼれまして、……丁度爺やの世話は誰がしますと仰在つた處を讀みかへして居りましたら、「靜、もう十時だぞ、夜更かしすると毒だぞ」と父の聲に吃驚し床に這入りました、そして靜かに横たはつて、いろ〳〵と考へ出しましたらもう諸々な事か筆ては書き盡せない程入り亂れまして、斯う細めた二分のランプの灯影に若い侍女が潸々泣いて居る蒼い顔がちらついてたまりませんてした、眞實に仰有るやうに父の世話は私より外誰が致しませう、思へば重い任を負ふて居るんてムいますものを、お嬢樣御安心遊ばして。もう其麽恐ろしい御奉公は望みません、一生此平和の村に只今の靜通りて大人になりますから、そして父に孝行致します、何卒、此度の萬國博覽會にはおよび遊ばして下さいましね、私東京が見度くつてなりませんから、是から母の墓へお花を取換へに參ります故お嬢樣のお分もどつさりお詣り致します、左樣ならば、どうぞ旦那樣や奥樣へ靜が嬉んで居たと仰せ遊ばして下さいまし。

中國美文めいたところもあるが、まア〳〵普通の作てした、實用文としてはこれても宜し（評）

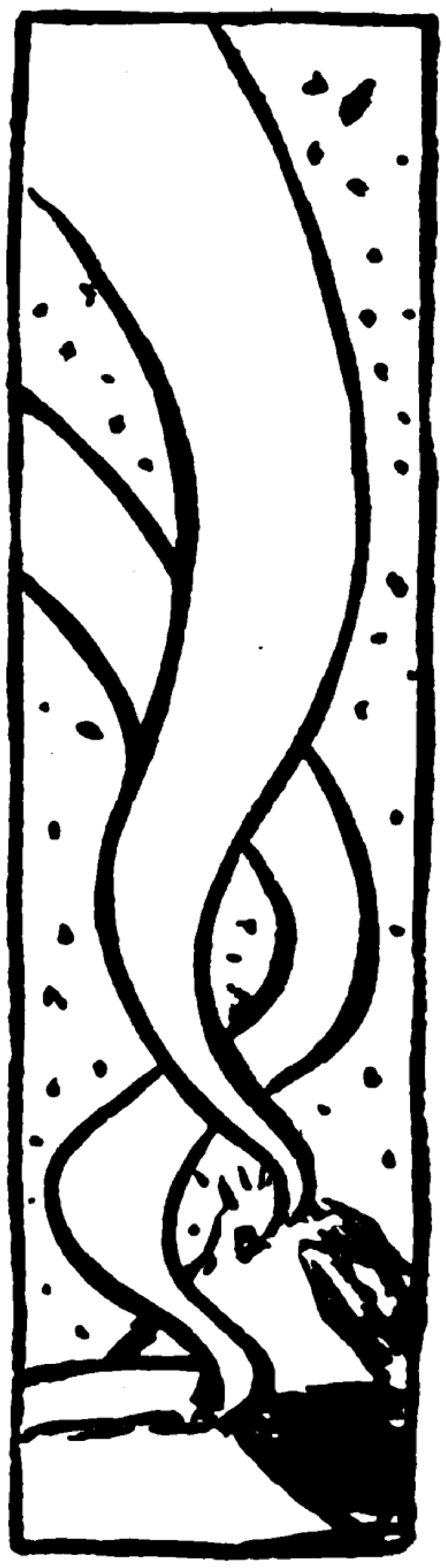
○都なる友の許へ

大阪府　寺部君子

春になると何となく都戀しくなりますの、山里も流石に、陽氣ては有り升か眞個に靜てすよ、今しも細い春雨がしと〳〵降る斗りて人の氣も有りません、何處かて鶯がホーホケキヨと囀て居り升、春の神樣の御聲の樣に思はれて恍惚仕てますの。おや庭の椿が落ちましてよ、ぽたりと、何と言ふ寂寥さてしよう。

端書文の上乘（評）

新歌謡



○規定　古來の俗謡の形式を取りて專ら優美洒脫なる作を歡迎す野卑猥雜なるものは斷る一人一章限りにして半紙又は罫紙に認むること丙種の賞を送呈すべし

○(地賞)　大阪市　京谷政野
月は河内の山から登る裏に波うつ萩の茶屋
景色が眼に浮ぶ

○(人賞)　紀州　白舞子
朝の神楽の太鼓の音に夢が覚めたか鹿が立つ
すが〳〵し

【秀逸】

○　大阪　福井まさご
伏見上りの淀川舟は白帆下して橋くゞる

○　岩代　植村喜奈子
昨夜垣根に啼いてた蟲が今朝の今まで啼いて居た

○　長野縣　山口破魔子
淺茅に交つた水引草の花に飛び込むきりぎりす

○　西多摩　三ケ島よし
月のよい晩提灯つけてとつた鈴蟲籠になく

○　石川　しすゐ

あすはお祭おどろかみよか雨もうれしや今朝はれた
○　長野　中武ひこ子

露のしら玉花から花へ葉から葉へ落ち地へ落ちた
○　佐渡　長島みどり

うさぎ馬ひき柳の木蔭月に水飼ふ韓少女
○　遠江　須部たまき

祭り太鼓が豊かにひゞく二百二十日の日和風
○　藤澤　常盤幸子

月は十六夜秋草亂る加茂の小家は顔合せ

○　安藝　名川白蘋
百合の匂ひにゆふべの夢をのせてあなたにおくりたい

○　長岡市　土田りた子
暗らい山路を一人で行けば後で薬師が呼び戻す

○　南多摩　中島きよ子
花をたよりの儚れな蝶の露の身に吹く秋の風

○　福島縣　藤崎花枝子
鎧兜の武者三千騎駒に水かふ新田川

○　大阪　吉井都留子

許しうけずに何故此所に來た今は里にも歸られず
○　小草子

秋の初風梭とる姉のびんのみだれをかろく吹く
○　兵庫　杉山春翠

月はてる〳〵妻戀ふ鹿のなく音もれくる山あらし
○　信濃　花子

畑の淺間て朝日をおがみ後ふりむきや富士が出る
○　和歌山　鳥居邦子

行儀正しく座つた膝を綺麗に延びてくレース絲
○　常陸　沼尻利子

桔梗野萩を手にして來るは散歩歸りか花習ひ
○　高知縣　譽田桃花

繰り戻つた白羽草の中に匂ひ床しい藤袴
○　大分縣　一法師八重子

晴着姿のあと追ひ行きて村の若衆がたもと引く
○　本郷　望月麗子

月の姫機嫌にも倦きて扇すてたか散る銀杏
○　四谷　櫻子

畑の小茄子をそともぎとればつるりすべつた露の玉
○　長野縣　津金泣月

鷄が欠伸をしたかげうつる小春日和の障子越
○　新潟縣　長谷川咲子

妾や深山の草かり少女こんどの未來は女學生
○　茨城縣　風見貞子

養蠶しながら唱歌のさらひねむけさましと笑ふ母
○　京橋區　胡蝶

花にやどつた白露かけて文をかきましよ戀文を
○　埼玉縣　長澤せつ子

わしの大切のあの朝顔はもやが深くて見えやせぬ
○　淡路　千惠女

月がゑがいた松葉の模樣白い砂地の夏衣
○　長野縣　三の丸

野邊の遊びはたのしいものよ花を摘むやら唱ふやら
○　高岡　篠原みゆき

妾しや甲州の山國育ち海の白帆はまだ知らぬ
○　山口縣　河村靜子

虹の七色のかけ橋こえて姫が行くあと消えて行く
○　函館　藤本鳥羽子

ないた涙のかわかぬひまに又も涙の形見わけ
○　和泉　金田芳子

親は二親そろうてあれど秋は淋しい思ひする
○　横濱　新井君子

姉が三味線妹がピアノ末の弟が薩摩琵琶
○　岩代　藤袴

黄金色した秋田の中に白い旗立つ村祭
○　東寺尾　しら菊女

寂しい草花みなかたづいて庭にさかりの菊の花
○　靜岡縣　波多野いち

野邊の尾花が招けど月はいやぢやいやぢやと雲に入る
○　靜岡縣　鈴木とも子

さびて來ました妹の嫁入廣い野原の袖時雨
○　王子　政子

ぜてるのは十五夜月よ砧打つのは姉妹
○　兵庫　靜子

牛に折られた牧場の萩は朝の露にて花が咲く
○　茨城縣　初澤さく子

西は鳥羽の江東は筑波私の住む村歌によい
○　信濃　東條文江

秋の風吹くうらやまづたひ落葉かき分け栗拾ひ
○　牛込　平塚白百合

雁がかくれた尾花の袖へ月がゆらりと顔を出す

笑話



○規定　面白い話なれば何でもよし實際の話でも一口話でも随意なり賞丙種

○妹の秘密（地賞）

遠江　鈴木小ぎく女

妾が妹に「美代ちやんお父さんはあんなに煙草飲むが何が宜い氣持なんでせう」と云つたら「アラ姉ちやん知らないのお父さんは鼻から煙出すのが面白いからだわ……」て云ふの妾思はず吹出したら「姉ちやんお父さんには秘密ですよ」てまじめな顔してるから妾堪まらず再び吹き出しました。

○胸が焼ける（人賞）

長野　竹内愛子

私の妹が八才の時です或る日御飯の時熱いお豆腐を鵜呑み致し餘程熱いと見えて胸を押へ顔をしかめながら「お母さん妾も胸が焼て困りますよ」と申すので皆々吹き出しました。

○氣を付け

長崎　冬野

姉「整容つて何の事なの
妹「キヲーツケーでせう
姉「さうねえ學校ではツケーよ
下女「あら漬物の事でしたか

○賞め上手

埼玉縣　青葉女

妻「すかつかり張りかへ様と思つたのですが儉約して切り張りにしましたのよ、随分可笑しいでしよう。
客「いゝえ貴女この頃流行の元祿格子の様で大へん見事ですよ。

○こぼしてぬれぬもの

函館　藤本島羽子

母嬢に向ひ、「お前のように愚痴ばかり、こぼしては本當に困るじやないか」傍に見て居た無邪氣な弟「だつて姉さんは何にもぬらしてはゐないよ」。

○いゝ法

堺市　なでしこ

「美ちやんいゝ方法を敎へてやらうか？」
「いゝ法？また忘れない法ですか」
「はア」
「そんな事わたし知つてゝ、そら何も覺えなかつたらいゝのよ」

○お醤油させばいゝ

大阪　平尾とき子

「花子さん姉妹の約束迄して今のお言葉あんまり水くさいことと」恨て居りますと側から妹が眞面目な顔して「姉さんそれはお醤油させばよい」には思はずふき出しました。

○お月見團子

東京　飯塚稜威子

姉「十五夜ですからお團子は十五上れば能いのでせうか、
妹「お月様幾つ十三七つてから二十あげるのよ。
兄「月見れば千々に物こそ悲けれつてから二千も上げたら能いだろう、

○夢

京城　露秋子

姉「いゝ夢見ていたのになぜ起しました」
妹「そうならそうと仰有れば起しはしませんでしたのにれ！」

○モデル

上毛　小澤卯の花

甲「此雜誌へ投書して有る君の文章は他の雜誌のを盗んで投書したのだろう」
乙「僕は其麼惡い事はしないよ」
甲「でも眞く似てるぜ」
乙「只モデルにした丈けさ」

○卒業

秋田　大舘のぶ

客「ホントニ此子は怜悧い事、學校なん年還入つたの、
子供「ハイ尋常五年卒業すました。

女子衛生問答



産科婦人科專門 醫學士 北畠孝夫述

女子の身體に就て衛生生理疾病等

○規定
各種の質問に應ず無書差支なし、毎月一日〆切
翌月發表す

第百七十五問 ●●●●●● 隆鼻術に就て

(a)隆鼻術はほんとうに高くなるのですか。何回位注射なし、何日位かゝりますか。(b)五年前にさかまつげの手術を受けましたが、それより顏を横にせねば物を見ることが出來なくなりました、右の眼が少しも見えない故でせうか。(愛讀者花子)

答 (a)隆鼻術と申してもその之に適應すべき性質のもと適應せざる者があります、適應すべきものなれば一回にて奏効する事あり或は二三回施術するの必要ある場合があります、專門の熟練家に就て治療を受けられよ。(b)眼科專門家に就て治療を御受けなさい左して六ケしき事は有りますまい。

第百七十六問 ●●●●●●●● 初生兒に起り安き病氣

●●●● 及び手當 初生兒に最も多き病氣及びその手當法をお敎へ下さい(きぬ)

答 初生兒に起る可き疾患は隨分多くあります、之を列擧すれば次の如し 初生兒丹毒、臍出血、臍膿漏、臍壞疽、臍炎、臍血管炎、初生兒膿漏性結膜炎、初生兒破傷風、初生兒蓐熱初生兒大水泡疹、初生兒の口蓋アフテーン、初生兒メレナ頭血腫その他尙ほ兩三種あります、是等に對する豫防法及び治療法は醫師の與かる所にて素人的獨治療法は須らく爲さゞるを可とす之に就て逐一治療法を示す事は何も六ケしき事ではありませんが紙上限りあります故ゑ略しおきます倘し尙ほ御承知なさり度きならば一つ一つに就て他日御答へ致しませう。

第百七十七問 ●●●●● 妊娠でせうか

私は當年十七歳、昨年結婚して只今妊娠六ヶ月です。(もつとも未だ醫師には診察して戴きませんが)月經は三月の末から始まり四月の二日に閉經いたしました。四月五月はあまり食事が進まず梅の實を好みました。その後一度も經を見ず、腹部は大きくなつて來ます故全く妊娠と信じてをるのですが不思議なのはたへず白血が下りることです。血と申しましても交接後に出る樣なものでして時によりて濃淡があります。恰度ローソクの燃え汁のやうな色であります。白血が出るものは受胎しないやうに聞きましたがもしそれが事實ならば私の妊娠は病氣ではありますまいかと心配して居ります。て白血の下るのが病的ならば妊娠に異變を來しますかお聞せ下さいませ。序に申上ますが此頃少しも性慾が起りません、交接後は下腹の所に固いものが現はれます、手で觸りますと痛う御座いますが次第にもとの通りになります。此のかたまりは胎兒でせうか、時々腰や膝が引きつつて動くこともどうすることも出來ないやうなことがあります。これらも受胎になにか關係があるのでせうか。(失名)

答 月經の閉止は每度申す通り必ず妊娠に限れるものではありませんが正規の月經經過をとり來れる健全なる婦人にして閉經せる時は先づ妊娠せるものと考へ而して妊娠時に來るべき身體に於ける變態を具備するならば妊娠を確定して可なり、然るに妊娠の徵候と申しても種々ありますが就中確實なる徵候は胎兒の部分を觸覺する事、胎動(胎兒が子宮腔內に於て動搖するを云ふ)及び胎兒の心音(之は醫士若くは產婆が聽診器を以て聽取する可である)此三徵候を認め得れば妊娠を確定して宜しい此三徵候は妊娠五ヶ月末頃より知得する事が出來ます(胎兒生活せる場合に於て)あなたは巳に(閉經後

六ケ月即ち最終月經開始期より起算して七ケ月に垂んとして御出て故、以上の三徴候は存在する筈であります、御氣附になりませんか、加之ならずあなたの仰せによれば腹部の膨大する事嗜好の變狀乳房の肥大、乳嘴の着色等を認めますから妊娠として御間違いはありません。

妊娠時に於ては內生殖器及び外陰部等一般に充血を來すのは通常生理的であります隨て子宮頸管、膣等の分泌、粘液)排出が旺盛になりますから是等の分泌物は白帶となり排出致します。元來婦人の子宮及び膣壁より絶えず粘液の分泌するのは生理的であります所へ妊娠時の充血が著くなりますから妊娠時には是等の分泌は一層増多するのである故にあなたの仰せの白血と申すは恐らく此類に他ならざるものと考へられます加之ならずその白血なるものの性質を御示しになりし所を思ひ合せば一層此斷定を確めます、何も御心配の事てはありません。

妊娠期間に於ての交接も危險である事は已に文壇て御示ししておきましたが殊に交接後に於て固體が腹壁の一部に凸隆し來るとの仰せに據ればその固體なる者は恐らく非理的刺戟に據りて子宮壁に攣縮を來せるが爲め胎兒の體向若くは體勢に變換を來し或部分が凸起するので有りませふ、之は有り得可き事であります。

腰部の牽引痛膝蓋の疼痛等は妊娠時に於ける全身變態の一影響であるらしく考へます。

第百七十八問 淚が滾れる 私は昨年頃から秋より春頃まで少し寒い風に當ると眼よりしきりに淚が出て困ります、何かよき療法をお敎へ下さい。(十六歲女)

答 恐らくは結膜炎の陳舊性となれる爲めか眼科醫に治療を御受けなさい、耳鼻も共に專門家に御見せなされ素人治療は有害無効であります。

第百七十九問 如何にすれば顏色はよくなるや 私事幼き頃より顏色惡しく昨年七月頃より胃腸及び肺尖加答兒にかゝり十二月頃全快いたし顏色も一旦よくなりしが此頃は又あまりによからず、一つは貧血のためならんとも存候が如何せばよろしく候か。(十九歲女)

答 肺尖加答兒の診斷にして確實なれば此方より先に治療せざれば榮養愈衰へ顏色は益益蒼白となるを免かれません、單に末にのみ奔りて焦心せらるゝは大なる過謬であります、肺尖加答兒は肺結核の初期でありますから全然治療する迄て戰はればなりません然るべき內科醫に就て能く御確めなされ、貧血は肺結核に必發の症候であります。

第百八十問 精神病にあらずや 私は不幸にして精神病系統あり、昨年より頭痛はげしく些細のこと氣になりて果は精神病にかゝれるにあらずやと思ふことさへあり、買物をし代價を拂いたる後にて若しか「拂はざりしか」と思へば恰かも拂はざる樣におもはれ、前額部には重き鉛にても入れあるかの樣にて候、如何なる病氣に候や。(あはれの女)

答 精神病系統のあればとて己れ必ず之に犯されると云ふ理由なし余り恐怖的に受働すれば却て被害的忘想に陷り遂には眞性精神病に犯さるゝに至らんとも云い難し精神病患者を看護するに當りゝ己れも之に罹りはせぬかと絕ず恐怖し居れば自然に感染する事がありますそれと全じ樣に始終之のみに心を勞すれば被害忘想に耽溺し遂に精神病者とならざるに限りません夢その樣な恐怖心を持たるゝな、あなたの仰せを承はればあなたは神經衰弱の狀態である何等恐るゝ所はありません內科醫士に就て速に治療を御受けなさい。

第百八十一問 四問 (a)記憶力を增補せしめる藥(b)俗に云ふアセモなるものは梅毒性のものではありませんか。(c)月經時千倍乃至二千倍の昇汞水、綿紗、又は綿花を挿入しては衛生上如何でありますか。(d)門齒二枚を入齒にして味覺に變りはありませんか。(肥前研究女)

答 (a)その樣な注文通りのものなし。(b)汗疹は梅毒性のものに非ず。(c)月經時に昇汞水ガーゼ若くは綿花を膣腔に裝置するは不必要にして有害なり月經時の攝生に就ては誌上屢々繰り返して示してあります。(d)多少の味覺變調はありませふ然し慣れば恢復するし適當の方法を盡せは齒芽に害を起さず。

第百八十二問　月經時に

月經時に神樣の掃除、又は神參り等をするのは惡るいですか。(さぬき生)

答 月經時は古來婦人の不淨と唱へられてありますが今日吾々より觀察すれば素より左樣の解釋を致しませんが然し不淨と申す時に臨て神佛詣りは御扣へなさるゝ方が宜しからん何となれば自己も不淨と信じ他人も言囃す場合に於て神聖なる神佛の前に出るのは何となく心咎め致し却てその後とに於て惡き事を爲したり抔の感念が起れば常ならぬあなたにくだらぬ忘想を來し過敏なる精神を愈々過敏ならしめ自繩自縛に陥る恐れが有ります寧ろ之を避けた方が宜しからん。

第百八十三問　心臟が弱い

私は二三丁の徒歩にもはげしい動悸がいたします。烈しい時には筆持つ手も顫へます。矢張り心臟がわるいでせうか。(花子)

答 實際心臟疾患の存する者かそれ丈けては分明ならず心悸昂進、呼吸困難(運動後に於て)は心臟疾患、必發の症候ではありますがその他呼吸器の疾患、高度の貧血等にも來るものてある、須らく知識ある醫士に鑑定を乞ひ治療を受けられよ。

第百八十四問　手術

白帶血が多いと妊娠しないといひますが治療するには手術をせればならないでせうか。あの房事といふことは如何なる事ですか。(御願い女)

答 白帶血多きとて妊娠せずと申す事は有りません白帶下の多きは婦人科的疾患を意味するものである婦人科的疾患は多くは妊娠機能を障害するのであります。

房事とは夜中房室に於て生殖の事を異性と共に計ることを申すのであります。

第百八十五問　膝が痛む

私は四年前に腸窒扶斯にかゝつてから足がだるくて、膝頭がクキ／＼していたみます。(十八才女)

答 寒冷に觸接せず溫暖に保ち適宜に「マツサーゼ」を施されよ。

第百八十六問　心臟の弱きものは

心臟のよはきものは平生如何なる攝生法によらばよろしきか、又普通婦人の一日にとるべき運動の時間をお數へ下さい。(なつ子)

答 心臟弱きと申す丈けでは分明なりませんが心臟疾患若くは心臟機能に故障のある人は過度の運動若くは激烈なる精神感動を避けられよその他浴湯、冷水浴抔は爲さぬ方可なり。

健全なる婦人なれば職業上の慣習よりして或は隨分激烈なる運動を爲して何等害を受ぬ者あり然し普通婦人は多く余り運動に慣ぬものなれば余り烈しき運動は爲さぬ方宜しかる可し然し適宜に運動を爲さゞれば健康を害する恐れあるを以て個人々々その自己に適當なる程度を定度として運動法を講ぜられよ。

第百八十七問　產蓐熱

產蓐熱は如何なる場合に起るものですか。(百合子)

答 產蓐熱は分娩時の消毒不完全並に產蓐期に於ける消毒怠慢等の場合に於て起るのである如何なる婦人と申して殊更に犯され易きもの犯され難き者と申す差別はないです誰人も前記の場合に遭遇すれば必ず免かれません。

第百八十八問　腦を病んでから

私は昨年腦を病んでから今日に到るまで鼻汁が出ます、そして時々胸の邊が、キリ／＼と痛んで。白い痰が出ます。毎朝起きると冷水磨擦をし、深呼吸をし一里程ある學校へゆき歸つてから近郊を散步します、けれどもなんだか心配てなり

ません、何病でせうか。（京女）

答　それ丈では確定する事は不可能であります然し攝生法は能く行き届きて居る樣でありますから漸次に健康を恢復するでせふ胸痛は恐らく肋間神經痛なるべし御安心の爲めに良醫に診察を御受けなさい。

第百八十九問　肝油　腦病には松の「みどり」を煎じて呑むといゝと云ひますが如何でせう。肝油はいつまで置いても惡くなりませんか、又重に如何なる滋養になるものですか。（横濱、武子）

答　松の翠り云々の事は小生不明にして判斷に苦みます肝油の保存を確實にすれば一定時間は變性を來さず然し一度脱栓しおきたるものならば塵埃の混入若くは肝油油質の分解等を來せる爲め用を爲さゞるのみならず有害なるべし肝油は多く脂肪質を身體に扶殖するのであります。

第百九十問　顔色を好くするには　私は顔色が非常に惡いのですが、毎朝一さぢの食鹽を食すればよくなるといひますが如何でせう。又十二脂腸虫に犯された時はどんな徴候を呈しますか。（武藏、まつえ子）

答　本號第三問に對する答を參照せられよ、食鹽の内服は補血に著しき影響なし隨て顔色を紅ならしむるを得ず、十二脂腸蟲疾患に來るべき重なる徴候は貧血であります。

第百九十一問　飛び〳〵に　私は昨年三月に初潮ありてより五月にあり其後は今年三月と五月と此度の休暇に少しありました。身體に異狀はないやうですが經行の來るまで待つてゝ差支はないでせうか。（福岡、心配女）

答　月經初潮後暫らく中絕し更に月花の開くる者頗る多く然る後は毎月一定時に來潮するを通常とす然も時としては尙ほ間歇性に月經を來す者なきに非ず之を凡べて病的とは申されません然れども其の多くは子宮の不全發育に基因するのである之を一層確めるには診察の上子宮の發育狀態を調査するを必要とす。

第百九十二問　局部の不發育　私は本年十九歲になりますが、未だ局部が大變小さいのですが發育する法はありませんか（備前、不安女）

答　人體に大小あるが如く又その局部に多少大さの差を來すは蓋し天授なり然れ共殊に發育完からず頗る小なる者に至りては畸形なるを免かれず之を醫士の技能に據り細工を加へ大ならしむる事は不可能なり、豈に飴細工の比ならんや然も時を經て身體の全部發育と共に常大に達するもの少なからず須らく落意せず時の到るを待たれよ。

第百九十三問　強壯なる兒を　私事結婚後九年、一男一女をあげしも今は此世になく醫士は腺病質と申されしが、強壯なる身體となりて丈夫なる子をあげたし、何卒日常の攝生法をお敎へ下されたく候。（豆州、愛讀女）

答　腺病性の婦人は兎角榮養給足せず健康に充全を缺く者多し此人この娩出せる小兒はその體質を傳承するを以て生育上頗る困難なるを免かれず勇健なる小兒を得んと欲せば自己の健康を先づ保全するの必要あり日常の攝生法と申しては頗る漫然なる問題でありますが單に申せば適宜の運動營養分に豐富なる食物攝取、冷水浴、睡眠充足、精神上の平和、消化機能の完全、排泄機能の調整等を勉むるに在ります。

第百九十四問　肉樣の物　私は八月に肉の樣の物が下りました、九月にも長さ五分位の物が下りました、身體に異狀なく、白帶血がほんの少しあります。（山里、紫子）

答　單に肉樣のものでは分明ならず詳細なる說明を要す、

上總　心配女に　根治療法があります、醫治を受けられよ。

下谷　岡本つる子に　春機發動期より發生するを常とす。

讀友俱樂部



○規定　本欄は誌友諸君の機關として閱意に使用あれ各自に誠實を守られたし不確實の投稿は沒書とす住所本名は詳記すると字體の明瞭を要す

記者と讀者

○記者樣私はいつてもをかしな和歌を投書いたしますとわるいところを直して下さるので何ともいはれぬうれしさにかげながら感謝いたしてをりますたゞ皆樣や先生方のお作をよく味はつて稽古いたしますれば和歌作法などの本を見ないても出來るものでせうか幼い時から好きでばかりあつてもちつとも手引がなかつたのでいく年たつてもだめでございますがもしためになる本とか雜誌とかありますなら御序に御敎へ下さいませ(三ケ島よし)

(記者曰、毎々言ふ通り古今を通じて好い歌を數多く讀むのが最も宜い修養になるのです、坊間に行はれる和歌作法など云ふ書物は、大抵は好い歌を作る助けになりません、多少の參考にはなるでせうけれど、寧ろそんなものは讀まず、に直ちに名歌を師とする方が歌の修養の方法だらうと考へます、まだ歌集を一册も御覽にならぬと云ふのなら最初に晶子さんの『みだれ髪』など讀んで御覽なさい、それから晶子さんの各集及び新派の諸氏の歌集を渉獵し、併せて古今、萬葉の古きに遡つて歌人還有の趣味をさとり、新しい句法で作つて行くのが順序でせう、)

○麹町、田中英子さんに、女流の俳句を集めた書物は、春陽堂からと、内外出版協會とから出版されてゐます、其外は知りません、(記者)○近江、淑子さんに、寫眞は何枚も同封して目方三十匁毎に郵便切手二錢を貼付すればよろしい、お送り下さい(記者)○落葉子さんに、五十錢の圖書切符を三十錢と二十錢にわけてお使ひ下さるのは勿論かまひませんが、同時に申込まなければなりません(記者)○九月號口繪信濃姨捨山寫眞寄贈者安原富美子とありましたが安坂の誤りでしたから正して置きます(記者)

○お問合せの中て、それで好いと思ひますこと。御あいさつ有りがたく承つたこと。初めての投書だからよくみてくれとのお願み。それ〳〵皆拜見しました、一々お答は申上ません、其代りに御名前だけを玆に掲げて置きます。成田、登子。近江、かのゑ。小樽、堀尾清子。秋田縣、すみれ會。山城、田舍娘。麻布、靜代。鳥取縣、春子。福岡縣、中尾豐子。信濃、賤女。栗田百枝。匿名子。芳子。上田光子。群馬縣、關口和香子。岩代、とよ子。熊谷とみ。常陸、政子。杉山ひさ子。陸奥、夜霧子。KY子。土佐、幽月女。安藝、鈴蘭女。矢野きみ子。

各地通信

○紐育より　誌友の皆樣に一寸お知らせしませう、昨夕、久邇宮殿下及び妃殿下御無事紐育にお着きになりました、只今は五十九丁目のプラザーホテルにお泊りでございます。今月十二日に紐育共濟會の秋季大會があつて、日本人五六百名、舟でロツクランドと云ふ所へ參ります、次に九月二十五日から十月二日まで紐育ハドソンリバーの三百年祭があります、其時は各國の軍艦が集つて來るさうです。日本より櫻の木を三百本送られたさうて、其櫻をイーストリバーに植ゑるさうでございます、ちやうど向島のやうになるでせう、何れ後便て又々おしらせします(紐育、甲野、竹田)

品物交換

○皆樣、私の手許に、未だ新しい琴(十三絃)中絃と、ヴアイオリン、原價弓共、拾圓のが、今年の九月に求めましたまゝ不用になりましたから他の物と、御交換下さる方は御一報下さい、また御ゆづり申してもようございますから、御一報下さい(山形縣西置賜郡鮎貝、鈴木靜)○皆樣の中でリボン、シオリ、をおくつて下さつたお方には妾の見苦しい寫眞とそしてヴアイオリン樂譜何か(いろ〳〵ある故)添へて御禮致します、しかし本誌愛讀者に望みます、(本郷區新花町三十六、富田樣方渡邊三枝)○水彩畫、栞等を送つて下さい、お禮は肉筆の繪ていたします(千葉縣山武郡鳴濱村白幡八一〇藤田すみれ)○寫眞、栞、ひじつきなど澤山送つて下さい、お禮

には地方の歌人俳人書家畫家などの書いたものをきつと差上げます。(静岡縣濱名郡北濱村西美園富永雪子)○誌友の姉様リボン、シホリ。繪はがき、等を送りて下さい、御禮は妾しの寫眞か(四名限り)又は九月號の女子文壇の口繪にある山清絡風景寫眞か(三枚限)秀才文壇か、ハガキ文學を送ります(信州北安曇郡廣津會村、中峰蝶子、十九才)○文壇愛讀の諸姉様、妾れ十字屋樂器店發賣の、舶來バイオリン附屬品とも一切ありますが、不用ですからもし皆様の内に、高等女學校第四學年に入用の、教科書及び附屬具御持ちの方がおりましたら、どうぞ御交換下さいませんか、(茨城縣稲敷郡古渡郵便局内春野富士子)○此月の内に皆様の寫眞御送り下さいな妾の寫眞に化粧品何品でもそへて御返禮致しますわそしてれ雜誌お惠み下されば妾しの寫眞だけですよ(大阪市東區上本町九丁目一五三、阪田靜子)○おなつかしき誌友の皆様よ、私は編物が大好なのよ、姉上様方の内でお持ちの方は、おゆづり下さいなお禮は、リボン、エハガキ雜誌等で致します、其内特に樂しき方二名にかぎり私の寫眞をそへて差上ます(大阪市南區瓦屋町三番町花岡カツエ子)○なつかしい皆様私の所にハーモニカ一個御座いますから編物指南と御交換下さいしかしハーモニカは一個きりですから先きに一寸御知らせ下さいいつはりは決して致しません(東京府下西多摩郡青梅町仲町中村つれ子)○妾の手許に、ヴァイオリンの不用がおります魔風戀風、コブシ、乳姉妹、金色夜叉、己か罪、紫子、等送つて下さる方へ御讓り申ます。(岐阜縣加茂郡黑川村中切入竹多満江)○誌友の皆様私の手許に上等賜琴譜付箱入で中古のがありますから皆様の中で手風琴御不用の方は交換して下さいなゆずつて頂だいてもよろしいのよどうぞお願ひいたします。(向しま寺島幸枝子)○誌友の皆様、私の洋琴中古のがありますお讀み古しの小説と交換を願ひます前以てお手紙にて下名へ申入れ下さいもし多數なれば足利絹端書にて御返事申上げます。(栃木縣足利郡毛野村大字北猿田小泉松子)

問合せ

○石本かずの様　金澤市實船路町七〇鈴木森正様方でゐらしやると云ふことでした幾度も御手紙出しても返つて來ますの御存じの方はお知らせ下さいませ心配して居りますからどうぞお願ひよ(三重縣鈴鹿郡關町字中町梅辻きよ子)

○山中みき子様　現住おしらせ下さい御存知の方はお情けを以てむしらせ下さい(東西女)

○平山紫泉様　本誌々友の豊後國臼杵唐人町の平山紫泉様は如何遊ばしましたか御存じの方は恐れ入りますが本誌上にて御知らせ下さいませ願ひます。(越中、しげ子)

○宮地蝶子様　貴郎はもしやお眼が惡ろくつて棚橋先生の處へお通ひ遊しませんかもしそれなれば私も眼が惡ろくつて通つて居りますのよ。(名古屋、戸崎友子)

○種田はる子様　私は去る三月大阪へ參りましたが病氣で又空氣清い此里に歸りました好きな本誌は如何に身が變化してもはなすわけにはまいりません大阪の師範學校へ通學遊ばしてゐる種田はる様お葉書大阪へ置いて來て了ひましたのでお所わかりません御知らせ下いさな(神奈川縣久良岐郡六浦莊村三分皮川、木村涙花子)

持つてゐる書物
讀みたい書物

○辭典其他　私の手許に女學世界ハガキ文學新文林女子文壇(一年分洋裝合本)、旅行とスケッチ、水彩畫手引、スケッチ畫集水繪、小品時文自然と人生、磯馴松、新詩辭典、辭林、日本大辭、英會話雜語句詳解、美文精選、熟語中辭林、ハムレット、黄菊白菊、スバル數冊、バイブル等其他實用女學講義及び教科書も澤山御座いますから皆様の言海、樗牛全集、紅葉全集藤村詩集漢和大字典、ことばの泉、數學速成講義録と交換をして下さい、他に私は習字速成練習帖、繪ハカキ、舶來數十枚、景色二百枚、肉筆二十枚ばかり御座います、御交換して下さる方は必ず私のみにくき寫眞とリボン或は手製の栞を御添へつけして差上ます。(北海道小樽區柳川町六丁目、岩村方、關蝶子)

○音樂　皆様の内音樂趣味持つてらしやる方がありましたらどうぞ離れ島、配所の月、胡蝶露營の夢などの内一册でもよろしうございますからお送り下さいまし、古くともかまひません、オルガン獨習なお持ちでしたらどうぞ、皆次第私も久留米高等女學校歌、しづか、影、我國兵士、大塔宮、想起、秋の夜、流れし宿の内お望のなどれ丈でもおくります、御願ひ。(久留米市荘島

町新町福田方、大石桃子）

○印材と交換　誌友の皆樣方よ妾は小說が大好ですから御送り下さい御禮には甲斐名產水晶印材をお送いたしますですが印刻御希望の節は別に御相談いたします手許にない小說は數あり ますが中でも心と心、女夫波、金色夜叉、男三郎、己が罪、寬風戀風、模範町村、學生の夢、若葉影、其他新小說を願ひ升。（山梨縣東山梨郡中牧村中尾岡政子）

○小說類　私の手許に水彩畫法女性と趣味、歸雁の渡、新約物語、素人診斷學小公子。全原濟、いたづら小僧日記、水彩及油繪畫法、小說露子、英語獨修全書などが不用ですから皆樣の內で金色夜叉（紅の六）、處美人草、青春、女夫波、虛榮、嫁淵、コブシ、寬風戀風などがありましたらば御交換下さい、小說類なら何でも：……。（河內國南河內郡高向村三浦敏江）

○お伽花束其他　皆樣の中にお花束がございましたら藤澤利喜太郎編纂の算術小數科書上卷に少女世界が增刊の白ゆりの卷等をそへ同假にして御禮致しますからお送り下さいな又女學世界の增刊滑稽智惠競べが御不用でしたら私の女學校用新習字帖卷三と御交換下さいれ ほんとにお願ひてすから（山城乙訓郡久世村字上久世、風間ゑい子）

○譜　島崎赤太郎先生の、オルガンれん習書（一、と二）及びマーチの本お持ちの方はどうか御送り下さいませ如何程、古く共譜の處がよめさゑすればけつこうてす、お禮は必ず〳〵致します。（東京芝區公園十四號ノ二山下花奴）

○呪はれたる女　誠に申兼れ候へ共皆樣の中に「呪はれたる女」御所持の方は御讓り下され度候、御禮は、編物（栞）新作家にて致候。（越後中蒲原郡割野小學校內、白露生）

○增刊　御なつかしき皆樣、始めて本欄にて御あいさついたします。以後御交際を……また妾の手許に文壇の花、新美文、及び本社發行の短篇小說の不用がございますから皆樣の御手許の新作家女學世界增刊、心の日記、心の秘密と御交換下さいませんか切に御願ひ致します、高崎市內の御方なら更にうれしう御座います。（群馬縣高崎市田町一〇二番地、清水貞子）

○詩集其他　手元に藤村詩集新體詩作法明治一萬句新詩文文話詩話など不用になつてゐますから皆樣の中に我輩は猫である玉蟲運命獨步集等不用なのがあれば何なりと御交換を願ひます。（德島縣麻植郡上浦村上野浦銀子）

○主に小說　誌友の諸姉樣妾の手許に、金色夜叉全、肉彈、青春全、眉山全集、紅葉全集四、不如歸、寬風戀風、貴族の戀、コブシ乳姉妹、夏人の自白、夫人の自白戀と戀、戀か夢か、少女の煩悶、戀の山賊、ト千萬堂日錄、女波男波、バイロン詩集、女學生、烟、天うつ波、ふところ鏡、巖窟王、山と水、嗚無情、天地有情花鳥集、椿姬八犬傳、呪はれたる女、女性と趣味、己が罪、浮世車上下等がありますから姉樣の內に今年一月より前の女子文壇、笑の國、忘れがたみ、ひとりぼつち、悲戀悲歎、千山萬水、戀の繪はがき、一年有半上下、歐山米水、洋行土產、南船北馬上下、關東の山水あめりか物語、割子集、屋、中村

不折君著の水彩繪手本全、良か不良か、大暗愁上下、行雲流水、處美人草、御持ちの方は御交換下さいませんか先着五名には私の寫眞をあげてよ不實な事はちかつて致しませんよ。（茨城縣稻敷郡古渡局區內、不樂村露子）

○女子書類其他　日本婦女川文。女學生の栞。女學生氣質。普通小文典。近世理化示教。香川習字帖（楷行草）各一部、考物一千題。新春夏秋冬の秋の部。青山白雲。名山勝水、愛山小品文ノ二。したわらび。文學概論。三十八年度博文館の代數之部。（十四冊全部）及び趣味新年號。全國評號。新小說新年號。江湖。などが妾の手元にありますから品子先生。薰園先生。柴舟先生。葉舟先生等の歌集か又は泣菫。有明。白秋各先生の詩集と御交換をお願ひします猶ほ種々の紀念繪葉書もありますから何かと御交換下さいナ（千葉縣安房郡北條町長須賀、宮本みち子）

○私の手許に、ローマ里見八犬傳、紅葉全集、小說ハイカラ令孃、後の不如歸、あしわけ舟、女樂師、濡衣、不如歸、短篇小說集、其他雜誌書籍も澤山不用になつて居りますから、御入用のお方へ上げます、されば皆さんより編物ハンカチ、リボン、英語書籍を送つてよ一日も早く申し越されたし。（若松市中六日町宮原樣にて小濱）○誌友諸姉上樣中學文壇七月一日發行二百七十號を送りて下さい御禮には第一着の方には寫眞とりボンを差上げます又二着以下の者へは四十一年の女子文壇か秀才文壇にて（信濃國北安曇郡度沖金村、中峰蝶子）○誌友の皆樣、私の手許に文學世界、秀才文壇、中學文壇、婦人世界、其他文學雜誌三十册計しありますから、婦人畫報、

婦人くらぶ少女世界、少女等と交換を願ひます。但し如何ほど古くとも差支へはありません。(千葉縣夷隅郡千町村須ヶ谷鵜飼一枝子)○読友諸姉様の内に己が罪(全部)乳姉妹、魔風戀風、月しろ(上下)金色夜叉がありましたら妾の日用家庭顧問血涙留日記處世訓、短篇小說傑作集(以上最も新)等交換して下さい。(横須賀市稲岡町七、森篠五郎方土方時子)○どなたか學の本をお持ちの方はおゆづり下さいませ、女子文壇、婦人世界など、交換してもようございます(羽前西置賜郡長井町、佐藤ます子)○満天下の本誌愛讀諸姉樣、妾の手元に小猫、新不如歸續編、懺悔、武勇譚談十二冊、女子文壇十四冊、新文林七冊冒險世界五冊其他古雑誌夥多有りますから皆さんお持の地方雑誌(古くても宜しい)と交換して下さいませんか着本次第妾の方からもお好みのものを送りますから屹度ですよ。(磐城國相馬郡上眞野村横手、藤崎花枝子)○読友の皆様へ御願ひ申します、私は小説、魔風戀風、ハイカラ令嬢、紅葉全集、天打つ波、響、呪はれたる女、青果集が讀みたいのでございますが御持ちの方は御送り下さいませんか、其御禮としては今私の學校で流行して居りますリボンの束、二冊以上の方々には舶來の繪葉書を添へて差上げます(東京市赤坂區氷川町九番地福島癸代子)○読友皆々樣私の所に新約全書詩篇附、明治才媛美譚、小說菊池幽芳著の探標が不用になつて居ります故諸姉様方の何か御不用の本と交換下さいませんか然しあまり勝手ですが始め往復はがきにて御一報を願ひます。(山口縣阿武郡萩町平安古二丁目須子照子)○姉上様方の御手許に不如歸己が罪後の不如歸新不如歸續子夏子其他面白き小說がありましたら何卒何卒御惠みくだされませんか相當の御禮は屹度致しますよ尚郵便古切手に御心のある方は御交換を願ひます。(近江國甲賀郡多羅尾村千八百八拾番地平田しげ)○皆様妾の許に世間、乳姉妹(上下四冊)不用でありますから諸姉様の不用書と御取換下さいませ(靜岡縣榛原郡萩間村東萩間字荒川水野甚作方秀子)○皆様の中で小森先生の短文軌範、新詩辞典譯御所持の方は下記へ御送り下さい私のにせ紫上下、幻影、戀慕流しの中御望みのと取り換へて下さいませ(尾張國海西郡十四山村大字鳥ヶ地十六番戸宇佐美鈴江)○おなつかしき皆様の中に、十大德致家傳品性の勢力、逆境離脱術。子供の研究、幕末勤王烈士手翰抄、大隈伯百話。交際術修養、文章大成、米國史、新撰家庭の料學小說ては左二冊宛人の妻、雌龍雄龍。女華族磨擦子、寒菊。白頭女、神出鬼沒。心の波。浮沈美丈夫。麗子夫子。嚴窟王無名城。大暗礁次は一冊宛天界の現象。人類界の現象。新式地文學。天文講話。今村著地震學。支那文典お持のお方は私の持つて居る玉藻。西洋小說では洋綴。芙蓉藻片手美人、英文の玉手箱。妾の罪。支那奇談集。日本治罪法。無錢旅行。新婚旅行。秘密の怪洞、實地應用美術的男女自宅職業獨案内。實地應用催眠術精神實驗法。骨皮道人八ヶ卷。心理學摘要。幻妙不可思儀奇術、全集飼育蠶業全書。寫眞術質問百談。物理學。實地怪談新百物語。新典琵琶明吟集、寫眞入化粧の友。化粧の栞成功座右銘。界の明星。教育の實際。田園の趣味、土佐日記。植物採集法。新美人法。右何れ成共御交換の程願ひ升(靜岡縣引佐郡奥山栃窪高田モト子)○讀者諸姉の許に七月一日發行の實業少年九月一日の葉書文學四十二年度官立諸學校入學試驗問題答案御所持之方は御惠み下さい妾しの自然と人生戀と戀響百日速成作文獨習術六十日卒業算術自在中學世界八冊新文林十冊本誌七冊婦人世界六冊の内隨意に望の書物で致します(常陸國金沼津郵便區内芝崎新田稲荷街辯潟本光子)○妾には「文章講義錄」「文章新辭典」「新文壇」「新國民」「秀才文壇」「小說二家族」など又澤山有りますから御入用之方は自身御寫眞添へて御申越直樣發送します猶妾からは當地御料牧場の牧畜繪葉書一組宛進上します。(千葉縣下總國三里塚荒井くみ子)○皆様の御内に婦人世界の増刊結婚の卷御持ちの御方は御惠みくださいましきつと御禮は致しますから(新潟縣刈羽北條村大字東長鳥金塚傳左衛門方癸代子)○読友の皆様よ妾の手許に左の不用書があります、少女の戀、露子、魔風戀風、相思怨、思ひ出の記金色夜叉の歌などあります、皆様の手許の、乳姉妹、コブシ、櫻子などと、交換して頂戴(岐阜縣加茂郡黑川村中切竹内奥村敏子)○紅葉全集第六卷。一葉全集終篇金色夜叉、コブシ、青春吾輩は猫てある、良人の自白、三四郎、お持ちの方はわたくしのヴアイオリンと御交換下さいませぬか但しヴアイオリンは眞新らのまゝでございます。(大阪市北區上福島中四丁目二一七ノ一玉置様方静)

○皆様の内で、青春、夏子、裾野、其他小說なら何んでも送つて下さい妾の手元に徒然草、秋深の「かこひもの」「學生立身要鑑」其他いろ〱御

臨いますから送ります。(上總刈谷局内千町須ヶ谷、鶴岡一枝子)〇誌友の皆様の内「百海」「旅子」「夏子」「呪はれたる女」「ハイカラ令孃」「鼓髭細工物全書」「女夫波」「戀か夢か」「嫁がふち」「雪」「麗子」御もちの御方は何卒私の「女夫波の歌」「乳姉妹の歌」「清風草紙」「幻妙不可思議奇術」「新美人繪葉書」「月の桂」等と御交換下さい(千葉縣舟橋町川島はつ子)〇皆さんの内で新聞雑誌書籍を交換して下さる方はありませんか(磐城國石城郡穂田町古和田芳江子)〇誌友の諸君妾の許に、小說は五拾七册に、講義録は、帝國習字學會繪畫部の、繪畫講義録と、大日本繪畫講習會の洋畫講義録と、繪畫講義録と、ありますが不用ですから、諸姉御持の、女學校用教科書又は、女子師範用の、教科書又は、作文教科書の外中等教科書なら何の教科書でもよいから、交換を願ひます。(常陸金江津局内戌渡新田山本保子)〇妾は寒村に住んでる不束な者でございますが何卒書籍の交換して下さいまし。新文林四月號より以來、女子文壇二年前の十五六册、去年の中學世界、少年世界、冒險世界、女學世界、ムラサキ、中學文壇、秀才文壇、ハガキ文學等數十册小說では、反魂記、肉彈思ひ出の記、不言不語、深山の美人、忘れがたみ等、其外中等百科辭典、教育勅語斧釋、中等唱歌集、丘生理、藤澤氏數高橋幾何以上新刊等ありますから以外の雑誌小說等とお換へ下さいませ。(安藝山形郡八重村石田トキ)〇永らく病床に臥せる母上を傍て看護しながら御本を讀んでお聞かせすると其間丈け苦痛をお忘れなさるつて被仰るのですが誌友の姉上樣の中で雑誌でも詩集でも小說でも御不用なのが一部でも有ましたら御寄贈なすつて下さいませんか乾度禮狀は差上ます。(東京豐多摩郡中野町飯塚稜威子)〇誌友の諸姉さま古いてすが女子生涯之務中學生文藝倶樂部いろんな本がたくさんあります決して惜りは申しませんから諸姉さま乳姉妹已が罪少女之戀お持ちの方は御座いませんかお持の御方は私のいづれなりと御交換を下さい。(奈良縣磯城郡朝倉村慈恩寺林とく子。)〇私の手許に不如歸、女心、處女の秘密、思出の記、青山白雲、その他色々の小說と博文館發行の淨瑠璃評註全、一葉全集、三體記尋文、女學世界、婦人世界、少女界、少女世界、少女之友、など色々不用ですからお姉樣の金色夜叉、乳姉妹、コブシ、夏子、旅子、など御不用の方は私のととりかへて頂戴ねおとしましたが土井林吉(晩翠)の天地有情、不如歸の脚本(柳川春葉著)の外つまらぬのですけど少々ありますから。(常陸稲敷郡騶柴村騶馬齋藤みつ子)〇私の手許に女鑑、女子文壇などが不用になつてゐますからお望みの方は、リボン、絹物、エハガキ(五枚位)にて申込み下さい直送りますから。又女子の御方で清い交際をして下さい。いつか雑誌を送つたらそれなり返事を下さらぬ方がありましたがさう云ふ方はお斷り致します。どこまでも清き方に(愛知縣東春水野村加藤秋月女)〇誌友の皆樣の内に昨年の三月婦人世界御持の方は何とぞ／＼御めぐみ下さいませんか必御禮には雑誌か小說を御送致しますから。(信州上伊那郡赤穗村 小原すなほ)〇全國の諸姉樣方みな樣の中に初等英語研究書か英語講義録がありましたら私の百日速成作文獨習書西洋歷史上卷附成館チヨイスリーダー一、二、ナショナルリーダー、一、二、英文の資料、添削獨習、辭、小說、破れ戀、女の運命、女難、彼の新不如歸、多情、新婚旅行、戀の罪、初等英語獨習新習文章講義中學講義録等ありますから御交換を希ひます又繪葉書郵信をも好みます(栃木縣安蘇郡田沼町大字吉水五貫久良子)〇誌友の皆樣の中で本年發行の婦人世界女學世界少女の友御持の御方は妾の美人繪葉書名所のある寫眞絹物リボンなど〻交換な願ひます御承知の方は至急送りください御望次第早速送ります。(上總山武郡四天木片岡吉次郎方にて秋金琴子)〇新婚旅行破れ戀新桁婦夫えらみ短篇小說傑作集華族の娘わかき人、愁芙蓉血か不良か後の新不如歸血に咲く不如歸「戀か夢か」未來の裝怨の戀仝後編川上行發(探偵實話)上下多恨女難處女の秘密以上有ります なら何の小說でも宜いから御取換を願ひます。(栃木縣安蘇郡田沼町大字吉水九四松島シナ)〇誌友皆樣の内婦人畫報御持ちの御方がございましたなら分けて下さいませんかお願致します。(大阪市中河内郡瓜破東瓜破村松本君子)〇只今私の手元に學生訓、動物學教科書少年文庫、日露戰爭記普通看病學、女學世界、婦人は結婚すべき乎、原田甲斐等御座います皆樣のうちで、八犬傳、源氏物語とお交換下さいな、其他の小說でもかまいません、(山口縣吉敷郡大内村小野古谷藤野)〇誌友の皆々樣私の手許に種々の古雑誌がありますから御玉章下された御方に返禮として差上げます(千葉縣夷隅郡大多喜町森宮、篠瀬紫翠)〇皆樣の中に本誌七月號か又は短篇小說、婦人畫報臨時、花の姿、女學世界臨時書く手紙、等

お持ちの方は私の持つて居る桂月文集雜木林、少年餘作集、女學世界、女子文壇、少女世界、等お望みの物を差上げますから御交換下さいませんか（茨城縣下妻町、平澤きい子）○皆樣の御手許に夏子雛子己が罪、乳姉妹、金色夜叉、月魄、嫁が澤御持ちの御方は妾の西洋音樂史、新撰謠式、新不如歸、新ほとゝぎす、戀の行末、英雄の道樂、少年武士道模範譜流秘傳生花獨稽古其他種々の雜誌と御交換下さい（京都府加佐郡由良尋常高等小學校川崎艶子）○誌友の皆樣私の手許に、小說、人の妻、おのが罪、間一髮、懸芙蓉、怪物屋敷等不用になりて居りますゆゑ女學世界增刊、心の秘密、魔風戀風おもちの方は、交換して下さい（山口縣玖珂郡余田村竹内伊志子）○皆樣私の手許に小說すみ子、むこえらみ、おてんば娘日記、露、新聲押川の小說など御座いますから皆樣の御姿と御交換下さいませんか御妹さんとか從妹樣とかの可愛らしいのでもよろしうご座います たゞし東京市内の女子の方に願ひます（日本橋區箱崎町四ノ一征本樣方きみ江子）○誌友の諸姉樣方よ繪葉書玉章雜誌等の御交換を願ひます尙皆樣の許に今年の六七八の三ヶ月分の新聲、女學世界、婦人世界右一册にてもよろしく御送の方には太宰府名所一册差上升（福岡縣博多下堅町六番地の二、中野さかゑ）○私の許に婦人世界、婦人くらぶ、文章世界、女學世界增刊心の秘密、處世百話、避暑號、太陽、等御座いますから諸姉樣古今欧集と御交換下さいませんか又不束者ですが御交際も御れがひ申ます（栃木縣足利町福居町丸山房子）○諸姉妹樣の御手許に、弦齋夫人料理談。六段の讀、淀君、小弓御所、乳姉妹、横笛の傳、女殿下、神稲水滸傳、深山の美人、配所の月、俠男兒上下、德川大奥、淸少納言、家庭小說、等御持ちの方は、妾の、己が罪、初子集、孝女白菊、婦女の玉章、汽車の大賊、眞田幸村、石童丸、女鑑、婦人世界、女子文壇、英語六ヶ月卒業、其他、數學書や女學校の本など澤山ありますから、御望の本と御交換下さいな、先着の方御二人樣には、御望みなれば妾の見苦しい寫眞を添へて御送り致します（伊豫國宇摩郡蕪島村篠原ゆみ子）○誌友の姉樣方妾は寫眞交換は尤好きよ送つて頂戴な御送り下さる御方に妾寫眞に付け女子文壇女學世界少女界小說は夏子、雛子、不如歸ハイカラ令孃魔風戀風己が罪それに奈良名所繪葉書をそへて御禮いたします（奈良縣山邊郡和村宇長柄四、山崎やす子）○戀しき路頭樣よ妾の手許に教育的心理學、舊約聖書創世記、中外今古英雄軍談、小說嫁と姑、不如歸、心の鬼、生花と茶の湯戰爭と文學、文藝倶樂部、新小說、花吹雪不如歸涙子歌、接吻詩集、乳姉妹の歌等其外美人繪葉書、上總名高き一ツ宮玉前神社及び海水浴の繪葉書九十九里繪葉書など不用になつて居りますから皆樣の中で不用の書御持の方は御送りください早速送ります（上總九十九里濱四天木局内山廣子）

繪葉書を好む

○私文壇で繪はがきの交換をお願致しましたら來るは〳〵四方の諸姉樣より中には男子の方もありましたから兩親や兄に知れましたら大變てす此後男子の方は斷然御免を蒙ります（佐世保山下靜枝）○先月誌上で寺社の印影有る葉書を御送り御願ひ致しましたら澤山の姉樣たちから御送り下さいまして有り難うございます何卒此後も續々御惠み下さらん事を一重に御願ひ致します御肉筆の御交換も御願ひ致します大阪市北區堂島濱通り四丁目二二 龜田方國近みどり）○誌友の諸姉兄樣何卒名所繪葉書の御交換を願ひます先着二名樣には（足利名所案内）を一册宛送ります（栃木縣足利町柳田幸吉方たま子）○壇友諸姉樣ヱハガキや寫眞の交換を願ひます必ず金澤名所のヱハガキでお禮いたしますさよなら（金澤片町柴川屋方後藤芳子）○私は繪葉書が大好きです、どうぞ皆樣の内に澤山御持の方があつたら送つて下さい。御禮にはやはり當地の繪葉書を送りまく。それから、皆樣の内に寫眞器の不用のが有りましたら私のヘモニカ（舶來）と病習書一册ととりかへて下さいどうぞ御れがひてす、そのときは前もつて葉書で知らして下さい。（千葉縣夷隅郡千町村須賀谷鶴岡園子）○私は極く〳〵の山間僻地に佗住居して居る不束者至つての繪端書好きてすのよけれど斯かる山間の事とて繪端書を求める事も出來ません御情厚き諸姉樣方よ、哀れと思召して何んな繪端書でもよろしう御座いますから御惠み下さいませ（岩手縣岩手郡田頭村箱坂くに子）○妾東宮殿下御覧野馬追繪葉書及び曾通野馬追繪葉書澤山持つて居ります古雜誌類と交換して下さい（磐城國相馬郡上眞野村大字横手藤崎花枝子）○誌友の皆樣方よ、妾は、繪葉書が、大好きですから、どうぞ、送つて下さい。決して只取は、致しません。どうぞ、送つて下さいな。十枚送つて、下

さつた、方には、婦人世界か、女子文壇、又は、女學世界かにて、御禮を申上げます、但し二十枚以上送つて、下さつた方には、洋畫講義錄か、繪畫講習錄にて、御禮を、申上ます。(茨城縣稻敷郡柴崎村戊渡新田山本三造方仲子)○私は時々兄樣に笑はれます、繪葉書好きですから三度の食事も忘れてつく〴〵見て居るのですもの誌友の姉さま方是非御惠送下さいな必ず御返禮はいたしますからね(遠江國榛原郡萩間村大寄庄太郎樣方島花子)○本誌友の皆樣よ、私の手許に、外國制、英、清、米、獨、露、官制紀念切手スタンプ付、其他名所、紀念、色々の繪葉書の不用が澤山あります、お望みのお方へ贈りますよ、誰れでもいゝから御申込みなさい、さはれ皆さんより寫眞、仕折、リボン等を送つて一先着數名まで私の紀念一大額面を添へて送ります、(若松市中六日町宮原方にてYMあて)○繪葉書に立秋の句にて俳句や和歌を五句以上拾句迄書いて御送り下さい屹度御返禮は致します(岐阜縣加茂郡黑川村大字中新田鷲見鐵彌樣方春野秋子)○誌友幾萬の諸孃樣よ各地名所の繪はがきの交換を願ます御交際を願ます御禮として我が舞鶴軍港及宮津の各名所の繪はがきを差上ます(京都府加佐郡新舞鶴町五條八島通り香河平造方倉澤誠)○未使用のエハガキ玉章の交換を願ひます寫眞の交換も願ひます(鳥取縣西伯郡大國村字原渡邊よし子)○觀兵式記念葉書甲種(二元帥六大將の分)御惠みの方へは小説又は各種繪葉書にて屹度御禮申上ます(廣島市國泰寺村一一二森本力内海敏江)

交際を望む

○**就職中の方に**　皆樣のうちて、小學校敎員か、郵便局員、電話交換手、切符賣、何でもよし只今職業に就いて居られる女子のお方に御交際をお願ひ致したう御座います。私は、女學校卒業後一年間敎員をしましたが、此春から遊んて居ますので、何か職業に就きたいと思つて居るのです。東は東京から西は神戸迄の間の土地なら、どんな田舍てもよし、良き所があつたらお知らせを願ひます、但し成るべくならば、郵便局が好きてす(三重縣四日市仲町六十三番地藤田とみ子)

○**和歌同好の方に**　私は歌が大好きてす、そして與謝野先生の崇拜者なのよ。本誌の紹介に依つて「佐保姬」を購つて見ました、修養の淺い私てすから意味も能く分明りません、けれど讀んて何となく心地ようご座います。その中の一首擧げますれば『くろ髮の上に羽子舞ふ街すぎて、君來る春となりにけらしな』先生てなくば詠み難い境だと思ひます。同好の方は是非今後歌の御交際を願ひます(牛込區南山伏町十八番地、吉田方塚原けん子)

○**心の底からの親切**　諸姉樣よ私は表面だけの親切は大嫌ひ、心底から親切をむねとし互に自作物の歌、文、句の添削をしあふて交際を願ひ度のてす(伊勢桑名郡古美村瀨木矢枝子)

○**牛込平塚白百合樣**　貴女は女學世界へもよく投書なさいます方てせう私何故かなつかしくてなりません誌上てゞ貴女のお名前が一番よく頭に上りますの如何したのてありませうか、御寫眞はたしかに誌上て拜見したと思て居ますがれたしかに出て居ましたてせう(山口縣花月子)

○**德島の吉田紫花樣**　私何故か貴女がなつかしうてたまりませんわ、私は草深い田舍に生れて敎育も何もありません賤しい女てすが眞面目な交際が願ひたう御座います、伯耆の竹本春江樣、貴女のお作にはいつも感心して終ひますおさし支へがなければ御住所を委はしう承りたう御座います(鳥取縣岩美郡美保村大字吉成村安木はる子)

○**種子**　諸姉上樣私の許に草花の種子あり、入用の方は一錢切手二枚送られよ(美濃加茂黑川鱒淵廣瀨舍方吉田れん子)

○**同名のお方に**　誌友の諸姉樣のお中で十八九歲か二十歲て文學好きの私と同名のお方は何卒永久に御交際を願ひたうご座います。(麻布富士見町九、池田君子)

○**大火御見舞拜謝**　先般の大火罹災の節に御見舞下さいました方に延引ながら御禮申上ます(大阪西野田玉川町四三六、平尾とき子)

○**敷島の道**　御面はそれと知られども敷島の同じ道ふむ誌友諸孃よ不束なるもおかまひなば何卒御玉章給はれかし(山口縣吉敷郡大內村矢田、棚見美奈子)

○**廣島縣の方に**　皆樣の內に廣島縣のお方が居られましたら何卒御通信下さい、尙縣下にて發行する新聞お送り下さいましたら相當のお禮はいたします(大阪堂島濱四龜田方すみれ)

○來る新年號は紀念として紙數二倍の大册子を發行す

本誌創刊

滿•五•周•年•

敬愛する讀者諸孃の承認せらるる如く、わが女子文壇は來る明治四十三年一月一日を以て、創立滿五箇年に相當す。顧れば五年の星霜短きにあらず、此間着着として本誌の基礎を固め得たるは、全く誠實なる讀者諸孃の愛顧に因れり。わが社は之に感激して、益す本誌の發展を期すると共に、來る新年號を以て滿五周年紀念號となし、紙數を二倍し、內容を充實し、體裁を完美し、以て聊か此欣ぶべき紀念を殘さんと欲す、わが社は既に之が爲に清新なる材料の蒐集に着手せり。

詳細は十二月號に發表す

特•別•賞

新年號の投稿は必ず多いと思ひます、多 內には必ず好い作があると思ひます、そこで各欄を通じて最も傑出したる作品を選び、此に規定通りの特別賞を差上ませう。空は靑く、氣は淸く、諸孃の頭腦も必ず明晰でせう、此際振つて一生懸命の傑作を投じ記者を驚かして下さい。

新•詩•句

新年號から新歌謠欄を發します、其代りに新詩句の一欄を置きます、新詩句に就ては皆さんにも經驗のないことですから、一言說明します、つまり口語の詩の一句のやうなものです、又口語の俳句のやうなものです、俳句は何うも形式にも內容にも囚はれ易く、皆さんも新しい思想を俳句で表はすことがむづかしさうです、そこで新詩句を募つて、俳句のやうな短い形式の新詩を試して見ませう、必ず十七字とは限りませんが、成るべく節調の附いた引締つた詩句を作つて下さい、初めの間は一人五句限り投じて下さい。

餘•興•の•課•題

從來本誌の特色として愛讀者諸孃に歡迎されつゝある「餘興」欄は更に嶄新奇拔なる題を設けて諸孃の雋才を試みたいと思ひます、題は

わがアルバム

皆さんは繪葉書帖を一册づゝお持てせう、そのアルバムのことを書いて頂きたい、殊に目出度き新年に於てアルバムの話に興味があらうと思ひます、中に挿んである繪葉書のこともお書き下さい、珍しい繪のことや、面白い文句や、又成る意味のあるアルバムの由來も宜し、何でもアルバムに就いてのことを能く考へて書いて下さい、長さは十六字詰、二十行內外特に總振假名をつけて下さい。

○新年號各欄の投稿は本月十五日を以て締切とす

○高女卒業の方　私は本年三月秋田高等女學校を卒業いたしまして年齢は數へ年十八歳で御座います高女御卒業の方で年齢の大差なき方と御交際を希望いたします（青森縣西津輕郡鰺ヶ澤町鈴木康子）

○親を失ひし方に　私は今年の六月、お父樣に逝かれてから、淋しく世をはかなんでゐるものですが、皆樣の內で私同樣の方がありますなら、潔白な御交際をいたしたうございます。それして双方で双方の慰籍者となるのです。私は和歌俳句狂ですから斯道の交換などは、悲觀してゐる私には、第一の慰籍となるのです。但し初信はお玉章でれ（會津若松南町新屋三三九山倉御宅にて樋山伊勢子）

○皆樣へ　おなつかしき皆樣寒くなりましてれ、御變りなくつて？私は至つて丈夫で友なき里に女子文壇を唯一の友と思つて傍ら針の道を辿つて居りますのヨ。じやア皆樣御躰お大切に遊ばせ、左樣なら、（北海道北見國網走町南通り宮本鯛子）

○痔の妙藥　私宅に痔に特効ある家傳の妙藥があります賣藥てはありませんが是迄て方々の人に惠みましたら十人の中八人迄ては全快したと云ふて禮を云はれました諸孃樣の中ても又御家の方ても痔の爲めに苦しんて居られゐ樣なら此の藥を上げますから送料として郵券五錢封入の上御申し込み下さい（秋田縣仙北郡大曲町鈴木嘉之助樣方菊子）

○歌を好む　私は非常に和歌を好んて居ります者。誌友の皆樣のお中にて同じ趣味をお持ちのお方は宜しくお交際をお願ひ申します。歌集の御交換もお希ひ致します。（京橋區木挽町三丁目前澤黄菊）

○報告　本誌々友青木靜山（おや子）は二十歳を一期として死去されました、御存知の方におしらせします（沼津友）

○文の下書　本誌御愛讀の姉君たちに御願ひ申ます私は至つて文筆の拙い者で情けなくてなりませんよつて皆樣の中に御同情よせて敎はる方が御座いましたら御美しい御文の下書きても御有りてしたら是非おめぐみ下さいませんか、（越後糸魚川町木島操）

○ヴアイオリンお好みの方へ　御願ひ申ます妾は會津の深山に住む賤女てす語らん友とてもなき淋しさに昨年よりヴアイオリンの獨習をして居るのてすが何ともわからん處があつて困つてゐます此の音樂御知りの姉樣よ何とぞあはれと思召して御交際してくださいれ、可成本縣の諸姉樣へ（福島縣河沼郡飯谷村藤小瀧みちゑ）

○東京横須賀　諸姉樣妾は誠に淋しき月日を送つて居ゐ者てす何卒東京又は横須賀の方で御厚情深き姉樣方に封書て親密に御交際を御願ひ申ます（東京日本橋區本町一ノ十四莊司方高橋照子）

○御禮　本誌九月號に望みましたる（聖書及び歌）皆樣の御情で幾重にも相成りましたのは私の深く感謝する次第で御座います此の方々にはもとより、御問合せやら御交際やらて御玉章下さいました御方にも一々御返事を差上ました筈てしたが何しろ多數の事故或はもれて失禮したのもあるかも知れませんので誌上を拜借いたしまして再び厚く御禮申上ます（越後井上貞子）

○おたづれ　大內たけ子樣は六月發行の文壇の口繪に野州誌友にてありました處に向て右より四番目大內たけ子樣にてばたしか五六年前鹽谷郡寶勝寺と云ふ處より氏家小學校へ通學した方てはありませんか左樣てしたら何卒親密なる御交際を願ひます若し人違いてしたら御免遊ばせ（在米國にて阿久津波子（H. Akutsu, 1623 Buchanan St. S. F. City, Cal.）

○例によりて全國各地の方愛讀諸孃から淸き交際を望むと申込まれた方の姓名と住所を左に揭げて皆さんに御紹介いたします。

○北海道小樽區若松町四四淸田方、淸田芳枝。
○神戶市旭通五丁目百拾番、細川みのる子。
○京都市堀川通今出川上ル、要司村福子。
○神田區錦町二ノ三久世方、大輪美智子。
○府下寺島村四八高橋信輝方、菊地芳子。
○長崎市東濱町一四、池田薰。
○秋田縣北秋田郡大舘町、平泉よれ子。
○羽前西置賜郡十王村、平眞津子。
○茨城縣眞壁郡下妻町鯨井方、鯨井ふさ子。
○京都府紀伊郡上鳥羽村田中祐二郎方、井上こう子。
○茨城縣新治郡田舍村上玉里、須崎せい子。
○小樽區色內區一〇ノ一中田方、松尾秋子。
○横須賀市稻岡町七森鐵五郎方、森時子。
○德島縣麻植郡上浦村、上野浦箏子。
○越後刈羽郡北條村字東長島金塚方、美代子。
○千葉縣檢見町稻毛八四二、石塚澄子。
○三重縣鈴鹿郡關町字中町、梅辻きよ子。
○茨城縣筑波郡大穗村大字君森、尾見秀子。
○福島縣相馬郡中村町字多川町、齋藤くに子。
○熊本縣鹿本郡植木町、森永浦子。
○深川區富川町十番地、後藤雪枝子。
○神奈川縣横須賀市稻岡町四六今井方、笹森武枝子。
○群馬縣佐波郡赤堀香林、町田とう子。

雜報

伊勢皇太神宮遷御

二十年每に御新造の定めなる伊勢皇太神宮は今度第五十七回の御造營成り、十月二日午後六時臨時祭主久邇宮多嘉王殿下、勅使岩倉掌典長、平田內務大臣以下參列、いと莊嚴に執行はれました、又宮中に於かせられては、同日午後八時、天皇陛下御束帶にて神嘉殿南庭に出御御遙拜あり、畢りて皇后陛下並に東宮同妃殿下の御遙拜あらせられたるやに洩れ承ります。

○伏見若宮妃殿下御渡歐

伏見宮博恭王妃經子殿下には、九月廿五日橫濱解纜の獨逸郵船プリンツアイテル、フリードリツヒ號にて御渡歐の途に上られましたが、十一月二日伊太利ゼノアに御上陸、巴里を經、倫敦にて博恭王殿下と御會合あり、夫れより英、佛、獨、白、西、伊、墺、瑞、蘭の各帝室御訪問後、米國に御渡航明年秋御歸朝の御豫定ださうであります。

○愛國婦人會の近事

愛國婦人會では曩に辭職の理事岩倉久子外三名の補缺選擧を行つたところ、子爵夫人阿部篤子、男爵夫人濱尾作子、三輪田高等女學校長三輪田眞佐子、東京高等女學校長棚橋絢子の四氏當選、更に從來の理事と合せ十名中より選擧、多數にて子爵夫人岡部抵子氏が會長に當選になつたとのことであります、同會最近の調査に依れば、特別會員七萬五百九十四人通常會員七十一萬三千三百七十八人合計七十八萬三千九百七十二人、外に贊助員が一千六百十三人だ相であります。

修正された『若き婦人の男子に對する心得』

九月廿八日午後四時より帝國敎育會に於いて開かれた女子敎育家懇話會は、男子三十餘名婦人四十餘名出席、今春原案として提出の『若き婦人の男子に對する心得』を逐條審議の上、左の如く修正可決せられたさうであります。

一、凡そ男子と面接する場合には適當なる同席者あるを要す若し止むを得ずして單獨にて面接する場合には打開きたる所に於てすべし。

二、單獨に居住する男子を訪問すべからず。但し止むを得ざる場合には適當なる同行者あるを要す。

三、漫に青年男子と文通すべからず、又未知の人より文書を送られたる時は自ら開封せずして適當なる保護者に差出し其の指揮を乞ふべし。

四、男子とは漫に寫眞其他物品の贈答をなすべからず。

五、日沒後はやむを得ざる場合の外單獨にて外出せざるをよしとす。

六、例令近親の間柄と雖も適當なる婦人の保護者なき家庭には宿泊または止宿すべからず。

七、途上にまたは車內などにても止むを得ざる外未知の男子と對話し又は其の世話を受くべきものにあらず。

八、病室又は取り亂したる室內に於て男子と面接するは禮を失するのみならず自己の品性を傷つくるものなれば最も注意を要す、其他すべて誤解を招き又は間違を生ずべき虞ある場所には近寄るべからず。

九、若き男女のみにて散步遊戲若しくは娛樂等をなすは周圍の指彈を招くものと心得べし、特に監督者なき歐留多會等に出席するは宜しからず。

十、常に其の行爲を愼み自重の心を養ふべきは勿論殊に男子に對しては其言行を謹み、苟も輕侮を受けざる樣注意すべし。

技藝學校新生徒

以前の女優養成所、今の帝國劇場附屬技藝學校は第一期の生徒十餘名の外に、今回第二期生徒を募り、首尾好く入校した者は十二名あります、十月一日同校に於て入校式があつた、新生徒は何れも相當の學力と技藝とを有し、將來女優として起ち得る素地はあるとのことです、中にも宮田百合子孃は三輪田高等女學校全科の卒業生です、現に我國では未だ純粹の女優の位置が出來てゐないので、是等の人々が他日成功した時には初めて女優と稱ふもの丶新面目を發揮するわけです、それ〴〵本人達も眞面目の決心を

持つて居るやうですから、此等の人々に依つて踏襲を脱したる新しい藝術の花を咲かせたいものです、十二人の姓名と其姿とは本號口繪に出て居ります。

双生の閨秀畫家

本號口繪にある閨秀畫家檜垣たけの、全うめよ兩氏は、時を同うし胞を同うして、愛媛縣今治町に生れ本年共に二十三歳の秋を迎へられたのです。

初め三十七年三月本郷の美術學校に入り、後牛込の女子圭文美術學校に轉じ、一昨年四月優等の成蹟を以て卒業後も猶ほ熱心に武村耕靄女史、野村文擧畫伯等に就いて日本畫の研鑚を重ね。傍ら女子高等師範附屬高等女學校教諭伊藤弘一氏に就きて教育學講究の上、本年八月執行の文部省中等教員豫備試驗を受けて、兩人共首尾よく合格、目下其本試驗に應ずる爲めの準備中であるさうです、たけの氏の號は桂月、うめよ氏は楊月と云つて、一昨年の博覧會を初め、眞美會等に作品を出して其都度賞讃を博せられたさうであります。

近松祭及講演會

近松祭は十月九、十の兩日早稻田大學にて開かれました、圖書館には別室に近松門左衛門の畫像と位牌を安置し、香花供物を調へ、閲覧室には饗庭篁村氏藏書丸本九十六種を始め、伊原青々園、帝國大學圖書館、永田有翠、松山米太郎、渡邊霞亭其他十數氏より出品された珍書珍籍二百種に上り、いづれも好古家をして狂喜せしむる程のものだつたさうです。九日午後一時からは近松講演會が開催せられ、水谷不倒、島村抱月、饗庭篁村諸氏に次いで、最後に坪内逍遙博士は『近松對沙翁對イプセン』と云ふ大演題にて約二時間以上に渉る趣味深き講演あり、六時に散會したさうであります。猶ほ本年は巣林子沒後百八十六年に當るさうであります。

西洋婦人新聞

○自動交換局　Hildesheim(プロイセン)で試驗の爲めに設立せられた電話自動交換局は、職員を要せないで電話を繋ぐことが出來る裝置になつてゐる。若しこれが一般に行はれるやうになつたら、女子が切角獲得した職業の一部を失ふだらう。

○すりと胡椒　伯林で十七歳の青年のすりが、胡椒を目つぶしに打つて、女の持つてゐる信玄袋をひつたくらうとして、しくぢつた。胡椒が目にはいらなかつたのである。

○娘を奪ふ　羅馬の田舍にゐる Laplaca といふ富家へ突然「お娘御を戴きたい」と云つて來た男がある。談判の末に三人の覆面した從者を呼んで、娘を馬車に擔ぎ込んで逃げ出した。同胞の男が跡を追つて、拳銃で打ち殺された。

○印度の後家　印度で寡婦を焚き殺すことは大分止んだが、それでも婢にして虐待することは依然としてゐる。一九〇七年にも二千一百萬の後家が出來て、その中には七十萬位若いのがゐた。皆虐待に泣いてゐるのである。

○かもじ市　毎年七月の初にLimoges(佛國)の「かもじ」市といふことがある。村の女が髮を賣りに出るのである。段々直段が高くなつて五年前に頭の毛一ポンド十圓位のが今年は二十圓位になつてゐる。純白な白髮などは却つて一ポンド十圓位したさうだ。

○女囚脫走　莫斯科の女獄から、七月十四日の夜に、國事犯の女十二人、刑事の犯人の女、女看守各一人、計十四人が逃げ出した。

○蛇帽　米國婦人 Joon MacMahon の帽は響尾蛇八疋の皮を縫ひ合せたもので五百弗の價を拂つたさうだ。

○結婚減少　結婚するものゝ比例は獨逸では次第に減ずる傾向がある。一八七二年には人口十萬に對して、千二百二十九組になつた。

○女子營業者　獨逸全國の女子の營業者は八百五十萬人である。

○嫁入保險　Kopenhagen で Wiehe-Berenyといふ婦人が生命保險に倣つて嫁入保險を始めた。四十歳になつて、一人でゐると金を拂つて貰はれるのである。

○瓦斯自殺　伯林で電話交換手をしてゐる女が部屋に薔薇の花を一ぱい蒔いて、裸體で寢て、瓦斯の栓を開けて自殺しやうとした。瓦斯臭いので、宿主の婆さんが氣が附いたので、切角の計畫が畫餅に歸した。此前に同じ準備をして拳銃自殺を爲遂げた、同職の女があつたさうだ。

○一寸用事　Buffalo の富人 Colorado の原を通りかゝると、獨歩で來た女が二人馬上から「一寸用事があるから待つて貰ひたい」と頼んだ。自動車を止めた。女は拳銃で五人の男を脅して、金を取つて、又獨歩で逃げた。

○結婚申込の際　獨逸の小說を讀んで男が女に結婚を申込んだ態度を百分比例にした人がある。

「あなたといふものなしには生きてゐられません」と云つた男	八一%
女の手を取つた男	七二
女に抱き付いた男	二六
平臥してゐた男	二五
一本足で立つた男	三
片膝衝いた男	六
兩膝衝いた男	四

その時の女の態度は左の比例のとほりである。

申込を豫期してゐた女	八七
男の胸に頭を倚せ掛けた女	六八
男の肩に頭を倚せ掛けた女	一二
椅子にぺつたりすわつた女	一一
兩手で男の頭を抱いた女	一一
目に情を含んで見た女	七二
涙ぐんだ女	七
聲を立てゝ泣いた女	四四
花束、ハンケチ、手袋をいぢつてゐた女	二七
兩手で顔をかくした女	一二
最初に男に接吻した女	六
接吻しようとする男に抵抗した女	一
部屋から逃げ出した女	九
ヒステリイ性の發作をした女	五
頭の青くなつた女	三
頭の赤くなつた女	一八
くしやみをした女	一
親に問うて見ると云つた女	三
「後悔なさいますな」と云つた女	一

○女藝人　獨逸の女藝人 Hildegard Hoffmann 藝名 Wonsselli は伯林に支那人の旦那を持つてゐて、Frankfurt am Main に興行に往つてゐる中に、日本人と色になつて、伯林の支那人に縁切状をやつた。支那人がフランクフルトへ出掛けて、拳銃で女を打ち殺した。日本人の名は新聞に載つてゐない。

寫眞を募る

誌友諸嬢の寫眞は勿論、別項記載の各種寫眞を募る、風景の珍しいもの、背景のあるもの、優美のもの、盛粧せるもの、名門名士の家庭など凡て口繪として斬新のものを望む、特に此際新年號掲載用として本月十五日までに優良の寫眞寄附を懇請す、本社に於て優等と認めしものには、揀撰の上、金二圓以下五十錢以上の報酬を呈す。

○象　Bregenz (Bodensee附近) で見世物の夫婦の象が逃げて田畑を散歩したので一時大騷ぎであつた。但し直に捕へられた。

○今死にます　Bologna の某教授の處へ、Geptosa 屍體置場から電話がかゝつた。掛けたのは何とか云ふ娘で、「只今死にます」といふのであつた。教授が電話で留めてゐる中に、銃聲が教授の耳に響いて、娘は死んだと、七月十日の羅馬通信にある。仔細のありさうな小說よりも奇なことである。（「スバル」椋鳥通信より）

十月の雜誌

▲『新小說』卷頭に小川未明氏の『雪來る前』あり、短いものなれど、北越のローカルカラーが出た景情双絶とも云ふべく、一種の神韻が籠つて居る、森田草平氏の『扉』は未完、昇曙夢氏譯原作アンドレーフの『深淵』は斯壇の好資と喜んだ甲斐もなく、是れある爲めに發賣禁止となつた。▲有名號として出た『無名通信』は二百餘頁の大册、名家大家の寄稿や談話で充ちて居る、しかしあまり彪大な爲めか平常の無名號程の辛辣を缺くやうだ。▲『スバル』も頁を増加した特別號である、重もなる作、鷗外氏の『金毘羅』、茅野蕭々氏の『再會』岡田八千代氏の『避暑』、石川啄木氏の『葉書』等、『椋鳥通信』例に依て賑つて居る。▲『ほとゝぎす』も紙數增加、創作及び評論等が附錄になつて居る、畫の多いのが又大變目について面白い。▲『新潮』には眞山青果氏の『初對面』、秋田雨雀氏の『盲目の子』がある、六號活字欄例によりて振つたもの。▲

『趣味』は卷頭に內田魯庵氏の飜譯『エスの十字架』、水野葉舟氏の『狗』、正宗白鳥氏の『銀時計』等見るべきもの多く。▲『新文林』の創作と評論、若々しくみづ〳〵し、▲『秀才文壇』も活氣横溢、一日號には小品が多かつた。▲新詩社から出る『常磐木』は與謝野氏の獨力になり、古歌と新派の歌の講話や評釋で充ちて居る。▲譲れて噂さのあつた『屋上庭園』はいよ〳〵十月一日に出た、紙數卅二頁大形で六號活字で組むである、紙質から體裁からすべて脫俗した瀟洒たるものである、かう云ふ雜誌は是非一つは無ければならぬと思ふ、健全なる發達を祈る。（以上寄贈を受けたるもの）

新刊

○歡樂　永井荷風著

短篇小說集で、卷首にある通り千九百八年七月著者海外より歸りて後一年間の創作を集めたものですが、其多分は本年に於ける努力に成るものであります、卷頭の『歡樂』は眼も眩むばかり華やかな、スヰートなもの、さうして其底につきせぬ悲哀が流れて居ます、この情調は是れのみならずすべてこの著者の特長である、『監獄署の裏』や『曇天』は尤も現代の壓迫に對する苦悶の聲が聞え痛切に讀者の同感を喚びます、『狐』は印象の鮮やかな作、『深川の唄』に時代破壞の哀傷がある、『祝盃』は中央公論所載の時とは少し改められて鋒鋩が隱れたが、猶は血と肉の距離を築じ得ざらしめやう、『春のおとづれ』、『花より雨に』は共に其情調に於いて、詩と云ふべき程のものです、珍重して推奨せんと思つた此書は、發刊後幾干もなくして發賣禁止になつたのは惜しい事でした。製本瀟洒、凝つたものです。（麴町區飯田町易風社發行）

○蝉の研究　西村醉夢著

蟲の研究に熱心なる西村醉夢氏の新著です、殊に蝉のことだけを一册の書物として著はしたのは恐らく是が始めてせう、蝉の身體各部（內部と外部）の構造から、蝉の意識、蝉の變體、蝉の色彩、蝉の鳴聲などを詳しく說明し、皆確實なる科學上の實驗から說明してゐる、單に娯樂的の書物として見ず、家庭に於ける自然科學の智識を養ふには、斯う云ふ子供にも興味を持つ處の蝉の様なものを捉えて敎へるのは極めて宜いとて、其等の參考にも恰好の著作です、白布の瀟洒たる表裝、美麗なる三色版二枚、精密なる木版挿畫二十八面、總紙數菊版二百頁、本文四號活字の讀み易い書物です（定價六十錢、博文館發兌）

○恐怖　岡田八千代著

嘗て婦女新聞に連載して好評あつた岡田八千代女史の小說を一册としたものです、國津と云ふ惑情に脆い油畫師の戀を描いたもので、女性の筆だけに柔かな處があつて、斯う云ふ題材、殊に斯う云ふ人物を描くのには適したやうに思はれました（定價三十五錢、日本橋區通油町水野書店發兌）

○新秋　白柳秀湖著

『離愁』以後の小品『燧火石火』以後の評論文の一部を集めたものです、すべて作者の火の如き惑情が社會の背景に包まれて、或は潜み或は現はれて居る、小品中には詩趣横溢の佳作も尠くない、『晩春初夏の惑』『新緑の悲哀』と云つた、青春を懷ふ情調が全篇を貫ぬいて居る、挿畫もある氣の利いた袖珍の美本。（定價金四十五錢、麴町區平河町五丁目五、金尾文淵堂發行）

○白河樂翁　碧瑠璃園著

樂翁は奥州白河の城主で松平定信と云つた人です、天明時代幕府の樞機に參じ、勤勉節約主義の政を執り、退いては風流の道にたづさはつた一代の人傑であります、本書は其生立ちからの事蹟を記したものです、二宮翁の報德敎が唱へらるゝ今日極めて有益だらうと思ひます、文は雅俗折衷で書き方が眞面目です、卷頭に小松原文部大臣の題字もあり、樂翁の眞蹟あり、河村清雄、齋藤松州兩畫伯の意匠を凝らした挿畫及裝畫あり、書齋に飾つて置くにしても美しいクロース本であります。（定價金壹圓貳拾錢、日本橋區本石町三丁目一四、至誠堂書店發行）

私製葉書の改正

私製葉書の規則が餘程面倒でなくなつた特に葉書を裝飾用とする場合には寫眞紙片織物木羽等を貼付してもよろしい寸法は從前通り重量は一枚八分迄のこと又之迄禁ぜられてあつた透文字も入れて差支なく表面の色合も薄ければ着色しても關はぬ尤も表面に必らず「郵便葉書」の四文字を印刷又は鉛書せねばならぬ併し是等萬國郵便條約施行規則には反する點もあるから外國行の分には注意を要する。

誌友諸嬢の寫眞を望む

我が『女子文壇』の誌友は日に月に增加してゆきますか、此增加してゆく愛讀者諸嬢のお寫眞を是非頂きたいものです、婦人は何んな方でも寫眞を持つてゐます、持つてゐる方はお友達にも見せて下さい、本社は只其紹介の勞を取るのです。其外お侍合せの盛粧せる婦人、貴族名士の家庭、女學生の動作、各種紀念會の餘興、世に現れざる名所舊蹟、又は風俗の寫眞などをどしどしお貸し下さい、寫眞は用濟次第お返しいたします。

◯女子文壇投稿各種懸賞定額

▲特別賞金五圓（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲甲種（短篇小說、美文）
天賞金參圓。地賞金壹圓五拾錢。人賞金七拾錢。

▲乙種（お伽噺、家庭日記、新論文、書簡文、新體詩、散文詩）
天賞金貳圓。地賞金八拾錢。人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、笑話、歌謠、教への庭、少女文壇　圖畫は二寸の三寸の大きさにて薄き日本紙に限る）
天賞金壹圓。地賞金五拾錢。人賞金貳拾錢。

◎各種とも金壹圓以上の價格の當選者には相當の呉服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す　壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◎投稿締切日　凡ての投書は毎月十五日限く締切ます

◉賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽竊したるものは無効とす）

社告

女子文壇定價明細表

（服部製本）

振替貯金口座　東京第壹七貳九番

◎定期發行分　▲▲▲▲毎月一回（一日定期發行）

一册（一回分）定價金拾五錢…郵税一錢五厘　計金拾六錢五厘
三册（三月分）同前金四拾三錢五厘…同四錢五厘　計金四拾八錢
六册（半年分）同前金八拾四錢…同九錢　計金九拾三錢
十二册（壹年分）同前金壹圓五拾六錢…同拾八錢　計金壹圓七拾四錢

◎臨時增刊分　▲▲▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

一册（一回分）定價金貳拾錢…郵税一錢五厘　計金貳拾一錢五厘
二册（半年分）同前金三拾八錢…同三錢　計金四拾壹錢
四册（壹年分）同前金七拾貳錢…同六錢　計金七拾八錢

◎定期發行及び臨時增刊とも全部――▲▲十六回

四册（三月分）定價金六拾三錢五厘…郵税六錢　計金六拾九錢五厘
八册（半年分）同前金壹圓二拾二錢…同拾貳錢　計金壹圓三拾四錢
十六册（壹年分）同前金貳圓二拾八錢…同二拾四錢　計金貳圓五拾二錢

▼申込注意　振替にて拂込む時は總代の外に貳錢登記料增すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絶）、凡て前金拂込に限る

廣告料金

特等	一頁三十圓	半頁……
上等	一頁廿五圓	半頁……
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓

一行四拾錢　部數多く有効に比し無類の割安　〆切毎號十五日前

特約取扱　◯京橋　日本電報通信社　◯京橋　明治廣告社　◯神田　博報堂

明治四十二年十月廿九日印刷
明治四十二年十一月一日發行

定價金拾五錢

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十一番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約賣捌元　◯東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

明治四十二年十一月一日發行
（毎月一回一日發行）
女子文壇
第五年第十四號
【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

女子文壇定價金拾五錢　郵税毎冊五厘

【東京秀英舍印刷】